
造られし空の下で（２）～生命の世界～

ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造られし空の下で（２）～生命の世界～

【Nコード】

N7638C

【作者名】

ユウチ

【あらすじ】

「お久しぶりです。みなさん！」その声は、三人にとって、まぎれもない『悪魔の声』だった。今回は『ゲーム』ではなく、『依頼』。プログラムによって造られた広大な異世界で、三人は戦う！己の意思とは関係なく！（第二章）

00：再起動（前書き）

：今回は、文法を一新して書いていきます。

00：再起動

「ちっ…… まいったな…… まさかこんな……」

暗い室内で、その人物は頭を抱えていた。

こんなことは初めてだ。

あり得ないという表情で、コンピュータの画面を見つめる。

時計が時を刻む音すら、今はイライラを増幅させる要因の一つだ。

しばらくキーボードを叩いてから、観念したように椅子の背もたれに背中を預け、天井を見つめた。

だが、すぐに頭を起こすと、再びキーボードを激しく叩いた。

何かをひらめいた。

「そうだ、あいつらを——」

カタカタカタ……

最後にエンターキーを押すと、スピーカーから声がした。

『はい。お呼びですか？』

「あいつらをそちらへ転送する。——始めるぞ」

01：悪魔の声

「——ここは……？」

目が覚めた三人の少年は、自分達がさっきまでのふかふかのベッドで眠っていないことに、すぐに気付いた。

「オレ達、いつの間にこんなところに……？」

小柄な少年——マハエ小守真栄が、周りをきよろきよろと見回し、呟いた。

「それにこの服装は……」

マハエよりも少し背の高い少年——エンドー遠藤京助が、自分の服装を見て固まった。

「ま……まさか……」

マハエよりもずっと背の高い少年——ハルトキ吉野春時が、青ざめた顔で二人の服装を見つめた。

マハエの服装は、白い長袖シャツに、深緑のノースリーブジャケット。下はそれと同じような色の長ズボン。

エンドーの服装は、同じく白い長袖シャツに、マハエと同じような型の黒いジャケット。そして真っ赤な長ズボン。

ハルトキの服装は、立派な革製の長袖ジャケット。青いジーンズにブーツ。いかにも貧乏服な二人に比べ、浮いた服装だ。

三人は何度も、それぞれの“見覚えある”服装を確認し、そして

何かを確信して思い切り息を吸い込んだ。

「うあああああっ！！！！ またかあああああ！！！！」

三人が同時に頭を抱え絶叫すると、どこからか聞き覚えのある声がした。

「お久しぶりです。 みなさん！ また会えて嬉しいです！」

男なのか女なのか判断しづらい声。 落ち着いた喋り方。 だが三人には、それが悪魔の声にしか聞こえなかった。

「やめてくれええ！ もうやめてくれええ！」

エンドーの叫び声は、悪魔—— 案内人には別の意味に聞こえたらしい。

「いやあ。 そんなにも喜んでもらえるとは」

その一言に三人は再び固まった。

そう、この案内人に、説得や抵抗は何の意味もなさない。

三人はそのことを“前回の件”で嫌というほど思い知らされた。

「まだ、あれから二ヶ月だぞ……？」

思い切り溜め息まじりのエンドーの発言は、黙殺された。

「案内人よ…… お前に、“戦いの痛み”というものは理解できるのか？」

マハエが案内人に訊く。

「必要な情報以外はプログラミングされていませんので」

キツパリと答える案内人。

『超高性能人工知能プログラム』の案内人にとって、“人の苦痛”というは必要な情報ではないようだ。

「しかしわたしも、前回のあなた達の苦闘する様子から学習しましたよ」

この苦しみは実際に経験しないとわからない。三人はそう言いたいのだが、喋る気も失せたので口を閉じていた。

「で、今回は何だ？ まあた、クソ制作者野郎の“暇つぶし”か？」
エンドーが後頭部をかき回す。そうとうイライラしているようだ。

「いえ、残念ですが今回は“依頼”です」

「依頼？？」

「詳しいことは後で話しますよ。まずはそのトンネルに入ってください」

三人がそちらを向くと、空間が揺れて古びた大きなトンネルが出現した。

怪しいことこの上ないトンネル。入り口から見える闇は、微かに波打っている。

「オレ、これ知ってるぞ」

マハエが言うと、ハルトキも。

「ボクも知ってる。このトンネルを抜けると、マハエとエンドーが
ブタにされて、ボクがそれを救うために恐ろしい魔女と戦うんだっ
け？」

「……………」

大きく違うが、まあ、よからぬことが起きるところは大差
ない。と、マハエは何も言わないことにした。

「ま、入らないほうが得策というわけだ」

エンドーの言葉に、二人もうなずいた。

すると案内人が、仕方ないと言うように質問する。

「では選択してください。軽い痛みを覚悟でトンネルに入るか、今まで体験したことのないとんでもない痛みをここで味わうか」

「う……」という三人の声。
そしてしばらくの沈黙。

「さあ、いざトンネルへー」
マハエの言葉に、エンドーとハルトキも「オー」と賛同し、揚々とトンネルへ入っていった。

その様子を見た案内人は、独り溜め息をついた。

トンネルを抜けると、そこは――
草原でした。

吹き抜ける暖かい春風。草の良い香り。
ここはもうセルヴォの世界なのだ。とすぐにわかった。
だが、今の三人は安らぐ気分にはとうていなれそうにない。

「で、依頼っていうのは？」
ハルトキがめんどくさそうに訊く。

「前回、の『セルヴォ』の件です」

「ああ、セルヴォね……」
プログラムが意思を持った存在――『セルヴォ』。

『デンテール』という欠陥プログラムによって、改造されたプログラム。

「そのセルヴオが、どうやら独自の世界を造り出しているようで……。そのせいで度々、制作者が管理する、26台のコンピュータが異常をきたすようになったんです」

「H A H A H A、ザマーミロ」

エンドーがケラケラと笑う。

「ですから、再度あなた達をお呼びしたというわけなんです」

「ボクらにその、セルヴオ達を抹殺させるため？」

「抹殺、という表現は過剰ですが、根本的な部分はあってます。どうですか？ 引き受けてくれますよね？」

期待を込めた案内人の言葉。三人の意見は完全に一致していた。

「はああああ??? なんでオレらが、クソ制作者のために、そんなクソめんどくさいことをしなきゃいけないんですかあ???」

きれいに声をそろえて言う。

なぜ、オレ達に任せる!? と言いたいのだ。

「それだけ制作者は、あなた達を道具——信頼しているということですよ」

「今、なんかチラツとヒドイこと言われたような気がする」

「ていうか、オレ達じゃなくて自分でなんとかしろよ!」

マハエが、案内人—— とういか制作者に訴える。

「最初は制作者も自分でなんとかしようと、『S A A P - 002』^{サブ}というプログラムを送り込みました」

「なんじゃそら?」

「特殊武装プログラム。Sword And Armor プログラム。つまり、セルヴオを破壊するために作られたプログラムです。しかしそれも、ほぼすべてがセルヴオに侵食されてしまいました」
「どうということだ? 侵食されたって?」

マハエが訊く。

「どうやら、この世界に入り込んだプログラムは、自動的にセルヴオ化してしまうらしいです」

——『セルヴオ』という存在についての、三人の分析。

つまり『セルヴオ』というものは、簡単に言うと、プログラムの集まりなのだ。

この世界の細かな分子、粒子、細胞。その一つ一つが複雑なプログラムだということだ。

人間の世界と変わりはない。三人は、自分達の世界に帰った後、そのことを度々考えるようになっていた。

この世界に入った単純プログラムは、超複雑プログラムに変えられてしまう。

それはつまり、命を得ると同じことなのだろう。

「わたしは、直接その世界にいるわけではないので、侵食されることはないと思いますが、そちらへ送り込まれた、セルヴオ化したプログラム達は、我々に敵意を向けています」

「そいつらも破壊しろということか」

「引き受けてくれますか？ —— もっとも、この任務をやり遂げるまで、あなた達は元の世界に帰ることはできません」

「……………」

「……………」

「……………」

いざ、強制遂行！

「――それでは、みなさんにはそれぞれ別行動をとってもらいます」「
「どういうことだー？」

気の抜けたエンドーの声。もう何もかもあきらめたのだ。

「セルヴォは和解を求めているのです」

「へー、だったらそれでいいんじゃない？」

ヨツくんの言うとおり！ と二人もうなずく。

「そう簡単な問題ではないんです。ですから、今から一人に一つずつ役目を与えます」

三人の不満顔にかまわず、案内人は話を続ける。

「一つは、『和解を求めている、この世界の王との交渉』。二つ目は、『情報収集』。そして三つ目は、『セルヴォ世界の破壊』。まあ、セルヴォ世界の破壊がそれぞれの最終目的です」

「なんかそれ、オレ達が悪役っぽくない？」

マハエが言うが、

「そんなことはありません！ さあ、三つのうち、一つずつ選んでください」

案内人は強制的に話を進める。

マハエは腕を組んだ。

「（オレはどれにしようか。一番楽そうなのが『情報収集』だな。よし）」

素早く挙手するマハエ。

「じゃあオレは――」

「オレが情報収集をしよう」

だがエンドーが先に答えた。

「はい。情報収集はエンドーさんですね」

舌打ちをして再び腕を組むマハエ。

「（次に楽そうなのが、王との交渉か）」

そして、さっきよりも素早く手をあげる。と同時に声を出す。

「オレは——」

「王との交渉は、ボクが」

それよりも恐ろしく素早く、ハルトキが拳手した。

「はい、決定。マハエさんはどうします？」

「……セルヴオの破壊」

うつむいて、ゆっくりと手をあげた。

「これで全員決まりましたね。それでは、気をつけつつ、がんばってください」

やはり、三人には、悪魔の声にしか聞こえなかった。

02：暴力反対

三人は、それぞれの目的のため、三方向に分かれることになった。

——この世界にいるときだけ、魔力が備わるらしい。

北へ向かうマハエは、案内人の話を聞きながらデコボコの道を独りで歩く。

——遠くに町が見える。

「おい、この世界のセルヴオっていうのは、モンスターじゃないのか？」

「はい。人型のセルヴオです」

「人を抹殺しろつてのか？」

「聞こえは悪いかもしれませんが、セルヴオがコンピュータに異常を与えている以上は、他に手はないのです。それに、セルヴオの中心部。つまり、“基”を破壊するだけで良いのです」

その説明は、マハエを納得させることができたのか。答えは否だ。セルヴオは人間に果てしなく近い存在だということを、マハエ、ハルトキ、エンドーはよくわかつている。できることなら、平穏に終わらせたい。

だが、セルヴオという種族自体が、自分達に危害を与えるようなら——そのときは止む終えない。

——セルヴオの町は、もう目の前だ。

「あん？ なんだと？」

「いえ、ですから、そこを通してもらえませんか？」

「ああ？ オレ達にここをどけてか！？」

「……まあ、そういうことです……」

「もういっぺん言ってみいや！」

「……あの……」

今、マハエの前には、町へ通じる、幅が極端に狭い橋がある。

そして、この橋には茶髪リーゼント＆サングラスの兄ちゃんが二人、たむろしている。

「（くっそおお！ この不良めええ！）」

マハエは、叫びたい気持ちを広い心の端っこに追いやった。（つまりは、ただの小心者）

不良が極端に苦手なマハエにとって、この橋を渡ることは大きな関門だ。相手が自分よりも明らかに年上ならなお更。

とりあえず橋から離れて様子を見る。

マハエは橋の傍らの、川辺に腰を下ろした。

「案内人さん。よくわかりました。セルヴォというのは、やはり“オレ”に有害です」

「それは不良全般では……？ いえ、わかっていただけたのなら、それでけっこうです」

マハエは耳をすます。

川のせせらぎ—— 草の香り—— 心地よい風—— 青い空に流れる白い雲——

目を閉じて、それらを体全体で感じ取る。

「マハエさん。何を考えているのですか？」

「このまま何もかも忘れて眠ってしまいたい」

呆れた。と、案内人が溜め息をつく。

「なんで、武器を装備に加えてないんだ？」

「武器というのは、何よりも複雑なプログラムなんです。しかも、プログラムの武器をこの世界に持ってきてても、どうなるか保証はできません。『S A A P^{サブ}』の件もありますし」

「じゃあ、お前が何とかしてよ。墓場のときみたいにギョオーンって」

「無理ですね。この世界では、わたしは喋ることしかできないんです」

役立たず。マハエの小声は案内人に聞こえていた。

案内人は、もう一度溜め息をつくと、「吉野さんのところへ行ってきます」と言っ、ピュンツという効果音を残して去った。

「逃げたか」

マハエは再び目を閉じた。

その頃、ハルトキは寂れた町の真ん中を歩いていた。

「なんか、変なところに迷い込んだじゃったなー」

コンクリートで固められていない、土の地面。大きな建物はところどころに建っているが、どれも古いもので、現在使われているのかどうかかわからない。

十歳くらいの、黄緑色の髪の子供ら三人が、小太りの青年をカツ

アゲしている。

「ほんと。変なところに迷い込んだな……」

茶髪リーゼントとサングラスの、いかにも不良が、横を通りすぎた。

セルヴォだからと言って、とくに害があるというわけではないよ
うだ。

普通の人間と同じだな。そう思えば心は楽になる。

だが、時々ちらちらと、物珍しそうにハルトキを見る人もいる。

「ちよいとお待ち、黒髪兄さん」

突然、横からそんな声が聞こえた。

道の隅っこで、水晶玉が乗った台座を前にし、椅子に座っている
初老の女。誰がどう見ても占い師だ。

「ボクですか？」

ハルトキがたずねると、占い師はうなずいた。

普通、わざわざ“黒髪”をつけるだろうか？ ハルトキは疑問に
思ったが、この世界の人物はさまざまな髪の色をしている。黒髪が
珍しいだけなのだろう。と、納得した。

「気をつけなさい。あなたの身に、これから何かとてつもなく恐ろ
しいことが起こる」

水晶玉を見つめて言う占い師。

「ていうか、もう起こっているのですけど……」

占い師に聞こえないように、ボソリと言う。

「ボクの人生、うまくいくのでしょうか……？」

恐る恐る占い師にたずねるハルトキ。

「知りたいのなら、お金を払っておくれ」

「ごもつとも。」

ハルトキはポケットに手を入れた。

「（……あ、一文無しだった）」

当然、お金なんて持っていない。

ハルトキは一礼して、その場を去った。

「あ、吉野さん。こんなところにいたんですか」

案内人が、建物の壁にもたれて立っているハルトキを見つけて言った。

「——で、大きな声出すなよ。怪しまれるだろう」

ハルトキは周りを見回すが、とくにこちらに注目している人物はいない。

「大丈夫です。あなた達以外に、わたしの声は聞こえません」

「え、そうなの？ 便利なことですねえ」

ハルトキは、ふつ、と鼻を鳴らす。

「ところで、真栄くんや京助くんはどうしてらっしゃる？」

「エンドーさんのところへはまだ行ってませんが、マハエさんのほうは、少々問題が発生しまして……」

「不良にでも絡まれたか？」

ハハハ、と笑うハルトキ。

「……よくわかりましたね……」

苦そうな声で案内人が言う。

「あいつの、不良との“好”相性は天性のものだからねえ」

よく、そういうトラブルに巻き込まれるんだよ。と笑いながら話すハルトキ。

その様子を、通行人達が訝しげな目で見ながら通り過ぎていく。

「さて、ところでボクの役目だけ……」

ふー、と息を吐いて、ハルトキは話題を変えた。

「はい。あなたの仕事は、王との交渉。まあ、『表向きは』ですけど。ただひたすらに、王のいる城へと向かえばいいのです」

「王かぁ。ていうか、王なんているのか……。いつからこの世界は存在していたんだ？」

「不明です。しかし、コンピュータが広まった後—— からでしゅうね」

「それって、けっこう最近じゃん……」

「そう考えると、矛盾な点が多く出てきます。それを明らかにするのも、あなたたちの仕事のひとつだと思ってください」

ハルトキは沈黙した。

「城は、ここから西へ行けば見えてくるはずですよ」

ハルトキは、とぼとぼと歩き始めた。

しかし、このまま町を素通りするのも、少し惜しい気がする。情報収集でもしてみよう。と、ハルトキは町の人々の会話に耳をすませた。

「——くそっ…… 田—— 弘—— のやつら——」

「——オレのどこ—— やられた——」

「——許せね—— な——」

心なしか、ほとんどの人の話が、あることに統一されている気がする。

「『タシマヒロコキ田島弘之』め……」

田島弘之——

ハルトキは、目の前を歩く、ビラを持ったおじさんにたずねる。

「あの、すいません。田島ナントカって――」

「おお！ あんたも協力してくれるかね。ほら、これだ」

そう言つと、おじさんはビラ束から、一枚差し出した。

ハルトキは渡されたビラを見る。

<お尋ね集団、田島弘之>

という大きな文字の下に、

<不良集団、『田島弘之』によるものと見られる事件が続発中。被害に注意するとともに、情報提供も随時受けつけ。些細な情報でもかまいません。どうか最寄りの交番へご一報ください>

「最近、この町を荒らしまわっている集団がいるんだよ。『田島弘之』といってね。ケガ人まで続出する始末さ」

おじさんはそう付け加えて、再びビラ配りを始めた。

「田島…… 弘之？」

03：田島弘之

「田島弘之のアジトは、おそらく、この町の近くにあるでしょう」
ハルトキは、交番で話を聞いていた。

交番のおまわりさん—— 胸部に刻印が刻まれた、木製の鎧を着し、腰には短刀が。これがこの世界の警察の正式な装備なのだろう。二人のおまわりさんは同じ格好をしている。

「この町の担当官は、我々二人だけで。ですので、なかなか手掛かりもつかめず……」

「なるほど……」

腕組みをしておまわりさん達の話に耳を傾けていたハルトキは、ひととおりの話を聞くと、交番を後にした。

「どうしたんですか？」

おじさんにもらったビラを、真剣な顔で見つめながら歩くハルトキに、案内人が話しかける。

「この『田島弘之』っていう不良集団のことが、ちょっと気になってね」

「気になった？」

呆れたような声を出す案内人。

「勘だよ、勘」

「……勘に従うのもいいですが、自分の任務も忘れないでくださいね」

「不良集団だよ。うまく忍び込めば、それなりに大きな情報が入ると思うよ」

この言葉には、案内人は反論できなかった。

「マハエさんとはえらい違いですね」

「あいつはボクよりも、シンが強いのかもしれない。ボクはそっち

のほうで、うらやましいよ」

案内人には理解できない、ハルトキの言葉だった。

「さて、田島弘之のアジトだけど……。案内人はどう思う？」

町の隅っこの、人気のない建物の陰——ここは寂れているというか、荒れている。雑草が生い茂り、その中に木箱やタルなど、ゴミまで捨てられている。そういう場所からできるだけ離れた場所に座り、木の枝を使って地面にだいたいの町のマップを描く。

ハルトキの問いかけに、案内人はすぐに答えた。

「まず、町の中にはないでしょうね。大抵の建物は、さっきのおまわりさん達が調べたでしょう」

「うん、ボクも同感。集団だから大人数でしょ。だったら屋外——町の外れか……。でも、普通では行けない場所にあるんだろ」

そして、マップの中に一本の線を引いた。

「知ってる？ 人はね、陸や空のことはよく知っているんだ。いつも目にするからね。だけど地下のことについては、かなりうーいんだ。どうしても無防備にもなりやすいしね」

「地下にアジトがあると？」

「その可能性もあるけど……。どうかな？ それか、地下に道があるとか」

そのとき、小さく人の足音が近づいてきた。

普通に歩く音ではない。気配を殺した足音だ。

考えるより早く、ハルトキは木の陰に隠れ、様子をうかがった。

少しすると、建物の裏から男が現れた。

整ったリーゼントに、尖ったサングラス。さっきハルトキとすれ違った不良だ。

不良は、用心深そうに周りを見回し、草むらに入った。そして捨ててあった——置いてあった木箱をどけると、もう一度周りを見

回した。かなり用心深い。

そして、誰もいないことを確かめた後――消えた。
地面に呑み込まれるように。

「さすが、吉野さん。ビンゴですね」

「うん、ここまで予想通りだとは思わなかったよ」

少し間をおいてから、不良が消えた場所へ。

木箱をどけてみると、その下には板が敷いてあり、それをめくると、地面に一人が通れる程度の穴が開いていた。

「アジトへの道かな？」

しゃがんで穴の中を覗き込むハルトキ。けっこう深く掘られているようだ。

「おそらく、そうでしょうね。いかにも“不良”でしたし……。それにあの不良は、マハエさんのところにいたのと同じ格好――」

「さて、ここで選択肢です。A：穴に入る。B：立ち去る。C：埋める」

「その問いかけは意味があるんですか？」

ハルトキは笑顔で首を横に振り、ニヤリと笑った。

「当然、『A』でしょ」

――穴には木のハシゴが備え付けられていた。穴は意外と深い。
ハルトキの身長以上ある。

ハシゴを下りたハルトキは驚いた。

ただ掘っただけの通路かと思いきや、壁はレンガや板でしっかりと補強してあった。広さは大人が屈んで通れるくらい。

奥にけっこう続いている。

「酸欠が心配だな」

「たしかに、細いし長いですね。しかし、風の音が聞こえませんか

？」

「……そうだな」

ゴウゴウと、風が通る低い音が聞こえる。換気用に、風の通る孔も設けられているのだろう。

「それなら安心か。あとはこの闇をなんとかすれば——」

ハルトキは目を閉じて、眼球に魔力を集中させる。

そして目を開けると、それまで真っ暗だった空間が、びっしりと明かりが灯されたかのように明るくなっていた。

「こんなときにも便利な力だよ」

何の苦もなく、ハルトキは地下通路を進む。

「あと、武器があれば安心だけだね」

その不満は、案内人に黙殺された。

——長い一本通路をしばらく進むと、突然問題に直面した。

分かれ道だ。それも三方向。

「まいったな……」

どこへ進むべきか迷っていると、頭のとっぺんに水滴が落ちてきた。

たしかにここは湿っぽい。ということは——

ハルトキは足元を見た。

踏み固められた土の地面も湿っている。そして、微妙にぬかるんだ地面に、よく見ないとわからないが、真新しい靴の跡が残っていた。

これをたどれば、迷路は抜け出せる。

——その後、同じような分かれ道がいくつかあったが、難なくクリアー。

ようやく、進行方向の先に、下りてきたのと同じようなハシゴが見えた。

——ガコン

ハシゴを上り、鉄製のふたを持ち上げると、まぶしい光が射し込んだ。

「ふう……」

ハルトキは眼の魔力を解除し、外へ出た。

新鮮な空気を一杯に吸い込み、吐き出しながら、曲げていた腰を存分に伸ばす。

狭い地下通路を出たそこも、人二人分ほどの狭い通路だった。

ここは町からそうはなれてはいない。だが、なるほど、高い壁に囲まれて、外側からは確認できない場所だ。しかも、窓のない廃屋がびっしりとならんで、この場所を隠している。

うまく隠したものだ。と、感心するハルトキ。

「ここが田島弘之のアジトかな？」

ハルトキが、小声で案内人に訊く。

「おそらくそうでしょうね。気をつけてくださいよ。相手は野蛮な集団です」

「わかってるよ」

だが、ハルトキが一步踏み出した途端——

カランカランカラン……

木の鳴子が騒いだ。

ドキッとして、ゆっくりと足元を見るハルトキ。そこには釣り糸のような細い糸が張ってあった。

ハルトキは、その糸に足を引っ掛けてしまったのだ。

マズイ…… と思ったときには、すでに『まな板の鯉』。

駆けつけた不良が「動くな！」と、ハルトキに武器を向けた。

棒の先に鉄の塊がついた鈍器——『メイス』という打撃武器だ。

ノーウェポン、ハルトキは、大人しくホールドアップ。

「てめえ！ 何者だ！？」

リーゼントサングラスの不良が、声を抑えて怒鳴る。

「はじめまして、吉野春時という者です。あ、ちなみにセールスマンの類ではないので——」

ハルトキの頬を冷たい汗が流れる。

「名前じゃねえ！ ここが、『田島弘之』の本部だと知って——」

「——まあ、まで。後を付けられたのはお前だ」

不良の後ろから、灰色のローブを羽織った男が歩み寄ってきた。

不良が、ビクツと後ろを振り向き、言った。

「ボス……！」

田島弘之のボスらしい男——灰色のローブ、鮮やかな朱色の髪の毛のオールバック。その男はハルトキよりも背が高く、圧倒的な威圧感がある。歳は二十歳前後だろう。

男は、ハルトキの落ち着いた顔を見てニヤリと笑った。

「せめて、ここまで来た根性を買ってやろうじゃないか」

04:タビト

「ぐー、ぐー」

目を閉じて低くうなりながら、マハエは川辺に寝転がっていた。

橋の上には、相変わらず不良二人が居座ったまま。

何が面白いのか、ずっと話し込んでいる。

「——ん？　おい、見る」

片方の不良が空を見て言った。

遠くのほうで青い煙が、細く昇っている。

「集合せよ、か。何があつたんだ？」

二人は、やれやれと言いながら立ち上がって、ズボンをはらった。

「ぐー、ぐー」

「——マハエさん」

「ぐー、ぐー」

「マハエさん」

「ぐー」

「不良に囲まれてますよー」

「ぐー!？」

飛び起きるマハエ。そして、ブン！ブン！と前後左右上下と、首をせわしく動かす。

不良など一人もいない。

「引っかかりましたね」

案内人が寝ぼけ眼のマハエに言う。

身の安全を確認したマハエは、ホッと溜め息をはいた。

「……オレは寝ていない」

「鼻から『Z』が出ていましたよ」

マハエは自分の鼻を押さえる。

「……出てない」

出るわけがない。

自分が川辺に寝転がっていた理由を思い出して、マハエは橋を見た。

もう、そこに不良はいない。

「ああ、ようやく去ったのか」

マハエは、川の水で顔を洗い、立ち上がって背伸びをした。

「どうだった？ ヨツくんのほうは？」

マハエが案内人に訊く。

「まあ…… ちょっと厄介なことに……」

「不良にでも絡まれたのか？」 ハハハハハ」

自分を棚に上げて笑うマハエ。

「その通りですけど」

「——ハ？」

「と、それは置いておいて—— 不良達は退散しましたよ。先に進みましょう」

「……………」

首をかしげながら、マハエは橋を渡った。

友人の安否を気づかっていたマハエだが、案内人の様子から、とりあえずは無事なのだろうと悟った。

今は自分の身の心配をしたほうがよさそうだ。と思い、しっかりと前を見据えた。

町はにぎやかに人が行きかっていた。

立ち話をして笑っている者。買い物をしている者。

人々の髪の色は、黄色や水色などさまざまで、それだけで華やかに見える。ただ、“黒髪”が一人も見当たらないのが、マハエは気

になった。

けど、みんな生き生きしている。

「いいなあ、ここは。見てるだけでも元気になる」

マハエは感動していた。それは、現実世界にある自分達の町ではなかなか見ることもない光景なのだ。

人はたくさんいるが、都会のような殺伐とした雰囲気は全くない。余裕の見られない現実世界とは、まるで違う。

こういう風景は、もはや日本では見られないだろう。

「ああ、案内人。オレ、この世界に対するイメージが一変したよ」

ニヤケながら言うマハエを見て、案内人が呆れた声を出す。

「なに、感化されているんですか……。あなたはこの世界を滅ぼすために送り込まれたんですよ？」

「……わかってるよ」

マハエは少し表情を曇らせて、大通りを歩いていった。

「わたしは、あなた達の住む世界なんて知りません。ですから、この世界のよさもわからないのです。——ただ、命令なんですから……」

マハエの後ろ姿を見ながら、案内人は呟いた。

命令は絶対遂行。それが、プログラムである案内人のさだめなのだ。

「あら、旅のお方ですか？ この町にお泊りでしたら、どうぞうちの宿をご利用くださいませ」

笑顔の少女が、マハエに話しかけていた。

「どうもどうも。ご利用させていただきまーす」

それ以上の笑顔のマハエが、元気に返事をしていった。

「——って、マハエさん！？ この町で一泊するつもりですか！？」
少女に手を振ったマハエが、変わらぬ笑顔で言う。

「『旅人割引』っていうのがあるんだってさ。ほら、これ割引券」
そう言って、嬉しそうに割引券をヒラヒラと振るマハエ。

「なに、ちゃっかりもらっちゃっているんですか」

「だって、どうせ今日中に終わりそうにない仕事じゃん。この町で宿とったほうがいいでしょ」

マハエの言葉に、案内人は、

「一理ありますね……」

そう言うなり、応答がなくなった。

パカッパカッパカッ……

ガラガラガラガラ……

馬の足音と、荷車のタイヤの音。

左右には、広大な畑が広がっている。

荷馬車に揺られながら、エンドーは干草をまくらにして、空を仰ぎ見ていた。

そして、後に残る真っ直ぐに伸びた細道に目をやる。

こういうシチュエーションだと、つつい鼻歌を歌いたくなるものだ。

かの有名なあの歌を。

エンドーは、目を閉じて、干草の臭いを胸いっぱい吸い込んだ。

「フンフ——」

「エンドーさん。お待たせしました」

「……………」

「……あれ？ どうしました？」

口をとがらせてグレてるエンドーに、案内人が不思議そうに訊く。更にグレるエンドー。体を横に向けて案内人を無視する。

「のんきに旅人気分にはたっている場合ではありませんよ」

案内人はかまわず話を始める。

「あなたの任務は、情報収集です。セルヴオについての情報、および、マハエさんや吉野さんの目的達成のために情報を集めてもらいます」

「おじさーん。あとどれくらいで町に着きますー？」

エンドーが、馬車馬を操るおじさんに声をかける。

「ほれ、もう見えとるぞ。すぐに着くわい」

おじさんが、前方を指差して言った。

なにやら、妙な町だ。田舎風景の中に、茶色い防壁に囲まれた要塞のような町。

「（あそこには何があるんだ……………？）」

エンドーは真剣な顔で、町の外観を見据えた。

「（何がオレを待ち受けているというのだ？ ——このときのオレは、想像すらしなかった。後に起こる、世界を巻き込む大戦争の発端——伝説の秘宝『マンティコアの爪』をめぐる醜い争いに、オレは深く関わってしまうことになる）」

いつの間にか、夕暮れになっていた。

オレンジ色の光がエンドーの顔を照らす。

「風が、冷えてきたぜ……………」

「……………」

——パカッパカッパカッ……

ガラガラガラガラ……

「……エンドーさん」

「そう——『マンティコアの爪』は、世界を滅ぼす力を持つて——」
「なに、勝手なアナザーストーリーつくってるんですか」

案内人の一言で、夕暮れは消え、青空が戻ってきた。

「雰囲気は大事だよ」

エンドーが、やれやれと両手を持ち上げる。

「なにか、あなたの脳内では、ものすごいストーリー展開になって
ませんでした？」

「いや、いたって普通の展開だ」

エンドーはもう一度、干草の上で仰向けになった。

「あせるな。もうすぐ町に着くから」

町の正門の前で、エンドーは荷馬車を降りた。

「ありがとうございました」

エンドーがおじさんに頭を下げると、「気をつけてなあ」と一言
言っ、おじさんは再び荷馬車を走らせた。

「この世界には、自動車なんてないんだと」

「コンピュータなどの複雑な技術は、全く発展していないんでしょ
うね」

「ゲームのRPGの世界のようだな」

荷馬車の姿が小さくなるまで見送ってから、エンドーは首をかし
げた。

「……そういえば、気をつけて——って？」

エンドーは、町のほうを向いた。

——町を囲む防壁は、木材が横に何本も積み重ねられ、つくられてあった。

ごく最近つくられたもののような。しかも、即行でつくられたみたいに、ところどころに手抜きが目立つ。

「——本題です。あなたの任務は、情報収集です。セルヴオについての情報、および、マハエさんや吉野さんの目的達成のための情報を集めてもらいます」

「まあ、一番のんびりできそうな仕事だな」

「もちろん、最終的にはマハエさんと同じく、セルヴオの破壊にあたってもらいます」

「……わかった」

「それと、とりあえずその町で宿を探してください」

案内人が言うと、エンドーはポケットに手を入れた。

「宿をとるのか。で、金は？ この世界だって金が必要なんじゃ？」

「稼いでください」

「……え……」

エンドーは冷たい風を感じた。

05：田島コロシム

がやがや……
がやがや……

『リング』の周りは騒がしい。
ハルトキは木箱に座って、今の状況になっただいきさつを思い返していた。

——せめて、ここまで来た根性を買ってやろう。

『田島弘之』のアジトを発見したハルトキだったが、すっかり、不良に見つかってしまった。

そしてボスの台詞——「根性を買ってやろう」。それは、とりあえずひどい目にはあわせないということなのだろう。

そして、ハルトキをつれて、ボスは本部の中まで案内した。

壁につくられた隠し戸を開いたその先には、通路と同じような高い壁に囲まれた、ちょっとした広場が。

広場には、白いテントがいくつか設置されていた。

何人かの不良が、テントから顔を出して侵入者^{ハルトキ}を観察している。

「ここが本部ですか」

ハルトキが言くと、ボスが振り向いた。

「想像とは違ったか？ はは、まあいい。とりあえずそこに座れ」
不良が木箱を運んできた。ハルトキは言われるままに木箱に座り、その正面にボスが座った。

三人の不良が、ハルトキとボスを囲むように立つ。
面白いことに、ボス以外、全員が統一された髪型、服装だ。

「名前は？」

ボスの質問に、ハルトキは正直に答える。

「吉野春時です」

「歳はいくつだ？」

「十六です」

「オレより三つ下だな。ふふ、よくここまで来たものだ。なかなか度胸がある」

そして今度は、ボスが名を名乗る。

「オレは、オオバヤシタカミツ大林鷹光。この『田島弘之』の頭だ」

「え。なぜ、田島弘之って、人名……？」

「ああ、このチームの名前か……。こっちにも、いろいろと事情があるんだよ」

一瞬、悲しそうな眼をする大林。

額や首に痛々しい傷痕が見え、ハルトキは息を呑んだ。

不良集団のボス——さすがに場数を踏んでいるのだろう。

だが、この男はそんなに危険な人物ではない。とハルトキは感じていた。

現に、侵入者に名前まで名乗ったのだから。

「ま、それは置いといて。この場所を知られたからには、ただで返すわけにはいかない」

「誰にも言いません。それに、お金は持ってませんよ」

「金じゃない。お前にはこれから、一対一で勝負をしてもらう」

ニヤリと笑う大林。

周りの不良も同じように笑っている。

「勝負？」

「そうだ。誰にも言わない、という言葉は、とりあえず信じよう。だが、確信するにはお前が本当に男かどうか確かめる必要がある」
「え」と、身を抱くハルトキ。

「だから、勝負だと言っているだろうが。お前には、メンバーの中

の一人と戦ってもらう」

ハルトキの眼をじつと見る大林。ハルトキも視線をそらさない。

「不良の名誉にかけてな」

おおー と周りがどよめく。中には笑う者もいる。

「（不良の名誉って…… ひねくれてるな……）」

その言葉は心の中にとどめておく。口に出したら殺されかねない。

——そして、この状況。

「『田島コロシウム』なんて久々だぜ。がんばれよー。ハハハ」

『田島コロシウム』と呼ばれるこのバトルは、一対一の素手の戦いらしい。ただし、蹴りは反則とみなされる。

即席のリング—— 長い木の棒を四本、四角形をつくるように地面に立て、ロープで囲む。五メートル四方のリングが、あつという間にできあがった。

この中で、『田島コロシウム』は行われる。

「けっ、こんなガキ相手に戦えつてのか。やれやれ」

対戦相手に選ばれた不良が、ハルトキをにらむ。

「ビビッてんじゃねーぞー 楽しませてくれや」

ギャラリーの不良達も、ハルトキを笑って見ている。

これはもう、勝つしかない。と、ハルトキは拳を握った。

相手は不良。ハルトキよりもはるかに、経験値は高いだろう。

しかしハルトキも、本物のモンスター相手に戦った経験がある。

それに今は——

「さつき集合をかけた仲間が戻らないが…… まあいい。そろそろ始めるぞ。リングに入れ」

大林が選手に指示を出す。

ハルトキと、対戦相手の不良は、ロープをくぐってリングに入る。

大林がリングの外で、右手を上げた。

対戦相手は、相変わらず恐い顔でハルトキをにらんでいる。

「ハルトキ 対 ソウシ」

大林が、対戦者二人の名前を言う

次の大林の合図とともに、バトル開始だ。

ハルトキは眼に、魔力を集中させた。

一瞬、銀色に光ったハルトキの眼に、対戦相手—— 『ソウシ』
がビクツとする。

「レディ——」

ソウシの顔がこわばる。

「ファイッ！」

大林の右手が振り下ろされた。

同時に、ソウシが拳を構えて突っ込む。

ゴッ……

ハルトキの左頬に振られた拳。

——入った！

ギャラリー全員がそう思った。

しかし、ソウシは驚いた表情をしている。

レフェリーの大林は、感心したように微笑んだ。

——ハルトキは、相手の攻撃に合わせ、うまく首を動かして衝撃を逃れていた。

ハルトキには、眼に集中させた魔力のおかげで、すべての動きがスローに見える。『動体視』だ。

今なら、弾丸すらも避けることができるだろう。

だが必要なのは身体能力。いくら相手の動きが見えていても、体がついていかなければ意味がない。

日頃、特別な訓練を受けていないハルトキには、タイミングが必要なのだ。攻撃が放たれる直前。その一瞬で攻撃の軌道を読み、避けるのだ。

——ハルトキは、そのまま回転を加えて、相手の背後へまわり、ひじ鉄を食らわす。

「ぐえっ！」とソウシは声を発したが、すぐに振り返って反撃する。その正確な拳は、通常なら相手を仕留めるほどのスピードだろう。だが、今のハルトキには通用しない。ソウシの連続攻撃は、ことごとく当たらない。

ハルトキは、最後の一撃を肩の上で受け止めると、ソウシの腹に拳を打ち込んだ。

——思ったより、うまく攻撃できなかった。唯一の弱点——ハルトキには、明らかに経験値が足りない。

攻撃面では不利だ。

とりあえず、相手と間合いをとるハルトキ。
ソウシは、ハルトキの能力に恐怖しながらも、一気に間合いを詰める。

もはや、半分ヤケクソだ。

バシッ！

今度のソウシの攻撃は、ハルトキの頬にヒットした。
だが、そこまで。

ハルトキはすぐに体勢を整えると、相手のサイドへ移動し、自分の足を相手の足に引っかけた。
そして、同時に、相手の胸を強く押す。

ドッ…… と、後ろへ転倒したソウシをまたぎ、ハルトキは拳を振り上げた。

顔を狙えば、弱い攻撃でも確実に効果はある。そう考えたのだ。

「うわっ！」

腕を顔の前で、構えようとするソウシ。
だが、ハルトキのほうが一瞬早かった。

「そこまで！」

レフェリー
大林が叫ぶ。

急ブレーキをかけた拳が、ソウシの鼻先に、トッ、と当たる。

「勝者は、ハルトキだ」

大林がリングに入った。

そして、倒れているソウシを見下ろす。

「ボス……なぜ止めたんです……？ 勝負がつくまで終わらせないのが、ルールでしょう」

息を切らせて言うソウシ。

「今のを食らって、まともに戦える自信はあったか？」

「……………」

ソウシは悔しそうに、歯を食いしばる。

「そう悔しがることもないだろう。一撃当てたんだ。あれに攻撃を当てるのは、オレでも難しいかもしれん」

そして大林は、ハルトキに目を向けた。

ハルトキも、息を切らせている。

「おめでとう。お前の勝ちだ」

ギャラリーから歓声があがった。ただし、町のほうに聞こえない程度に。

ハルトキの耳に口を近づけて、大林が小声で言った。

「お前、さっき、わざと攻撃食らっただろ」

「……さあ？」

「あいつのプライドを守るためか？」

ソウシに目を向ける大林。

ハルトキは微笑む。

「いいか。これは、名誉をかけた戦いだ。相手のプライドを守ろうとする行動自体が、逆にそのプライドを踏みにじることになる」

ハルトキも小声で言う。

「でも、相手がそのことに気付かなければ、プライドは守ったことになりますよ」

「ああ、だから小声で話しているんだ」

大林も微笑んだ。

そして最後に一言。

「ありがとな」

ハルトキはようやく気付いた。

不良はプライドが高い。それは、絶対に守らなければいけないこと。プライドを失った不良は、ただの荒くれ者になる。

不良というのは、意外と誇り高い人種なのかもしれない。

06：モンスター

テント広場で、木箱に座るハルトキ。そして、その向かいに大林が座っている。

パチパチと燃える焚き火を挟んで、向かい合う二人。

今回は不良に囲まれていない。完全にではないが、信用された証拠だろう。

大林は、ハルトキの頭を、珍しそうに眺めている。

「黒髪つて、珍しいんですか？」

視線が気になり、ハルトキは尋ねた。

「ああ、無理矢理染めるやつは、たまに見かけるが、そこまできれいに染めるやつは初めて見た」

「これは染めてませんよ。生まれつきです」

それを訊いた大林は、少し驚いた顔をした。

「生まれつき—— っていうのは聞いたことないが。どこ生まれだ？」

「日本です」

「……聞いたことないな……」

この世界で黒い髪は稀なのだと、ハルトキは自分へ対する、人々の妙な視線の理由をようやく確信した。

「一つ、訊いていいですか？」

ハルトキが大林に訊く。

「なんだ？」

「ちょっと小耳にはさんだんですが、最近、町で暴れまわる集団がいると……。そしてそれが『田島弘之』の連中の仕業だとか」

それを訊いた大林は、少し迷ってから口を開いた。

「お前を、本物の男と見込んで話す」

うなづくハルトキ。

テントの中の不良や、近くの壁にもたれている不良も、聞き耳を立てている。

「その犯人グループは——『田島弘之』ではない。別の団体だ」
「別の……と言うと？」

「『ニュートリア・ベネツへ』の連中の仕業だろう」

「……ニュートリア——ベネツへ？」

——『ニュートリア・ベネツへ』——

頭領、KEN 窪井率いる不良集団。その極悪非道さは、“不良”の域を超えつつある。

“お尋ね者”として、懸賞金がかけられている。一般的には、その実体のほとんどが不明。

「『ニュートリア・ベネツへ』は、オレ達『田島弘之』のライバル

——いや、“敵”だ」

大林が、目の前で燃える炎を、じつとにらむ。

ハルトキは、浮かんだ疑問を口にする。

「でもなぜ、『田島弘之』が疑われているのか……」

「……どうやら、やつら…… 犯行時に『田島弘之』のグループ名を名乗っているそうだ」

拳を固める大林。

「嫌がらせ…… でしょうか？」

「わからん」

怒りを精神力で抑えこむ大林。

ハルトキは、自分にできることはないだろうか？ そう思い、腕を組んだ。

だが、今のハルトキには、やるべき任務がある。今は大林達に関わっている場合ではないのだ。

「深刻ですね」

「深刻だよ」

——町に入ったエンドーは、とりあえず言われたとおりに、宿をキープしておくことにした。

疲れ顔のエンドー。

町に入るとき、何人かの警備員に足止めをくらったのだ。なんでも、数週間前から、町の外側をモンスターがうろつくようになったとか。

擬人モンスターの可能性も否定できないため、町の出入りには厳重な警戒態勢がしかれている。

防壁がつくられていたのも、モンスターの侵入を防ぐためだろう。エンドーが入ってきたのは、東出入り口。現在、モンスターがうろつくのは、西出入り口付近の平原。

この町は、北と南を山に挟まれている。そのおかげで、現段階では東方面でモンスターは確認されていない。

「またモンスターだとき。案内人」

「らしいですね。セルヴォは人型だけではないということです」

「はぁー……」

溜め息とともに、体中の力が抜ける。

「……宿をキープしたら、すぐに武器を買わなきゃな」

エンドーはすぐに立ち直り、とりあえず金稼ぎの前に、宿を探すことにした。

メインストリートを歩くと、行商人達がさまざまな露店を構えていた。

やはり、売り物は武器系が多い。

見たことのない武器や防具が、たくさん露店に並べられている。

「すげー」

エンドーはこういう商品を見ると、なぜかわくわくするのだ。

「はいはい！ その兄さん！」

行商人のおじさんが、エンドーを呼び止める。

「『御守り』はいかがかな？ 運気を上げる御守りに、精神をとぎすます御守り。いろいろあるよ」

いかにも怪しい商品ばかりだ。

御守りの効力なんか信じないエンドーは、丁重に断った。

「一番安いのでいいからさ。これ、この『マンティコアの爪』は、なんと！ たったの2P——」

ペオラ

とんがった小石を差し出す行商人を無視して、エンドーはメインストリートを進んだ。

宿らしき建物は、周辺に見当たらない。

その代わり、町の西端—— 高い『物見やぐら』らしき建造物の前に到着した。

何人もの見張りが、外側の様子をうかがっている。そしてその向こうに、町の西出入口が。

「止まりなさい」

鎧を着た警備員が、近づくエンドーを止めた。

「わかつているだろう。この先は危険だ」

「少しだけ、様子を見させてくれませんか？」

「ダメだ、ダメだ！ これは町長命令だ。ここを通りたい者は、許可証に町長のサインをもらってこい！」

半分キレかけの警備員。

エンドーは、とりあえず、あきらめて引き返した。

「……町長か。どっちにしろ、合うしかなさそうだな」

「通行許可証をもらわないと、この町から先に進めそうにないですね」

「いろいろと、調べておく必要があるな。宿の前に、町長の居場所くらい把握しておくか」

その場所から見回しても、町長が居そうな建物は見当たらない。この世界にも、町役場とかあるのだろうか？

エンドーは、通りかかったおじさんに尋ねる。

「すいません。町長は、どこに居るのでしょうか？」

すると、おじさんは途端に凍りついたような表情になり、静かに言った。

「キミはこの町の住人ではないな。町長とは関わらないほうがいい」

首をかしげるエンドー。

「なぜ？」

「怪しすぎるんだよ。あの町長は」

「というと？」

「一ヶ月前に、元町長が引退して新しく町長になった男。そいつは、就任するやいなや、大至急、町を防壁で囲むように町民全員に指示

を出した。数日で壁は完成したが、その直後だ。モンスターが現れ出したのは」

たしかに妙な話だ。と、エンドーは腕を組んだ。

「町長には、十分に注意しな」

そう言い残して、おじさんはエンドーから離れた。

——その後、何人かの人に話を聞くエンドー。

だが、どれもが聞いたのと同じような内容だった。

誰もが共通して、「町長に関わるな」だ。

『町長が就任した途端に、モンスターが出現し始めた』『町長は、滅多に人前に姿を現さない』『町民からの町長への話は、ほとんどが伝言係に任される』などなど、どう考えても怪しすぎる話の内容。

「探ってみる必要は、あると思うか？」

町長に関する情報を復習し、エンドーは案内人に訊いた。

「どうでしょうか……。しかし、モンスターと関わりがある可能性がありますね。モンスターというのは前回にも出てきましたが、それはデンテールが改造したプログラムでした。——しかし、今回のモンスターは、セルヴオ世界のモンスターです。『王』と関係があるのかもしれませんが」

「まずは、『町長様』を調べるか」

その後エンドーは、何とか人から聞き出した町長の居所——町長の自宅を訪れた。

滅多に人前に現れない町長。彼はずっと自宅にこもっているらしい。

町長の自宅——その外見は以外にも、とっても小さい。

「ちよつとエンドーさん。いきなり乗り込むんですか？」

「下調べにな。まさか、“人型”相手に武器も必要ないだろ」

「それはそうですが……、しかし、もう少し慎重に——」

——ガチャッ

ドアを開けるエンドー。

案内人は、彼の猪突猛進な性格を思い出し、それ以上の説得は無駄だと悟り、

「気をつけてください」

それだけ言って、後は本人に任せることにした。

何だかだ言っても、前回のピンチの連続を、ことごとく打破してきたのだ。そう簡単に窮地に負けはしない——

——五人ほどの警備員に取り囲まれるエンドー。

「……………」

——ホールドアップ。

07：実技試験

かこのネズミが鳴いた。

フラスコや、試験管、薬品などが並べられた棚。床に乱雑に置かれた、薬草や鉱石のような物。

まるで研究室のような薄暗い地下部屋で、男は机に向かい、ノートの上でひたすらにペンを走らせていた。

ノートには、簡単なモンスターのイラストの横に、複雑な計算式や文章がビッシリ。

「この研究を完成させれば……」

ろうそくの炎に照らされた男の顔が、不気味に笑った。

コンコン

ノックの音。続いてドアの向こうから、別の男のかしこまった声が聞こえた。

警備員だ。

「町長様。たった今、侵入者が——」

「どのような方でス力？」

ペンを走らせたまま、男——町長が警備員に訊く。

「怪しい黒髪の少年でして——町長に会わせると」

町長はペンを置いて、机の引き出しを引いた。その中の一枚の紙に目をやった後、机の上のノートを入れ、引き出しをもどした。

「ここに連れてきてくだサーイ」

——数十秒後、警備員に連れられて部屋に入ってきたエンドー。エンドーはいぶかしげな目で、その部屋の隅々を見回した。

突然の来訪者に、かごの中のネズミが騒ぐ。

エンドーは、壁際の一体の人形に目を止めた。

二メートル近くある、鉄の塊のような人形。頭の真ん中に一つだけある眼が、キラリと光ったように見えた。

「（不気味なところだ）」

次に、エンドーは町長を見た。

町長は、警備員に出て行くように言うと、椅子から立ち上がって、壁の大掛かりなスイッチを下げた。

ブォン…… という音の後、大きな電球に明かりがついた。薄暗かった部屋が、一瞬にして屋外のように明るくなる。

「ユーは誰ですか？」

町長が椅子に座りなおし、エンドーに訊く。

「遠藤京助といます」

「オウ！ キョースケイ、デスカー」

妙にテンションの高い町長を前に、呆氣にとられるエンドー。

「（何なんだ、この人は……）」

だが、すぐに氣を持ち直し、西門の通行許可証にサインをしてもらえるか、さっそく訊いてみる。

「えーとですね、町長——」

「わかってマース！ ユーの望みくらい、手を取る—— 手に取るようにわかりマース！」

「（マジ、何なんだ、この人は……）」

エンドーはこういうキャラがあまり好きではない。なぜかというとお調子者なほど信用できないからだ。

「まあ、それなら話が早い。早く許可証に——」

「ミーのサインでショウ？」

「そうそう。許可証にサインを——」

意外と話がわかる人のようだ。と、エンドーは町長に対するイメージを改めた。

だが、「ちょっと待ってください」と言った後、町長がエンドーにわたしたのは――

サイン色紙に達筆で書かれた、『チョーちょう』という“サイン”だった。

「……………」

言葉を失くすエンドー。

満足そうな顔の町長。

「……………案内人…………… やっぱり、武器を手に入れてから来るべきだった」

「殴っちゃダメですよ。騒ぎは起こさないようにしてください」

「……………わかってる」

エンドーは、咳払いをして気持ちを落ち着かせてから、今できる限りの笑顔で言う。

「町長様、サインはありがたく、いただいております。それはそれとして別のほうのサインを――」

「オオウ！ そうデスカー！ サイン入りＴシャツもほしいのデスネー？」

エンドーの右手で、色紙がグシャリと握りつぶされた。

「サインだよ、サ・イ・ン！ 通行許可証にサインしてくださいな」。って言いたいんだオレはあ……！！！」

ぜー、ぜー、と息を切らすエンドー。

「もしかシテ、西門の通行許可証がほしいのデスカー？」

「ああ…………… ソウダヨ……………」

エンドーは、ようやく話が通じた。と、脱力する。

そうなればもう簡単だと、エンドーは期待したが、町長の言った言葉は予想外だった。

「ユーには、試験を受けてもらいマース」

ビシッと、エンドーを指差す町長。

「試験って……。学力でも試そうって言うんで？」

「ノンノン。そんな甘い試験ではアリマセーン。学力というより、実技デース」

「……………」

エンドーは首をひねる。

「門の向こうは、とっても危険デース。デスから、あなたにどれほどの実力があるのか、試させてもらいマース」

町長は部屋の隅に移動し、そこにあつたドアの鍵を開けた。

ドアを開くと、そこには大きな機械が。

町長が機械の電源を入れると、機械の一部であろう床のプレートが、白く光った。

「これは、いわゆる『テレポート装置』というもののデース」

町長が人差し指を立てて説明する。

「コレを使えば、設定した別の装置の元へ、瞬時に移動できるのデース。『ワープ』というやつデスネー」

「へえ、そういう技術は発展しているのか」

「コレハ、一般的には知られていない技術なのデース」

自動車やテレビなどの技術は発展していないのに、現実世界よりもすぐれた技術が発展していることに、エンドーは驚いた。だが、ここは異世界なのだからと、とくに不思議だとは思わなかった。

「覚悟ができたのなら、このプレートの上に立ってください」

「そいつで、試験部屋へテレポートさせるってのか？」

「そんなとこデスネ」

一呼吸し、エンドーはプレートに立った。

「とても良い精神デス。それでは、準備はいいデスネ？」

「ああ、いつでも」

それを聞いた町長は、装置のレバーを操作した。

——突然、足元の床がぬけた感覚。宙に浮く感覚を、エンドーは感じた。そして、そのときになって重要なことを思い出した。

「あ、そっぴや武器——」

言葉が終わらないうちに、エンドーは“飛ばされた”。

プレートが更に激しく発光し、エンドーの体がガラス片のように砕け、プレートに吸い込まれた。

——プレートの光りが収まった。エンドーの姿は、完全にその場から消え、部屋に静けさがもどった。

「……せいぜい、がんばって死ぬがいい。あの方に逆らうことは許されないのだから」

町長は装置の電源を切った。

「ほれ、次はこれだ。少し重いぞ」

「はいはい！」

マハエは元気に返事をして、差し出された木箱を受け取った。倉庫に保管されていた、ずっしりと重い木箱を荷車に乗せ、近くの工場へ運ぶのだ。

荷車を引いていくおじさんを見送り、しばし休憩。

倉庫に一人残されたマハエは、額の汗を腕でぬぐった。

「……なに、いい汗かいているんですか」

スポーツドリンクのCMのような、さわやか笑顔のマハエを見て、案内人が言った。

「ああ、来てたのか、案内人」

笑顔のままのマハエ。

「今、来たところです」

「この町の工場がさ。ちょうど、バイトを募集してたから、一日だけ雇ってもらってる」

コップに入れた水を、一気に飲むマハエ。

「それはいいのですが、なぜ力仕事なんですか？　これから戦うことになるんですよ」

「プハア。このくらい軽いって。それに必ずしも、戦いになるってことは——」

「残念ですが、モンスターも出現しています」

「……は？」

マハエは、一瞬コップを落としそうになる。

「エンドーさんのところで、モンスターが出現しました」

その言葉に、マハエは冷静に、気を落ち着かせコップ横に置く。

「も、もんすたーが出たって……」

「まだ、戦闘にはなっていないですが、このまま任務を遂行しようとすれば、あなたたちも——」

「キーーーーッ！」

案内人の言葉を、奇声でさえぎるマハエ。

しばらく口をあけて、天井を見つめ続けた。

「おつかれさん。もう終わりだよ」

倉庫の中の木箱を運び終え、おじさんが金貨の入った布袋をマハエに渡した。

さつきと打って変わって、元気のなくなったマハエを、おじさんは心配そうに見ていた。

給料を受け取ったマハエは、さっそく少女に紹介された宿を探す。

「――モンスターか……」

金貨の入った布袋を手の上で転がしながら、マハエは考えていた。

「まあ、最初から覚悟はしていたが……」

「そうですよ。それを承知で引き受けたのでしょうか？」

「あんな。オレ達は引き受けたわけではないぞ」

「はいはい」

――宿に着いた。

ドアを開け、入ったところに、小さなフロントがある。

「いらつしゃい」

受付のおばさんが、入ってきたマハエに笑顔を向ける。

「一泊、いくらですか？」

マハエは、少女にもらった割引券を差し出した。

「旅人さんかい？ それなら、『5P』だよ」
ペオーラ

マハエは、事前に工場のおじさんに教えてもらっていた。

この世界のお金の数え方は、『1P』が金貨一枚。『5P』なら金貨五枚という、簡単なものだ。

遠くの町から旅をし、この辺のお金のことをよく知らない。と言ったら、親切に教えてくれたのだ。『ペオーラ』というのは、世界の創造神の名前らしい。

マハエは、布袋から小さな金貨を五枚取り出し、カウンターに置いた。

「じゅっくりどうぞ」

そう言つと、おばさんはマハエに、部屋番号の入った札をぶら下げた鍵を渡した。

08：トカゲに鳥にクモ

ボウウン……

突然、地面に足をついたエンドーは、バランスを崩して尻餅をついた。

「……………」

言葉が出ない。

目がまわる。

町長の地下室にあったテレポート装置で、エンドーは強い光に包まれた後、数秒間、光の空間を移動したように感じた。

そして、光は消え、気付けば足が地面をとらえていた。

しばらくしてエンドーは立ち上がると、後ろにある装置を見た。

さっき見たテレポート装置と同じような形だ。そして、足元には光のなくなったプレート。

これが、町長が言っていた“別の装置”なのだろう。

装置から装置へ、瞬時に移動する技術。

その、現実ではあり得ない技術は、エンドーが思い描いていた、『魔法』を使った『テレポート』なんかよりは、はるかに現実的だった。

そして町長の話では、今エンドーが居るこの場所は、『試験部屋』のはずなのだが――

「なんだ、ここは？」

そこはどう見ても、ボロボロの小さな小屋の中だった。

レンガの壁に、つつけば孔の開きそうな、板の屋根。

あるのは、使えなくなったテレポート装置と、外へ通じるドアだけ。

「いったい、何が試験なんだ？」

エンドーは、案内人と呼ぶ。

しかし、別のところへ行っているらしく、応答がない。

怪しいことこの上ないが、外に出てみるしかない。と、エンドーはドアへ近づいた。

ドアを少しだけ開き、外の様子をうかがう。

見通しの良い、ただっ広い平原だ。

だが、そのところどころでうごめいているのは――

「モンスターだ……」

エンドーはそっと、ドアを閉めた。

「マジかよ……」

町長が言っていた“試験”。それは、モンスターと戦えということなのだろう。

なんとなく予想はしていたエンドーだが、うろついているモンスターの数は半端ではない。

「町長め…… ぶん殴ってやる」

拳を固めると、エンドーはドアを開けて外へ飛び出た。

そこにいる何種類かのモンスター達は、前回の改造された『モンスタープログラム』とは、違った。

ゲームに現れるような、武器を持っている巨体はいない。いるのは、百三十センチほどの二足歩行のトカゲや、ニワトリよりもひとまわり大きな鳥。どれも野性的な姿のモンスターだ。『トカゲ』は、どう見ても肉食にしか見えない。『鳥』のほうは、赤っぽい羽毛で、

敏捷性が高そうな上に凶暴らしい。これも肉食なのだろう。

——こつちの世界に來ると、本能的な部分に、刻まれる情報のようなものがあるらしい。

現実世界では使えなかった『魔力』の使い方を、今ははっきりと思いついていた。

エンドーは深呼吸すると、地面を蹴った。

——走る。

——モンスターが、エンドーに気付く。

——腕を構えるエンドー。

——モンスター爆破。

連続三発の爆発で、三体のモンスターが倒れた。

正面からエンドーに飛び掛った、人間の赤ん坊ほどの巨大な『クモ』が、エンドーの放った『魔力球』によって微塵に吹き飛んだ。

エンドーは早くも疲れを感じていた。

走っているせいだけではない。連続で魔力を使い続けることは、重い疲労となる。

大きな岩を跳び越え、その後ろに身を隠した。

「ハッ…… ハッ……」

動きを止めると、途端に呼吸が激しくなる。

エンドーは、モンスターの鼻が自分の匂いを嗅ぎ付けないことを

祈り、呼吸を整える。

——ふと、手に触れた物があつた。

見ると、刃のない小太刀のような打撃武器と、小型のバッグが転がっていた。そして、近くには乾いた血がべつとりと……。

エンドーの他にも、誰かが“試験”を受けたのだろうか？　そして、殺された？

ゾツとするエンドーだが、その“誰か”が残してくれた武器はありがたい。

気付けば、もう夕暮れが近づいている。暗くなれば非常にマズイだろう。

エンドーは、『無刃刀』とバッグを拾うと、岩陰から飛び出た。

武器を手にした途端に、更に勢いのついたエンドー。

飛び掛ってくるモンスターに、無刃刀を叩きつけ、走る。

エンドーは、どちらかといえば運動は苦手だ。というか、面倒くさいとは思っていない。

だが、前回の件で、生き残るために運動能力は必須なのだと、身をもって知った。

以来、できる限り体力づくりを心がけた。

そういう面では、前回のゲームはエンドーにとっても、他の二人にとっても、良い結果をもたらしたと言えよう。

——敵を蹴散らし、走るうちに、前方に垂直の岩壁が見えてきた。行き止まりか！？

止まることはできない。走り続けながら逃げ道を探す。

「あれだ！」

壁の根元に、小さな裂け目ができていた。

人一人—— やせたエンドー一人が、ぎりぎり入れるくらいの裂け目。

洞窟のようになっていいるのかもしれない。

エンドーは、最後に立ちはだかった『トカゲ』を殴り飛ばし、裂け目に飛び込んだ。

もしも行き止まりで、身動きがとれなくなったらどうする？ エンドーの脳裏に、不吉な結果が浮かんだ。

——肩を少しすりむいたが、エンドーの予想通り、入り口こそ狭いものの、入ってみると、歩くのに苦労しないほどの広さの洞窟だった。

起き上がった『トカゲ』が、未練がましく中を覗き込んでいた。

トカゲなら入れそうなものだが、あいにく異様に出っ張った腹のせいで、それは無理のようだった。

「オレを食えなくて残念だったな」

エンドーは、トカゲに向かって親指を下に向けた。

そして、背中を向けると、洞窟の奥へ進む。

暗くて何も見えない。

エンドーは、無刃刀を前に突き出しながら歩く。

「くそっ…… こっちの仕事も楽じゃね——」

ズルッ

足元の様子が急変した。

前ばかりに気をとられていて、そこで道が途切れていることに気がつかなかったのだ。

「おわああああああ……！！！！」

岩をすべり台のようにすべりながら、エンドーは地下へと落下した。

「——いてっ……」

空ではカラスが、夕暮れを知らせていた。

「もう夕暮れか」

空を見上げた大林が呟いた。

『田島弘之』の本部広場——

ハルトキと大林は、今だ焚き火を挟んで向かい合っていた。

「長話をしすぎたな。おし、それじゃ、そろそろ——」

「ボス——」

地下通路のほうから、不良が駆けてきた。

「どうした、そろそろ静かにする時間だぞ」

「そ、それよりも大変なんスよ！ コロシアムの前に召集をかけた二人が、今やっと帰ってきて——」

すると、隠し扉を開いて、二人の不良がボロボロの状態で、抱えられながら広場に入ってきた。

「どうしたんだ！」

大林が二人に駆け寄る。

「ボ、ボス…… 大変です……。ニユートリア…… ベネツヘが……」

「窪井が……？ まさか……」

「……攻めてきやした…… 西の河原…… です……」

大林は一瞬放心状態になったが、すぐに気絶した二人を両肩に抱え、テントへ移動させた。

「仇はとる。その後に立派なカンオケをつくってやるからな」

“気絶”した二人に優しく話しかける大林。

「（あ、もうそこまで話進んでるんだ）」

ハルトキはその様子を、呆然と眺めていた。

「悪いな。お前はもう帰っていいぞ」

大林は、ハルトキにそう言うってから、集まった不良を向いた。

「みんな。行くぞ」

ロープをひるがえし、広場を出て行く大林。そして後に続く不良達。

その不良達の姿には、さっきまでの野蛮さは微塵もなく、“頼もしい男達”の後ろ姿が、オレンジ色の夕日に美しく照らされていた。

「吉野さん……」

案内人の声。

「いたの？」

「いえ、たった今、来たところです。どうしたんですか？ 何か騒がしいですね」

「なにやら、ごたごたが起こつたみたい」

「そうですね…… 巻き込まれないうちに去ったほうがいいですね」

「まだ、重要な情報は何一つ聞き出せていないけどね……」

ハルトキはポケットから、くしゃくしゃになった、<お尋ね集団、田島弘之>の『ビラ』を取り出した。

「わたしは、そろそろ『スリープモード』に入ります。少し“体調”がすぐれないので」

「はいはい……」

「気をつけてくださいね」

——案内人の声が聞こえなくなり、ハルトキは歩き出した。

「巻き込まれないように……か……」

ハルトキは、『ビラ』を両手で固め、それを焚き火の中へ放り入れた。

「無理な話だね」

09：夕暮れの戦い

西の河原――

川の水が、夕陽に輝きながら流れゆく。

「何の用だ？ ニュートリア・ベネツへ―― K E N 窪井！」

西日に照らされる大林の顔は、じつと―― 目前に立つ男に向けていた。

瞬きもせず、ただ、明らかに“敵”を見つめる目――

「何の用か…… だつて？」

フン！ と鼻を鳴らす男―― K E N 窪井。

背の高さは、大林とほぼ同じ。真っ青な髪の毛が風にそよいでいる。

大林の後ろには、リーゼントの不良が九人。窪井の後ろには、短髪を紫色に染めた不良が十五人。『田島弘之』と同じく、統一された髪型と服装だ。

「ふざけるなよ、大林。よくそんなことが言える」

「何のことだ？」

「ハッ！ これだよ、まったく」

窪井は呆れたように舌打ちし、後ろの不良達に指示を出した。

「やっちまえ」

それぞれが武器を構える。

「ニユートリア・ベネツへなんぞに、負けるわきゃねえ！」

大林組も武器を構え、意気込む。

——吹き抜けた冷たい風。それを合図に、互いの勢力がぶつかり合った。

武器と武器、拳と拳が激しくぶつかり合う。

「ふはははは……」

「——まて！」

戦いのさなか抜け出す窪井を、大林は見逃さなかった。周りに居た三人の窪井組を、一瞬でなぎ倒す大林。

「何のつもりだ、窪井！」

笑いながらその場を離れる窪井を、大林は追った。

「——やってますねえ……」

しばらくして、小さな孔を抜けてきたハルトキ。

地下通路の分かれ道の一つは、河原に続いていた。

その河原で巻き起こっている、激しい戦い。

ハルトキは、少しだけ恐怖を感じていた。こんな大勢の争いを見るのは初めてなのだ。

武器をはじかれ、無防備の状態抵抗する大林組。人数では明らかに、窪井組のほうが優勢だ。

だが、その中に大林はいない。

ハルトキは、目をこらして大林を探した。

——乱闘を抜けた向こう側。皆と離れた場所にいる。
近くに別の男がいるが、闘っている様子ではない。

「ぐあつ……！」

大林組の不良が一人倒された。『田島コロシウム』で、ハルトキと闘った『ソウシ』だ。

「くっそお……」

立とうにも、もはや力の残っていないソウシ。

ハルトキはソウシに近づくと、その手元にあった『メイス』を拾い上げた。

「あ…… あんたは……」

かすれ声のソウシが、うつ伏せの状態でハルトキを見上げた。

「駄目だ…… 一般人がニュートリア・ベネツへと関わっては……」
「……………」

ソウシの言葉を見無視し、ハルトキは大林の元へ向かった。

「いくらあんたでも…… ボスと窪井の闘いに巻き込まれちゃ……
死ぬぜ……」

ソウシの消えそうな声は、ハルトキには聞こえていなかった。

この戦いは、ハルトキには無関係ではなくなっていた。

大林を助けたい。自分でもよくわからない感情が、ハルトキの中で渦をまいていた。

「——もう逃がさない」

大林と窪井のにらみ合い。

不良達の戦いの声は、だんだんと小さくなっていく。

どちらが勝っていて、どちらが負けているのか、それを確認する

余裕は、今の大林にはない。

『田島弘之』の連中が『ニュートリア・ベネツへ』に負けるはずがない。大林はそう信じた。

「逃がさないって？ ハハハ！ わざわざ二人だけで闘える場所までみちびいてやったというのに」

窪井の自信満々の顔。

「ふ……。それはありがたいね」

大林もそれに負けていない。

——ガッ！

なんの前ぶれもなく、突然繰り出された窪井の素早い蹴り。

右から、左から——そしてかかと落とし。

それらの技をすべて繰り出すのに、二秒とかからない。

だが、大林も平然とした顔で右からの蹴りを右腕で弾き、左からの蹴りをしゃがんでかわす。そこに叩き込まれたかかと落としを、後ろへ転がって回避した。

不良達の殴り合いなどとは格段にレベルが違う、超ハイレベルな闘いだ。

——攻撃の流れは変わらない。コンマ五秒もおかず、窪井の低姿勢からの蹴り。

大林は、それをジャンプで避けると同時に、空中で回し蹴りを放った。

——低姿勢のまま、窪井はそれを回避できない。大林の攻撃は、窪井の側頭部を打った。

通常ならば、一撃でノックアウトできる威力だが、窪井の場合は違った。

大林は、足に伝わった感覚に違和感を感じ、すばやく攻撃を中止し、後方へ退避した。

「窪井…… お前……」

大林は、窪井の首筋を見ていた。
足に伝わった感覚は、人を蹴った感覚ではなかった。

窪井の首筋は、赤く変色し——首の筋が、まるで極限まで鍛えられたように、盛り上っている。
赤くなっているのは、大林の蹴りの効果ではないだろう。窪井の肉体に明らかな変化が起こったのだ。

窪井が立ち上がると、盛り上った筋は徐々に元にもどり、赤くなつた部分の色ももどった。

「どうした、大林。少しも効いてないぞ？」

「てめえ…… 何なんだ？」

呆氣にとられる大林。窪井にとっては、まさに攻撃のチャンス。

すばやく移動し、間合いを詰める窪井。

大林はぎりぎりで反応し、上から迫る窪井のパンチをなんとか回避した。

だが、大林はここでも違和感——まるでゾウの足が目の前に落ちたような、重い空気の動きを感じた。

——ガズン！

窪井の拳が地面を割った。

小石が敷き詰められた地面に、窪井の拳がめり込み、弾かれた小石が弾丸のように飛び散る。

大林には、その光景が信じられなかった。微妙に攻撃がかすった、大林の頬が切れ、血が流れる。

まさにゾウの如く重い拳。急所に直撃していたら命はなかっただろう。

「窪井…… 何しやがった……？」

赤く変色し、石のようにながちりと硬そうな窪井の拳。腕はどのようなになっているのか、服の袖が長いのでわからない。

「無駄さ、大林。いくらお前でも、今のオレには勝てない。たとえ、お前のところの連中が、束になってかかってきても、オレを倒すことはできない」

大林は口を開けなかった。窪井の言葉は、けっして大げさなものではない。と、大林にはわかった。

「（こいつは…… ヤバイかもしれない）」

窪井の脅威。

大林の本能が、警告を発していた。

大林は、今まで数え切れないほどの敵と戦ってきた。そして、生き残ってきた。

しかし、今、目の前にいる化け物は、踏み越えてきたそれらとは比べ物にならない。

「——ぐふっ……！」

戦っていた窪井組の不良が倒れた。

何かが近づく気配に、大林は目を向けた。

「ハルトキ……！」

背後から襲い来る窪井組の不良を、ハルトキは『動体視』を使い、

軽々と避け、腹にメイスの一撃をぶち込む。

ドサツ……

大林は初めて知った。

大林組と窪井組。圧倒的に、大林組は劣勢だった。ほとんどの不良が倒れている中、残っているのは窪井組の連中だけ。

窪井と大林に近づくハルトキを、残った窪井組が阻止しようとし、倒されていく。

「なんだ、あいつは……？ お前のとこの新入りか？」

窪井が大林に訊く。

「……ハルトキ！ 来るな！」

大林の言葉に、ハルトキは従わない。二人のそばまで来ると、足を止め、窪井を見据えた。

「加勢します。大林さん」

「バ力を言っな。お前の戦い方は見た。お前が持っているのは、ずば抜けた動体視力だけで、実戦経験はゼロに等しいはずだ！」

その通りだ。大林は『田島コロシアム』でハルトキの闘いを一度見ただけで、彼の戦闘能力を細かく分析していたのだ。

「でも、今はあなたが不利な状況だということは、ボクにもわかります」

大林は、ゴクリとつばを呑んだ。

ハルトキの、“何か”を感じ取ったのだ。

キーン……

ハルトキの眼が銀色に光った。
窪井が突然うなり、硬直する。

「少ない戦力くらいには、なるつもりです」

ハルトキを睨みつけたまま声も出せないでいる窪井の様子に、大
林は得体の知れない恐怖を感じた。

「——お前、何者なんだ？」

10：ケンカとケジメ

不良達は倒れ、静かになった河原。

立っているのは、大林、窪井、ハルトキだけになっていた。

「そつか…… きさま……」

窪井が何かうなる。

そして次の瞬間には不気味な笑みをつくり、ハルトキの“力”に抵抗する。

（ガシャン！）

鎖が引きちぎられる感じがし、ハルトキは、はっと窪井を見た。

ハルトキの『金縛り』は、完璧なはずだった。完全に敵を“縛った”はずだった。

しかし窪井は、その『魔力の鎖』を、力づくで引きちぎったのだ。

「何なんですか、こいつ」

窪井の体が、赤く変色していく。

「こいつが、ニュートリア・ベネツへの頭領、KEN 窪井だ」
身構える大林。

「はああああああ……」

窪井が低くうなると、まるでポンプで空気を注入するように、窪井の体中の筋肉が盛り上がった。

着ている服を裂き、むき出しになった窪井の全身。

幸い、服の下にレスリングコスチュームのようなものを着ており、

全裸はまぬがれている。

「……何なんですか、こいつ」

ハルトキが再び問う。

「……オレにもわからん」

——窪井のボディは、モンスターののように筋肉隆々。赤く染まった人間離れた筋肉が、ぴくぴくと動く。

「驚いたか！　これが新しいオレのパワーだ！　すばらしい……！」

変身前の窪井を並べてみても、本人だとはわからないだろう。

「てめえ……　いったい……」

驚愕の表情で窪井を見る大林。

ハルトキは前回のゲームのおかげで、こういうキャラクターに対しての免疫ができたらしく、さして驚かない。

「とうとう、人の道を踏み外したか、KEN　窪井！」

「何を言う、大林。これが新しい人の道だ。この力で、お前等をねじ伏せてやるわ！」

ドゴウン……！！

窪井の強烈な一撃で、かたわらの岩が砕かれた。

「……悪いですが大林さん。やはり加勢させてもらいます！」

ハルトキが窪井の背後へまわった。

大林はもう、何も言わなかった。

このカイブツを自分一人で倒すのは無理だと悟った。

「ふんぬっ！」

窪井の一撃目はハルトキを狙っていた。だが、動体視を発動中のハルトキにとっては、まだかわすことのできるスピードだ。

窪井の攻撃が地面にめり込むのを横目で確認し、ハルトキは力任せに窪井の横腹をメイスで強打した。

——ハルトキの力が弱すぎたのか、あるいは、窪井の肉体が強靱すぎるのか、かたいサンドバッグを殴ったのような音しかしなかった。

しかし、効果がない、というわけではないようだった。

窪井は一瞬顔をゆがめると、すぐさま第二打を放つ。

だが、攻撃が放たれた瞬間、大林の蹴り上げで、窪井の腕が上方にそらされた。

「わかったハルトキ！ 攻撃はオレに任せろ！ お前はおとりに徹してくれ！」

大林の言葉にうなづくハルトキだが、戦いを長引かせる気はなかった。

魔力が尽きれば、動体視は使えなくなる。そうなってしまうえば、ハルトキは戦力外となってしまう。

イコール、この戦いに負けてしまうことになる。最悪—— 殺される。

大林の攻撃力は、今の窪井には劣るものの、正確に急所を突き、確実に相手を弱めていく。

その戦いぶりは、ハルトキにとって見たことのない、身軽な、そして凄まじい運動能力だった。

ハルトキが窪井の気をそらせ、大林が飛び上がり、頭部を回し蹴り。

会って間もない二人にしては、なかなかすばらしいコンビネーションだ。

さすがに強気だった窪井の表情にも、焦りの色が出てくる。

焦っているのは窪井だけではない。ハルトキの動体視のダメージは、魔力だけではなく、眼にもくる。長時間使い続けると、眼が疲れてくるのだ。

早く終わらせなければいけないという焦りが、ハルトキの判断力を鈍らす。

窪井の攻撃が、ハルトキの頭すれすれの空気を殴り飛ばした。

大林は、ハルトキの異変に気付いていた。

大林自身も、この戦いを早く終わらせたかった。ハルトキの様子に加え、これだけの騒ぎを起こしていれば、すぐにでも町の連中に気付かれてしまう。

——窪井は、ザコであるハルトキから潰しにかかった。

もつとも、今の窪井にとって、両者ともザコに違いはない。だが、ザコとザコが力を合わせ、脅威となっている今、ザコの中でも更にザコであるハルトキを真つ先に潰しておくのが、効率の良い戦い方だ。

ハルトキの眼は、すでに疲労を感じ始めていた。

窪井の攻撃が、ついさつきよりも、早く感じられる。

『氷室』のときと同じだ。だが今は、あのときよりも長持ちしている。

それに、窪井の動きは氷室のものよりもだいぶ遅い。

ハルトキの異変に、窪井も気がついた。

ハルトキに拳を連打する窪井。ハルトキはそれを避け続けるが――

「はははあっ！」

真正面から、窪井の――今度は“腕”が迫った。

ハルトキは「しまった！」と思った。

拳――ハルトキから見て、“点”が迫ってくる場合は、少し体を動かせば避けることができる。しかし、腕――腕全体の攻撃の場合、“線”が迫ってくるのである。単純にそれだけなら、避けることもできないはない。しかし、続けざまの“点”の攻撃から、突然“線”の攻撃へと移行し、ハルトキは混乱した。

完全に不意打ちを食ってしまったと思った。

だが、ハルトキの防御本能は、寸前のところで窪井の腕を両手で防いでいた。

拳よりは威力が低かった。そのおかげで、五メートルほど振り飛ばされる程度ですんだ。

――大林はそのチャンスを見逃さなかった。

すぐにハルトキを振り飛ばした腕を踏み台にし、窪井の頭上ヘジヤンプ。背後へ着地するとき、窪井の首に腕を回し、落下の速度に合わせて頭部を地面に叩きつけた。

「ぐあっ！」

窪井の巨体が地面に倒れ、周りの小石が散乱する。

大林の長いローブが、ひらりと地面についた。

「――窪井、一つ訊こう。これは、ケンカか？ それとも、殺し合

いか？」

「……………」

窪井は驚いた表情のまま沈黙する。

もうほとんど、夕日のオレンジ色は消えかかっている。

——ニヤリと笑う窪井。

そして、大林の足首を掴んだ。

「どちらでもない。これはケジメの戦いだ」

窪井は起き上がると、そのまま、片手で大林を頭上へ放り投げた。
宙を舞う大林。

「——それは困ったな……………」

窪井が拳を振り上げる。落ちるままに落ちる大林は、その拳を回避することができない。

——ハルトキの魔力も、限界に近かった。
だが、最後の力を窪井へ向けて飛ばす。

窪井の腕の動きが、一瞬止まった。

大林は、振り上げられたままの窪井の拳に両手をつき、腕の力で再び舞い上がった。

「はあっ！」

空中で回転し、頭上からの強烈なかかと落とし。
脳天にそれを食らった窪井は、耐えられず撃沈した。

「——ケンカなら、相手を倒した時点で勝負は決まる。殺し合いなら、相手を殺すまで勝負は決まらない」

ズシン……！

窪井の敗北だった。

「……中途半端な戦いだ」

夜が近づく。

町のほうが少し騒がしくなった。

「死んだんですか？」

窪井の、赤くなり、盛り上がった体は、風船がしぼむように小さくなり、元の窪井の姿にもどった。

「殺してはいない。こいつらは、田島弘之を名乗って、町で騒ぎを起こし、オレ達をおびき出そうとしていたんだろう。こいつは、ポリに引き渡す。田島弘之の無実もすぐに証明されるだろう」

町のほうから、人の声が集まってくる。

「お前のおかげで助かった。何か恩返しができないか？」

大林が、横たわった仲間を助け起こしながらハルトキに訊く。

ハルトキは重要なことを思い出した。

「それじゃ、どこか一泊できる場所を紹介してほしいですね」
すると、大林は微笑んで言った。

「それなら、いい“宿”を知っているぞ」

11：それぞれの夜

田島弘之の本部は、盛大に盛り上がっていた。

バーベキューを肴に酒を飲み—— この世界では、飲酒は自由らしい。（ハルトキは飲まなかったが）

大林も、基本的に酒は飲まないらしい。

酔っ払いの不良達が騒ぐ中、ハルトキと大林は、やはり焚き火を挟んで向かい合っていた。

窪井組は交番へ——（さいわいどちらの組も、大きなケガ人は出なかった。）住民の証言で、町を荒らしまわっていたのは、田島弘之ではなく、ニュートリア・ベネツへだったということが証明できた。

これで、田島弘之は“お尋ね者”ではなくなった。

大林もニュートリア・ベネツへの被害者だということで、事情聴取なども簡単なものずんだ。

おまけに、ニュートリア・ベネツへの懸賞金まで入った。

「ところで……」

ハルトキはリンゴジュースを片手に、大林を見る。

「ニュートリア・ベネツへは、田島弘之に何の用があつたんです？」

串に刺した肉をかじる大林。それを飲み込み、大林は交番で聞いた内容を、話し始めた。

「窪井が言うには—— あいつらは、拉致された仲間を助けるために、オレ達を探していたらしい」

「拉致？ それが田島弘之と関係が？」

「そう、そこだ」

大林はコップの水を一口飲み、続ける。

「二ヶ月ほど前、ニュートリア・ベネツへの仲間が、行方不明になったんだ。で、KEN 窪井はオレ達がそれに関与していると思っただろうだ」

「迷惑な話ですね。実際は何の関係もないのに、あなた達が苦しめられるなんて」

ぐいっとリンゴジュースを口へ流し込むハルトキ。

「二ヶ月前に、どこかの墓地へ行っただけ、もどってこないそうだし」

ハルトキの口から、リンゴジュースが流れ落ちる。

「……なん……ですって？」

ハルトキの頭に、嫌な記憶がよぎった。

「二ヶ月前…… 墓地……」

ハルトキは思い出した。

以前、あの紫色の髪をした不良達と戦ったことがある。服装もニュートリア・ベネツへと同じだった。

——しかも、墓地で。

「……………」

コップを持ち上げたまま固まったハルトキを、大林は首をかしげて見ていた。

「どうかしたか？」

「……いいえ……。ところで、訊きたいことがあるんですが……」
明らかに変わった真実を、心の奥の、暗証番号十ケタの鋼鉄金庫に押し入れ、ハルトキは別の話題を持ち出した。

「この世界の王様のことなんですが……」

『この世界』というワードに、大林は疑問を感じたが、それは置

いとして、ハルトキの質問に答える態勢をとる。

「王か……」

「王が、いるんですよね？」

「ああ、聞いたことはある」

「聞いたことは？」

大林の言い方は、「王は存在するらしいが、詳しいことはわからない」と言う風だ。

「最近まで、オレも王の存在なんて知らなかった」

「……………」

「とにかく、すべてが謎で、城があるらしいが誰も近寄らないらしい」

頭のメモ帳に、大林の話を書き込むハルトキ。

やはり、不良集団に近づいたのは正解だったようだ。

「実際、王がどんなやつで、どんな働きをしているのか、誰も知らない」

「とことん謎なんですな……」

「俺が知ったのは、ほんの半年前だ」

ハルトキは腕を組む。

王というものは、代々王族の誰かが国を治める存在のはずだ。なのに、最近まで知らなかった人もいる。

ということは、王は最近まで存在していなかった可能性がある。

「わけがわかりませんね……」

「“ハル”、お前まさか王に会いに行くって言うんじゃない——」

大林は、ハルトキを『ハル』を呼ぶことにした。「お前は、もう俺の弟分だ」ということだ。

「ええ、王に用事があるので……」

「やめたほうがいい」

大林は真剣な目でハルトキを見る。

「噂では、城の周りはバケモノがうろついているとか」

「ば…… ばけもの……？」

「危険な場所らしい。興味本位でとかなら、やめておけ」
ハルトキを目眩が襲う。

「（ボク、そんなところに行かなきゃいけないの？）」

「ま、ハルなら大丈夫だろうか。お前には度胸がある」

「……度胸…… ですか……」

ハルトキは首を振る。

「ボクは過去の記憶を忘れることができないだけです」

「過去の記憶？」

「……ボクは、三歳のときに両親を失いました。両親はボクをつれて、一家三人で心中したんです。でも、ボクは生きていて、両親のことなんてほとんど覚えていませんが、その後、親戚中をたらい回しに。何度も捨てられたんです」

話すハルトキには、悲しみの表情も、怒りの表情もなく、ただ当然のことにように無表情で話し続ける。大林も、同じような顔で話を聞いていた。

「ですから、ボクはたくさんの人を親として見ていたんです。でも、誰もボクのことを快く思っていなかった」

ハルトキは、初めて自分の口から人に過去を話した。

この事情を知っているのは、施設の先生方と、マハエ、エンドーしかいなかった。ましてや、会ってまだ一日と経っていない者に話すことなど、ハルトキ自身も信じられなかった。

「過去を忘れられる友人達がうらやましい」

ここで、初めてハルトキは悲しい顔をした。

重い過去を捨てられない。だから現在の自分に興味をなくしてし

まう。

「……もう、寝ますわ」

木箱から立ち上がったハルトキは、テントの中へ。

「おやすみ」と互いがいさつをし、大林はその場に独りになった。

「……過去の記憶が……」

大林はただ、焚き火を見つめていた。

「過去を、忘れられる友人……」

夜空を見上げる大林の顔もまた、深い悲しみを帯びていた。

「オレと同じじゃないか……」

満天の星空が、大林には空が泣いているように見えた。

「——人間、前や上ばかりを見て生きていてもダメだね。たまには足元も見ないと」

洞窟の中で、穴に落ちたエンドーは、光沢のある岩の上をすべり、見事、着地していた。

「真っ暗だ。何も見えない」

エンドーは、ある程度、闇に目が慣れるのを待つて、無刃刀と一緒にに拾ったバッグの中身を探った。

この“遺品”の主は、旅人かなにかだったのだろう。中には、それらしい道具がいくつか入っていた。

薄い寝袋、カンテラ、マツチに乾パン、金貨が何枚か入っている革袋。

エンドーは改めて、これらの“元”持ち主に感謝した。

マツチで、油式のカンテラに火を灯す。

ここは、あの洞窟よりも、五メートルほど地下らしい。上の通路よりも横幅がある。丸い空洞のようだ。そして、外に出られそうな孔もある。

「（もう外は暗いだろうな。ここで寝るとしますか）」

モンスターから隠れるには、まさにうってつけの場所だろう。

エンドーは、寝袋と食料をバッグから出した。

ぽりぽりぽり……

エンドーの粗末な食事の音。

せめて水でもあればなあ、と、エンドーは溜め息をつく。

ぽりぽりぽり……

この世界に来て、何度心の底から溜め息をついただろうか。

ぽりぽりぽり……

「……せつないなあ……」

町の宿――

とりあえず宿を確保したマハエ。

この宿では、食事は出ないらしい。ただ泊まるだけの宿だ。夜になる前に食料を買っておいたマハエは、テーブルで独り食事。

「みんなは、どんな夜を過ごしているのだろうか？」

パンにゆで卵とベーコンと各種野菜をはさんだ、

「（名づけて、『スタミナ健康野菜サンド』）」
を、ほおばる。

「（うん。新鮮な環境で食べる晩飯は格別だ）」

今ごろ、施設のみんなは、食事を終えているだろうか。
施設の食事風景を思い浮かべる。

『みんな家族』をモットーに、長いテーブルを囲んで、年齢順に座る。マハエ達三人は最年長だ。最年少組の近くに、先生達、そして一番奥の椅子に――

突然、風景いっぱいに“クマ”のようなシルエットが現れた。

「（……オレは重要なことを忘れている）」

だが、せつかくの食事がまずくなるので、思考を停止。食べることに集中する。

「うん。うまい」

深夜――

部屋と部屋とをしきる壁が薄いせいで、隣の部屋からのいびきが筒抜けだ。

だがマハエはぐっすりと眠っていた。

「うつ…… すいません…… えんちょ——」

マハエには、そのいびきの音が、クマのうなり声のように――

「……マハエさ——ん」

いびきにまざって聞こえる声。

「ガガ—— マハエさん……」

「ほらほら…… エンドーくんも謝って—— ……が……？」

マハエはその声に目が覚めた。

「ガガガ—— マハエ…… さん」

案内人の声だ。

「……んー、案内人しゃん？」

「ガ—— 町の…… 公園へ…… 重要なこと……」

「……公園？ 何の用ですか？」

「ガガガ——」

「……」

それだけで、案内人の声は途絶えた。

マハエはベッドから立ち上がると、椅子にかけていたジャケットを着た。

「重要なこと？ 何なんだよ…… ったく……」

12：オムカエ

この世界でもまだ夜は少し寒い時期なのだろう。それは現実世界でも変わらない。

ここが現実世界の時間と同じように流れるのなら、季節は夏も近い―― 五月の中旬だ。

マハエは、夜の空気で深呼吸する。

こうして自然を感じると、ここがとても異世界だとは思えない。

「（……で、何のために外に出てきたんだっけ？）」

ついさっきまで宿のベッドで眠っていたマハエは、まだ完全に眠気が消えない頭で数分前の記憶を検索した。

――案内人の声に起こされた。

――『町の公園へ』『重要なこと』――

たしかに、この町の端には小さな公園がある。

そんなところに呼び出して何の用だというのだろうか？

疑問を頭の中で解決するほど、マハエの脳みそはまだ覚醒していない。

「（行ってみればわかるか）」

マハエは、人気のない深夜の町中をとぼとぼと歩き始めた。

「これがエンドーだったら、確実にキレルだろうな」

公園――

真っ暗で、何もいない。

虫の声すらも、聞こえない。

「案内人――」

近所迷惑にならないよう、マハエは小声で案内人を呼ぶ。

「……………」

しかし、言葉は返ってこない。

宿から公園まで百メートルほど。それだけ歩けば眠気も覚める。

マハエは、ぽーっと考えた。

あのときの案内人の声は、普通じゃなかった。少し途切れ途切れ、
というか、明らかに様子がおかしかった。

直前まで眠っていたので、マハエも細かいところは覚えていない。
ただ、「公園に來い」という部分は覚えている。

しかし、公園に来てみても何も無い。

「（もしかして案内人の寝言か？　　ったく、寝言なんていい迷惑だ）
」

そう思い、宿へもどろうとしたとき――

オオオオオオオオオオオオ……………

マハエは嫌な気配を感じ、動きを止めた。

体を流れる魔力が、何かを敏感に感じ取っている。

何かに見られている。

妙な汗が、背中を湿らす。

「……………」

何かがいる。

しかも、気配は一つではない。

オオオオオオオオオオオオ……

風の音にしては低すぎる音。

獣のうなり声でもないその音は、すでにマハエを取り囲んでいた。

——三体だ。

マハエの直感。

魔力のおかげか、マハエのすべての神経が、野生動物のようにと
ぎすまされる。

目の前にもいる。

体を動かさなければいけない。

いつでも戦闘に入れるように。

——これらは敵だ！

マハエは体を取りまく氷を、一瞬で砕き、地面を転がった。

——シュパン！

直後、鋭い風のようなものが、マハエが立っていた場所の空気を
切り裂いた。

「冗談じゃねえぞ……」

今、見えない三体はマハエの正面にいる。マハエにはそれがわかる。

「姿を見せろ！」マハエがそう叫ぶ前に、三体は変化を見せた。

まるで、ドクロの仮面が空中に浮いているかのよう――
三つのドクロが、人の顔の高さに浮いている。

そして、ドクロの周囲の空間がゆがみ、黒い色をつけていく。

ドクロを顔に、黒いマントで覆われた頭、胴体が出現した。

「……まいったな……」

マハエは、とことん自分の運命を呪った。

「死神様がむかえに来るとは…… もう、オレ、死ぬんだな……」

そう、その姿は、カマコそ持っていないが、まさに死神を模した姿。

あの世から、死者をむかえに来た使い魔。

はたまた、死者をつくるために送られた使い魔か。

「昔から、死神が見えるやつは死期が近いって言うしなあ」

マハエの頭の中は、すでに自分の死のイメージしかない。

だが、それを素直に受け入れるマハエでもない。

身構えるマハエ。

死神から逃げても無駄だと言うことはわかっている。

死神か、モンスターか。どちらにしる敵に違いないのだ。

相手の出方を見てからでは遅い。

マハエは動いた。

『自分の身を守る護身術』

現実世界に帰ったマハエが、学校の図書室で読んでみた本。

『今、身近に武器がない場合——武器は己の拳しかない。消しゴムを常備せよ』

マハエは足元を探し、手の平にぴったり合う小石を拾い上げた。消しゴムなんて持っていない。ここは小石で代用するしかない。

右手に小石をぎゅっと握り、準備完了。

こうして何かを握って拳をつくれれば、だんぜん威力は上がる。

オオオオオオオオオオオオ……

一体のドクロが、地面をすべるように移動し、マハエを襲う。物理攻撃が効くかどうかなんて、考えているヒマはない。頭で考えるよりも行動あるのみ。

マハエはドクロの仮面に、小石を握った拳を叩き込んだ。

——ヒット！

効果はあった。

だが同時に、マハエの拳も痛んだ。

「いつてえー……」

やはり、仮面は頑丈なようだ。

マハエは攻撃部位を、顔面から胴体へ切り替え、攻撃することにした。

オオオオオオオオオオオオ……

今度は三方からいつせい攻撃のようだ。

マハエは衝撃波を放った。

波は地面を広がり、三体のドクロをのみこむ――

――まるで効果がない。

このドクロどもは、地面に立っていないのか。

――違う。地面に立っていないのではない。

衝撃波が起こした空気の流れが、ドクロのマントをすくいあげた。

――立っていないどころか、足がない。足がないどころか、マントの下には―― 胴体すらない。

――見えないだけかもしれない。

マハエは思い直し、胴を攻撃。だがやはり、拳、腕は、それをすり抜けた。

その状態のまま敵の背後へ移動し、三体から距離をとる。

実体があるのはドクロの仮面とマントだけのようだ。

ということは、おのずと急所は見えてくる。

急所は仮面だ。

マハエは小石を捨てるついでに、仮面へ投げつけた。

カン…… と仮面の額部分に小石が当たる。

それを合図にするように、三体のドクロがいつせいに動き出した。

——シュン！

空気を切って、風が飛んでくる。

その素早い攻撃は、マハエの左肩を切り裂いた。

「ぐあつ！ くっ……！ 飛び道具なんて卑怯な！」

ほんの数秒前に、自分も飛び道具を使ったばかりだということをマハエは忘れている。

それに、ドクロの攻撃は飛び道具なんて甘いものではないようだ。何もないはずのマントの下から、飛ばされる『かまいたち』。

それは目に見えないため、避けることも難しい。

——シュシュシュン！

三連続のかまいたちが、マハエの頬、腕、足に傷をつけていく。殺す気があるのかないのか、致命傷を負わせるほどの攻撃を仕掛けてこない。

「オレはまだまだ！ あと百年は死なん！」

足に魔力を溜め、爆発的な力で飛び上がる。

バキッ！

ドクロの仮面の上に着地と同時に、再び放った力は、仮面に絶大なダメージを与えた。

パリィン……

仮面が碎けると、ドクロは溶けるように消滅。

「あと二体！」

一体が撃破され、残りの二体はうろたえている。
もう、戦いはマハエのペースだ。

13：早朝の準備運動

朝の新鮮な空気が、町にふりそそぐ。
早起きの小鳥たちが、まだ目の覚めきっていない町の空を飛び交う。

風のない、ほんとうに穏やかな早朝だ。

カラン カラン カラン

朝を知らせる鐘の音が、町中に響き渡った。

目覚めた人々は窓を開け、ベランダに布団を干し、また一日お世話になる太陽をおがむ。

平和な町だ。

家のベランダに、二人の幼い兄弟が眠たそうに布団を抱えてきた。

「よしよ」と力を合わせて、手すりに布団をかける。

と、兄が何かに気がついた。

「なにあれ？」

すぐに弟も、兄の指差す“それ”を見る。

「ご飯ができたわー！」と言うお母さんの声もよそに、兄弟は公園に横たわるそれを眺めていた。

その緑色のかたまりは、一見すると刈り取られた雑草が積まれているようにも見える。

だが、そのかたまりは、パンの焼けるいい匂いに反応するかのようにはひくひくと動き、ガバツと起き上がった。

「むんっ!？」

起き上がった緑色のかたまり——マハエは、後ろのほうから聞こえる子供の悲鳴も気にせず、ただ四方八方を見回す。

「……腹減った！」

マハエはピヨンと立ち上がると、ベランダから覗き込んでいる兄弟を「むんっ!？」とにらみ、スタタタと走り出した。

昨夜——

公園での戦いで、マハエは完全に自分ペースに持ち込み、残りの二体も撃破した。

だが、マハエ自身も負傷し、魔力は尽き、その場に倒れこんでしまったのだ。

——カカカカッ!

イナズマのごとき勢いで、チャーハンをかきこむマハエ。

早朝開店の食堂には、朝食を食べに来た客が数人。その中でマハエは、朝にも関わらず元気に胃袋を満たしていく。

「朝っぱらから元気だねえ」

店のおやじが感心したように言う。

最後にコップの水を飲み干すと、満足そうに息を吐いた。

「（あのドクロ野郎は何だったのだろうか?）」

腹を満たせば頭も働く。

体の傷はすでに完治しており、痕一つない。そのせいで、あの出来事は夢のようにも思える。

だが、夢ではない。たしかにマハエは、三体の『死神』と戦ったのだ。

店のおねえさんが空になったコップに水を入れる。
さつきとは打って変わって大人しくちびちびと水をすすするマハエを、おやじは不思議そうな目で見ていた。おまけに“黒髪”も珍しいのだろう。

「そうだ！」

いきなり叫び、立ち上がるマハエ。

興味深げに注目していた周りの客達が、そろって手に持ったコップを落しかける。

マハエはカウンターにお代を置き、店を出た。

宿の部屋にもどり、マハエは“落ち着いて”、“冷静に”怒りを沸騰させた。

「案内人っ！！！」

マハエの怒りの声は、一発で案内人を呼び出した。

「おはようございます、マハエさん。よく眠れましたか——」

「ええよく眠れましたともさほんと星がきれいでねえうん外は涼しかったよ凍るくらいねえ」

「……血管、浮き出てますよ？」

「何でだと思う？」

「さあ？」

……沈黙。

長い沈黙の間、マハエは怒りを抑え、慎重に次の言葉を選ぶ。

「表に出ろやあ！」

ビツと上のほうを指差す。

「無理です」

即答する案内人。

「うるせえ！」

隣の部屋からの怒鳴り声。

「すいません……」

マハエ弱体化。

鍵をフロントに返し、とぼとぼと宿から出た。

「すべてお前の責任だ。案内人！」

「何のことですか？」

「夜中に急に呼び出されたと思ったら、変なドクロどもに襲われて

……」

「夢でも見たのでしょうか？」

マハエの怒りメーターが急激に下がっていく。

「……はぁ…… まあいいや。お前のこういう性格には慣れた。どうせ夜間訓練か何かだろう？」

疑問符を浮べる案内人。

「よくわからないですが……。とにかく先へ進みましょう」

「さて、問題発生」

「今度はなんです？」

マハエは、金貨の布袋を逆さまにして振った。

——何も落ちてこない。

「武器買い忘れた」

「……………」

呆れて言葉をなくす案内人。

「……馬鹿ですね？」

「……申し訳ない……」

どうすることもできないので、とにかく先へ進むことにした。

ときおり聞こえる案内人の溜め息のような声が、マハエの背中に

痛く突き刺さる。

「でもさ。腹が減ってはなんとやらって――」

「はいはい」

「……………」

マハエの言い訳は、自分を苦しめるだけだった。

町を抜け、しばらく細道を歩くと、大きな橋が見えてきた。

五十メートルほど幅のある、深い深い谷のような亀裂が、地面をえぐっている。

そこに大きなつり橋がかけられていた。馬車でもらくらく通れる幅の大規模なつり橋。

とても頑丈につくられているようだが、マハエは疑わしい顔をし、橋に第一歩を踏み出そうとしない。

「どうしました？」

そんなマハエに案内人が声をかける。

「いや、高いなあゝ と思つて」

「もしかして、高所恐怖症ですか？」

「違う。『つり橋恐怖症』だ」

「幼稚ですね」

「ほんの二ヶ月前までは、つり橋大好きだったんだけどな」

常識で判断してはいけない。というのは、前回のゲームの話。

だが、これはゲームではなく、ほとんど現実に近いのだ。

「大丈夫だよな……………」

マハエは思い切つて足を踏み出した。

「（そりやそうだ。考えてみればなんてことはない。ただの頑丈なつり橋だ。落ちるほうがおかしいのだ）」

徐々に鼻歌をまじらせ、歩く。

あまり揺れないつり橋は、目を閉じて歩けば陸と大差はない。

橋の真ん中を、できるだけ周りの風景を見ないように歩く。底の見えない亀裂だ。マハエでなくても十分に恐怖するだろう。

周りを見ないように歩いていたマハエだが、橋の中間あたりで、どうしてもある“物”が視界に入った。

「何だこれ？」

マハエは端に寄って、手すりにくっつけてある、“黒い箱”に顔を近づけた。

それには、筒のような物が取り付けであり、アンテナのような突起もある。

反対側の手すりにも、同じような物がくっつけてあった。

「変わった飾りだなあ」

すると案内人が笑いながら、

「何言ってるんですか、それはどう見ても『時限爆弾』ですよ。遠距離操作式の」

「……………疲れてるようだ…………… なんかお前の言葉すべてが不吉に聞こえる。すまない、もう一度言ってくれ」

「ですからそれは爆弾—— ってあれ？」

「…………… キミの人工頭脳というものは、なぜそんなにも欠陥だらけなのでしょう？」

「リアルにつくられてあるだけです」

マハエは息を吐きつくし、そして大きく吸う。

「——爆弾！！！！？」

ワンテンポ遅れて案内人も騒ぎ出す。

「ど、どうしましょう！？ どうしましょう！？ あ、でもまだ作動はしていないみたいですよ？」

ピッ…… ピッ…… ピッ……

『黒い箱』に赤色のランプがとり、独特の電子音を発する。

「なんか音が鳴ってるんですけどー！ー！ー！？」

「は、早く逃げてください！」

「言われなくともっ！ー！ー！」

マハエは全速力で橋を駆ける。

電子音は早くも勢いよく鳴りはじめた。

「（なんか、前にもこんな経験——）」

——一瞬、音が止まり、直後に地面、空気を激しく揺るがす爆音が轟いた。

無数の鳥が音に驚いて、鳴きながら木から飛び立つ。

ドドドドドドド……

つり橋の大部分は亀裂の底に吸い込まれていった。

——爆音は膨張し、薄れ、消えた。

そして次の瞬間には、奇妙なほどの静寂。

「……………」

「——マハエさん？ マハエさん！」

「……うつ、けほっ、けほっ………」

薄れていく爆煙の中に、うつ伏せ状態で倒れているマハエ。

「もっ……… 絶対つり橋は渡らないぞ………」

ぎりぎり、マハエの足先数センチのところで、わずかに残った橋

の断片が崩れ落ちた。

「……何とか橋は渡りきったが…… 嗚呼…… もう動きたくない」

仰向けに転がり、空を見上げる。

だが、気付かなかった。

すぐ近くのカゲの上で、マハエを見下ろす二つの影があることに。

黒いマント—— ドクロの仮面——

二体のドクロは、マハエの生存を確認すると、そのまま消えていった。

14：技の使用法

「モーニングですよ、エンドーさん」

「……そうだな」

「どうですか？ こちらの世界の朝は」

「人生最悪の朝だ」

エンドーの目の下には、うつすらとクマが浮き出ている。

「そうですか。それでは、二度とこのような朝をむかえないよう、今日中に任務を終わらせましょう！」

人生最悪な顔にも、案内人はおかまいなしだ。

「たとえこの任務を終えてもこの世界に帰ったとしても、二週間はトラウマが消えることはないだろう」

「さ、いつまでもそんな抜け殻みたいになってないで、さっさとセルヴォ破壊の手掛かりを探しましょう！ マハエさんはもう、早くから行動してますよ」

やはり、案内人は冷酷だった。

「……やるせないぜ……」

残った乾パンを一気に口へ放り込み、もぐもぐしながら立ち上がった。

火を灯したカンテラを手を持ち、出口を探す。

ここに入ってきたときに確認した孔は、やはり外へつながっているようだ。

エンドーは細い体を駆使し、その孔を抜けた。

腰ほどの段差を乗り越え、光のある外へ。

まだ朝も早いだけあって、空気は冷えている。

「モンスターどもも、寝てるんじゃないかな」

それはエンドー自身の願いでもあった。

「そう甘くないと思いますよ。野生動物は、朝の光とともに目を覚ましますから」

案内人が、その願いをさらりとぶち壊す。

「夜に行動すればよかつたつてのか？」

「それは大きな間違いです。夜行性のモンスターだっているかもしれません。どちらにせよ、夜の行動は非常に危険です」

「どちらにせよ、オレは地獄を探検してるわけだ」

冗談めかしく、ハハツと笑うエンドー。

自然の迷路のように壁に囲まれた道を、エンドーは進んでいく。

見晴らしが悪い分、見つかりにくい。しかし、敵と出くわした場

合――

「グブルルル……！」

――そらきた！

獣のうなり声に、エンドーは警戒態勢に入った。

まるで待ちかまえていたかのように、頭上から灰色の巨大なトカゲが降ってきた。

ドシン！

と、モンスターの足元の土がえぐれる。

「わお……こりゃ、オドロキだ……」

エンドーは目の前のモンスターに圧倒された。

「グオオオオオオオ！」

獲物を見つけた！ と言っているのだろうか。その咆哮は、他のモンスターとは比べ物にならないほどの、格の違いを感じさせる。

モンスターの大きさは、エンドーをはるかに上回る。二メートル

——三メートルあるかもしれない。エンドーは一目でピーンときた。

「ドラゴンか……！」

もはやモンスター界では定番中の定番であろう。そういう系のゲームや映画などには必ずと言っていいほど登場する『ドラゴン』。この世界も例外ではないようだ。

翼がないことから、空から降ってきたのではなく、やはり壁の上から待ち構えていたのだらう。

鋭い牙をむき出しにし、太く長い尻尾で地面を叩くドラゴン。

「遊びたいようだな……」

エンドーも感心している場合ではないと悟った。

「フリスビー遊びでは、満足しそうにないですよ……？」

「ああ……　なだめるための“エサ”も持っていないしな……」

わりと強気のエンドーだが、頬を伝う恐怖の汗と、足の震えは隠せない。

『無刃刀』をにぎり、戦いの邪魔になるバッグを地面に落とす。その音に反応してか、ドラゴンが暴れ始めた。

「……そうだ。“エサ”は“オレ”なんだ」

『野生動物を前にしたときは、絶対に目をそらしてはいけない』

昔々、エンドー、マハエ、ハルトキに、園長が話していた。

『それと、絶対に背中を向けてはいけない』

エンドーは園長の話を思い出していた。

後退しながらゆっくりと呼吸をし、心を落ち着かせる。

それに、脳に酸素をおくらなければ、冷静な判断ができない。

「（……よし、大丈夫だ。オレには武器がある。それに『力』だつてある。まずはどうにかしてヤツの背後へまわり、攻撃。ここはあの巨体にとっては狭い通路。思うように身動きできないはずだ）」

「グウオオオオオ！」

鼓膜を激しく刺激するその咆哮で、エンドーのプランはパチンとはじけた。

百八十度回転。そして逃走。

『背中を向けるんじゃない！』

エンドーの頭の中で園長が怒鳴るが、知ったこっちゃないと言うように疾走する。

背後から、明らかにドラゴンを追ってくる。

「ええい！　どんなに逃げてもラチが明かない！」

エンドーは全力疾走だが、ドラゴンからしてみれば、小走り程度のスピードでしかない。体力の差は明白だ。

「……死ぬわけにも、いかないし。やってみるか！」

エンドーは一瞬で方向を変え、今度は逆にドラゴンへ突進した。逃げていた獲物が突然、自分へ向かってきたのだ。ドラゴンは驚いたように立ち止まった。

が、獲物エンドーが自ら目の前へ来て、ドラゴンにとっては好都合でもある。

腕を振り上げ、爪を立て、切り裂く。

——ドオン！

その腕が、魔力の爆発で弾かれた。

ドラゴンがひるんだすきに、エンドーはドラゴンの横——巨体と壁との狭い隙間を、やはり細い体を駆使し、通り抜ける。そのとき、壁に手を触れ、何かを“貼り付けた”。

すぐに反対側の壁にも、同じように貼り付ける。

獲物は後ろ。

ドラゴンは、狭い壁と壁との間で、無理に体の向きを変えようとがんばる。

ある程度距離をとったところで、エンドーは抑えこんでいた力を一気に解放した。

——ドドンッ!!

エンドーが二箇所“貼り付けた”魔力が、同時に爆発。ドラゴンを両側から挟むように。

「オオオオオオオ……!!!!」

ドラゴンの苦しみの咆哮。

そして、とどめと言わんばかりにその頭上から岩がいくつも落下してきた。

爆発の衝撃で壁の一部が崩れたのだ。

頑丈な表皮におおわれた巨体でも、さすがにダメージは甚大のようだ。

弱ったドラゴンは、その場に倒れた。

「……お見事です」

様子を見ていた案内人が、感嘆の声を出す。

「そんな使い方もあったんですね」

「イメージはしていたが、使ったのは初めてだ。ま、場所がよかった」

本人も技の成功に驚いている。

爆発前の魔力を壁に貼り付け、遠距離から爆破。しかし、爆発させるまでは使用者にも負担がかかり、長時間維持することはできない。大量に何箇所にも貼り付けることもできないのだ。

「一度に三箇所くらいが限界だな」

エンドーの説明を、案内人はデータに追加記録する。

「不思議な力です。あなた達が人間だから、宿った力なのでしょうか？ もっと他の使用方法もあるのかもしれないね」

「この力をくれた何者か、も気になるな……」

——エンドーと案内人の会話。しかしそれは、傍から見ればエンドーの独り言でしかない。そんな独り言を聞いている者など、今の状況から考えればいるはずはないのだ。

だが、そこにいた。

ずっとエンドーの戦いを見ていたのは、案内人だけではなかった。木の裏側で腕を組んでいる男。

男はエンドーの勝利を見届けると、スッと、銀色の長髪をなびかせて、音もなく立ち去った。

そして、案内人と銀髪男の他に、エンドーの様子を黙って見ていたもう一つの影。

エンドーは気配を感じ、後ろを振り返った。

四メートルほどの壁の上から、エンドーを見下ろすドクロ面。それも、すぐにスー……と音もなく消えた。

「……今のは……？」

「やはり動き出していましたか……」

「何のこと——」

エンドーが言いかけたとき、

「グルル……」

倒れているドラゴンが、弱った声を出した。

「生きてたか。でも、もう動けないだろ」

エンドーはトドメを刺すこともせず、バッグを拾い上げてその場を去った。

案内人は、その背中に頼もしさを感じていた。

「だいぶこの仕事が板に付いてきましたね」

「この状況で覚悟ができないほうがおかしいだろ。朝っばらからあんなのと戦わせやがって」

エンドーは迷路を抜けた。

そこは少し高台で、小さな一本道を見下ろせる。

そのつきあたりに、入り口の大きな洞窟がある。

その中から二つ影が現れた。鳥とトカゲのモンスターだ。

「あそこが発生源か？」

「わかりませんが……。やはり——」

「入ってみるか」

「え？」

自分の耳を疑うかのような、案内人の疑問符。

「何だ？」

「わたしが言う前に、自分から入ろうなんて……」

それまでのエンドーの様子からは、想像できない言葉だったのだ。エンドーの中の、何かのスイッチがオンになったことは間違いなかった。

——下へ下りれる道を見つけ、エンドーは見下ろしていた小道に立った。

洞窟から伸びた道は、曲がりくねりながらどこかへ続いている。レポート装置の小屋がある平原へと続いているのだらうと、エンドーにはわかった。

それよりも今は——

洞窟。

この洞窟の奥に何があるのか。これからそれを調べなければなら
ないのだ。

少しだけ外観を観察してから、意を決して中へ踏み込んだ。

15：友情の走馬灯

「まず、話しておくことがあります」

暗い洞窟でカンテラに火をつけたエンドーに、案内人が話す。

「先ほどのドクロ面のことで——」

「今、重要？ できれば敵の気配に集中したい」

「では、集中しながら聞いてください」

また無茶な要望をする案内人に、エンドーは声をあげそうになるが、洞窟内でそれはマズイと思い、呑み込んだ。

「あのドクロ。マハエさんの話で、まさかとは思いましたが、やはりそうでした」

「だから何だよ？ マハエがどうしたって？」

「あのドクロ面——あれが『対S A A P』——改造プログラムです」

カンテラを前に差し出しながら、エンドーは慎重に洞窟を進む。

「対S A A Pって、こっちに送り込まれたプログラムが、セルヴォに侵食されたっていう？」

「はい。あの死神デザイン。間違いありません」

「——て、悪趣味だな、制作者は。特殊武装プログラムじゃなかったのか？」

「それは例えですよ。それに、すべてがああいうデザインというわけではないですよ。『S A A P - 002』の隊長は、まともなデザインで——」

「そんなん、どうでもええ」

真っ直ぐな洞窟ではないので、いつそう警戒しなくてはならない。何度か左右にカーブし、進んでいくが、幸いモンスターとは出くわさない。

「こちらに送り込まれたのが、『002部隊』一つだけでよかった

です。とくに部隊の隊長は、他のプログラムとは格が違いますから」

「それらも、破壊しなきゃならないんだろ？」

「そういうことです」

「しかたねえなあ……」

——暗闇の中では、手に持ったカンテラの明かりだけが頼りだ。どこまで続いているのかわからない洞窟で、油切れを心配しながら、ただ足を動かす。

やたら長いように感じるのは、エンドーの足取りが遅いせいだ。

——ボワウン……

聞き覚えのある、高い音が聞こえた。

すぐ前の角を曲がった先。

——黄色い何かが光った。

「シャアウ！」

「うわっ！」

クモだ。黄色い眼を光らせた巨大グモが、エンドーに飛びかかった。

顔面に張り付いたクモを引きはがし、地面に叩きつける。

闇の中を、黄色い眼がすばやく移動する。

地面から壁、天井、エンドーの頭上へ——

バシッ！

頭上から落下したクモを、エンドーは無刃刀でなぎ払った。逃げようとするクモの背中に、無刃刀を突き刺す。

一声鳴き、クモは絶命した。

「暗闇でよかった。こんな気持ち悪いもん、お日様の下では見たくねえ」

無刃刀に付着している液体を、振って払う。

——何はともあれ、ゴールのようだ。

エンドーの目の前で、見覚えのある装置が明かりに照らされた——
いや、白く光る装置のプレートが、闇を打ち消してくれている。

「このテレポート装置で、モンスターをここへ送り込んでいたわけか。これを使えばここから出られるかな？」

これで試験は合格だろう。

そう思い、一安心してプレートに足を乗せようとすると——

安定していたプレートの光が、激しく光り始めた。何かが転送される。

「（モンスターか……！）」

カンテラと武器を構えるエンドー。

だが、そこに現れた黒く大きな影は、エンドーの想像を絶するものだった。

——モンスターなんかではない。

あのドラゴンほど大きくはないが、二メートル近くある巨体。鉄の塊のようなボディ。そして、頭の真ん中に一つだけある眼が、妖しい赤い光を放っている。

エンドーは思い出した。

これは、町長の部屋にあった、人形だ。

「まさか、あれがロボットだったとは……」

ギシッ……と音をたて、ロボットがエンドーに接近する。壁に追いつめられるエンドー。

「敵なのか……？」

ロボットは目の前で立ち止まると、赤い眼を今度は青白く光らせ、映写機のような光を放った。

すると地面に、立体映像の町長の姿が現れた。

「ごきげんヨウウ！ ミスターエンドー！」

「よお、町長。わざわざ出迎えですか？ それとも、合格発表？」

「ノンノン。どちらも違いマース。一つ言い忘れましたケド、この試験——生きて帰った者八、誰一人としていまセーン。なぜだと思いまスカ？」

「そりゃ、あんなにもモンスターがうろついていたら——」

立体映像の町長が、「んふふ」と笑う。

「答えハー、生きて帰ってはいけないからデース」

「……………」

エンドーの頭に、この上なく嫌な予感が溜まっていく。

「まさか——」

「ミーの研究に付き合ってもらった者二八—— “死んでもらわなきゃいけない”」

途端に町長の口調が変わった。ほんの一瞬前まで、呆れるくらい気さくな外人系だったにも関わらず、一瞬後にはその雰囲気微塵も残さず、狂った科学者のような顔。

「てめえ…… いったい……」

町長の変貌ぶりに驚くしかない。

「そこまで知る必要はない。ここでしくじると、わたしの立場も危うくなるのだ。だから——」

立体映像の町長が背中を向ける。

「いいかげん、死んでください」

最後にそう言い、町長の映像はプツンと消えた。

ロボットの眼が、再び赤くなった。

「町長め……ぶっ飛ばしてやる！」

そう固く決心した。

だがその前に、このロボットを解体するのが先である。

ロボットは町長の命令により、エンドーを葬りにかかる。

「ハカイスル ハカイスル」

「うるせー！ この人形野郎があー！」

邪魔なカンテラをロボットに投げつけるエンドー。

中から油が飛び出し、火に引火。ロボットは火だるまになりながらもエンドーを襲う。当然、痛みなどは感じないようだ。

「んにやるお……！」

エンドーはロボットの横から背後へまわり、『魔力球』を放つ。

魔力の爆発は、ロボットに命中したが、体にまとわりついた火と油だけが吹き飛び、ロボット本体はほぼ無傷だ。

やたら頑丈なようだ。

さらに三つまとめて、魔力球を飛ばす。

ドドドオン……！！

三連続で爆発はロボットに命中。

だが、まるでダメージはない。

「……………」

悔しさを言葉にする余裕も、エンドーにはない。

倒せないのなら、逃げるしかない！

後ろのテレポート装置へ走る。

——ガッ！

それはまるで、小さなネズミをつまみあげるように—— ロボットは軽々と、エンドーを装置に近づけさせまいと、反対側へ投げ飛ばした。

エンドーは反射的に頭をかばい、背中を壁に打ち付ける。

「ごはっ……！ くっそっ……！」

ズシン、ズシンと、ロボットが迫る。

エンドーは両側の壁をタッチし、魔力を貼り付ける。そして距離をとり、ロボットを待ちかまえる。

——これまでの様子から、この技が効くという保証はない。だが、あのドラゴンに多大なダメージを与えたのだ。頑丈なロボットにでも少なからず効果はあるだろう。

両側から爆風で挟み込めば——

ドドオン！！

洞窟内に大きな爆音が響く。

だが、その大きな音とは裏腹に、ロボットはよろめきすらしない。

まったく、効果がない。

「マジ…… かよ……？」

こうなればもう、苦笑するしかない。
自分の運命を——

——いや、まだ逃げ道はある。

引き返して入り口までもどればいいのだ。今は逃げに徹するしかない。

だが、それさえもロボットは許さない。

眼の光が赤から黄色に——そして、『眼からビーム』。

「出ると思ってたよ…… ビーム」

眼からビームは、天井を削り、落石を引き起こした。

背後の道が塞がれていく音は、苦笑を続けるエンドーの耳にも、しっかりと聞こえていた。

完全に、追いつめられた。

ロボットは町長に、じわじわとエンドーを葬るようにと命令されていたのだろう。

ビームで、エンドーを攻撃しようとはしなかった。

ただその首をがちりと掴み、締め上げる。

「ぐああ……」

「エンドーさん！　しっかり——」

案内人の声は、エンドーには聞こえていなかった。

——死の直前、過去の記憶が走馬灯のようによみがえるという。

七歳のとき。施設に入った当初——マハエとハルトキに出会った。

そして数日後には仲良くなり——打ち解けあい——それから二年後——エンドーを引き取りたいと、申し出た人がいた。だがそれは、二人の悪魔のような策略により、“なかった話

”となった。だからその後、マハエに同じ話があったとき、やり返してやったのだ。

——ずっと三人一緒だと、笑いあった。

「——んなところで死んだら…… あいつら怒るよな……」

自然と笑いがこぼれていた。

「死ぬわけにはいかないからさ…… 絶対に」

エンドーの中の魔力が、激しく騒いだ。

16：狂った科学者

魔力が無限に膨れ上がる。

それにしたがって、締め上げられたエンドーの意識もだんだんとはつきりしてきた。

——死ぬわけにはいかないから！

「キケン キケン」

ロボットがエンドーの力の増大を感知し、危険物と化したエンドーを後ろへ投げ飛ばす。

エンドーは負ける気がしなかった。

今度は頭をかばうことなく壁に激突—— エンドーが触れる直前、壁が砕けた。

膨大な力が、エンドーを包み込んでいる。

案内人のセンサーにも、異常な変化が表示される。

「エンドーさ——」

「ははははは！ すごい……！ もう負けねえ……！」

エンドーは、狂ったように高まった気を抑えきれない。
力が腕に集中する。

ロボットは警告音を発しながら後ずさる。

「キケン キケン キケン」

「ははははははははは……！」

すべての力が、エンドーの手の平で凝縮。

球となって、ロボットへ放たれた。

「キケン キケ——」

——それはまるで、小さく再現された核爆発。

凝縮された膨大な力がロボットに命中し、大爆発した。
洞窟内のすべてが振動する。

「キ…… ケ……」

爆発音が収まっても、振動だけはしばらく続いた。

ロボットは胸部を大きく陥没させ、ギシギシと音をたてながら膝をついた。

だが、完全には破壊できていない。

「はっ…… はっ……」

今にも倒れそうなエンドー。力のすべてを使い切り、立っていることすらままならない。

「ン…… キ……」

「これ…… を食らっても…… まだ、動ける…… か……」

壁にもたれて座り込み、エンドーは動けない。今なら、停止寸前のロボットでも、エンドーをひねり潰すくらいわけではない。

そのとき——

ゴゴゴゴゴゴゴ……

爆発の振動は消えたが、別の振動が壁や天井を揺らす。
パラパラと、天井の一部が降ってくる。

まるで今にも――

「エンドーさん！ 動いて！ 洞窟が崩れますよ！」

「ああ……」

あの大爆発は、洞窟全体にも大きなダメージを与えたのだろう。振動音が大きくなり、数秒後には崩落する。

「エンドーさん！」

「……わかつてる…… って……」

地面を這いながら、テレポート装置へ移動するエンドー。

ロボットは今だ命令を成し遂げようと、ぎこちなく立ち上がる。その頭に岩が落下するが、岩のほうは硬度負けして砕けた。

いよいよ崩落。というところで装置にたどり着いたエンドーは、パネルの上に立ち、横のスイッチに手をかけた。

「ギシ…… ハカイ ハカ…… イ……」

ロボットが放ったビームが、エンドーの一メートル前方の地面に穴をあけた。照準が合わないのだ。

「……あわれなロボットだ」

エンドーは体重をかけて、重たいスイッチを下に下げた。

――ドゴォン！！！！ ドドドドドド……

崩落していく洞窟の中で、ロボットは手を伸ばしていた。命令の遂行？ それとも助けてくれと？

――もうわからない。

崩落していく洞窟も、あわれなロボットも、もう視界にはなく、エンドーは白い光の空間を飛んでいった。

——ボワウン……

静かな倉庫の中に、テレポートの音がこだまする。

パネルの上に降り立ったエンドーは、足に力が入らず転倒した。

「……………」

どうにか、崩落には巻き込まれなかった。生きて脱出した。

小さな倉庫の入り口はやたら広く、そこからまた、平原が望める。ちらほらと、モンスターの姿もうかがえる。

「ここにも…… モンスターか……」

ここの装置のスイッチは入りっぱなしになっており、絶えずパネルに触れたモンスターを転送し続けていたのだ。しかし、片方の装置が崩壊し、もはや役目を果たさない。

エンドーは立ち上がり、モンスターが入ってこないよう、倉庫のシャッターを降ろした。

そして床に大の字になって倒れる。

「エンドーさん？」

心配して、案内人が声をかけると、

「お前は、マハエやヨツくんのところへ行ってくれ……。オレは、しばらく動けない」

「……わかりました」

案内人の声が聞こえなくなり、しばらくエンドーは、光の差し込む天井を見つめていた。

激闘の直後だというのに、なぜか心は平然としていた。

ハリケーンが去った後のように、心の中には感情も、何もなかった。

「生きてた……」

脱出して初めて、それを実感した。

「ありがとうございます大林さん」

前日、『田島弘之』と『ニユートリア・ベネツヘ』がぶつかり合った河原。

ハルトキは、大林とその他大勢の田島組に見送られる。

「気をつけて行ってこい。オレ達の力が必要になったら、いつでも頼ってくれ」

「ええ、ありがとうございます」

「アニキ」！ お元気で！」

不良の一人が言うと、他の不良も口々に「アニキ！」と繰り返す。前日の一件で、大林がハルトキを『弟分』と認めた。『部下』ではなく、『弟分』という立場は、他の不良達よりも上なのだ。

その日に突然現れた子供を、その日に弟分と位置付けられたわけだが、田島組の不良達は全員が賛成した。

それは、大林が認めたから仕方なく、というわけではなく、やはりハルトキのおかげで全員——とくに大林が無事にこうして生きているという事実が、不良達の心を大きく揺さぶった。

「アニキー！」

一人の不良が、ハルトキに何かを投げてよこす。

落としそうになりながら、それを両手でキャッチ。

「これは？」

受け取ったのは、鞘に納まった『ダガー』—— 刃渡り十五センチ

チほどの短剣。

「持っていけ。武器もないんだろ？」

「……ありがとうございます」

このせんべつは、ハルトキにはとてもありがたかった。

「では、失礼します」

『田島弘之』に背を向け、ハルトキは歩き出した。ハルトキの任務は、いよいよここからが本番なのだ。

不良達が「アニキー！」と繰り返し叫び見送る中、大林が呟く。

「また会おう。“兄弟”」

——田島弘之の大勢の不良の声も聞こえなくなり、静かな小道。

まだ昼前の時間帯で、少しずつ涼しさが温かさになってきた。しかし蝉の声もまだ聞こえない季節だ。耳に入るのは、風が草を揺らす音と、自分の足音。

「どうしちゃったんですか？　いつからあんなにも親しく？」

それと案内人の声。

「キミが寝てる間にね。いろいろとあつたんだよ」

ハルトキは、もらったダガーを眺めた。ずっと憂鬱^{ゆううつ}だった。

「ねえ、案内人。セルヴォって、どうしても破壊しなきゃいけないのかな？」

「そりゃそうですよ。セルヴォがコンピュータに異常を与えている以上、放っておくわけにはいきません」

「……………」

「それがどうかしましたか？」

「キミにはわからないよ」

セルヴォがコンピュータに異常をきたす原因。それを排除するのは、ウィルスを排除することと同じなのだ。少なくとも、案内人と制作者にとっては。

——セルヴオはウイルスとは違う。意思があり、生きている。他に解決策はないのか。

すでにセルヴオと深く関わってしまったハルトキは、任務を遂行する自信をなくしていた。

田島弘之と接し、わかったことは一つ。これは大きなことで、明らかなこと。

セルヴオは、“人”なのだ。

「——吉野さん」

「ん？」

「必ずしも、良いセルヴオだけではない。ということ覚えておいてください」

「わかってるよ。人間と同じさ」

言葉を選ぶように黙る案内人。

「あなた達を、ねらっているセルヴオもいます」

「ボクらを狙う？」

「はい。改造されたプログラム。対S A A Pが、マハエさんとエンドーさんのところに現れました」

そのとき、ハルトキの頭に真っ先に浮かんだのは、自分の心配ではなく、他の二人の心配だった。

しかし案内人の話し方から、二人は無事だということを確認し、今度は自分の心配。

「対S A A Pは、自分達の意味で動いているのかが、疑問なんです」
「指示しているやつがいると？」

「ええ。まだはっきりとはわかりませんが、おそらく、直接指示を出しているは、隊長プログラムでしょう。部隊のすべてがセルヴオに侵食された今、操る者がいないにしても、敵は多いですよ」

元々この世界にいたセルヴオをもとに、前回のゲームはつくられた。そして今回は、そのセルヴオがコンピュータに異常をきたす原因となった。

何か――ハルトキの頭の中で、何かが引っかかった。

17：迷惑なプレゼント

トロツコ置き場――

森をさけ、山を登ったハルトキが行き着いた場所には、古いトロツコがいくつも放置されていた。

「採石場跡…… でしょうか？ このトロツコ、使えませんか？」

「トロツコか…… 危険な二オイがぶんぶんするね」

「どんな二オイですか？」

「卵かけご飯に牛乳を混ぜ合わせて、真夏の屋内に一週間放置した二オイだよ」

「……想像したくないですね」

ハルトキはトロツコを調べ始めた。

トロツコは、ほとんどがレールから外れたところに放置されているが、一つだけレールに乗っかっているものもあった。

「電気を使うやつじゃなさそうだね」

「電気というもの自体、まだあまり普及していないんですね」

「錆びてなかったら動きそうだけど」

ハルトキはトロツコを押してみる。

「けっこう簡単に動くみたい」

「それはよかったです。そこから城が見えるはずですよ」

たしかに、あと半日もかからない距離に城が見える。森に囲まれた外観は、さほど大きな城には見えない。

トロツコに乗って下りの時間を短縮しようという、案内人の案だ。

ハルトキは、トロツコを坂のほうへ押した。

――と、レールの上に木箱が乗っているのに気付いた。

一メートル四方の木箱。何者かが意図的に、そこに置いたというのは明らかだ。

「邪魔だな。誰が置いたのか——！！？」

ハルトキが触れた途端、木箱がドグンツ！とひとりでに跳ねた。

「……生きてる……！？ 箱型モンスター、ボックスパッケン！？」

「吉野さん、箱が活着ているのではありません！ 生きて何かが中にいます！」

「なんだ、よかった」

——よくない。

木箱はもう一度跳ね上がり、内側からの圧力で、メキツとヒビが入った。

「思い出すよ。クリスマスでもらったプレゼントの箱を開ける瞬間を」

「妙に冷静ですね」

「冷静なもんか。別の意味のわくわくで胸が張り裂けそうだよ」

もう一度、木箱は跳ね上がると、ひびが裂け、空中でばらばらに砕け散った。

——中から飛び出てきたのは、異様な“物体”だった。

「シャアウー……」

ささやくように、弱弱しくうなったモンスター。

——モンスターと言っているのかどうか危うい。モンスターに変わりはないのだろうが、その姿はあまりにも、今までのものとは異質だった。

両腕部分に太い触手の生えた、二足歩行のトカゲモンスター。まるで触手自身が活着ているように、くねくねとうごめいている

「これは……」

驚愕した案内人の声。

トカゲの両腕にくっついているのは、触手ではなく、ヘビ。
二匹のヘビが、縫い合わされたようにトカゲの腕と化しているのだ。

「うえ…… 気持ち悪い人形をもらっちゃった……」

口を押さえるハルトキ。

「何なんでしょうか？ このモンスター…… 不自然すぎです」

「不自然なのは、姿だけじゃないよ」

「はい？」

ハルトキは動き出していた。

腰のダガーを鞘から抜き、すばやく背後へ回り込む。

先に攻撃をしかけたのは、左腕のヘビだった。回り込むハルトキを追って、ヘビもトカゲの背後へぐりとまわる。トカゲ本体は、それに振り回されるように動く。

「シャア！」

ヘビが牙をむき出し、体を伸ばす。

「毒ヘビ？ 厄介だね」

ハルトキは、動体視を発動した。

トカゲがくると向きを変え、ハルトキのほうへ歩み寄る。攻撃はヘビの役目のようだ。

「シャッ！」

更に攻撃をしかける左のヘビの頭に、タイミングよくハルトキはダガーを突き刺した。

頭に致命的攻撃を食らったヘビは、そのままダラリとなって動かなくなった。

しかし、トカゲ本体に痛みはないらしく、うろたえることなくハルトキへ歩む。

——警戒しながらも飛びかかった、もう一方のへびを撃退するのは、ハルトキにとって容易だった。

同じように頭を貫かれた右へび。

あっという間に“両腕”を失ったトカゲ本体は、無力となった。

「——ザコだったね」

トカゲの死がいを見下ろすハルトキの目は、哀れみに満ちていた。このトカゲは、どう考えても自然に産まれてきた姿ではなく、人工的に融合させられた形だ。

しかも動きも不自然で、少しも統率がとれていなかった。三体ばらばらのモンスターのほうが、よっぽど厄介だったことだろう。

「この世界では、何でもありっていうことかな？」

「そう…… ですかね？」

三体のモンスターが融合した新たな敵。ハルトキは先の戦いに、不安を抱かずにはいらなかった。

「城はやバイ」という大林の忠告が、嫌でも頭をよぎるのだった。

——そしてここでもまた、ドクロ面——『対S A A P』が高台からその様子を見下ろしていたが、ハルトキは—— 当然、案内人も、それに気がつかなかった。

対S A A Pは、そのまま何もせず、姿を消した。

「——もう障害物はなさそうだね」

レールの上には、もう木箱の類は乗っていない。

もっとも、乗っていたとしたら、ハルトキはトロツコをあきらめ

ただろう。

ブレーキを調整してから、ハルトキはトロツコを押し、乗り込んだ。

まっすぐにレールの延びた坂を、トロツコは下っていった。

その向こうでは目指す城が、不気味にハルトキの到着を待ちかまえていた。

「さて、わたしはマハエさんの様子でも見に行きましょうかね。あ忙しい」

順調なハルトキのもとを離れ、案内人はマハエの位置を探った。電源が落ちたように真つ暗な視界に、映像が現れる。マハエがどこかの町で、ぼーっと立ち尽くしているのが見えた。

「町に着いたんですね。こちらも順調—— ガガ——」

一瞬、視界に砂嵐が。

「ガガガ—— あれ、またエラーですか—— ガガ——」

原因不明のエラーに、案内人は冷静に対処する。

「ガガガガ—— 何でしょうか？ 昨日から調子が—— ガガ——」

「ピー—— ガガガ——」

「…… やつとおさまった」

港町——

マハエは潮の香りに導かれながら、大きな港町に到着していた。

「にぎやかだねえ」

この先、どうしてよいのかわからず、町に到着してから、マハエは入り口付近でただぼーっとこの世界の住人達を観察していた。

「ほんと、人間と変わらないんだよなあ」

のほほんと独り言を言っていると、

「ごきげんよう、マハエさん」

案内人の明るい声。

「……いつもながら、突然現れるねえ」

「そこは気にしたってしかたありません。実体がないんですから」
そう言う案内人の声は、少し暗い。

「それで、ここからどうすればいいのかな？」

「とりあえず、情報収集をしながら—— ガガ——」
「どうした？」

「ガガガ—— という雑音を発し、声を出さない案内人。
「……………」？」

「——ガガ—— 展望—— 台へ—— ガガガ——」

むりやりに絞り出したような案内人の声は、すぐに消え、もとの声にもどった。

「——ああ、すいません。さっきからエラーが続いていまして。バグでしょうかね？」

「ていうか、展望台ってなに？」

「はい？ 何のことです？」

少し前に言った言葉を、本人が否定する。

案内人が言うようにただのバグなのか、と思ったが、マハエは気になった。

たしかに、この町には展望台があるからだ。

「この件が終わったら、制作者にメンテナンスをしてもらいましょ
う」

「（壊れちまえ）」

マハエは思ったが、口には出さない。

「そちらは、がんばって任務を続けてください。わたしはしばらく
不具合の応急処置をしています」

「壊れちまえ」

マハエはボソツと言った。

18：謎の男

「情報収集って言うてもなあ……。セルヴオの破壊方法なんて、誰が知ってるってんだよ？」

案内人は自分の不具合に対応中。マハエは“表向き”情報収集中。エンドーからの情報がまったくない今、マハエはそっちの役目も同時にこなさなければならぬのだ。

本来マハエは、知らない人と話すのが苦手だ。でも、ここは異世界だからと割り切っていた。

だが、さすがに二日目にもなると、どうしてもセルヴオを人間として見てしまう。

人間としか見れない。

——人間とあまりにも同じだから。

海に沿った形で町は続いている。町全体が大きな商店街のように、メインストリートの両側を建物が挟むように建ち並んでいる。

メインストリートを歩くだけで、迷いはしないのだ。

そこから波の音が聞こえる横道へ。

——港にはたくさんの漁船。そして漁師達が。

広い海——沖のほうに、小さな何かの影が見える。

「ほんと、にぎやかだ」

このにぎやかさを、自分達が壊さなきゃならないのかと思うと、気が重くなる。

「悪いのはセルヴオじゃない……。制作者なんだ」

マハエは、自分勝手な制作者に腹が立った。しかし、任務を終わらせるまで帰してもらえないというのも事実。

どうすればいいのか、マハエは困惑した。

「こんなにも空は青いの……」

海鳥が気持ち良さそうに、空をすべっている。

——展望台へ——

案内人の言葉がよみがえった。

昨夜も案内人の妙な言葉に従って、大変な目にあった。

——また同じなのか。

——だが、マハエは展望台へ来ていた。

他にやることがないし、この上からなら、真実が見えるような気がしたからだ。

マハエは最上階を見上げると、気合を入れて中へ入った。

レンガ造りの巨大な筒の中の、長い長いらせん階段をのぼる。

「えっほ、えっほ」

下ってくる、数人の柔道家のような人達とすれ違い——

「はあ——……」

上を見上げて溜め息をついている、いかにもダイエット中なおじさんとすれ違い——

「ば、ばあさんや…… わしはもう限界じゃああ……」

「なにを言っているんですか、おじいさん……。もう少し、もう少しじゃよお」

「……………」

——軽快な足取りで、マハエは展望台を上りきった。
運動すると少しは気が晴れるものだ。

最上階は、屋内でガラス張りではなく、ただ手すりに囲まれただけの屋上のような場所。

涼しい風で、ほてった体を冷やす。

マハエの他にも数人、海や山を眺める人達がいる。

「（なぜ展望台なんだ？）」

マハエは注意深く周りを見た。

三百六十度見回せる望遠鏡が、真ん中に備え付けてある。

そういえば。と、マハエは望遠鏡を覗いた。そしてそれを海のほうへ向ける。

港で見た、沖の小さな影——

ズームイン——

「……………島？」

小さな影は、拡大すると島だということがよくわかる。だがそれは、緑の山が盛り上がった一般的な島とは違い、ごっこごっこした感じの鉄の塊みたいな小さな島だった。

もう少し拡大できないものかと、つまみを回す。

「……………!？」

——マハエの後頭部を、何者かの人差し指が押さえた。
肌黒の、男の指。

マハエは望遠鏡を覗きこんだまま動けない。

「町の東端にある、赤い屋根の小屋だ」

マハエの耳元で、男がささやいた。

言葉を返すこともできないマハエ。ただ、後ろの気配に全神経を集中する。

——だが、男からの次の言葉は無い。

マハエは、もう頭が押さえつけられていないことに気がついた。
ばつ、と振り返り男を探すと、銀色の髪が、スツと階段へ消える
のが視界に入った。

すぐにマハエはそれを追った。

だが、階段の手すりに身を乗り出しても、男の姿はもうどこにも
ない。

階段を駆け下り、出入口から飛び出る。

「——はあっ はあっ …… くそっ ……」

やはり、男の姿はない。

——町の東端にある、赤い屋根の小屋だ——

その言葉だけを残し、何者かは消えた。

きつと深い意味があるに違いない。

マハエは、言われたとおりに町の東へと歩き始めた。

あの男は何者なのか。

案内人が展望台へ行けと言い、今度は謎の男が赤い屋根の小屋へ、と。

「……………」

頭がこんがらがるので、マハエは考えるのをやめた。

展望台からメインストリート歩いて、町の東端へはすぐだった。端へ行くにつれ、建物の数も少なくなっていく。

途中、武器商人が露店を開いていた。

「よお、兄ちゃん。知ってるか？ 東のほうでは、モンスターが出たって大騒ぎしてんだ」

マハエはすぐに、そこがエンドーがいるところだと気付いた。

「いつこつちにも来るかわからねえ。どうだい？ 『WC社』から取り寄せた新型の武器もあるぞ」

困惑した顔で商品を見るマハエ。どれもなかなか高額だが、中には安いものもある。しかし、今のマハエは一文無しだ。買っていない気持ちは抑えて、小走りにその場を去った。

——赤い屋根の小屋。

それはすぐに見つかった。

とても小さな、レンガの箱のような小屋だ。

建物の数が少ないせいか、茶色の屋根がほとんどのせいか、それだけが妙に目立っている。

先ほどの男の姿はない。

——中に誰がいるのだろうか。

マハエは、頑丈そうな鉄のドアに手を伸ばした。

「……………」

やはりその前に武器になる物を探そう。そう思って手を止めたとき。

オオオオオオオオオオオ……………

嫌な気配が、背後を支配した。

マハエはそのまま硬直し、その気配の正体を思い出す。

——たしかに感じたことがある。つい最近——夜の公園だ。

その正体に気付いたマハエだが、遅かった。

マハエの背後の対S A A Pが、黒いマントを広げ、マハエを包み込んだ。

「また……………かよ……………」

海の音も、太陽の暖かさも消え、マハエの意識は眠るように遠のいていった。

「ガガ——ガガガ——」

案内人は、更に激しくなったエラーと戦い続けていた。

「ガガガ——これは……………ガ——わたしだけでは対処できそうに、ないですね……………ガガ——」

探しても探しても、不具合の原因が見つからない。

それが見つからなければ、応急処置さえもできないのだ。

「ガガガガガ——」

そうしている間にも、更にエラーは大きくなる。

「ガ——まるで…… ガガ—— 何かが入り込んで、わたしを引きずり出そうと—— ガガガ——」

案内人は、ある一つの結論にたどりついた。

「ガガ—— まさか…… ガガガ—— これは—— ガガガガガガガ……」

案内人の声は、すべてが雑音と化した。

ようやく雑音が収まると、案内人の声もどった。

「……マハエ、エンドー、ヨシノ……」

——だがそれは、まるで異質なものだった。

19：町長の研究書

ここはどこかの部屋の中。

部屋の広さのわりに、ひどくこざっぱりしている。

赤く長いじゅうたんが中央に敷いてあり、その上に豪華な椅子一つだけ置いてあるだけだ。

二人の男が話をしている。

一人は、日焼けしたような茶色い肌の、銀色の長髪男。

もう一人は、椅子に座り、全身を黒いマントで身を包んでいる。対S A A Pのようにも思えるが、ドクロの仮面をつけてはいない。立場的には、銀髪男のほうが部下といった感じた。

「——そうか、しくじったか」

銀髪男の話を聞いたマントの男が、楽しそうに言う。

「どういたしましょう？」

「ふふ。あいつはもう必要ない。こちらの情報を知りすぎたしな。

——消しておけ」

銀髪男はうなずくと、もう一つ訊く。

「例の実験体は？」

「あいつはこれから必要になってくる。まあ、いつまでも放し飼いだというのは、少し危ないか……。いや、放っておいても向こうから帰ってくるだろう」

承知しました。と銀髪男は背中を向けた。

「一人——二人、捕らえたようだな」

部屋から出ようとする銀髪男が立ち止る。

「面白くなるぞ」

マントの男は嬉しそうに笑った。

無表情だった銀髪男も、口元を吊り上げた。

「想定外の結果にならぬよう、お気をつけください」

「ふふ……。どのようなことがあるうと、結果は同じだ」

「たしかに。では、“黒服”はこちらにすべてお任せ」

——扉が閉まり、銀髪男がいなくなっても、マントの男の顔はまだ笑っていた。

そして、椅子のひじ掛に仕込んであるスイッチを押した。

床が開き、コンピュータのような機械が現れた。

「ここからが、始まりなのだ」

外からのモンスターの咆哮で、エンドーは目覚めた。

シャッターが下りた倉庫の中。エンドーは、ここへテレポートし、しばらく横になって休憩していた。

膨大な魔力を一度に使うと、疲労もかなり大きい。

眠っていたのはほんの短い時間だったが、魔力のほうはだいぶ回復したようだった。

「あー…… 起きたくねえー……」

起きたくない理由は山ほどある。
試験、モンスター、ロボット、町長――

「……………」

エンドーは、まだ重たい体をしならせ、飛び起きた。

「そうだあ！ あんのクソ町長お！ もう許さねえ！！」

町長への激しい怒りを爆発させる。

――エンドーの中の何かが音をたてて外れ、粉々に砕けた。
シャッターを爆破し、駆け出すエンドー。

「うおおあああ！……」

そこは、あの町の西。町を囲む防壁の外側だ。

許可証で西出入口を通らなくとも、エンドーはその外へテレポーターしていたのだ。

「おおおおお！……」

だが、そんなことは今のエンドーにとっては、どうでもいいことなのだ。

物見やぐらの上の見張りが、絶叫しながら突進してくるエンドーに気付く。

「おい！ 少年が襲われているぞ！」

下の警備員に向かって叫ぶ見張り。

だが、エンドーはモンスターに襲われるどころか、次々と武器で蹴散らしていく。

「……なんだあれは……?」

「うおおおおあー!!! 出て来いや町長おー!!!」

「うわあっ!」

ドゴォン!!!

防壁が爆発。

手抜きだらけの防壁に、いともたやすく孔が開く。

「なんだ!? モンスターか!？」

剣を抜く、大勢の警備員達。

「町長出せやあー!!!」

だが、エンドーの気迫に恐れ、たじろいでいる。

「と、止まりなさい! それ以上近づくと容赦しませんよ!」

「うるせー! 用があるのは町長だけじゃああー!!! ザコは引っ込んでろおー!!!」

もはや、完全にセーフティー装置が故障したエンドーを、誰も止めることはできない。

ドドドドドドド……

「う、うわああー!!!」

十人はいたはずの警備員が、エンドーに道を開けた。
モンスターよりも恐ろしい存在なのだろう。

「ま、待て！」

だが、そこは職務上、侵入者を追うしかない。

エンドーは、後ろから追ってくる大勢の足音にもかまわず、町長の家を探した。

「うおおおおおお！！！！！」

「待てー！！！！！」

……誰も、止められない。

エンドーは、建物と建物の屋根の間に、町長の家の屋根を見つけ、突進。

——ゴッ……

エンドーの上空を、何かが通り過ぎた。
それは、エンドーの進行方向へ——

ドガアアン！！！！！！

凄まじい爆音と爆風が、エンドーを吹き飛ばす。

「うわ！？」

後方に転がったエンドーは、建物の壁に激しく止められた。

「なんだ！？」

警備員達も、いっせいに立ち止まる。

ゴゴゴゴゴゴ……

「……………」

その光景に、エンドーはもちろん、警備員、住人達も声が出せなかった。

ゴゴゴゴゴ……

「……………」

静寂がもどり、少しすると、途端に誰もが騒ぎ出した。

「見た？ 今の……」

「隕石…… よね？」

「どこに落ちた!？」

「ちよ、町長の家だ!」

エンドーの横を、大勢の野次馬達を通り過ぎる。

警備員達もエンドーにかまわず、町長の家へ向かう。

「……………」

動けなかったのは、エンドー一人だけだった。

隕石が落ちた。

それも、あるうことがピンポイントに、町長宅に。

偶然か、それともエンドーの怒りが具現化したのか、定かではないが――

「…………町長っ!」

エンドーは立ち上がり、町長の家へ走った。

——野次馬の群れを押し分け、最前列に。

町長の家は、見事に木っ端微塵になり、炎をあげていた。もうその状態では地下室もなにも関係ない。

すべてが破壊され、燃えていた。

男達がバケツリレーで、炎を消しにかかる。被害の拡大を防ぐと必死だ。

「おい、女も手を貸してくれ！ ポンプにホースをつなげろ！ 早く！」

騒動、悲鳴の中、炎が小さくなっていく様子を、エンドーはただただ見ていた。

町長が家の中にいたとしたら—— いや、おそらく地下室に閉じこもっていただろう。

ということは、町長は——

隕石で家が大破する確率—— 何十億、何百億分の一だろうか。

（少なくとも現実世界では）

それがエンドーの目の前で、エンドーが向かっていた場所で起こった。

それはもう、確率うんぬんの問題ではない。

「出来すぎている」

これは意図的なものだ。と、エンドーは確信した。

しかし、誰の仕業にせよ、町長を殴りそこねたのは事実。エンドーは脱力して溜め息も出なかった。

炎に舞い上げられた紙クズが、いたるところに散乱し、灰と化す。その中の一番大きな紙を選び、エンドーは火を踏んで消した。

《マウス実験の結果》

《マウスによる実験の××× これを人体に利用すれば、その肉体は××× により、強大なパワーと××× 更なる改良により×××》

いたるところが焦げていて、すべては読めない。だがこれは、明らかに誰かに宛てた文章の下書きのようだ。

もう一枚拾うが、やはり同じような研究に関するものだ。

《これらの研究が、あなた様のお役に立てれば光栄です。実験の場と、さまざまな実験体をご用意いただき、感謝致します。》

《追伸—— 例の“超金属”の研究につきましては、後ほどご報告致します。》

20：次の町へ

「おい！ さっきの隕石で、町長が死んだらしいぜ！」

町の食堂は、その話でもちきりだ。

ただ一人、エンドーだけは話に参加せず、もくもくと食事をしていた。

「おい兄ちゃん。あんた近くにいたんだって？」

ヒゲヅラのおじさんが、エンドーに話をふる。

エンドーを追っていた警備員達は、隕石事件でエンドーのことなどすっかり忘れている。

だからこうして、堂々と食堂で食事ができるのだ。

「別に、オレは関係ないですよ。ただ、町長の野郎をぶっ飛ばし――」

エンドーは自分の口を押さえた。

一応、町長だった男が死んだのだ。町民達だって、ショックに違いない。

――はずだ。

「あつはつはつは！ いやあ、次の町長選挙、オレっち出ちゃおっかな？」

食堂大爆笑。

「（……町長……、あわれなり）」

エンドーにはもう、町長への怒りはなくなっていた。

思い返せばはらわたが煮えくり返るが、死んでしまった者にどう怒ってもしかたがない。今は先へ進むこと。それだけだ。

町長が行っていた研究のことも気になるが、エンドーにそれについて思考するほどの脳みそはない。

「これで足りませんか？」

エンドーは、金貨の入った革袋をカウンターに置いた。

「ああ、十分足りるが—— あ、ちよつと！」

「寄付します」

エンドーは金を置いて店を出た。

「案内人！ 案内人！」

「こんにちは。エンドーさん」

いつの間にか居た案内人。

「おう、いたのか。次はどうすればいいんだっけ？」

「この町の西門から出てください。先の町に『ガレット・マーキン』という人がいます」

「マーキン？ どんな人？」

「飛行技術の研究をしています」

この情報をどこから得たのか、エンドーは訊かなかった。マハエやハルトキが情報を手に入れたのだろうと思ったからだ。

「ここから城へ向かうには、それが一番効率的です」

「……わかった。マーキンという人に会えばいいんだな？」

先ほどエンドーが開けた防壁の孔は、完全にふさがれていた。

あきらめて門へ向かうと、警備員が恐れるように「ヒツ……」と目を丸くし、すぐに門を開けた。

「ありがとさん」

やはりエンドーは、モンスターよりも恐れられる存在のようだ。

警備員の「もう来るなー！」という遠吠えのような叫びを背中
聞きながら、エンドーは次の町へ向かった。

モンスターは相変わらずうつろっている。

見つからないように隠れながら移動するが、それではどれだけか
かっても町には着きそうにない。

「くっそ…… モンスターが邪魔だ。どこから湧いて出てるんだ？
どう思う案内人？」

「……………」

案内人の声はない。

「さっき来たばかりだろ。もう居ないのか」

自分ひとりで行動するのは心細い。声だけの案内人でも、居ない
よりは幾分かマシなのだ。

「（居ないとすれば、あまり長い時間、危険な場所をうつろつもの
よくないな）」

平原の緑色の中に、茶色い道のようなものが続いている。エンド
ーが向かう町へ続いているのだろう。その道を頼りに進めば、迷っ
たりはしなさそうだ。

だがモンスターがいる以上、その道のりは百倍きびしい。

「くっそお…… 早くしないと日が暮れるなあ」

太陽はまだ真上にある。現実世界と同じなら、まだ真昼の時間帯
だ。

「こそこそと隠れて行動するのは、オレの性に合わんな」

エンドーは、自分の気の短い性格を呪った。

「りゃああー！！！」

まさに白昼堂々、エンドーはモンスターの巣窟の中を駆け抜けた。

「——うわああああー！！！」

当然、モンスターに集団で追いかけられる。

モンスターの種類は数多い。巨大なトカゲ、クモをはじめ、肉食鳥や、これまた巨大な力エル——毒々しい色の、グロテスクな力エルだ。おそらくまだまだ種類はあるだろう。

不思議なのが、これほどの種類がいて、モンスター同士の争いが見受けられないことだ。

すべてが、『モンスター』という一つの“種族”を成しているようだ。

「ちつ……！ 別の種を拒絶するところなんか、人と同じか……！」

エンドーは、木の横を通過するとき、左手で魔力を貼り付けておいた。

ドォン！

そしてすぐに爆破。

一部分をえぐられた木は、ギシギシギシ……と音をたてて、ズズン！と倒れた。

エンドーを追うモンスターの何体かが、それに巻き込まれる。

だが、その他のモンスターは倒れた木を跳び越え、ちゅうちゅうな追走を続ける。同類が倒れてもお構いなしだ。

「人とは違うか……」

仲間を助け起こすくらいの行動をとれば、エンドーだって哀れみを抱くだろう。

——やはり、単に獲物を追い回す獣のようだ。

「はあ、はあ、はあ」

二百メートルも走れば、エンドーはヘトヘトだ。

「ちょ—— もうギブ！ ギブ！」

当然、モンスターに人語は通用しない。

「くっそー！」

エンドーは逃走をあきらめ、前に転倒。数回地面を転び、停止した。

「グヒヤオ！」

これはチャンス！と、更に勢いづくモンスター達。よほど食料不足なのだろう。

—— 追いつめられたはずのエンドーが、ニヤニヤと笑っていることに気が付かず……。

ドゴオン！！！！

“その場所”を通過したモンスターの足元が、爆発した。

「ギャウー！？」

何が起こったのか理解できないモンスター達。空中へ舞い上がり、ドシャツ！と地面に落下した。

エンドーは、前へ転がったときに、魔力を三つ、地面に貼り付けていたのだ。

これで残ったモンスターはわずか。

あとは『魔力球』で一掃した。

「ああ…… もう嫌だ」

ぶつぶつ言いながらも、エンドーは先を目指した。

モンスターはまだまだ出現する。

「あー…… ヨツくとマハエは無事だろうか」

ようやく、モンスターも見当たらない場所まで逃れた。

全力疾走と魔力の連発で、エンドーの体力は限界だ。

だが、前よりも魔力が増大しているらしく、これまでよりも長持ちした。

「はあ…… もっと力つけないとな……」

行動できる最低限の力がもどったところで、エンドーは再び歩き出した。

すぐ先に、山と山の間の細い道があり、門がつくられていた。

「やっと着いた……」

エンドーはふらふらとした足取りで、門へ近づいた。

「止まれ！」

突然の声に、エンドーは驚きもせず足を止めた。

「またですか……」

警備員が、門の上からエンドーを見下ろしている。

「あんな危険な道を一人で通つてくるとは…… 何者だ？」

「何者と言われましても……」

「まさか、モンスターか？」

エンドーは飽き飽きした声で警備員に言う。

「あんなのと一緒にされちゃ、おしまいでしょ」
警備員はまじまじとエンドーを観察する。

——しばらくし、門が開いた。

「通れ」

「どーもー」

念のためのボディチェックをすまし、別の警備員に連れられて細道を歩く。

「キミ、賞金稼ぎかい？」

警備員がエンドーに訊く。

「……ええ、まあ、そんなところです」

「ははは。そうは見えないな」

「……………」

もう一つ門を通過し、町の中へ。

「じゃあね」

手を振って、自分の持ち場にもどる警備員。

エンドーはマーキンのことを思い出し、警備員に聞こうとしたが遅かった。

「……まあ、いいか。その辺の人にも」

その町は、前の町よりも平和なようだった。

だが、エンドーはもう、どの町でも“町長”とだけは関わりたくなかった。

21: ガレット・マーキン

「マーキンさんかい？」

エンドーの質問に、なぜかめんどくさげに答える青年。

「あの人に何か用？ 知り合いかい？」

「いえ、知らない人だから訊いてるんです」

「そうかあ、あまりあの人とは関わらないほうが——」

前にもこんな会話をしたことがあるぞ。と、ギクリとするエンドー。

「あの人はなんというか、うん。一言で言うと“変人”だ」

「……………」

エンドーは目頭を押さえる。

変人としが関わりを持たないのか、変人に呼び寄せられるのか、エンドー自体が変人なのか。

——その問題は別として、マーキンの居場所を訊く。

「あの人なら、たいてい家にいるからなあ。わけのわからない研究をしているよ」

「で、家はどこです？」

——マーキンの家の場所を聞き出し、エンドーは気が進まないまま、そこへ向かった。

「（オレだけが辛いんじゃない。オレだけが辛いんじゃない）」
そう自分に言い聞かせる。

——マーキンの家は、高いエントツが目印。家の前には、ガラクタが山のように積まれている。
その情報だけで十分だった。

ほどなくして、エンドーは目的の家を見つけた。

情報どおり、家の前にはガラクタが山のように。

気球や、飛行船に似た模型がいくつも。試行錯誤を繰り返したあげく、捨てられた模型や、機械の部品。

「まだ、まともな飛行技術も発展していない世界か……」

そういう世界の不便さを想像し、エンドーは苦笑した。

ガレット・マーキンは、この世界の人が空を飛ぶための研究をしている。それが完成すれば、この世界は大きく変わるだろう。

その前に、滅びなければ……。

エンドーは、ドアの呼び鈴を鳴らした。

「……………」

誰も出てこない。

もう一度、呼び鈴を鳴らす。

「……………」

——もう一度。

「……………」

今度は声をかけてみる。

「すいませーん。マーキンさーん」

留守なのかもしれない。しかし——

「この家にマーキンはおらんよー」

中から男の声がした。

マーキンの助手かもしれない。

「居ないのか、まいったな……。どこ行っただ？——すいませーん、マーキンさんはどこに出かけられましたか？」

「マーキンは引越したー」

「引つ越した!？」

「ああー、さつき引つ越したー。本人のわしが言っんじゃない、間違いない」

「居るんじゃないか!?!」

エンドーは、ドアを蹴り開けた。

「……居ないと言っておるじゃろう」

「ヘツタクソな居留守使ってんじゃないえー!!! あんたがマーキンだろ!?!」

「……わしはフランソワじゃ。マーキンの双子の弟じゃ」

「なんてベタな言い訳を……!?!」

机で作業中だった、ボサボサの白髪、白いヒゲ、汚れた白衣を着た老人は、氣だるげに顔を上げた。

「誰じゃ? 何か用か?」

「オホン。すいません、マーキンさん。オレは遠藤京助といいます。えーと……」

そういえば、何の用があつてマーキンを探していたのか、詳しい理由を案内人から聞いていなかったことを思い出した。

「遠く離れた場所に、至急行かなくてはならないので、乗り物を貸してください。」と

それまで居ないと思っていた案内人が、突然声を出した。

「え、えーと……。遠く離れた場所に、至急行かなくてはならないので、乗り物を貸してください」

「イヤじゃ」

即答するマーキン。

「いやいや、そこを何とか……」

「イヤじゃ」

「……………」

「なぜわしが、見ず知らずのやからに、物を貸さねばならんのじゃ？」

「まあ、たしかに言えてますね」

何とか説得できないものか。

エンドーは、表に捨ててあったガラクタを思い出した。

「ところで、研究のほうはどうなっていますか？」

「なんじゃ、興味があるのか？」

「……ええ」

「あと一歩というところか。自由に空を飛ぶ、大きな乗り物をつくるのじゃ」

飛行船のような乗り物のことを言っているのだろう。とエンドーは理解した。

「空を飛ぶしくみとかは？」

とりあえず飛行技術に興味があるふりをする。といっても興味がないわけでもないのだ。

飛行船は、気体の性質を利用して浮上するものだ。この世界ではどのようなものになるのか、エンドーは少なからず興味があった。

「なるほどのう。おぬし、良い目をしておる。悪かったの、実はわし、フランソワではないんじゃない」

「……わかつてます」

あきれるほど変人だ。そうエンドーは確信した。

マーキンが、金庫の中から小さな黒い石を出してきた。

「これが、何かわかるか？」

握りこぶし半分くらいの大きさのその石は、透き通ったきれいな石炭のような物で、現実世界では見ない物だ。

「これは『太陽のかけら』と呼ばれる石での。とても貴重なものじゃ」

それをテーブルの鉄板の上に置き、マッチをこする。

「一見、石炭のようじゃが、こいつに熱を与えると――」

マッチの先端についた火を、石に近づける。

すると、黒かった石が、瞬く間に真っ赤になった。

「少しの熱で、膨大なエネルギーを生み出す、奇跡の石じゃ」

赤くなった石に、周りの鉄片が引き寄せられるように動く。

マッチの火が消えると、石は元の黒色にもどった。

「この石が生み出すエネルギーを利用し、大きな機械を動かそうと思う。しかし、たったこれっぽっちじゃ、限界がある。しかも、石の力にも限りがあるしのう」

『太陽のかから』という石が生み出すエネルギー。エンドーは、自分が持つ『魔力』に、近いものを感じた。どちらも、未知のエネルギーに違いないのだから。

「この石は、さっきも言ったように貴重なものでな。そう簡単には手に入らんのだよ」

残念そうなマークン。

エンドーは簡単になぐさめた後、再び本題を持ち出した。

「ところで、乗り物を貸してくれま――」

「イヤじゃ」

「……………」

それとこれとは話が別。とても言うように、即答され、エンドーは別の方法を模索する。

――それなら、少し遠回りの方法しかない。と考え、

「では、どうすれば貸してもらえます？」

その質問に、マークンは「うーむ」と考え、言った。

「わしのゆいいつの親友である、町長の頼みじやったら、『気球』を貸してやらんこともない」

「ちょ……………町長っすか……………」

「うむ。この研究の費用の一部を、町長に協力してもらっておるか

らのつ」

できればもう、町長などというやからには関わりたくなかったエンドーだが、そうしないとマーキンを説得できない。ということで、やむなくマーキンの家を出た。

「ふ…… ふふふふふふ……。嫌な予感がするぜ……」

ここの町長がまともでありますように。と、エンドーは心の底から願った。

——だがすぐに、そんな願いも叶わぬものと悟る。

町長の家もまた、マーキン家に負けず劣らず、見つけやすかった。住人の情報で、町長の家を見つけたエンドーは、思わず回れ右をする。

「いかん。騙されたな」

それを町長の家だと言われても、信じることはできない。

壁にはヒビが入り、隙間だらけ。窓のガラスは割れ、板が打ち付けてある。

テレビや絵本の昔話によく出てくる、典型的な“貧乏”家屋だ。

「くそ…… もう一度“町長の家”を探しなおさなければ——」

「——町長さん！ どうぞ、おすそ分けです」

「おお、おお、いつもすまんね。ほほう、これは美味そうなジャガイモじゃな」

エンドーは、もう一度回れ右で、ボロ家に向き直る。

町民であろう奥様が、ボロ家のドアを開け、町長と話をしている。

「……まさか、本当に町長の家なのか？」

「——それじゃね、町長さん。お体に気をつけてくださいね」

「おお、おお、そこは抜かりないぞい」

「うふふふ。けっこうなことですよ」

大声で突っ込みたい気持ちを、エンドーは数回の深呼吸で抑え込んだ。

奥様が去った後のドアを、エンドーは壊れないようにそつとノックした。

「はいはい、どちら様ですか？」

「遠藤京助という者ですー。お願いがあつて来ましたー」
半ば脱力気味に声をかける。

「お入りくださいな」という町長の返事で、エンドーはドアを開けた。

「う……」

思わずうめき声を出してしまうエンドー。

——一言で言つと、そこは家ではない。

全体の広さは、六畳間ほど。床のところどころに穴があり。使い古されたむしろの上には、それ以上に使い古されたであろうちゃぶ台。

見ているだけで悲しくなる。

そして、ちゃぶ台に向かつて、今にも昇天してしまいそうな老人が。

「いらつしゃい。わしに何の用事かの？」

「えー…… あー、その……」

あまりにも哀れな町長の姿に、エンドーは本当にこの人にものを頼んでよいものか、気の毒になつてしまう。

「遠慮などいらんよ。それに、わしは哀れな老人などではない」

エンドーの思つたことを見透かすように、町長が言つた。

とりあえず、エンドーは靴をぬぎ、町長の向かいに座つた。

22：町長さんの依頼

「そうか……。マーキンにのう……」

エンドーは、町長にガレット・マーキンのことを話した。

一通りの話を聞いた町長は、困ったようにうなった。

「何とかありませんかね？」

「……わしとマーキンは、古くからの友でのお。たしかに、わしから頼めばどうにかなるが……」

しかしのう。と、町長はまたうなる。

「マーキンの研究には、わしも援助金を出しておる。じゃから、マーキンが言うように、見ず知らずの者にそうやすやすと許可は出せんのじゃ」

たしかにその通りなので、エンドーは口を出せない。

マーキンにしたのと同じように、町長にも尋ねる。

「……何か条件を？」

「そうさなあ……」

そして沈黙。

「……………」

町長はうつむいて、眠ったように瞑想する。

数分の沈黙後、先に口を開いたのはエンドーだった。

「……ところで町長さん」

「……んを！？ な、なんじゃ！？」

「……………」

眠っていたようだ。

「なぜ町長さんの家は、こんなにも…… レトロというか、雑巾と
いうか……」

「ふおっふおっふお。なぜこんなにもボロボロなのか、とな？」

「ええ」

貧乏暮らしを楽しむような、町長の顔。

「マーキンに資金援助をしておるのもそうじゃが、ある金はこのよ
うな老いぼれのために使うよりも、未来ある町民のために役立てた
ほうが効率的じゃて」

その言葉に、エンドーは心を動かされた。

だから、町民からの信頼も厚いのだろう。前の町の町長とは正反
対だ。

「おお、そうじゃ。お客人には茶を出さんとお」

「いえいえ、けっこうです」

立ち上がろうとする町長を、慌てて止める。

「そうかい。それじゃ、ニボシでも食うかね？」

「心から遠慮いたします」

「むう。そうかい」

残念そうな顔で町長が言う。

「ところで、さっきの条件を思いついたのじゃが」

「そ、そんな無理して考えなくても……」

町長はふおっふおっふおと笑い、条件を言う。

「最近、この付近にモンスターが出現する。というのは言うまでも
ない。そこで、賞金稼ぎであるおぬしに、依頼しようと思う」

「ちよつとまで」

エンドーが手の平を町長に向け、言葉を止める。

「いつオレが賞金稼ぎだと言いました？」

「ふおっふお。門の警備員から報告が入っておる。黒髪の若い賞金
稼ぎが町に入ったとな」

「ま、まさか、それを知っててわざと話を——」

「ぐおっほん！　そこでおぬしに依頼というのはじゃな！」
ちやぶ台に片足を乗せ、エンドーをビシッと指差す町長。

「その、どこからともなく湧いて出るモンスターの源をつきとめてほしい！」

老人にしては迫力のある言い方だった。

ある程度、ろくな条件ではないことを予想していたエンドー。

「オレ一人で、ですか？」

「嫌なら、マーキンはあきらめるんじゃない？」

「（卑怯な……！）」

町長本人は、これでエンドーはあきらめるだろうと思っている。
だが――

「モンスターのもとを探れば、マーキンの件、どうにかしてくれま
すね？」

その言葉に町長は驚いた。だが、今更止めるのもおかしい話だ。

「……約束しよう」

やむなくうなずいた。

――町長の依頼を受けたエンドーだったが、町長の家を出るやいなや、地面に両手をつけて激しく後悔する。

「なんでオレはこう、いつも――」

それが自分のもっとも悪いくせだと、わかってはいるが、どうしても自分を制御できないエンドー。

先の見えない森の中を突っ走って、崖に向かってジャンプしたとき、馬鹿をしたと気付く。

「親の顔が見てみたいぜ……」

最後に、額を地面に打ち付けた。
その馬鹿な行動が、通行人達の視線を集めているということも知らず。

「しかしまあ、受けちまったもんは仕方ねえな」

——立ち直りが恐ろしく早いというのも、エンドーの大きな特徴の一つだ。

しかし、そのせいで、いつも後悔したことを忘れてしまうのだ。
町の門を出るとき、警備員達がエンドーを応援する。

「がんばれよー」

「死ぬんじゃないぞー」

「頼りにしてまっす！」

いつの間にエンドーが受けた依頼のことを聞いたのだろうか。

「まかせとけー」

まるでやる気のない声を残し、警備員達に見送られる。

——魔力はすっかり回復し、戦闘準備は万端だ。

できれば道具もそろえたかったが、有り金すべてを、前の町の食堂に置いてきてしまったことを思い出した。

モンスターが発生する原因。

それは、エンドーも気になっていたことだ。考えられる原因としては、悪町長の“試験部屋”のように、どこからかモンスターがレポートしてきていること。

だが、その装置の場所すら、けんとうもつかない。もっとも、土地勘があれば別だが、当然エンドーにそれはない。

——となれば、やることは一つ。

エンドーは適当な木によじ登り、モンスターを観察。

モンスターは、彼に気付かず、うろつろと徘徊している。
視力が良いおかげで、平原の隅々までくまなく観察できる。

モンスターの動き、集まっている場所—— 怪しいところはない
か——

長時間集中できることといえば限られている。ゲームをするとき、
本を読むとき。彼にとって今のこの状況は、本来耐えられるはずも
ないものなのだ。

まだ少し冷たい風が、何度も肌をかすめるが、身動き一つもしな
い。

他の誰かが同じように木に登って観察しただろうか。そらくエン
ドローが初めてだろう。そのおかげで、通常ではなかなか見えない場
所に気がついた。

そこから百メートルほど離れた場所に、よくよく見ないとわから
ないほどに草で隠された道がある。

数分おきに、そこからモンスターが現れるのだ。

「あれか」

エンドローはすすると木から下り、草陰に隠れながらその場所へ
移動した。

「——間違いないな」

じつと耳を澄ますと、わりと近くから、ボワウン…… というテ
レポートの音が聞こえた。

近くに装置がある、と確信したエンドローは、モンスターが出現す
る怪しい隠れ道に入った。

背の高い草を、何度も踏みつけてつくられた獣道に従う。

普段は人が立ち入らない場所なのだろう。【立ち入り禁止】や【

ケモノ注意】などといった看板がいくつか立てられていた。

獣道をたどるのは、本来危険な行為だ。いつ獣——モンスターと正面から出くわすかもわからない。

「（そのときはそのときだ）」

いつものマイペース思考でさくさくと獣道を進む。

「グブルルル……」

聞き覚えのあるうなり声に、エンドーは慎重さを取り戻す。

——ドラゴンだ。

あふれ出る恐怖に栓をし、気配を感じ取る。自分を野生化させる。

——おそらく獣道のゴールであろう、小さな掘っ立て小屋の前に、それはいた。

まるで小屋の番をしているかのように、ドラゴンは動かない。

「グルル……!?!」

鼻が利くのか、ドラゴンは早くも人の臭いを嗅ぎとったようだ。

あの小屋の中に装置がある。と確信したエンドーは、周りの状況を確認した。そして、できるかぎり音を消し、草むらの中で身をかがめる。

ここは草が生い茂り、視界が悪い。

それはエンドーにとってもそうだが、ドラゴンからしても、自分よりも小さなエンドーを見つけるのは至難だろう。

更に言えば、体の大きなほうは小さな者から見れば見つけやすい。しかも、エンドーが得意とするのは遠距離からの爆撃だ。

割合的には、エンドーが有利。

「っじゃ！ いっちょやるか！」

23：コイの気持ち

エンドーの魔力の最大値にも、余裕ができていた。
まだまだ疲れる様子がない。

遠距離からの攻撃後、場所を移動し、また攻撃。

——四回の爆発後、ドラゴンはだいぶ弱ったようによろけ、地面に膝をついた。

もう一発、魔力球を爆発させると、それがトドメとなった。

無傷で倒したドラゴンを前にして、エンドーの気分は高揚。
あとドラゴンが一体いても、軽く倒してしまうかもしれない。

「さて、テレポート装置か」

ドラゴンが守っていた掘った小屋の中では、やはりテレポート装置が動いていた。

これがどこにつながっているのか。
エンドーは唾を飲んだ。

——人為的にモンスターを送り込んでいたのは明らかだ。

——でも誰が？

この装置を使って、そのどこかに移動できるだろうか。

——帰られなくなったらどうするか？

——転送された先に、希望はあるだろうか？

うじうじと考えるのは、自分の性に合っていない。

「（オレはただ突き進む！）」

「うおっす！」と気合を入れ、先の見えぬ地獄へと踏み出そうとした――

「――グブルルル……！」

装置に集中していて、エンドーはよみがえった気配に気がつかなかった。

高まった気分が――潮が引いていき、頭が冷めていく。

倒れたはずのドラゴンが、復活してエンドーを完全に捕捉していた。

「……ぬかった……」

失神寸前の、ドラゴンの荒い息が、エンドーの脳天に降りかかる。背後から首を鷲掴みにされたエンドーは、振り向いて攻撃することもできない。

もう片方の腕の、鋭い爪で切り裂かれるか。

もしくは鋭い牙でかぶりつかれるか。

このまま首をへし折られるか。

まな板の上に寝かされたコイの気持ちを、痛いほど感じていた。

煮るなり焼くなり――自分の哀れな姿を想像し、エンドーは唾を吐いた。

――敵は弱っている。まだあきらめるところではない！

「おおおおああー!!!」

その叫びで、弱ったドラゴンはうろたえる。エンドーを恐れている。

それもそのはずだ。さっきまで完全に力で圧倒されていた敵を、ようやく自分の好きなように調理できるということところまで追いつめた。だが、その敵が、まだあきらめていなかったのだから。

まな板の上で、突然コイが跳ね上がり、それに驚いて包丁を落としてしまった板前のように、ドラゴンは力を緩めた。

そのすきに振り向いたエンドーの手の平には、すでに魔力が凝縮されて、球体を形成していた。

彼は、それを飛ばすのではなく、そのままドラゴンの腹にぶち込んだ。

——ドグンッ!!!

腹に魔力球を押し付けられ、直に爆破されたドラゴン。
「ググ……」

白目をむき、苦しそうな声を出して後ろに倒れた。

あるとき立ち上がらなければ、生きながらえたであろう。結果的に、執念深さでエンドーに負けてしまったのだ。

手の平で爆発が起こったにも関わらず、エンドーは無傷だった。
自分の魔力のダメージを、同質の魔力が防いだのだろう。

「やっぱ、死ねねえわ。オレ」

高笑いしたい気持ちで、微笑むだけで抑えた。

次は装置だ。と覚悟を決めなおす。
だが、その覚悟も、あっけなく不要となる。

ビリビリ…… キュイイ……

装置全体に電気が走り、煙を出して停止した。
さらに小さな爆発が起こり、装置はバラバラに分解した。

「……番人が倒されれば、装置も使えなくなるしくみか。用心深いことだ」

エンドーは内心、ホッとしていた。

先の見えない近道を通るよりも、やはり慎重に遠回りしたほうが安全だ。

——これでマーキンの件もどうにかなるだろう。
あとは城へ向かう。

「（マハエもヨツくんも、城にいるのだろうか）」
とにかく早く合流したい。

とたんに、こんな物騒な場所に一人でいるのが心細くなった。

——物騒な場所にいるのは、エンドーだけではなかった。

モンスターがうろつく森の中を、城へまっすぐに行く人物。

「吉野さん」

ハルトキは、突然の声に少し驚き、それが案内人だとわかると、
はぁと息を吐いた。

「案内人。だいぶボクを放っておいたじゃない」

「そうですか」

「冷たい言葉ですねえ……」

——トロツコに乗って城を目指していたハルトキだが、城が大きく見えてきたところで、レールが途切れており、やむをえなく徒歩で移動していた。

「適当に城へ向かってるんだけど、この道であつてるかな？」

「はい。もう少しで城の敷地に入ります」

——いよいよなんだな。

ハルトキも、独りでいる心細さを覚えていた。

何体かのモンスターを、『金縛り』でやり過ごし、ハルトキは森をぬけた。

脇には人工的につくられた深い水路があり、城へ向かって勢いよく水が流れている。

ここに飛び込めば、城へ着くだろうか。ハルトキはその可能性を笑い飛ばした。

「やっぱり、あの融合モンスターは、王と関係があるのかな？——ん？」

ハルトキはそこでピタリと立ち止まった。

——魔力が何かを感じ取る。

——何かの気配。

ハルトキはとっさに、『動体視』を発動した。

オオオオオオオオオオ……

洞窟の中を風が通り抜けるような、低いうなり声。
何かに狙われている感覚。

“誰か”ではなく、“何か”に。

空間がゆがんだ。

——シュパン！

ゆがんだ空間—— 空気が、高速でハルトキに迫る。
身体を回転させながらそれを回避した彼の後ろの木に、切れ込み
が入った。
また空間がゆがみ、今度は黒い色をつけて、目に見える形になっ
た。

「ドクロの面……？」

ハルトキはすぐ傍らにも同じ気配を感じ、反対側へ逃れた。
だが、そこで、片足が地面を踏んでいないことに気付き——

「うわぁ！……！」

ドクロ面—— 対S A A Pの放った『かまいたち』が、水路で足
を踏み外し、体勢を崩したハルトキの額にかすり傷をつけた。

「ああああああああ……！！！！」

深い水路の、流れの速い水の中へ、ハルトキは落下した。

——まっすぐに、水が彼を城へと運んでいった。

『ぐおー、たあべちやうぞおー』

『たすけてゝ あゝれゝ』

『ぐへへへへ。だれもたすけになんか、こないわあ！ そおれガジガジ』

『いやあゝ やめてえゝ ハンバーグかえしてえゝ』

『ぐははははは！』

「——つぶは!?!」

恐ろしい夢で、マハエは飛び起きた。

「はあはあ…… やつべえ、近年まれに見る壮絶な夢だったぜ……あれ?」

何が恐ろしかったんだっけ? と直前まで見ていた夢を思い返そうとする。

「(たしか、テンションの高いインド人に、超甘口カレーを食べさせられて…… じゃない。ポルトガル人だったっけ……?)」

——とにかく、思い出そうとすると鳥肌が立つ夢だったのだ。

頭が冷静さを取り戻すのに三分要し、ようやく現実を取り戻した。

——シンとした薄暗い部屋の片隅に、マハエは寝かされていた。

「なんでオレ、こんなところで……」

一分ほど考え、自分が港町で“ドクロ面”に襲われたことを思い出した。

謎の男の言うとおりに行動し、赤い屋根の小屋の前で——

——やはり罠だったのか。

そう考えると、今、自分がいるこの場所の異様さに、はつきりと

気がつく。

縦にまっすぐ、細い鉄の棒が伸びて、床と天井をつないでいる。それが何本も並んで、まるでマハエを閉じ込めるように――

「おいおい…… マジで？」

マハエは牢屋に放り込まれ、冷たい床に転がっていたのだ。あれは罠だった。そう確信するには、十分だった。

「冗談じゃないぞ！」

鉄格子のドアを、ガチャガチャとゆする。

「出せ！ コラ！ 出せクソツタレ！」

「うるさいぞ。静かにしろ！」

「すいません……」

牢屋の番人であろう大男に、低い声で怒鳴られ、マハエは動きを止めた。

番人はぶつぶつ言いながら奥へ消えた。

「……って、何でオレがあやまらなきゃならないんだ！？」

ガシャンガシャンガシャン！！ とドアを乱暴にゆする。

「出あー せえー よおー！！」

ガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャン――

「――あ。」

前に押したとき、鉄格子のドアが枠から外れた。なんとという手抜き工事か。

その音に気付いた番人が、ギロリとマハエをにらむ。

「……………」

マハエは黙って、ドアをもとにもどした。

——格子ドアは、すぐに鎖でぐるぐる巻きにされ、脱出は不可能となった。

「馬鹿だったな……………」

抵抗すればよかったものの、番人ににらまれ、マハエは弱気になってしまった。それは不良の類が苦手なマハエの悲しい性。

魔力を使つたとしても、この牢は壊せそうにない。おまけに武器もない——

「あれ？」

マハエは自分が寝ていた場所に目をやり、あるものを見つけた。

それは、“つば”のない真っ直ぐな居合刀のような刀。黒い鞘におさまっている。

意外な場所で武器を見つけたが、その刀は日本刀とは違い、ある程度の達人にしかなかなか扱えないだろう。

「（ま、武器は武器だ。ありがたく頂いておこう）」

だが、武器があつても脱出できなければ意味はない。

監禁されているということは、いずれ脱出するチャンスはある。

そのときまで待つしかない。

いつのことになるのか。マハエは、もう一分だってこんなじめじめしたところに居たくはなかった。

「——あなた、人間ですか？」

唐突に、信じられないほど近くから聞こえた声に、マハエは驚いた。

薄暗くて気がつかなかったが、この牢の中にはもう一人、人が居たのだ。

その人物は木箱の陰に座っていた。

黒い服に、黒いズボン。とじたように細い目を隠すように、つばの垂れた黒い帽子をかぶっている。若い男のようだ。

全身真っ黒な姿が、闇と同化していた。

敵ではないことを確認し、マハエは話しかけた。

「あなたは……？」

「……人間、なんですね？」

質問に質問で返してくる男。

「人間……　ていうのは？　オレはモンスターではないですよ」

「いえ……。あなたは、“セルヴォ”ではないのですね？」

男の言った意味を理解するのに少し時間がかかったが、それを理解すると、大きな疑問が浮かんだ。

「なぜセルヴォのことを？　何者なんだ？」

男は帽子をくいつと上に上げ、マハエを見据えた。

「やはり、あちらから送られてきた“人間”、ですか」

「あ、ああ。でもなぜ……？」

「わたしも、この世界に送り込まれてきた者です。ただ、あなたとは違う」

男は立ち上がり、帽子を取った。

「わたしは、特殊武装プログラム——『S A A P』。部隊002の“隊長”です」

こげ茶色の髪の頭をマハエに向け、ていねいにお辞儀をする。

「S A A P…… って……」

——セルヴオ化したS A A P達は、自分達に敵意を向けている。
案内人がそう言っていたのを思い出し、マハエは刀を黒い鞘から引き抜く。

だが、その手を男—— 隊長が押さえ、見事な手さばきで、一瞬のうちに刀を奪った。

「落ち着いてください。わたしは敵ではありません」

言葉自体は信用できるものではないが、敵なら牢屋に閉じ込められていた理由がわからない。

マハエは信じてみることにした。

「……すいませんでした。でも、S A A Pは敵だと言われたので」

「ええ、たしかに、ほとんど—— いえ、わたし以外すべての仲間が、洗脳されてしまいました」

「……洗脳？」

隊長の話では、この世界に送り込まれたS A A P達は、全員がセルヴオと化した。しかし、部隊は任務の遂行を続けた。そして、城にたどり着いたとき、何者かに拉致され、洗脳されてしまった。隊長は、気付けばこの牢に監禁されていたらしい。

「その何者かを、見ましたか？ どんなやつが——」

「牢に入れられる直前だと思いますが、二人の男の声が聞こえました。姿は…… わかりません」

「そう、ですか……。オレは、制作者の依頼でこっちに送り込まれました。小守真栄といいます」

ようやくマハエも自己紹介。

「シンエイさん、ですか。仲間は何人ですか？」

「オレを合わせて三人です」

三人という数の少なさに驚く隊長だが、それを隠して言う。

「あと二人ですか。捕まっていなければ良いんですけど」

「全員捕まったら絶望的だな……」

全員が捕まってしまったら、ここから助け出してくれる者はいない。敵がそのうち牢を開くときを待つしかないのだ。

「一つ—— 脱出する方法ができました」

隊長が冷静に言った。

「本当ですか!？」

「はい。任せてください」

そして、先ほど取り上げた刀を、鞘に収めたまま、横にして両手で前に構える。

「この世界に来て、プログラムの武器は使えなくなりました。ですがこの刀は——」

刀に魔力がそそがれる。

「——て、あなた、一体……!」

マハエは、自分に流れる魔力と、同じような気配を感じていた。

「わたし達は味方同士です。協力し合いましょう」

隊長はそう言うと、刀を振った。

——閃!

その振りは、目に見えぬほどの速さで、鞘から抜かれた刀は、空中に白い光の線を残した。

——ガランガラン……

光の線が消えると、すっぱりと切断された鉄の棒が、床に転がった。

「すげえ……」

「この刀は、この世界でつくられた物のようですが、どういふわけか、わたしの手に馴染んでいますね。なぜあなたがこれを？」

「そこで見つけたものです」

そう言い、自分が寝ていた場所を指差す。

「……わたしが目覚めたときには、何もなかったはず……」

隊長は刀を鞘におさめ、左手に握った。

「なっ……！ お前らどうやって……」

番人の大男が、音を聞きつけてやってきた。

すでに牢を脱した二人は、大男と向き合う形に。

隊長が一步前へ出た。

「さて、身体慣らしといきましょうか」

25：クロスワード

「うおおおおお!!! お前らをここから出すわけにはいかん!」

マハエと、S A A P隊長を前にし、番人は低い声で叫ぶ。

その迫力に尻込みするマハエとは逆に、隊長は表情一つ変えない。

番人が更に低い声でうなりはじめた。

「ぐうううううううぬ……!」

番人の太い腕から、何本もの触手が伸びた。

「なんだ……? こいつ、人じゃないのか?」

「ぐははは! ひねり潰すっ!」

——ビシュッ!

触手がマハエの隣の隊長を襲う。

——キーン!

隊長は刀を目の前に構え、それを弾いた。

マハエは彼の後ろに逃れ、武器になりそうなものを探した。

——キーン! ガキン!

触手の連続攻撃を、隊長はことごとく防ぎ、弾いている。

マハエは、床に転がっている、切断された牢の鉄棒を拾い上げた。
棒の先はやや斜めに切断され、槍のようになっていてる。

——少々重くて扱いづらいが、構わない。

マハエはそれを前に突き出し、戦いに加わった。

触手攻撃が素早すぎて、隊長もなかなか攻撃にうつれない様子。

触手は両腕から出ている。数は六本。それぞれが意思を持っているように動く。

「（ようするに、敵は七体か）」

マハエはせめて片腕だけでも封じようと、鉄棒で敵の左腕を突いた。

だが、棒は三本の触手に絡めとられた。そして触手は、恐ろしいほどの怪力で、それをマハエごと持ち上げ、床に叩きつけた。

「ぐはっ！」

身動きがとれないマハエに触手が、絡めとった鉄棒で攻撃をしかける。

——シュン！

寸前で、触手が三本とも切断された。

「大丈夫ですか？」

マハエを助けた隊長が、手を差し伸べる。

ひるむことなく襲いくる残りの触手が、続けて振られた刀に、糸を切るように切断された。

「なんだと……！？」

すべての武器を失った番人がたじろぐ。

「準備運動は、このくらいでよしとしましょう」

隊長が刀を縦にまっすぐ構え、魔力をそそぎ込む。白い刀身が淡い光をまとった。

が、番人は余裕の表情で、

「まだまだあ！これで終わりではない！」

すると、体中から新たな触手が伸び、そのすべてが無抵抗の隊長を襲う。

マハエはすぐに足に魔力を溜め、床を踏みしめようとした。が――

――シュパァン……

それまで居た場所から、隊長の姿が消え、同時に番人の動きが止まった。

「斬灯―― 『ひかり灯柱』」

番人の大きな体の中央で消えていく、縦に伸びた白い光の柱。

一言も発することなく倒れる番人の後ろで、隊長が魔力の光を帯びた刀を、鞘にもどした。

それはアニメさながらの光景。とても人のものとは思えない素早い技、動き。まさに電光石火の如く、敵を切り裂いた。

足に溜めつばなしたった魔力を解放し、マハエは一つ質問した。

「苦戦…… してたんじゃない……？」

「いえ、敵の動きを見極めていたんですよ。それに、まだこの体にあまり慣れていませんから」

「……………」

「それよりも、大丈夫ですか？ あんなに激しく叩きつけられて」

「…… ええ、まあ……」

マハエはうつむいたまま、「行きましょう」という隊長に従った。念のために鉄棒を持つマハエだが、この隊長の後についていけば敵はいないのかもしれない。

――それよりも、隊長が使った魔力の技のことが気になっていた。

「隊長さん。名前とかあるんですか？」

人気のない廊下を警戒しながら歩く二人。

マハエは先を歩く隊長に尋ねた。

「名前は—— そうですね……。002部隊は、切り込み部隊ということで、『槍』と『剣』という意味で、『ソウケン』と呼ばれていました。攻撃専用としてつくられたのです」

「なるほど。その他の部隊が存在したのか、という疑問は置いときましょう」

「ソウケン—— わたしのことは『宗萱^{ソウケン}』とでも呼んでください」

「宗萱…… ね」

少し嬉しそうに、隊長—— 宗萱がうなずいた。

「この世界に送られたプログラムが、『002』一部隊だけでよかったです。少数とはいえ、部隊を敵に奪われてしまった今、それを倒せるのはわたしと—— あなた方しかいません」

—— 人間の戦闘力はたかが知れている。

無力な幼い子供を見るような宗萱の冷たい目に、マハエは気付かない。

「そうですね。これ以上敵が増えないことを祈ります」

「…… 気を引き締めて行きましょう。また捕まれば元も子もありませんからね。敵と遭遇したときは、わたしに任せてください」

「了解」

マハエはマハエで、心強い味方が加わり、一安心していた。

「あれ？」

ジャケットのポケットをまさぐっていたマハエが、そこから“黒い箱”を取り出した。

「『無線機』ですね」

「こんなの、拾った覚えはないんだけど……」

マハエはしばらく無線機をいじるが、使えないらしい。

だが、何か重要そうな感じがしたので、またポケットにもどした。

廊下の窓から広場が見える。

広場の奥に、大きな建物があるらしい。

「宗萱さん。ここって——」

宗萱も、その建物を見て、マハエの言葉に続く。

「“城”ですね。我々は目指していた城の、牢に閉じ込められていたのです」

「城って、王の城—— ですか？」

「ええ、和解を求めた王の城。わたしの部隊は、この広場で拉致されたんです」

「……いよいよ、怪しいな……」

王とは何か。セルヴォとは何か。また、敵とは何なのか。

マハエは、クロスワードの答えが見えてきた気がした。

「やつらが逃げ出したか」

「はい」

「こつもやすやすと逃げられるとはな……」

—— 赤いじゅうたんが敷かれた、こざつぱりした部屋。

豪華な椅子に座った黒マントの男と、銀髪の男。

マントの男は、不都合を楽しむように笑った。

「ふふふ…… けつこうなことだ。いや、いい機会ではないか。モルモットが箱庭に逃げ出したくらいで、実験に支障は出ない。予定を少し早め、“試作品”の相手をさせる」

「承知しました」

銀髪男は、確認するようにマントの男に尋ねる。

「すべて任せてもらえますね？」

それに対し、マントの男はうなずくと、コンピューターの画面を見つめた。

画面は、複数の監視カメラの映像を映している。

その中の一つのカメラに、大きな“鎧”が映された。

「——使うの？『Re^{レイ}y プロト』を？」

どこから現れたのか、部屋の隅に年の頃、二十歳ほどの女が立っていた。長いすみれ色の髪を後ろで団子状に結び、丈の長い青色の服をまとっている。

「居たのか、“セレーネ”」

無表情の女の顔。それが整った顔立ちをより強調させる。

「まだ実験段階でしょ？」

「ふん。実際に使ってみなくては、完成はしない」

「それで、失敗に終わる。なんてことは予想してる？」

「……お前も、“グラソン”と同じ事を言う」

その言葉に、女——セレーネはそれまで無表情だった顔を初めて歪めた。

「一緒にしないで」

怒ったように言っていると、つかつかと部屋から出て行った。

マントの男は、その様子に気兼ねすることなく、再びコンピューターの画面に目を戻した。

「ショーの始まりだ」

26：風まかせ

マハ工達が牢を脱したところ、エンドーは町長の家にもどり、依頼の達成を報告していた。

「そうかそうか、やってくれたか。モンスターの数が激減してきていると、警備員から報告が入ったわい」

「ええ、しかしなぜ、今まで発生源がわからなかったのでしょうか？」

エンドーは少々皮肉を込めて訊いた。

「ん、まあ—— ふ、ふおっふおっふお……」

命を張り、極限の緊張状態から解放されたエンドーは、立腹している。

土地勘のある町の男何人かが探せば、あの装置の場所くらい簡単に見つけることができたはずだ。なのにそうしなかったということは、ただ恐ろしかったからだ。

「そう怒りなさんな。モンスターが現れるなんぞ、この辺では今までになかったことじゃ。恐れをなすのは当然じゃろって」

「ベツニ怒ッテナイデスヨ」

その様子を見て、町長は溜めてあったチラシやビラなどの紙の束から一枚抜き取り、裏面に筆で何かを書き始めた。

「ま、あとはこちらに任せておくれ。おぬしの功績に、町の者たちも立ち上がるじやろう。残ったモンスターの処理は、皆に任せておけばよい。——ほれ」

町長がエンドーに、チラシを渡した。

その裏面に、マーキンに宛てた文章と、町長のサインが。

「約束じゃからの。それを持って、マーキンのところへ行くとよいぞい」

「……それはいいのですが、そんな大事な許可書をチラ——」

「大切なのは、『心』じゃ！」

「……ラブレターじゃないんですから……」

エンドーは許可書を丁寧にポケットにしまい、立ち上がった。

「もう行くのかの？」

「ええ、急ぎの用ですの」

と言いつつ、早くカビ臭い家から逃れたいというのが本音だ。たしかに急ぎの用でもあるが、エンドー的には疲れた体を癒しつつ、のんびりと進みたいのだった。

「あー、それならば、そのドアからは出んほうがええぞ」

「はい？」

が、すでにエンドーはドアを開けていた。

——ざわっ！

途端に、騒がしさがあふれた。

町長家の玄関前には、町民の半分はいるのではないかというほど、人が群がっていた。

呆氣にとられるエンドーに、前に立っていた男が言う。

「オレ達は、モンスター騒動で町の外に出ることができなかった。

キミのおかげで町は救われたよ」

「……いえ、そんな救ったとか——」

いつの間に町中に知れ渡ったのか、わざわざ大人数で礼をしに来たようだ。

「オレはただ、ついでに——というか、強制的に——」

そんなエンドーに有無を言わせないかのように、人が押し寄せた。

「これ、持って行ってくれ！　うちの店のまんじゅうだ！」

「焼きたてのパンはいかがかな？」

「うちのだんごも持って行ってちょうだい！」

「お花あげる」

「ニボシ！ ニボシ！」

すっかり英雄となったエンドーだが、それに甘えている時間は無いということにはわかっていた。

無理矢理持たされた、まんじゅうやパンやだんごを両手に抱え、マーキンの家へ向かった。

しばらく、エンドーの後ろを何人かの人がついてきていたが、マーキンの家が近くなると、誰もいなくなっていた。

「（どれだけ嫌われてるんだ？ あの人は……）」

エンドーは荷物を置いて、マーキンの家のドアをノックし、開けた。

——マーキンは相変わらず、机で機械をいじっていた。

そして、入ってきたエンドーを見ると、

「だれじゃ、おぬしは？ ここは部外者立ち入り禁止じゃ」

「えええ！？ ちょっと——！！ オレですよ、オレ！！ 遠藤京助！！」

「エンドロスキン？ 痔の薬か何かかの？」

「エンドーキョウスケだ——っ！！！！ せめて風邪薬とかにしろ！！」

そこまで怒ったエンドーは、マーキンがぼけたふりをし、話の崩壊を狙っていることに気付いた。

「とぼけても無駄ですよ。約束どおり、町長に許可をもらってきましてから！」

そう言っ、チラシの許可書を、机に叩きつける。

マーキンは、明らかに迷惑そうな顔でエンドーを一瞥すると、しぶしぶ許可書に目を向けた。

——約束どおり、町長から許可をもらった。これでマーキンも断る理由はないはずだ。

だが、マーキンはそれまでにない鋭い目つきで、許可書を見つめると、突然、

「なんじゃと!? そんな馬鹿な!」

怒鳴りながら、怒りと驚愕の表情で立ち上がった。

まさか本当に許可をもらってくるとは、予想だにしていなかったのか、または、許可を出した町長に対しての怒りなのか、許可書を破れんばかりに握り締めるマーキンの手は、わなわなと震えていた。「ま、そういうことです、マーキンさん。ここはあきらめて――」

「特売セール!? なんと! 全品激安祭りとな!」

「……あれ?」

「安い! 安すぎるぞ!! ……む? よく見ると去年の日付じゃ」

「……マーキンさん、逆。裏面を見てください」

はてな? という顔をし、マーキンはチラシの広告面を裏返した。

「(わざわざ疲れる人だ……)」

「……………」

裏面の町長のメッセージを黙読し、マーキンは一瞬、顔をしかめた。が、すぐに承知したように鼻を鳴らした。

「ついてきなさい」

机の上を作業中のまま、マーキンは白衣を着替もせず、エンドーを外へ連れ出した。

「どこへ行くんですか?」

「わしの研究所じゃ」

マーキンがまんじゅうを頬張りながら喋る。

いつの間にか、エンドーがもらった品々は、すべて私物化されていた。

「研究所まであるんですか」

「小さなものじゃがな」

途中、何人かの住人に声をかけられたが、誰もが「お、あんな――」

——」と言ったところで、口をつぐむ。マーキンがとなりに居るせいだろう。

だが、マーキンは住人達の態度に慣れているのか、気付いていないのか、なにくわぬ顔。

——町の端に、段状につくられた墓地があり、その階段を上っていく。小山の頂上に研究所があるのだ。

いくつも並ぶ墓石の一つ一つを、エンドーは半ば他人事とは思えない気持ちで眺め歩く。

「（こいつらの仲間にはなりたくないものだ）」

無言のまま階段を上りきった二人の目の前に、二階建てくらいの高さの白壁の建物が現れた。

「小さいじやろう。まあ、これから大きくするさ」

わっはっは！と笑うマーキン横で、エンドーは貧乏町長のことを思い出していた。

あのボロボロの家に住む町長の援助金もあって、この研究所は建てられたのだろうか、と。そう思えば、更にあわれに思えてきた。

だが今は、あわれみの感情よりも、緊張感のほうがかはるかに勝っている。

戦いの前のドロドロとした気持ちの悪い緊張感が、胸の中に流れ込んでくるのを、エンドーは感じていた。

——大丈夫。これまでうまく生き延びてきたんだ。

今はその自信だけが、緊張をねじ伏せる唯一の武器だった。

「——ん？」

と、不意に、エンドーは背後に冷たい風を感じた。

「どうした、早く来いな」

いつの間にか、マーキンは研究所の入り口ドアの前でカギを開けていた。

後ろを振り返りきよろきよろするエンドーに、手招きをしている。

「おかしいな……」

すぐ後ろに何かの気配を感じたのだが、気のせいだろうと思い、エンドーは研究所の中へと入っていくマーキンを追った。

ドアが閉まると、真っ暗な研究所内。

マーキンが、奥の壁のハンドルを回すと、壁の一部が持ち上がり、光が差し込んだ。

真っ黒な影しかわからなかった、さまざまな装置や、骨組み段階の船のような乗り物がいくつか姿を現した。研究所というよりは、組み立て工場といった感じた。

完全に壁が開くと、そこから裏庭らしき広い空間が窺える。

「裏庭か」

エンドーは芝生の庭へ出ると、空を仰ぎ見た。

空はほぼ晴天。広い範囲で、雨が降る気配は全くない。

そこへ、マーキンが巨大な袋を引きずってきた。一目でそれが『気球』だと判断できる。

続いて、ゴンドラと、バーナーも運ばれてきた。

「こいつを操るのはずいぶんコツが必要じゃぞ」

そう言いながら、着々と準備を進めるマーキン。

気球なんていうものに、エンドーは乗ったことがない。それどころか、触ったことも、直接見るのも初めてだ。だが、理科の授業でそのしくみなどは理解している。

エンドーも準備を手伝いながら、気球の操作説明を簡単に聞く。

「——気球には推進力がない。じゃから、風の力のみで移動しなけ

ればならん」

高度を調整しながら、進む方向に適した風を探すのだ。

—— ほどなくし、庭が覆い隠されるほどに、白いバルーンは大きく膨らんだ。

その立派な姿を、マーキンは惚れ惚れと見つめる。本気で、真面目に空に憧れているのだと、その純粋な子供のような瞳が語っている。

「—— マーキンさん。ありがとうございます」

ゴンドラに乗り込み、エンドーははじめて心から、素直にお礼を言えた。

「ふん。礼なら帰って来てからせい」

腰に手を当て、鼻で笑うマーキン。

「…… ええ。それじゃ」

対してエンドーは曖昧に微笑む。

おそらく、もうここへは帰ってこない。自分達はこの世界を滅ぼすために来たんだということを、エンドーは忘れていない。だからこの気球を返すことも、マーキンの研究が完成することも、ないだろう。

その虚しさを打ち消すように、エンドーはバーナーの噴出ヒモを思い切り引っ張った。

ポウツ！と勢いよく炎が上がり、気球はゆっくりと浮上する。

エンドーは無言で、小さくなっていくマーキンに手を振った。

マーキンは仏頂面で、浮上していく気球を見つめていた。

—— 気球は風に流され、見えなくなっていく。

白い気球は、まるで小さな雲。空の一部になったかのように——
その眺めに、ようやくマーキンは表情をほころばせた。

「やれやれ……。あの気球は、高くつくんじゃないか」

完全に気球が見えなくなっても、マーキンはその空を眺め続けていた。

「わしも、もつと熱意を持たねばな」

そして、無言で空に手を振った。

27：鋼の兵士

城の広場は、異様なほどの静けさに包まれていた。

マハエと宗萱は、大扉から広場へ出ると、中央あたりで立ち止まった。

「嵐の前の静けさ……、と言いますよね」

そっと、宗萱が刀を抜きながら、静かに言った。

マハエも、牢から持ってきた先の尖った鉄棒を両手で構える。

その静けさは、気持ちの悪いほどどんよりとし、大蛇のようにとぐるを巻いているようだ。

「何か……、来ますね」

二人は“嵐”の気配を感じ取っていた。

ガシャ…… ガシャ……

どこからか、重々しい金属の音が近づいてくる。

「なんだ？」

「……………」

宗萱は、黙ってその音に耳を澄まし、その位置を探ろうとする。近づいてくる音は、まるで生き物のように動き—— 歩行している——

「上です！」

宗萱が、城を見上げた。

城は、何段にも建物が積み重ねられたようにつくりだ。その段の一つ一つは、テラスのようになっている。見張りなどに使うのに便利なのだろう。

——ガシャンッ……！

その一段目のテラスに、それは現れた。

二メートルはある大きな鎧。黒光りする金属が太陽の光を吸収し、漆黒の怪物のように見せている。

——ズズーン!!!

重量のありそうな鎧は、それもものもしないかのように、テラスから飛び降り、地面を揺らした。

巨大な砲弾でも落ちたかのように、鎧の足元の土はくぼみ、土の塊を飛び散らせた。

「なんだありや……？」

パラパラと、土の塊が二人の足元まで転がってくる。

宗萱は、マハエを自分の後ろへやると、刀に魔力を注いだ。

鎧がゆつくりと立ち上がる。すると、それを覆い隠していた土ばかりが、風に吹き消されていく。

ガシャン！

鎧は勇ましく一歩踏み出すと、低い、こもった声を出した。

「徹底排除する」

鎧はおもむろに腕を持ち上げると、岩のような拳で地面を殴った。まるでそれを宣戦のおたけびとするかのように、地面には轟く鈍い音とともに深い円形のくぼみができた。

「中身はモンスター？」

「先ほどの番人といい、あの中身も人を改造したモンスターという可能性もあります」

宗萱は、どっちだっていい。と言いたげに、刀の先を鎧に向けた。敵を敵としてだけ見る。中身が人だろうと、敵は倒すのみなのだ。

地面にできたくぼみ。ゾウがじだんだを踏んでもこうはならない

だろう。つまり、一発でも食らえば、文字通り粉碎されてしまう。恐怖で唾を飲み込むマハエの喉の音が聞こえたのか、宗萱がここから離れるように言う。

マハエはためらうが、自分が足手まといになると気付き、従った。

宗萱から距離をとったマハエは、鎧の被害に遭わないであろう、ぎりぎり場所で待機する。

心配することでもないだろうが、マハエは緊張を解かない。万が一のときは加勢するしかない。

だが、彼はハルトキのように『動体視』を使えるわけでもなく、反射神経に自信があるわけでもない。戦いに加わったところで、命を落とすのがオチかもしれない。しかも、武器が鉄棒一本だけというのも、なんとも不安だった。

一步一步を踏みしめながら歩み寄る鎧。宗萱は細い目でその動きを観察する。

一段目のテラスから飛び降りたときの地面の陥没具合。重さは軽く三百キロは超えているだろう。鎧自体、相当な重量のはずだ。そんな鎧を、普通の人の力で扱えるわけではない。

どちらにせよ、素早い動きはできないはずだ。

宗萱は、牢の鉄棒を切断するときよりも、多めに魔力を刀に注いだ。

彼自身、破壊力のある相手とは、できるだけ戦いたくはない。

——一撃で決める！

宗萱の体が、蜃気楼のように揺らいだ。

「斬灯——『灯柱』」

——シュパァン……

宗萱の体はその場所から消え、次の瞬間には鎧の背後へ。そして、牢の番人のときと同じく、縦に伸びた光の柱が、鎧の中央を切り裂いていた——

「!？」

宗萱は、違和感を感じ、すぐさま刀を縦に構えた。

——ガギン！

鎧の拳が、魔力にコーティングされた刀ごと、宗萱を吹っ飛ばす。「うぐっ……!」

宗萱は、城の外壁まで飛ばされ、それに跳ね返るようになって止まった。

「宗萱……!」

思わず叫ぶマハエに、鎧の頭がぐりと向いた。どうやらターゲットを変更したようだ。

「……残念ながら……、わたしはまだ動けますよ……」立ち上がった宗萱は、再び刀に魔力を込める。

「少々……油断しましたね。予想以上に硬度があるようです」鉄の棒を簡単に切断した宗萱の刀——魔力。その威力でも、鎧には傷一つつかなかった。

「たいしたものですよ。しかし次は——」

両手で握った刀の切っ先を鎧に向け、それを腰のところで構える。鎧は再び宗萱へ向かう。

ある程度、鎧との距離が縮まったところで、また宗萱の体が揺らいだ。

「斬灯——
『灯矢点穴』とうしてんけつ」

——キン……

まるで光の矢のように、白い光が鎧へ向かって伸びた。それが鎧に直撃し、激しい閃光を放つ。

今度は、宗萱の姿は敵の背後ではなく、懐へ。腕を伸ばし、刀を鎧の中央に突き立てている。

——だが、刀の刃先、魔力が、鎧を貫くことはなかった。

「……………」

宗萱の頬を、汗が伝う。

魔力を一点に集中させ、その破壊力を一点に向かって放った宗萱の刀。だが、その鎧の硬度は、彼の予想をはるかに超えていた。

ほんの深さ一ミリ程度。鎧に小さな傷がついた程度だった。

「危ない！」

マハエの声に宗萱は反応し、刀を頭上に構えた。

鎧の拳の、数トンの重みが、宗萱の腕にのしかかる。

刀と腕は、魔力でコーティングされ、折れることはないが、その重量はゾウがアリを踏み潰すが如く。

「くっ……………」

地面に押し倒される宗萱。すべての魔力を防御へまわし、全力で目の前の死を防ぐが、このままで力尽きるのは、自分のほうが先だと、わかっている。

鎧の頭部の隙間からチラリと覗く、笑っているような目。

宗萱は悔しさを覚えた。

だんだんと、拳の圧力を防ぐ刀が下がっていく。

「けつきよく…… 約束…… 守れませんね……」

まだあきらめるのは早いとわかっている。だが、抵抗する手段を
思案する余裕も、時間も、宗萱には残っていない。

「——あきらめるな！」

どこかで誰かが叫ぶのを、宗萱は聞き取った。

「！」

——ガオン！

何かが、宗萱を押しつぶそうとする鎧の腕に当たった。

鎧の気が逸れ、力が弱まった瞬間、宗萱は刀で拳を押し返し、窮
地を脱した。

——ガオン！ ガオン！

二発、空気の塊のようなものが鎧に当たり、弾ける。

「……真栄さん？」

攻撃の発射源—— マハエが空中を蹴ると、衝撃のつぶてが弾丸
のように鎧へ飛ぶ。

「おおあああ——！！」

マハエは全力疾走し、跳び上がり、鎧の頭部を踏むと同時に、凝
縮した魔力を叩き込む。

グラリ……。

鎧が横へ傾く。

着地したマハエは流れを崩さず、すぐに魔力を溜めなおすと、続
けて鎧の側頭部を蹴り飛ばした。

その衝撃と自らの重量で、鎧は地面に倒れた。

「はぁ…… はぁ……」

初めての技、魔力の連続攻撃で、早くも疲労するマハエ。そんなマハエを、宗萱は愕然とした表情で見つめた。

「真栄さん…… その力は――」

「ぐ…… むむむ……」

言い終わらないうちに、鎧が再び起き上がってきた。

28：起死回生

あれだけの攻撃を受けても、鎧のダメージはほとんど皆無のようだった。

何事もなかったかのように立ち上がり、挑発するように両の拳をぶつけ合った。

「話は後ですね……。真栄さん、あなたを立派な戦力として見てもいいですね？」

「……ええ」

できれば戦いを宗萱に任せておきたかったマハエだが、敵の力は想像以上。二人が協力しなければ倒せない。もつとも、それで倒せるという保証もないが。

敵のほうを向く宗萱だが、その顔にはまだマハエの使った力に対し、驚きの表情が残る。

「……どうすればあの鎧を破壊できるのか……。まず、わたしの力を一点に集中した一撃で、ダメージはあの程度。それに、鉄の鎧と刀というのは、なんとも相性が悪いです。ですから、鎧の敵には打撃——というよりも強い衝撃が効果的です。内側の本体にダメージを与えるのです」

「……オレが主要として攻撃に参加しろと？」

「先ほどのあなたの攻撃は、鎧はともかく、中身の本体には少なからずダメージはあったはずですよ」

「でも、オレの力では、あと五発放つのが限界です」

「それまでに勝負をつけないければなりませんね……」

そうしているうちに、鎧はすぐにでも攻撃をしかけられる体勢に入っていた。

「とにかく、的確に急所を狙って、確実に攻撃を当てていかなければならない？」

「そういうことで、お願いします」

「……やってみます」

——自信はないがやるしかない。

できれば遠距離攻撃に徹したいマハエだが、先ほどの『衝撃弾』は、やたらと魔力を削るわりに攻撃力は低い。本来マハエの技は、対接近戦用だ。自ずと、不向きな敵は増えてくる。この“鎧”もそれに入るのだ。

だが、宗萱もじつとはしていない。刀の攻撃が通用しないとはいえ、マハエの攻撃のチャンスをつくり出すはずだ。

二人は頷きあうと、二方へ分かれた。

——急所を狙わなければならない。

「（でも急所ってどこだ？ 頭？）」

マハエは鎧の頭に『衝撃』を放ったとき、それなりの手ごたえがあったことを思い出す。

おそらく急所は関節部分だろう。そう確信し、機会をうかがった。鎧は、すでにマハエに狙いを定めている。背後の宗萱を気にしていない様子から、やはりマハエの攻撃は効いていたのだ。

右手の鉄棒を地面に突き刺し、マハエはじりじりと距離を寄せてくる鎧に、じつと警戒する。

「少しは、こちらを見てはどうですか？」

宗萱が鎧の頭上に跳び上がり、勢いをつけて刃先を突き立てた。

——ビシッ……

刀が刺さった、肩の分厚い装甲と首の付け根の間——その隙間の鉄板の薄い部分に、小さなヒビが入った。

それに危険を感じたのか、鎧はすぐに肩に乗っかっている宗萱の

腕を掴み、振り回し、背後へ投げ飛ばした。

そのときがチャンス。

マハエは一気に鎧との距離をつめ、まず足のふくらはぎの部分に衝撃を放ち、案の定、敵が膝をついたところへ、頭部への強烈な蹴り。ある程度の手ごたえを確認し、もう一度魔力を込めた蹴り。

宗萱の刃の一撃で入ったヒビが、その衝撃で少しずつ広がっていく。

「（残りは二発！）」

確かな勝機を見出し、マハエは気合の一撃を放つ。

「——！！」

だが、その一撃は寸前で防がれた。

止めたのは鎧の掌。マハエの足をがっしりと掴み、引き寄せた。

そしてもう片方の掌で、マハエの首を掴み上げる。

そのまま鎧が立ち上がると、身長差でマハエの首は絞まっていく。

「うぐ……ぐが……」

勝てると思った瞬間の、突然の裏切り。一瞬だけ、油断してしまったのだ。そのほんの一瞬の油断が、状況を大きく裏返してしまっ

た。だが、今更悔いてもどうにもならない。

必死に両手を使って絞め付ける手から逃れようとしても、身をよじっても、その大きな手は万力のようにしつかりと、がっちりとしてじりじりと、マハエの意識を彼方へと葬っていく。

——くっそおっ……！

足の魔力を鎧にぶつけるが、まったくの苦し紛れでしかなかった。
「真栄さん！ 意識をしつかり！」

宗萱が助けようと刀を振るが、鎧には通じず、逆に拳の攻撃を受

けてなぎ倒された。

自分はもう助からないという絶望。マハエは死を悟った。

「ぐ……………」

マハエの腕はだらりと力なく垂れ、抵抗すらなくなった。その姿は刈り取られた雑草のように、風が吹けば飛んでいきそうなほどに力は見られない。

「真栄さん！ 真栄さん！！」

宗萱は痛む体を起こし、残り少ない魔力のすべてを、刀に込めた。「（わたしの最後の力……。これを使っても真栄さんを助け出せるかどうか…………）」

宗萱は細い目を見開き、燃える緑の瞳で敵を見定めた。

大量の魔力が注がれた刀は、淡い青の光をまとい、膨らんでいく。

「（腕一本くらい、切り落とす力を…………！）」

大勢の仲間を失った宗萱にとって、出会って間もない少年であっても、命をかけて守りたい。戦うためのプログラムとしてつくられる際、プログラミングなどされなかったその感情は、この世界に入って初めて生まれたものだった。

——助けてみせる！

握りしめた刀に、技を繰り出す準備は完了した。

——まだ間に合う。手遅れになる前に——

——バシユ…………

「…………え…………？」

突然、刀に込められた宗萱の魔力が吹き飛んだ。それは宗萱の意図ではない。他の巨大な力によって、ろうそくの

炎のように吹き消されたのだ。

「……………なにが……………？」

魔力を失った刀身は、ただ白く輝いているだけ。何がこの巨大な力を放っているのか、宗萱ははっとマハエに視線を移した。

——まさに、鎧がマハエにトドメをさそうとしたとき、首をへし折る力を入れた手に衝撃が起こった。

まるで爆弾でも握っていたかのように、手の中で爆発したものに弾かれ、マハエを取り落とした。

「……………！！？」

膨大な魔力に包まれたマハエの体は、着地すると同時に足元にクレーターをつくる。

「真栄さん？」

力を使い切り、脱力した宗萱の目の前で、すでにすべての力を失ったはずのマハエが立ち上がる。さっきまでと同じように、腕をだらりと下げ、うつむいたまま。

もう一度呼びかける宗萱の声は、マハエには聞こえず、代わりに狂ったような笑い声が広場にこだました。

「は…………… はははははははははははは……………！！！！」

「……………」

「ははははは……………」

笑い終わり、くわっ！と顔を上げたマハエの表情には、異常なまでの生気があふれていた。

「…………… おい、“粘土”野郎」

喜びに満ちたマハエの声。

「死に損ないが……………」

“粘土”とバカにされたことに怒った鎧——鎧の中の人物は、「今度こそひねり潰してやる」と、今のマハエの様子を警戒することなく、手を伸ばす。

——バチィッ！！

だが、マハエを包む力にその手は弾かれ、驚いた拍子に数歩後ずさる。

マハエが一步一步、鎧へ歩み寄るたびに、その力が一点に集中する。

さすがに鎧も恐怖を抱いたのか、恐れるように更に後ずさる。

すべての魔力がマハエの右足に凝縮された。

足を踏み止めた鎧は、攻撃に備えて防御の体勢をつくる。

その姿にはまだ、自分を包み、完璧に守るその“金属”に自信が見られるが——

——！！！！

音さえも打ち消す凄まじい衝撃の塊が、鎧の胸部にぶち当たった。空間が波打ち、地面を削る。

マハエの言ったとおり、まるで粘土の人形のように、鎧は軽々と吹っ飛び、石の壁に突っ込んだ。

——攻撃を放つと同時に反対側へ吹っ飛んだマハエの体は、宗萱によって受け止められていた。

ようやく城の壁に反響しながら、グァングァン……という余韻が響き、空を大量の小鳥が飛び去っていく。

嵐の後の、静けさ——

「……真栄さん」

宗萱は自分の上でぐったりとなっているマハエの体を起こし、呼びかける。

頬を軽く数回叩けば、マハエはうめきながら目を開けた。そして

宗萱と目が合うと、力のない笑顔を見せた。

「大丈夫ですか？」

「……爽快な気分です」

それを見て、宗萱は安心する。

「よかったです……」

二人はしばらく、そのまま力の回復を待った。

石の壁を深く破壊し、めり込んだまま鎧は完全に停止していた。

「何だったんだろ？ こいつ」

マハエも宗萱もある程度、傷は癒え、魔力も回復し、万全でなくとも十分に行動できる状態にもどった。

特大攻撃を食らった鎧の胸部は、砕けはしていないものの、大きく陥没し、大きなヒビができていた。

「強敵でした……。攻撃が通用しない敵……。これ以上に厄介な相手はいませんね」

宗萱は壊れかけの頭の部分の装甲を外した。

「重たいですね……。よくこんなものを——」

覗き込むようにして、中に入っているスキンヘッドの男を見る。

「……モンスターではない……。？——人？」

首を傾げる宗萱の横で、マハエは別のところに目をやっていた。

「宗萱さん、これ」

マハエが示すところ——鎧の腕の部分に、それまでわからなかった文字が彫られてあった。

「『Rey Proto』？」

29：力の契約者

ぱちぱちと松明が灯る薄暗い城の廊下を、マハエと宗萱は進んでいく。

「……あなたの、その力のことなのですが」

「『魔力』のことですか？」

宗萱はうなずく。

「宗萱さんも、同じようなものを使えるようですね」

「ええ、しかしわたしのものと、あなたのものでは—— 何と言うか質が違う気がするんです」

宗萱は話し始める。自分の力について——

「この世界では—— 我々『S A A P』の力はほとんど無意味なものでした」

S A A Pがつくられる際、組み込まれた戦闘能力のすべては、敵を前にして何の役にも立たなかった。手も足も出なかったという。武器は使えず、無力な“人”と同じ。

「しかし、牢で“目覚める前”のことは、よく覚えています」

「目覚める前？」

「妙な—— 夢を見ました。……いえ、夢というよりは、もっと現実感のある何か。—— わたしは『灰白の世界』で、契約を交わしました」

マハエは驚いて宗萱を見た。

「『この世界を救ってほしい』……そう言われました」

「宗萱…… え……？」

マハエは思い出した。自分達が魔力を手に入れたときのことを。

『灰白の世界』で言われた言葉。『この世界を救ってくださいか

？』と。

「救う。と、答えたんですね？」

「ええ」

「……オレも——オレ達も同じですよ。女の声で——」

「あなたがたも……？　ということは、この力は共通したものの……、ということですか」

「そういうことですよね……」

しばらく二人は無言で考えた。

「……契約者はオレ達だけではなかった……」

「この力で世界を救え……。何から救うと言うのでしょうか？」

力をくれた何者か——。その意図もわからない現状では、ただ、今の自分達の仕事をするしかない。

この世界がどのような経緯で造られたものかはわからない。わかっていることは、この世界を守るうとする者がいるということ。

もうそれ以上は考えようがない。

二人は今の状況だけに集中することにした。

この城には、らしくないほどに、人の気配がない。

見張りも誰もいないおかげで、楽々と進むことができるが、それが逆に気持ち悪かった。

「このドアは鍵がかかってますね」

それでも一切、警戒を解くことなく、宗萱は慎重に次々とドアを調べる。

「……ここも閉まってます」

当然、ぶち破る、なんて大雑把な危険は冒さない。

真っ直ぐな廊下に、いくつも部屋があるようで、そのドアの一つ一つを調べる。

部屋数は多いが、人数は少ない。何のためにこれほどの部屋が存在するのか。

——調べていくうち、一つだけ特殊な装飾がされているドアが見
つかった。

ガチャリ、と音をたて、そのドアは開いた。鍵はかかっていなか
った。

宗萱はマハエを一瞥し、二人はその部屋へ入った。

しかしそこには何もなく、有り余った部屋のひとつといった感じだ。
「何もない。次行きましょう」

そう言い、部屋を出て行こうとするマハエを、宗萱が止める。

「おかしいと思いませんか？ この部屋だけ鍵がかかっていません
でした。ということは、この部屋は最近使われた可能性があるとい
うことです」

部屋の壁を調べ始める宗萱。

壁の一部に細い溝がある。

「たしかにその可能性もありますけど、気のせいじゃ——」

「……そうかもしれませんね」

宗萱が他と色の違う部分の壁を押す。

ガコン…… とその部分がへこみ、部屋全体に鈍い機械音が響い
た。

壁がスライドし、新たな空間が現れる。そこには、三人は乗れる
ほどのエレベーターが。

「……おお、さすが」

感心するマハエをよそに、宗萱はいつでも刀を抜けるように腕を
構え、エレベーターに乗る。マハエも鉄棒を握りしめ、続いた。

「わざわざエレベーターを隠していた、ということは、この上はお
そらく城の中枢、または重要な部分」

「……大丈夫。相手が敵であろうとなかろうと」

一度ハルトキやエンドーと合流してからのほうがよかったのでは
ないか。そう思ったマハエだが、もう遅かった。二階分ほどエレベ

―ターは上昇し、停止した。

そこはまたもや何もない部屋の中。ただ、先ほどの部屋と違うのは、真つ直ぐ前に両開きの鉄扉があり、そこへ向かって赤く長いじゅうたんが敷かれていること。

じゅうたんの上に一步踏み出す二人。

「あの扉……。やっぱりここが中枢？」

「……………」

「あらあら。子ネズミがこんなところまで入り込んでいたのね」
突然の背後からの声に、宗萱はすばやく刀を抜き、身体を回転させる。

刀の上を転がるように、何かがくるりと身軽な動きで受け流した。
「なかなか華麗な動きね。黒服さん」

宗萱の頭上を飛び越え、扉の前に着地した人物は、青い服をまとった女性。

「……………あなたこそ。まるで蝶ですね」

「それはどうも」

女は無表情でお辞儀をすると、名を名乗った。

「私は『セレーネ』。悪いけど、ここを通すわけにはいかない」

セレーネの腕が動いた瞬間、その姿はマハエの真下へ。

「い！？」

対処ができないマハエのあごへ、セレーネの鋭い突きが放たれた。

――キーン！

突き出された指先は、寸前のところで宗萱の刀に阻止された。

「……………」

セレーネの攻撃は受けなかったものの、同じく刀の鋭い突きがあるご下に繰り出され、マハエは完全に固まった。

「黒服さん。ずいぶんと軟弱なお供をお連れのようなね」
「すぐさま攻撃に転じた宗萱の刀を、セレーネは柔軟な動きでかわす。」

まるで素早いタコのような動きだが、それはまだ、“人の業”を超えてはいない。だが、魔力を備えた宗萱の動きでも、相手に見切られれば強敵となりかねない。

「どうやら、簡単に斬れる相手ではなさそうですね……。真栄さ――」

「……………」

マハエの周りを、どす黒い空気が支配していた。

「あ……。宗萱さん……。がんばってください……………」

「……………」

“軟弱”という言葉は、マハエの精神に大きなダメージを与えていた。

「真栄さん。あなたは軟弱などではありませんよ。…………たぶん」

「…………いいんだ。だって宗萱さん、強いもん」

「精神も軟弱みたいね」

――プツン。

無表情であざ笑うセレーネに、マハエの頭の中で何かが切れた。

「ちっ、これ以上、女に見下されるわけにはいかないよな」

マハエは鉄棒を頭の上で振り回し、ドン！と床を突いた。

「宗萱さん！」

「はい。まずはわたしが相手の隙をつくり――」

「オレの分まで思う存分切り刻んでやってください！」

「そう言つと、床にあぐらをかいて座り込んだ。」

「……………」

「救いようがないわね」

「…………仕方ないですよ。ところで――」

鞘を腰に差し、宗萱は両手で刀を構えた。

「わたしは敵は排除しますよ。相手が女だからといっても」

「あらあら、紳士ではなかったのね」

セレーネは微かに薄い笑みを浮べた。

そして、一瞬で宗萱の懐へとび込むと、肘鉄を叩き込む。

宗萱はその動きに同調するように攻撃を避け、相手の背後へまわり、喉元に刀をまわすと、そこで刃を止めた。魔力を使っていなくても身体能力はずば抜けている。

「……容赦はしないんじゃないの？」

「ええ。しかし、あなたには少し訊きたいことがあるので。この城のどこを」

「力ずくで訊いてみれば？」

「接近戦の刀に対し、素手でそれに挑もうなんて安易過ぎではありませんか？」

刀の刃が、セレーネの喉元に押し付けられる。

「……素手だと思った？」

「え……？」

スツと、セレーネの手が動く。

「くっ……！」

宗萱の手から刀が落ちた。

「人は相手よりも優位に立ったときに、隙ができる」

手の中から現れた細い棒のようなもので、宗萱の腕の関節、続いて足の関節部分を突く。

宗萱は力が抜けたように膝をついた。

「……暗器ですか」

「暗器といっても、わたしは暗器使いではないわ。あいにく、人を殺すのは趣味じゃないの」

宗萱はツボを突かれ、手首も腕も足も痺れている。無抵抗の宗萱を、セレーネは蹴り倒す。

「……人をいたぶるのは趣味なんですか？」

「……まあまあ、ね」

無表情だった顔に、歪んだ喜びの表情が表れた。

痺れもいくらか消えた宗萱だが、抵抗できる状況ではない。武器もなく、今は彼女のほうが、明らかに優位に立っている。

「……人は優位に立つと隙ができるんですよね？」

「なに？」

後ろを振り向こうとしたセレーネは、背中に飛び込んできた圧力で、仰け反りながら宗萱の前から消えた。

床を転がり、受身をとったセレーネは、振り向いてその人物をにらんだ。

「手加減してやったぞ。なめんな」

『衝撃弾』を放ったマハエだった。

「油断しましたね？」

完全に動けるようになった宗萱が、刀を拾い上げた。

「卑怯な……！」

だが、その言葉は宗萱に軽く流される。

「もう、隙は見せませんよ」

穏やかな声で言うと、刀を彼女に向ける。

追いつめられたセレーネだが、その顔にはまだ余裕が残っていた。

「退け、セレーネ」

男の声がした。

すると、天井から茶色い肌の男が、宗萱、マハエとセレーネの間に降り立った。

30：セルヴォの王

「……あぁー！」

セレーネの前に降り立った男。その男を見て、マハエは小さく叫んだ。

茶色い肌、銀色の長髪、筋肉質な体。ぴっちりとした紫色の袖なしのシャツに、迷彩柄のズボンという服装。

身なりは別として、その銀色の長髪をマハエは覚えていた。

港町の展望台で、彼を罠にかけた男だ。

「下がってなさい、『グラソン』！ 手出しは無用よ」

「いやいや、これはオレの意思ではない。あの方の命令だ。退け」

そしてグラソンと呼ばれた男は、マハエと宗萱のほうを向くと、口元を吊り上げた。

「よく『Rey』を破壊したな。想像以上の結果だ」

「何者ですか？」

宗萱は刀を構え、すぐに防御にも攻撃にも移れる体勢を崩さない。セレーネが口を開く。

「……命令ですって？ それは本当に——」

「いいから、退け」

グラソンがセレーネをにらむ。

それは、宗萱と同じく、時には女にも容赦はしないという気構えの表れだ。

「……わかったわ。とりあえず退いてあげる」

セレーネの表情に恐れはなく、怒りを込めたような無表情の顔のまま、後ろの扉から出て行った。

「——さて」

冷めた眼を、宗萱とマハエに向ける。

「そう構えるな。今は戦う気はない」

「今は？——それなら、後に戦う前に今から排除します」

一気にグラソンに接近し、宗萱は刀を振り下ろした。

「焦るな」

ガチイ！という音。

グラソンは宗萱の刀を、右腕一本で受け止めていた。

「……！？あなたは……！」

グラソンは左手で刀を掴むと、ねじりながら下げ、右の“掌底”で宗萱の胸を強打した。

「——っ！！」

後ろへ仰け反り、倒れる宗萱。

グラソンはギリりと眼を青く光らせ、無言のまま、百八十度後ろを向き、セレーネと同じドアから姿を消した。

扉がゆっくり閉じられ、男の足音が完全に聞こえなくなってから、マハエは呆気にとられたままの宗萱を助け起こした。

「大丈夫ですか？」

「……ええ。しかしあの男……」

宗萱はしばらく扉を見つめてから、マハエに訊いた。

「あの女性——セレーネでしたっけ。あなたが、あのとき加勢したのは作戦ですか？」

『衝撃弾』でセレーネを吹っ飛ばしたことだ。

「え……！？ええ、もちろん作戦です！完全に戦意のないふりをし、オレを彼女の意識から消し去り！確実な隙を狙っていた、というわけですよ！」

最後に大きく頷き、両手を腰に当てるマハエ。

「……まあ、そういうことにしておきます。とにかく助かりました」と、ところでどうしますか？後を追います？」

「扉は一つだけ。あのグラソンとかいう男も、後を追ってくると見越しているでしょうね」

大きく息を吐き、宗萱は扉へ向かった。
「行きますよ」

鉄扉から、二人は十メートルほどの真っ直ぐな廊下に出た。
この廊下にも、赤いじゅうたんが敷かれている。

松明の明かりも少なく薄暗い廊下で、突き当たりに二つある明かりが、やけに豪華な扉を照らしている。

「あの扉の向こうですか」

「グラソンってやつが言っていた、『あの方』って……、王のことかな？」

「……断言はできませんけどね……」

その扉は、後ろの鉄扉よりもひと回り大きく、全体的に赤い装飾が施されている。その向こうの部屋が特別なものであることは、容易に想像がつく。

扉の前で耳をすましても、防音されているのか、横の松明の音以外は何も聞こえない。

「入りますよ」

取っ手に手をかけ、マハエを見てから、宗萱はゆっくりと扉を押し開けた。

キィという、小さな音とともに扉が開く。

その部屋の中には、二人の男の影があった。

こざっぱりとした部屋。続いていたじゅうたんの先には、豪華な椅子が。

来客二人が部屋に入り、扉が閉まると、椅子に座っていた黒マントを着た男が立ち上がり、拍手した。

「ようこそ、我が城へ」

「……あなたが、セルヴォの王か？」

マントの男の近くにグラソンが立っているが、セレーネの姿はない。

「いかにも、そつだ」

「最初から、交渉する気はなかったということですね？　交渉をエサに、我々をここへおびき寄せた」

宗萱が言った。

「目的はなんですか？　S A A Pを手に入れること、というわけではないでしょうか？」

宗萱の質問に、マントの男は黙ると、少しして答えた。

「目的か……。そつだな、任務を全うすること、かな」

「任務だと？」

「キミらと同じさ。ふふふふ……」

マントの男が椅子の横にあるコンピューターを片手で操作する。最後の力チツという音で、何かの機械が作動した。

奥の天井の一部が降下し、マントの男の後ろにガラス張りの巨大な箱が現れた。

それを見たマハエが、「あつ！」と声をあげる。

ガラス越しに、箱の中に誰かが閉じ込められているのが見える。

「ヨツくん！？」

それはまさしく、ハルトキの姿だった。

「おー……　マハエ……　助けに来てくれたのかー」

ハルトキは閉じ込められているというのに、のん気に箱の中央であぐらをかいて座っている。その姿は、あまり心配できるものではない。

「……動物園の見せ物か」

「……怒るよ？」

ハルトキがひきつった笑顔で言う。

「あなたのお仲間ですか？」

宗萱がマハエに訊く。

「まあ、“あれ”もそうです」

頭をぽりぽりとかく。

マントの男が、椅子の後ろにあるスイッチを押した。

この階へ来たエレベーターのときと同じように、ガラスの檻の横の壁がスライドし、ドアが姿を現した。

「さて、キミ達にはもう少し間をおいてほしい。こちらにもいろいろと、準備が必要なのでな」

「準備？」

「グラソン、しばらくこいつらの相手を任せる」

その言葉に、グラソンはニヤリと笑う。

「かしこまりました」

「あ、さて——」

ドアへ逃げていくマントの男へ手を伸ばすマハエだが、足が動かなかった。

「——！？」

マハエの足はピッタリと地面にくっついていて。

「なんで……！？」

宗萱も同じように、両足を固められ身動きがとれない。

「——そうだ」

マハエは足に魔力を込め、衝撃波を放った。パリッとガラス片を踏むような音がし、自由に自由がもどる。

だがすでに、マントの男はドアの向こう。その前にグラソンが立ちただかった。

「何を企んでいるのですか？」

宗萱も自力で足の接着を解き、マハエの隣にならんだ。

疑問に答えず、どこか嬉しそうに笑うグラソン。

「……答える気はない、ということですか」

「オレを斬ろうってか？」

「斬りますよ」

白い刀が、淡い光をまとう。

「あなたには、本気で向かわなければ勝てないようです」

「やってみろ」

挑発を受けても、冷静さを欠かない宗萱。標的に向かって一直線

に移動する。

音の速さで迫る宗萱を、グラソンは的確に目で追う。

——キーン！

グラソンが腰から抜いた四本の棒。三十センチほどの長さの金属棒によつて、刀の攻撃は横へ逸らされた。右手に二本、左手に二本。再度、急所への攻撃をかわしながら、その四本の棒は一本の長い棍棒へと組み立てられた。

金属と金属が交わる音。

ぎりぎり刃の刀が金属棒に押し付けられる。

グラソンは金属棒を器用に扱い、斜め下からの攻撃を仕掛ける。それを宗萱は身体を回転させながら回避。その回転の勢いで繰り出された刀を、また金属棒が防御する。

「どうしました？ あなたの力はこの程度ではないはず……」

「……何のことだ？」

刀が金属棒にはねられると同時に、宗萱とグラソンは後ろへ飛びのく。

「あのとき、わたしの刀をあなたは腕で防ぎました。刀を素手で、ですよ。そして先ほど、我々の動きを止めたあれは……」

大振りなモーションとともに、宗萱の刀が振り下ろされる。回避はせず、グラソンは金属棒を横にして構えた。だがその一撃は確実に鉄をも切断するだろう。

——ガチィ

次の瞬間のその音は、金属同士がぶつかる音ではなかった。

「ちっ」

とグラソンが舌打ちをする。

魔力をまとった宗萱の刀は、金属棒の周りに発生した氷に食い込

んでいた。

「……やはり、
“氷”を操る力……」

31：救出と追跡

宗萱、グラソン両者の闘いを、マハエは巻き込まれないように離れて傍観していた。

二人の闘いは激しく、とても割って入ることのできるものではない。

宗萱の剣術と対等に渡り合うグラソン。両手で振り回す金属棒に、氷がまとわりつく。氷は自在に、トゲにも刃物にも変化する。砕かれても砕かれてもすぐに新たな形を形成し、上から下から左右から、宗萱めがけて棒は振られる。

——ガチィッ！

横からの攻撃を、刀が受け止める。

「ずいぶんと、頑丈な氷ですね……」

「お前の刀と同じだろ？」

再び激しい打ち合い。

どちらも致命的な攻撃は受けない。優雅に、舞うように刀を振る宗萱とは相反し、グラソンは力強い棒さばき。力押しならばグラソンが上だろう、しかし宗萱はそれを受け流すテクニックで差を補う。闘いはほぼ互角だ。

その闘いに見入っていたマハエだが、だんだんとガラスの檻から離れていく宗萱の行動に気付く。

それは、自分が敵を引きつけている間に、ハルトキを助けよ、ということだ。

マハエはすぐに走り出した。

足に魔力を溜め、ガラスを蹴り破る。

「そう簡単にはさせない」

——パリパリパリ

檻の前に、氷の壁が現れた。

グラソンがマハエに気付いたのだ。

「おおおお！！！」

だが、マハエはそのままジャンプし、氷の壁ごとガラスを破壊した。

ガシャァン！と氷とガラスが同時に崩れる。

「大丈夫か、ヨツくん？」

檻の中に飛び込み、気だるげに座っているハルトキに、デコピンする。

「……痛い。それがキミの再会のあいさつですか」

力の抜けた声を出す。

「それにさあ、中にボクがいるっていうのに、普通、ガラス蹴り破る？」

「文句の多いヤツだな」

なかなか立ち上がるうとしないハルトキを、マハエは強引に檻から引きずり出す。

それを見たグラソンは、闘いの手を止めた。

「……ちつ、不利か」

さすがに三対一の勝負では勝てないと思ったのだろう。斬りかかる宗萱の刀をかわし、マントの男が姿を消したドアへ移動する。

「逃がしません！」

逃走を阻止しようとする宗萱だが、グラソンを囲うように形成された氷の壁に攻撃を阻まれる。

「残念だが、あんたとの勝負はおあずけだ。じゃあな」

「……………」

ドアが開き、閉まる音に、宗萱はただ耳を傾ける。

グラソンがその場から去ると、刀が食い込んだ氷がガシャガシャ

と砕けた。

「宗萱さん！ オレ達はいいですから追ってください！」

ハルトキの肩に腕を回し叫ぶマハエ。だが宗萱は、無言で刀を鞘にもどした。

「いえ、彼も言ったでしょう。勝負はおあずけです」

「そんなこと言ってる場合ですか！」

「……いいんですよ、これで」

そう言う二人に歩み寄り、ハルトキに訊く。

「怪我はありませんか？」

それはマハエの乱暴な救出に対してではない。それ以前にハルトキの様子が普通ではなかったからだ。外傷は見当たらないが、支えられ立っている足には力が入っていない。

「……なんか、あのガラスの檻に入っていると、力が抜かれるような感覚になつて……」

「だから魔力を使わなかったのか」

「うん、いや、正直助かった。ありがとう」

素直にお礼を言い、宗萱を見る。

宗萱はマハエのときと同じように、帽子を取ってハルトキにお辞儀をする。

「わたしは、S A A P 002部隊の隊長。——だった者です。宗萱と呼んでください」

「S A A P……？」

「大丈夫だヨツくん。彼は敵じゃあない」

その言葉に、ほっとするハルトキ。そして自らも自己紹介をする。マハエは、宗萱と出会ってから起こったこと、話したことを簡単に彼に伝えた。

「……さっきの刀の力って、やっぱり魔力なのか」

あごに手をやり、考えるしぐさをするハルトキ。檻から出たおかげか、いつの間にか気だるさは消えていた。

「ところで、力が抜かれると言いましたね？」

「ええ、吸いとられる感じで」

宗萱は檻の中を調べ始めた。

「……たしかに、何かに力が吸いとられる感覚が――」

檻の天井を見た宗萱は、天井の中央部分に、小さな青い石を見つけた。

「これのせいですね……」

そう言うと、天井から石を取り外す。

「どうやら、魔力の“バッテリー”のようなものです。使い方次第で魔力を吸いとったり、放出したりできるみたいです」

「……ちよつと待って。なぜそんな都合のいい物が？ 魔力つていうのは、この世界では異質なもののなんじゃ？」

魔力は契約によって手に入れた力。自然に存在しているのか、誰かがつくり出したのかは定かではないが、その石の存在は、魔力の存在をたしかに肯定している。

「よくはわかりませんが、魔力とこの世界は、深いつながりがあるのかもしれない」

青い石を少し眺め、それをマハエに放る。

「持っていてください。どこかで役立つかもしれませんよ」

「……………」

受け取った石を手の平の上で転がす。

檻から取り外されたせいかわ、今は力を吸いとることはしない。かといって、力を放っている様子もない。

「たしかに、不思議なものを感じるけど……。まあ、いつか」

石を保管しようとしたマハエは、ポケットの中の異変に気付いた。何かが鳴っている。

「これは……………」

取り出したそれは、無線機。いつの間にかマハエのポケットに入

っていた物だ。

無線機が、小さな音を発している。

「……ヲ……ケテ……」

ノイズの合間に聞こえる音は、誰かの声。

「……キヲ……ツケテ…… カレハ……」

はつきりしない言葉が繰り返される。

「お前は誰だ？」

マハエは無線機に口を近づけて、声の主に話しかける。

「……オワツテイナイ……」

ザザー…… と、声はノイズに吞み込まれた。

ノイズを消そうと無線機を叩くマハエだが、しばらくしてそれも聞こえなくなり、あきらめて溜め息をついた。

「何のことかわかった？」

首を振るハルトキと宗萱。

「ボク達に警告を発していたようだけど……」

宗萱も頷く。そして大きく深呼吸をした。

「先へ進みましょう。あのマントの男、何か企んでいます」

「……そうっすね」

無線機から聞こえた言葉を気にしつつも、三人は黒マントとグラソンを追った。

とにかく三人とも、城の構造などはまったくわからない。分かれ道がいくつもあれば、迷うことは間違いない。

「案内人！」

マハエはもう一人仲間の存在を思い出し、呼び出す。

「はい。どうしましたか？」

久しぶりに聞くその声。

「お前な。居たんなら声を発せ。でないと友達に『あいつ暗いヤツだ』とか言われるぞ。そんな学生時代、後悔するだけだぞ」

「忙しかったもので」

「お前、この城の構造とか知らない？」

「進めばいいんです」

案内人はあつさりと答える。

「……悪かった。下がってよいぞ」

役立たずめ。そういう意味を込めてマハエは言った。

「何ですか？ 今の声は？」

会話を聞いていた宗萱が尋ねる。

「案内人といまして、一応オレ達のサポート役です」

説明するマハエの横で、ハルトキがつぶやく。

「あれ？ 案内人の声って、ボク達以外には聞こえないんじゃない……？」

「行くぞー、ヨツくんー」

「お、おー」

忙しいと言う案内人は、それっきり話しかけてこなかった。

探検気分ならば、少しはわくわくできそうな場所だが――

予想していたとおり、分かれ道がいくつかある。どこへ進むべきかと迷うマハエとハルトキ、だが宗萱は、迷うことなく一つの道を選んだ。

「こっちです」

「なぜわかるんですか？」

「ここを見てください。床に水が落ちてます。おそらく、先ほどの闘いでグラソンの身体か武器に氷が残っていたのでしょーう」

なるほど。と納得する二人。

急ぎましようと言う宗萱を先頭に、水の跡をたどり行くと、入り組んだ廊下の先にエレベーターを見つけた。

スイッチを操作し、待つと、エレベーターが降りてきた。三人は迷うことなく上階を目指す。

重い機械音を耳にしながら、じっと停止を待つ。

目の前で壁が降下していき、やがて進むべき空間が目に入った。エレベーターが完全に停止するやいなや、三人は走り出す。

そこからの廊下は分岐がなく、すぐに一つの扉にたどり着き、その勢いのまま扉を開け放った。

「……意外と早かったではないか」

広い室内の中央に、黒マントの男が背を向けて立っていた。

32：倒すべき敵

部屋の中央にマントの男。

その部屋は前の部屋よりも広いわりに、それ以上にこざっぱりしている。三人と反対側の壁に、不自然に設けられた椅子。そしてその横に立っているのは、グラソンだ。

「できれば、もう少し遅い到着のほうが都合が良かったのだが」
マントの男が言う。

「そう簡単に、思い通りにはさせない」

鉄棒をマントの男へ向けるマハエ。ハルトキも『田島弘之』から受け取ったダガーを構える。ただ一人、宗萱は動かずに、じっとグラソンへ注意を向けていた。

「なかなかやるではないか。相変わらずだな」

「なんだと？」

マントの男が言った“相変わらず”という言葉に、マハエとハルトキは疑問を持った。

「何者？」

ハルトキのその言葉に、マントの男は振り向き、笑った。
そしてマントに手をかけると、バツと傍らへ投げ捨てた。

あらわになった顔。クリーム色の髪、白い肌。若い美男子のようだ。

「……誰だ？」

見覚えのないその顔に対し、マハエにはそう言うしかなかった。
ハルトキも宗萱も、誰だかわからないという表情。

「おっと、お前ら二人には、こっちのほうが馴染みがあるか？」

マハエ、ハルトキにそう言う男の顔が、少しずつ変化していく。
美しい顔にしわができ、全体がしなびていく。目も陥没し、その顔はまるでゾンビ――

「……デントール……」

マハエ、ハルトキは同時につぶやいた。

「……誰です？」

宗萱の疑問も、二人には聞こえていない。

「なんででめえ……」

「ふふふ。驚いたか？」

久しぶりに見るその顔、二度と見なくなかったその顔が、再び二人の前に。

「死んでなかったのかよ……！」

「……すべてはセルヴォのおかげさ。ただのプログラムだったオレが、完璧な知性を得ることができた」

あの最悪な“神”が、生きていた。

三人が力を合わせ、苦戦の末、やっとの思いで倒した神、デントール。

今にも脱力してしまいそうな二人と、何かなにやらわからず、困惑する宗萱。

「オレはあるとき、お前らに敗れ、一時の死を見た。だが、オレの中の何かが、オレを蘇らせたのだ」

デントールの顔が、ゾンビ顔から美形顔にもどった。

「悪かったなあ。さっきまで、完全にこの姿に馴染んでいなかったんで、マントを着用させてもらっていた」

「……」

沈黙する二人と宗萱。彼は話の基が見えてこないの、黙って話を聞いている。

「この世界は、あんたが造ったのか？」

ハルトキが大きな疑問を口にする。

「それは違うな。この世界はもともと存在していた。オレが知らない、ずっと前からだ。今まで、誰も気付かなかったただけだ」

それを聞いたハルトキは、ある一つの仮説に到達した。

「コンピューターに異常を与えていたのは、セルヴオそのものではなくて—— あんただったんだね？」

デンテールが両手を横へ広げ、嬉しそうに言う。

「すばらしい力だ。ただのプログラムだったオレがだ！ まさに“王”となるにふさわしい力を手に入れた！ ふふふふ……、その通りだ。すべてはお前らをおびき寄せるためにオレが仕組んだ」
「なぜオレ達にこだわる！？ あのととき負けたのがそんなに悔しかったのか！？」

マハエは憎しみと、怒りを込めて言った。

もしそうだとしたら、この世界での戦いは、まったく馬鹿馬鹿しいものだだったこととなる。

「……ふふ。それについては、こいつにでも訊け。今のオレには、それを説明する時間も惜しい」

そして、信じられない言葉を放った。

それはまるで、マハエ達がそうするように——

「出て来い！ “案内人”！」

デンテールが案内人呼び出した。

「お呼びですか？ “デンテール様”」

その声は、この世界へ再び連れてこられた三人に、悪魔を思わせた案内人の声。だが、今彼らにとって悪魔以上の存在は他でもない、デンテールなのだ。

案内人は仲間の一人だ。

この世界を知り、セルヴオを知り、仲間というものを深く知った。

「……案内人……？」

二人は自分の耳を疑いたくなった。

『デンテール“様”』——それは、この最悪な神への忠義を表していた。

「悪いが、案内人はすでにこちらが乗っ取った」

「……………」

マハエには思い当たる節があった。

「あのとき、港町で調子が悪いって言っていた……。それからか……」

……

「くっ……………」

悔しさで歯を食いしるハルトキ。

あれほど迷惑だと思っていた案内人だが、今は敵に奪われ、利用されてしまっている。悔しいのはマハエだって同じだ。案内人の言うこと一つ一つに腹を立てたが、まぎれもない仲間だった。こんなやつ居なくなってしまうばいいと思うこともあったが、それは一種の“ひねくれ”でもあったのだ。

「許さねえ……。てめえ、二度と蘇れないように叩き潰してやる……」

……！

ピリピリと魔力が騒ぐ。

だがデンテールは、

「残念だ。できれば、オレが自らお前らを葬ってやりたい。だが、今は危険を冒すわけにはいかないからな」

三人に背を向けると、デンテールは壁際の椅子へ移動する。

「お前らはもう、ここまでだ。グラソン、こいつらの始末は任せた。城もろとも爆破しろ」

「かしこまりました。デンテール様」

椅子に座るデンテール。椅子からは四本の鎖が上へ伸びており、真上の天井に開いた穴へと続いている。

「どこへ行く！？」

「知る必要はない」

デンテールが冷たく言い放つ。
プロペラが回るような轟音が聞こえてくる。この上に、何かが待機しているようだ。

「だいたい話が見えてきました。敵は逃がしません！」

宗萱が刀を構え、床を蹴る。

瞬息に移動する宗萱を、グラソンが捉えた。組み立てた灰色の金属棒で、刀を叩き落そうとする。

「とことん邪魔をするつもりそうですね」

「……………」

刀背を押さえるグラソンと、それに抵抗し、金属棒を切断しようとする宗萱。押し合ったままにらみ合う。

宗萱は刀を反転させ、刃を上に向ける。そのまま金属棒ごとグラソンを斬ろうとするが、とっさにそれをかわしたグラソンが逆に蹴りをかます。

デンテールが椅子ごと鎖に引っ張られ上昇し、天井の穴へ消える。

「まてえ！」

衝撃弾を放つマハエ。

グラソンの頭上を抜けた衝撃の塊。だが狙いを外し、デンテールには当たらなかった。

「……直接戦えたなら、どれほど楽しいものか。そっちの黒服も、妙な技を使う」

——部屋全体の空間がゆがむ。

「ふふふふ……。残念だ」

デンテールの姿はもうない。

——代わりに歪んだ空間が、黒い色を帯びていく。そして、形を成していく。

「これは厄介ですね……………」

グラソンから離れ、二人の前で刀を構える宗萱。

オオオオオオオオオオオオオオオオ……

大量の対S A A Pが出現し、一箇所に固まる三人を取り囲んだ。

——二十体はいる。

「こいつら……、公園で見た死神……」

「こいつら……、ボクを水路に落としたドクロ……」

「元S A A Pのメンバーです」

対S A A Pの大軍の中で、自若としているのはグラソンだけだ。ポケットに手を入れ、自分側の圧倒的な有利を楽しんでいるかのようだ。この数を相手に三人だけというのは、分が悪すぎる。

さすがの宗萱も、額に汗を浮べている。

——ドオン！

どこかで爆発が起こった。

「城を爆破しろ」とデンテールが言っていたのを思い出し、更に焦る三人。

再び二度、どこかで爆発が起こり、四度目の爆発はすぐ近くで——その瞬間、部屋全体が振動した。

爆発したのは、この部屋の壁。コンクリートの粉塵や煙のもやがかかった壁には、直径一メートルほどの孔が穿たれた。それはうまい具合に、別の部屋、もしくは廊下に通じているようだった。

「わたしが道をつくります。あなたはあの孔から抜け、デンテールを追ってください。ここに居ては皆殺しです」

「馬鹿なことを言わないでください。あなたを置いて行けるわけない」

宗萱の提案を、マハエは否定する。

「行ってください。あなた達までここで無駄死にすることはありません。——任務を思い出してください！」

「……………」

「マハエ………」

細く開いた宗萱の眼には、固い決心の色が宿っていた。揺らぐことのない精神、自らの犠牲の先にある希望を――

じつとその眼を見つめてからマハエは言った。

「行くぞ、ヨツくん」

「……………」

もう一度宗萱の眼を見つめ返し、永遠の別れを覚悟する。

互いの思いは通じた。

それまで三人の決心を待っていたかのように、対S A A Pがいつせいに動き出した。

「“元”わたしの部下だからといって、容赦はしませんよ！――はあっ！」

宗萱は邪魔な何体かの対S A A Pを蹴散らし、道をつくる。

「さあ、早く！」

上方からのグラソンの一撃を刀で受け止め、彼は最後に言った。

「忘れないでください。戦う者の意志を」

激しい戦場と化した室内。戦う一つの“意志”。

唇を噛みしめ、マハエとハルトキは振り返ることなく孔を抜けた。

「死ぬな、宗萱………」

厚い壁一つ向こうで、強い意志を宿した雄叫びが激戦の音の中に消えていった。

33：神の手下

短い階段を一つ上ると、さっきまでの部屋から響く音は届かなくなつた。

「……………」

無言のマハエに、ハルトキは話しかけることも出来ない。

彼がどれほどの間、宗萱とともに行動したのかハルトキは知らない。だが、その心の痛みは嫌というほど伝わってくるのであった。

「大丈夫だ」

マハエがつぶやく。自分に言い聞かせるように。

その様子に、ハルトキも胸をなでおろす。

親友が心に傷を負つたままでは、無事に自分達の世界に帰つたとしてもあまりにも後味が悪すぎる。

励ますように思い切りマハエの背中を叩く。

「ぐはっ！ 口から心臓が飛び出る！」

苦笑しながら、マハエは窓から外を見た。二人が歩く廊下には、ガラスのない穴だけの窓がいくつもあり、時々そよ風が吹き込んでくる。

「ん？ ヨツくんあれ見ろ」

「なんだい？」

二人が見ている空。そこに灰色の巨大な物体が浮いていた。それは城から遠ざかるように消えていく。

「デンテールだ」

くそっ！とマハエは壁を叩いた。

デンテールの乗った巨大な飛行船。それはマハエ達をあざ笑うかのように、もはや手の届かない遠くまで逃げていた。

「あいつは、何でも思い通りに造つたり、消したりできるんだつたな……………」

この世界には似つかわしくないほど高度な技術。城のコンピュー

ターも、すべてデンテールがつくったものだろう。もしかすればこの城も。

彼はこの世界はもとも存在したと言った。ますます、デンテールという“神”の存在がわからなくなる。

この世界に伝わる創造神“ペオーラ”。もしも存在していたとすれば、このデンテールの所業を許すだろうか？——そんなことを考え、マハエは顔を上げた。

「オレ達のこの魔力つて、神が授けたものなのかもしれない……。デンテールを倒せつて」

「……真面目にそんなこと考えてたの？」

「大真面目だ」

「まあ、それも重要かもしれないけど、今はどうやってデンテールを追おうとか、考えない？」

すでにデンテールは空の彼方。腕がゴムになたって届きそうになり。

「……神様、オレ達に翼をください」

「（……いつものマハエだ）」

十分後――

二人は広いホールにたどり着いた。

やたら冷え冷えと感じるのは、空間が広くなったせいだけではないだろう。壁や床が石張りであるせいもあるだろうが、このホールが位置しているのはおそらく城の最上階か、それに近い。考えもなしにこの場所へ来た二人はそれを知り、焦った。

「おいおい……、城つて、爆破されるんだよな？」

「あー……、うん」

「本当なら、一階を目指さないといけないんだよな？」

「あー……、うん」

「どうやって脱出する？」

「んあー……」

確實にもどるには、来た道をもどり、宗萱達がいる部屋からエレベーターへ行かなければならない。デンテールがもうこの城にいない今、上階を目指す理由はないのだ。

しかし爆破といっても、部屋を出るときの四回の爆発以来、爆音は聞こえてこない。グラソンが宗萱に手こずっている間は大規模な爆破はできないのだろう。

ホールには、計三つの道がある。一つは二人が入ってきた扉、あとの二つはホールの奥にあり、階下への階段と、その横のもう一つの扉。

その扉はどこへ続いているのかわからないが、一階へ向かうのなら階段を選ぶ。

「階段から下へ行こう」

ハルトキが言い、マハエが返事をする。

「ああ」

「——いや、奥の扉へ行け」

同時に別の声が、二人の後ろから聞こえた。

慌てて振り返る二人の目に、信じたくない人物が映った。

「そんな……」

——グラソン！

ハルトキよりも少し背の高いグラソン。彼は二人を見下ろし、そこに立っていた。それも一人で。

宗萱はどうした？ マハエはそう訊きたかったが、恐くてできなかった。宗萱は無事なはずだ。きっと対S A A Pにその場を任せてここへ来たのだ。そう言い聞かせた。

——ここへ来た？ 何のために？

「あの扉から出、少し行くとテレポート装置が設置してある部屋に着く」

「……テレポート装置？」

「ま、信じないのなら勝手にしろ」

それだけ伝え、何もせず出て行こうとする。

「まで！ あんたは何がしたい！？ なぜオレらにそんなこと！」

「……“本物の”彼に訊いてみな。偽者はシャットダウンした」

「は？ ——って、待て！」

ボタン。手を伸ばすマハエの目の前で、扉は閉まった。

「……何が言いたかったんだ？」

突然現れ、あっけなく去ったグラソン。その真意は、二人にはわからなかった。

ピーガガガガ……

マハエのジャケットのポケットが微妙に振動した。それは中に入っている、無線機がノイズを発したためだ。すぐにそれを取り出し、耳を向けた。

「ガガガ—— マ……さん……」

どこかで聞いたことのある声。

ガガ、と鳴って、プツンと途切れる音の後に、はつきりとした声が発せられた。

「マハエさん、吉野さん。無事ですか？」

二人はその声に驚きながら、何とも言えない喜びがあふれるのを感じた。

「案内人……！」

同時に無線機に向かって叫ぶ。

前みたいなクリアな音声ではないものの、その声は間違いなく案内人だった。

「すみません。もう少し声のボリュームを抑えてください」

「なんでこんなところに？ やっぱ変だなお前」

喜びで泣きそうになりながら、マハエは言った。

「案内人……！ 案内人だよね！？」

「デンテール様とか言わないよな！？」

「デンテール様がどうしました？」

「……………」

「……………」

場が静まり返る。

「冗談です。わたしは本物ですよ」

「……だよな？　で、なんでそんなところにいるわけ？」

「事情は後で説明します。とにかく、今は彼——グラソンの言うとおりに行動しましょう」

「あの男の言うこと、信用できるの？」

ハルトキが不審な顔で尋ねる。

「……とりあえず、今はあなた達を殺すようなことはしなさそうです」

「……今はって……」

「とにかく、城から出ましょう」

そう促す案内人だが、マハエは、

「待つて、宗萱が……」

宗萱の生存を信じたい。だが、案内人は諭すように言った。

「彼は——……彼は強い方なのでしょう？　安心してください。きっと生き延びます」

「……………」

案内人にも完璧な根拠があるわけではない。あの様子からすると、彼はおそらく——　だが、今ここで希望を打ち消すことは案内人にもできなかった。

「……そうだな、出よう。とにかく、お前がそんな状態になった理由とか、後でちゃんと説明しろよ！」

「はい」

グラソンの指示どおり、階段横の扉から行くことに決めた。

案内人の言った、今はグラソンはマハ工達を殺しはしない、という言葉を信じて。

たしかに、全員殺すつもりなら城を丸ごと爆破するという手もあったはずだ。しかしそうはしなかったばかりか、わざわざここへ来て道を教えた。ここでも二人まとめて殺すという選択もあったはずなのだ。彼は二人をまだ殺すつもりはない。それはデンテールの命令を無視していることになる。

「どんな目的があつて？」そう口に出そうとしたマハ工は、ハルトキが立ち止まるのを見てとっさに言葉を呑み込んだ。
「誰が来る」

ハルトキが言う。

ほんの六メートル先の階段から、人の足音が響いてくる。

コツ…… コツ……

ためらいのない足取りから、向こうはまだ二人の気配に気付いてはいないようだ。

数歩下がり、二人は足音が上がってくるのを待った。

コツ…… コツ……

ようやく影が見え、一瞬後に真つ青な頭がのぞいた。顔を下に向けて「やれやれ」とぼやきながら、その人物は最後の段を踏んだ。

「まいるぜ。——ったく」

背の高い男だ。

男はようやく、先に居た者達の気配に顔を上げた。

青い髪を持ち上げた男の顔は、マハ工の知る者ではなかった。だが、ハルトキはその覚えのある顔に目を見開いて息を呑んだ。男のほつも、ハルトキを見て同じような顔をする。

「お前は……」

男が先に言葉を出し、同じような言葉を出そうとして出遅れたハルトキは言う機会を逃した。

KEN 窪井—— 不良集団『ニュートリア・ベネツヘ』のリーダーだ。つい前日に顔を合わせたばかりで、お互い忘れるわけもない。それどころか、激しい争いまでした。何ヶ月経っても忘れることはないだろう。

だが窪井はハルトキと大林に敗れ、警察に引き渡されたはずだ。なぜこの場にこの男が居るのか、ハルトキは疑問で頭がいっぱいになった。懸賞金まで懸けられていたのだ。当然、一日二日で釈放などされるわけもない。

ということは、つまり“脱獄”したのだ。

「なぜお前がここにいる？」

窪井は見開いていた目を鋭い眼差しに変え、ハルトキを見た。

「それはこつちが訊きたい。なぜあんたが……」

ハルトキを良く知るマハエでも、ここまで低い声を出す彼を見ることは滅多にない。この二人の間に、“知り合い”ではすまされないような何かがあったのだらうと察した。

「なぜ“デンテール様”の城にお前がいる？」

思いがけないその言葉に、ハルトキは息を吞んで沈黙した。

34：忠実と裏切り

『なぜ“デンテール様”の城にお前がいる？』

KEN 窪井は言った。デンテール“様”と。

その言葉が意味することは一つだけ。

「あんたも……、デンテールの手下だったのか……」

少し驚いた風に眉をしかめながら、窪井はすべてを悟ったようだった。

「そうか……、まさかお前が噂の、デンテール様の“敵”だったとはなあ……」

「クツクツ……」と笑い、「クツハツハツハ！」と声を上げて笑い始める。

「とんだ偶然もあつたものだ。そうか、デンテール様の敵は、大林ともつながっていたのか。こいつはとんだ脅威だ！」

大林とハルトキは、前日に初めて会った。窪井は勘違いをしているようだが、それを否定する余裕はハルトキにはない。

「まあいいさ。両方始末すればいいだけのこと。お前らの始末はオレの部下達に任せよう。おい！ 仕事ができた！ こっちへ来い！」

階段に向かって叫ぶ。すると、数人の影が階段を上り現れた。

紫色に染められた短髪。ニュートリア・ベネツへに所属する不良達だ。――が、

ドサッドサツ……

先に出てきていた二人の不良が床に倒れた。続いてまた一人、その上に投げ飛ばされるように重なり倒れる。

「……なんだと？」

コツコツと、またホールへ上ってくる人影が。場の空気が一変する。

「やっと見つけたぞ。窪井」

窪井と同じくらいの背丈の男。朱色の髪をオールバックにし、灰色のローブを羽織っている。

『田島弘之』のリーダー、大林だ。

「大林さん!？」

ハルトキの声に、大林はニッコリと笑う。

「よお、ハル。また会ったな」

「また会ったな。って……。なぜここへ？」

「ボス！ 階下の制圧、完了しまし—— ア、アニキ!？」

階段を駆け上がったきたリーゼントの不良—— 裸の上半身にさらしを巻いた不良がハルトキを見つけて驚きの声を出した。

「あ、どうも」

同じ髪型で統一されているせいで、外見での区別は困難だが、声で彼が田島弘之の幹部、青島一斉だアオシマイサイと気付く。

「ヨツくん……、妙なお友達をつくってしまったって……。しかも、ア
ニキって……」

ハルトキの横で、不良が苦手なマハエが涙を流している。

「ちっ……、大林、こんなところまでつけてきやがったのか」

「こっちはな、お前が大人しくポリに捕まっているわけがないと見越して、見張っていたんだ。案の定、脱獄したお前を、ついでだから本拠を突き止めてやろうと後をつけてきた。驚いたぜ。まさか、この城にたどり着くとはな」

そう言い、ハルトキを見る。

大林は、ハルトキがこの城を目指していることを聞いて知っていた。彼の安否を気にかけていたのだろう。

「田島弘之は、後で潰すつもりだったが、予定が早まったな。全員、今ここで葬ってやる」

上着を脱ぎ捨てて窪井。

下にはすでに、伸縮性のレスリングコスチュームが装着されている。

「見よ！ このすばらしい力を……！」

ミシミシミシ……

窪井の身体が、音を立てて変形していく。全身真っ赤に染まり、筋肉が恐ろしいスピードで発達する。

首、腕、胸、腹、足——顔の筋肉、指の一本一本まで。

「また、この気持ち悪い筋肉を……」

ハルトキは口を押さえた。

始めて見るマハエは、その変貌ぶりにただただ啞然とする。

十秒後には、もはや人とは思えないほどのゴリラ体型に。レスリングコスチュームも悲鳴を上げるように、ぴっちり張り付いている。

「じ、実はかなりの筋肉質だったのか……」

マハエの、やっと絞り出した言葉がそれだ。

「窪井……」

大林は拳を固めた。

「ボス……、窪井のやろう、いったい……」

「さあな。悪魔にでも身を売ったか……」

「クハハハア……！ 蹴散らしてやる……！」

始まった戦いから少し離れた場所にある廊下。

遠くで騒ぐ低い声と、別の数人の声が、静まった城内の通路を伝ってくる。

「窪井が到着したか」

その廊下にこだまするのは騒ぐ者達の声だけではない。一人の人物の足音も、一定の間隔を置いて反響する。

ホールから階段を一つ下りたグラソンは、ガラスのない窓が並ぶ廊下を後戻りしていた。

床か壁を破壊する音が時折聞こえる。窪井の力任せの拳は、爆破するまでもなく城を破壊するのではないかと思わせる。

「（そういえば、窪井を連れ出しておけとも言われていたな）」

デンテールからの面倒くさい言いつけを思い出し、後頭部をかくだが、それを無視して城を爆破したとしても、窪井は生き延びるだろう。そうでなくとも、あの筋肉男の戦いには巻き込まれたくなかった。

冷たい風が銀色の長髪を揺らす。

「（……ああ、あと一つ。面倒くさいやつがいた）」

殺気をまじらせた視線を背中に受けながら、グラソンはもう一度、後頭部をかいた。

「——どういっつもり？」

その女の声は、視線以上に殺気が含まれていた。

グラソンは後ろを見ずにその声に答える。

「何のことだ？ セレーネ」

「ふざけないで」

セレーネの顔は無表情ながらも、怒りに満ちている。

「どういっつもり？ あの方の命令を無視するなんて……。それどころか、あの二人を逃がそうとするなんて」

「……お前は忠実すぎるな」

「あなたはあの方の意思ではなく、自分の目的のためだけに動いて

いる気がするわ」

「……………」

窓から入った風が、二人の髪をなでた。

「ここは寒いな」

グラソンは再び歩き出す。

「待ちなさい！ あの方に逆らうお前を野放しにはできない！」

「デンテールの目的を達成させるためか？」

“様”を付けずに“あの方”を呼び捨てにしたことに、セレーネの頬がぴくりと動く。

「そうよ」

「くだらんな……………」

セレーネの身体が動く。数歩で攻撃の射程範囲まで詰めると、袖から飛び出た細いクナイを手に、グラソンの後頭部を狙う。

ここでグラソンは初めて振り向くと、身を傾け攻撃をかわし、彼女の手首を掴んだ。

そのまま腕を引っ張り、鼻と鼻が当たる寸前まで顔を近づける。

「オレは、“あの方”が何を企んでいるようと、何をしようと興味はない。オレは誰にも従わない」

「——っ!？」

セレーネの腕が凍った。

ピキピキと、氷が手首から肩まで這い上る。

「なに…………？ これ……………」

セレーネを壁に押し付けると、壁も凍り、彼女を拘束するように氷の手かせと足かせが形成された。

四肢を壁に張りつけられ、反撃は不可能となる。

「なに？ この力は？」

セレーネの顔に、恐怖と困惑の表情が浮かぶ。グラソンは彼女のそんな表情を見るのは初めてで、彼自身も驚いた顔をする。

「“人”らしい顔もするじゃないか」

「これを外しなさい！」

「悪いが、今はそれはできない。しばらくすれば外れるさ。その前にこの城とともに消滅するか？」

「……………」

「お前は普通の“人”にすぎない。どんなに戦闘能力に優れていようと、ただのボディガードだ。お前は“あの方”の目的を知っているか？ 何か知らされているか？」

「……………」

知らない。でも関係ない。彼女の顔はそう語っている。

「あわれだな。お前はただの道具としか見られていないというのに……………」わたしはただ、あの方を守るだけよ。あの方のそばで、あの方の目的のために身を削るだけ。それでいいのよ！ “新人”のあなたに何がわかるって言うの！？」

「……………」たしかに、お前はオレよりも以前から“あの方”に仕えていた。なぜだ？ 命を救われた恩があるからか？」

「……………」そうよ」

グラソンは溜め息をつき、もう一度言った。

「あわれだな」

そして、セレーネの顔面に手を向ける。

顔を凍らせ、息の根を止められる。彼女はそれを覚悟し、目を閉じた。

水が急速に凍るのと同じ音がし、少ししてグラソンの手が顔から離れた。

「……………」

セレーネは目を開ける。

彼女はまだ息をし、こうやって目を開けることができる。何が起こったのかわからないという顔で、去っていくグラソンの後ろ姿を見ていた。

「もう少し女らしくしろ」

「……………」

彼女の頭には、氷でできた大きな“リボン”が乗っかっていた。

「城は爆破しないで置いてやる」

奥のドアが開いて閉まった。

グラソンが居なくなり、セレーネは一人、風が吹き込む廊下で凍える寒さに耐えていた。

ホールから聞こえていた音も、いくらか静かになっていた。

35：根性の潜入

一度、窪井が床に膝をつき、二度目つくまでにはさほど時間はかからなかった。

——戦闘が始まって二分。最初にやられたのはマハエだった。それもそうだ。大林、青島、ハルトキ、マハエ、四人対一人といっても、ケンカ慣れしている大林と青島はともかく、ハルトキとマハエはまだそれほど慣れてはいない。しかもマハエのほうは『動体視』が使えない。当然こうなることはわかりきっていた。

——恐ろしいのは、大林と青島だ。窪井の猛攻を素早い動きで逃れながら、反撃を繰り返している。

青島はメイスを使っているが、大林はもっぱら素手が主流だ。

腹を殴られ、何メートルか吹っ飛んだマハエだが、骨が折れなかったのは幸いだった。

左手で腹を押さえ、右腕を使ってなんとか起き上がった。じっとしていれば痛みは治まっていく。

戦いの最中、折れ曲がり、御役御免となってしまうた牢の鉄棒を横に投げ捨て、舌打ちをする。

残った三人の戦う姿を見ながら、自分にはとうてい真似できなと感じていた。

次にハルトキが攻撃を受けた。マハエが離脱してから一分後——振り回される窪井の右腕にダガーを突き刺した直後だった。こっちはそのまま腕に殴られた後、マハエのほうへ蹴り飛ばされた。強烈に蹴られ、勢いが止まらないハルトキを、マハエが身を挺して受け止めた。

「くそお……」

「おい、重いぞ早くどけい」

すかさず、窪井が腕に刺さったダガーを二人へと投げた。

その刃先は正確にハルトキの喉元へ直進する。

「おっと」

まだ動体視状態を保っていたハルトキは、身体をどけ、それを避ける。

ダガーは後ろに居たマハエの肩に深々と刺さった。

「ぎゃーっ！！！！」

「だ、大丈夫かマハエ！？」

「お、おま！ お前は身を挺して受け止めてやったオレを——ギニヤーツ——」

ハルトキがダガーを抜き取った。

「——それにしても……、すごいねあの二人」

「平然とした顔で話を逸らさないでもらいたい」

「青島さんもすごいね……。まるでアクション映画を観ているようだよ」

「普通病院行きだよこれ。ねえ、キミも何で攻撃受けたのにそんな平然としてるの？」

マハエは仕返しに、ハルトキの殴られた部分を力の限りはたく。

「——つつっ！！！！？」

——窪井は以前にも増して強くなっているようだった。河原での戦いは、本気ではなかったのか。

大林も何発か攻撃を食らっていた。だが、ともに食らったわけではない。攻撃を受け流し、ダメージを最小限に抑えているのだ。

「ぐあっ！」

それから青島が窪井の裏拳に倒れた。

「くそっ……！」

鼻から血を出しながら、青島が毒づく。

「離れてろ一斉！」

田島弘之の幹部も戦闘から離脱し、開始から五分足らずで、残ったのは大林だけとなった。

だが、さすがに頑丈な窪井のボディにも、ダメージは蓄積されていた。

——三度目に窪井が膝をつき、そこにトドメをさしたのは後頭部にぶちかまされた大林のかかと落とし。

窪井はうなり声も出さず、顔面から床に倒れた。

「はあ……。厄介な体だな。その筋肉は見せ掛けだけではない、ということがよくわかった」

窪井の体は、筋肉がしばみ、人の肉体にもどった。

「クソ野郎が」

冷たい目で窪井を見下ろしながら、大林は自分の口元についた血を手の甲で拭き取る。

「人に生まれりゃ、死ぬまで人として生きていかなきゃならない。最後にはバケモノなんぞに魂を売りやがって。それがお前の生きる道なのか」

「……………」

完全に気を失った窪井は何も答えない。

大林もそれ以上は何も言わなかった。

城での戦いに勝負がつく少し前、空の旅を楽しむエンドーは、笑いながら小さな町並みを見下ろしていた。

案内人から目的地の方角を教えてもらい、気球を操りながら城へと向かっていた。

「アハハ……ハ……………」

笑いながら—— エンドーの笑顔は固まっていた。

「アハハハハ……」

鼻から水が垂れる。

「……寒い……」

城らしき建物はまだ見えてこない。

いや、今進んでいる方角自体、正しいとは限らない。エンドーはもはや、そんな“些細な”問題は気にしていなかった。

案内人も一言も話しかけてこない。エンドーから声をかけても、応答はない。

だがそれも今となつてはどうでもいい。ただ、凍死寸前の自分の意識を保つことで精一杯だった。

「（……寒いと思うから寒いんだ……。温かいことを考えよう）」
エンドーは真夏の海を思い出した。

「（そうだ……。そう、スイカ割りをしたんだ。小学生のとき。そんで、オレが間違えて後ろにいたマハエをなぐっちゃったんだっけ。楽しかったなあ……）」

今度は中学生時の夏を思い出す。

「（山へハイキングに行ったんだ……。そこでオレがうつかり石に蹴つまずいて、前にいたマハエを川に突き落としちゃったんだっけ。楽しかったなあ……）」

そして一番最近の夏。

「（あー、例年まれに見る猛暑だった……。クーラーをきかせた部屋で三人で昼寝していて、マハエを置いてちよつと部屋を出るとき、オレとヨツくんは手違いでクーラーの電源を——）」

温かい気持ちになりかけていたエンドーは、慌てて記憶の映像を遮断した。

「走馬灯やんけっ！……！」

“川”を渡りかけていた自分にゾツとしながら叫んだ。

「……いったん地上にもどろう」

ようやくその手を思いつき、炎を調整する。

そのとき、エンドーの視界に巨大な影が入り込んだ。

「……は……？」

突然轟音を響かせながら目の前に現れた巨大な物体。

「わ、わ、わ！？——ゲフツ」

気球はあっけなく、その何十倍も大きな飛行船に突進、破壊された。

飛行船の操舵室にいたのは、デンテール。

デンテールは操舵室の真ん中の特別席にどっしりと座っていた。

前部で舵をとっていた二体の対S A A Pが、デンテールに向かって意味不明な言葉を発する。

その、どこの国にもありそうにない暗号のような言葉を、デンテールはすぐに理解する。

「謎の飛行物体と衝突？ ふん、かまわん。そのまま進め」

この巨大な飛行船は、小さな飛行物体と衝突したからといって、なんらダメージは受けない。

衝突した飛行物体が衝撃で大破しようが、人が乗っていようが、デンテールにとってはどうでもいいこと。プロペラが一つ壊れようが、この飛行船は落ちたりしない。だからデンテールは何一つ気にしなかった。

——ただ、彼は気付いていない。

たった今衝突した飛行物体にエンドーが乗っていて、その時点でも空気が抜け、破れかけた袋にしぶとくしがみついていることに。

——気球を浮べていた袋は、プロペラが高速で回転するその真下にある棒に絡みつき、ゴンドラから投げ出されたエンドーが、懸命にそれにしがみついていた。

「くっそ！ 誰だ、荒っぽい操縦しやがって！！！」

手を離せばエンドーは落下し、ジ・エンド。

そうならないためにも、早く足場を見つけないといけない。

両手で袋を掴みながら、逃げ場を探す。

幸い、修理のためのものが、はしがいたるところに取り付けてある。

エンドーは風の勢いを利用してそれに手を伸ばし、慎重に移動した。

はしごを伝って少し下へ行くと、二メートル四方の狭い足場があった。

「よつと」

最後は飛び降りて木の床を踏む。

「一時はどうなるかと思ったよ……」

ほつとして、胸に溜まっていた息を吐き出すと、足の力が抜け、壁にもたれて座り込んだ。

その狭い足場は、飛行船の外側の修理や整備用に設けられたものだろう。内部へのドアが一つだけある。

「なんだこの飛行船は？ くそー、ヒドイ目に遭った」

上を見上げ、引っかった気球を見る。

もう完全に使い物になりそうにない。

「マーキンさんがこれ見たら、オレ殺されるな……」

彼からの借り物を壊してしまったことには、とくに大きな罪悪感はない。悪いのはエンドーではなく、この飛行船の持ち主なのだ。

「ここは文句を言ってやらねば」

右拳を左の手の平に叩きつける。

立ち上がろうと膝を立てたとき、風の音に雑じって誰かの声が微かに聞こえた。

「なんだ？」

エンドーは周りを見回し、その声が自分の体のどこから発せられていることに気付き、ボディーチェックのように体を上から叩くズボンの尻ポケットに触れたとき、手の平が固いものを感じ取った。

尻ポケットから、覚えのないワイヤレスのイヤホンが出てきた。よく映画で、部隊の隊員達が片耳に付けているあれに似ている。声はそのイヤホンから漏れているようだ。

エンドーはそれを、左耳に引っ掛けるようにして取り付けてみた。

「エンドーさん！！ 無事ですか！！？」

突然の案内人の声に驚いて、それを床に叩きつける。

「エンドーさん！？ エンドーさん！！？」

床に転がったイヤホンから、案内人が叫んでいるようだ。

「あ、案内人！？ な、何だ、びっくりした！」

イヤホンをつまみ上げ、顔のそばまで持ち上げる。

「無事なようですね。エンドーさん」

「……いや、お前が無事かよ？」

「ちよつと事情がありまして……」

音量を下げ、もう一度それを耳に引っ掛けると、今度はちょうどいい大きさに、案内人の声が耳に入る。

「今どこですか？」

「ああ、ちよつと野暮用だね。見知らぬ飛行船の中にいるよ」

「飛行船！？」

「ああ、こいつがいきなり気球に突っ込んできたからさ。これから文句を言つてやろうと——」

「気をつけてください！」

「いや、気をつけるも何も、突っ込んできたのは向こうだし」
すると、案内人は呆れた声を出す。

「違うんです。気をつけなければいけないのは、その飛行船に乗っている人物にです」

そして一言一言を丁寧に、ゆっくりと言う。

「いいですか？ よく聞いてください」

案内人は、それまでのことを話した。

セルヴォの王の正体、その王が巨大な飛行船に乗って逃亡したことも。

「……………」

「ということで、その飛行船に乗っているのはデンテールなんです」
「……なるほど……。生きてたのか、あのゾンビ」

「ええ、わたしも驚きました。あの状態から蘇るなんて……」

エンドーも驚いたが、逆にいろいろな謎が解けてすっきりしていた。

「このことを制作者には報告したのか？」

「いえ、なにしろわたしはこの状態ですからね……。今あなたが聞いているわたしの声は、マハエさん達の無線機から通信しています」
「……………」

細く長い息を吐いて、エンドーは立ち上がる。

「どうせ文句を言いに行くつもりだったんだ。文句ついでにぶん殴ってやる」

「……あまりいい考えではないですね……」

36：巨大飛行船

飛行船の内部は、風がまったくないおかげで温かく感じられる。それまで死ぬほど寒い思いをしていたエンドーには、暖房設備がなくてもそこは天国だった。もっとも、それは別の意味でだ。ここはすでに敵陣。どこに敵が潜んでいるかわからない。

「床も壁も木造ですね。やろうと思えば簡単に破壊できそうですが、それはやめてくださいよ？」

「……ばっ……、そんな危険なことやるわけ—— て、あれ？ お前見えてるの？」

「そのイヤホンには小型のカメラも付いているんです」

「ははっ、なるほど。これでお前も完全な“機械”だな」

「……デントールには近づきすぎないでくださいね」

「それじゃ殴れないじゃん」

「殴らなくてもいいんです」

——床も壁もほとんどが木造。それは本体をできる限り軽くすることが目的なのだろうが、案内人が言うように、やろうと思えばエンドーの『魔力球』で簡単に穴が開いてしまいそうだ。もしも敵と戦闘になった場合、慎重に闘わねば意図せずとも穴だらけになってしまう。

おまけに隠れる場所も少ないようだ。

その場を動かないほうが得策だが——

「操舵室はあっちか」

エンドーは飛行船が進んでいた方向を思い出し、飛行船の前部を目指した。

「——城もそうでしたが、ここも人の気配はないですね」

「マハエとヨツくんは城にいるんだよね？」

「はい。先ほど敵と戦闘になりましたが、どうにか勝ったようです」
「そうか」

デンテールを殴れなくとも、この飛行船がどこへ向かっているのか調べるのは自分の役目だとわかっている。早く二人と再会するために、それは必要な情報なのだ。

「（ここからつまみ出されるのだけはごめんだな）」

中央通路らしき廊下を歩いていたエンドーは、鉄の扉の前で足を止めた。

操舵室へ行くための扉に違いない。しかし、その扉はロックされていた。

「爆破するわけにもいかないしなあ……」

頭をぼりぼりとかきながら扉に手をつく。扉には鍵穴がない。それ以外の解除装置も見当たらない。

「ん？」

その代わり、扉の真ん中に数字が彫つてある。

「『250』？」

これがロックを解除するヒントなのか。
指で数字をなぞり、その意味を考える。

「ダイヤル式の錠があるわけでもないですよ？ 別の場所でするのではないですか？」

「かもしれないな」

この場所においても数字以外のヒントは見つかりそうにない。エンドーは踵を返した。

「反対側へ行ってみようか」

前部の謎を解く鍵は後部にある。いたって単純な思考だった。

通路をもどり、入ってきたドアのところを通り過ぎ、後部へ移動する。

それまでにも、よく見ると数字が書かれたドアがいくつかあった。敵が居ないのは良いが、逆に不気味でたまらない。そのおかげですぐにたどり着くことができたのだが、エンドーは納得いかなかった。

前回の“ゲーム”では、デン^{ボス}テールまでたどり着くまでに多くのモンスターと遭遇した。十や二十、いや、何百というモンスターを手なずけることは、デンテールにならたやすいことのはずだ。自分に都合のいいようにセルヴオを“改造”すれば良いのだから。

考え事をしている間に、エンドーの手は無意識に突き当たりのドアを開けていた。

「あ。」

そのすぐ向こうにいた“マント”がゆっくりと振り返る。

顔の部分にドクロの仮面—— 対S A A Pだ。

「あ、すみません」でドアを閉めようとしたエンドーだが、対S A A Pはそれを許すはずもない。

侵入者は排除するように命令されているのだろっ。瞬時に侵入者だと判断し、『かまいたち』を放つ。

エンドーはドアを盾にしてそれを防いだ。

「ちっ」

こうなれば逃げないほうがいい。こいつを倒さなければ、エンドーの侵入がばれ、増援を送られるかもしれない。

ドアの陰から飛び出すと、すかさず放たれた『かまいたち』を無刃刀で打ち消す。

だが、完全には打ち消すことができず、両方の頬に切り傷ができた。それにもかまわず、ひるむことなく跳び上がり、無刃刀を仮面に振り下ろした。

着地するともう一度、回転を加え同じところに振り下ろした。

——パリン……

仮面が砕け散り、対S A A Pはスライムのようになり、溶けて消えた。

「対S A A Pねえ……。あまり手ごたえはなかったが……」

「どれほどのレベルがこの世界で通用するのか、それはS A A Pをつくる際には未知なものでした。それがこの結果です。それに、まさか相手がデンテールだったとは思いませんでした」

「まあ、そのおかげで一匹は倒すことができたが……。これが大勢現われたらじつに厄介だ」

「……………」

案内人は沈黙した。

大勢の“これ”と戦った者がいるからだ。マハエが訊いていたらまた気を落とすだろう。

当然、エンドーはそんなことは露も知らない。敵の居なくなったその部屋の中を調べ始めていた。

「案内人、どう思う？」

「何がです？」

「デンテールだよ、デンテール。あのデンテールが乗っている飛行船に、なぜこれほどに手下が少ないのか」

「それはたしかに気になりますね、前回の様子から考えると……。城には二人の手下がいましたが……」

「やれやれ、お友達が少ないのかね」

エンドーが壁にあるスイッチを押した。

壁の一部が両側へ開き、通路が現われた。

「そういうやつはな、ひねくれてるんだ。ほら、この隠し通路だってそういう性格の表れだ」

「あなた、自分がひねくれてないとも思ってます？」

「……案内人、今なら訊かなかったことにしてやる」

「心が広くなりましたね」

エンドーはイヤホーンの音量を最小まで下げた。

ゲームなどでは、隠し扉や通路が見つかれば、その道は正しいのだ。

この通路もしかりだった。

通路を進むと、少し広い部屋があり、そこには妙な装置があった。大きな装置で、ハンドルと、三桁の数字を表すダイヤル。上からは一本のパイプが天井へ伸びている。

ダイヤルは、『000』になっている。

「これはもしかして……」

装置を観察するエンドー。

「先ほどの『250』という数字が何か関係してそうですね」

エンドーが思っていたことを案内人が言う。（しかたなく、イヤホーンの音量を戻しておいたのだ）

「これがロックの解除方法かな？」

エンドーがハンドルを回す。

すると、『000』だったダイヤルが回り、数字が十ずつ増えていく。

『010』『050』『100』『150』……

『250』のところでハンドルを止めた。

パイプが微妙に振動している。

「なるほど。この装置からパイプを通じて、あのドアに『250』の圧力を与えるんですね。空気圧か、ガス圧か……。それがロックの解除方法ですよ。一定の圧力によって開くしくみでしょう」

案内人が推理する。

「これで解除されたかな？」

戻ろうとしたエンドーは、もう一つ気になる道を見つけた。

階段だ。暗くて奥は見えないが、そこから聞こえてくるのは――
「なんだろ？ 何かのうなり声が……」

「戻りましょうよ。もしかしたらこの圧力の操作によって相手に気付かれた可能性もありますよ」

「そうなんだが……」

しばらく階段と戻りの道を見比べ、エンドーは階段を下りはじめた。

「中途半端は嫌いなんだ」

「ですが……」

三人をサポートし、任務を遂行させるのが本来の案内人の役目でもあるが、同時に助言をし、守るのも役目なのだ。しかし、三人の性格をよく知った案内人は、彼を止めることは自分にはできないこともよくわかつている。

制作者がどういう理由でこの三人を選んだのか、案内人は聞かされていないが、人選は間違いではなかったのかもしれない。階段を下りたエンドーがその空間に電気を灯した瞬間、改めてそう思った。

ガシャンガシャンと鉄格子を叩く音。うなり声。

そこでは、五つの巨大な檻に閉じ込められたモンスター達が、激しく騒いでいた。

一つの檻に五つ七体。エンドーが遭遇したトカゲや鳥。その他いろいろと、種類別に檻に入れている。

ここは貨物室だろうか。

「何でモンスターなんか乗せてんだ？」

「おそらく、実験に使うつもりでしょう。吉野さんが、二体のモンスターが融合した奇妙な生物に遭遇しました」

それを聞いたエンドーは苦笑する。

「モンスターの融合か……。できればお目にかかりたくないな」

「しかしそう考えると、あのときの町の周りでモンスターが出現していたのは、デンテールの仕業でしょね」

「……殴る理由が二つ増えたな」

一つは、モンスターの出現によってあの悪町長と関わってしまった

たこと。二つ目は同じくそれによって面倒くさい依頼を受けてしまったこと。

「（おっと、あの町長を殴りそこねた分で三つか）」

エンドーはこちら側へ来るときよりも、さっと、体を回転させ引き返した。

拳に熱い怒りを燃えたぎらせ、飛行船の前部へ。

それを、やはり案内人は止めようとはしなかった。

37：小指一本

ロックされていた鉄扉は、予想通り開くようになっていた。やはりあの装置で『250』に圧力を調整するというのは正解だったようだ。

鉄扉を開くと、こんどは短い通路。その先にまた扉があった。プレートに『操舵室』と書かれていて、ここまでの選択は間違っていないかったことを確信した。

操舵室以外にドアなどは見当たらない。デンテールがのん気に眠っていないのなら、彼は操舵室にいる可能性が高い。たとえその他の理由でそこにいないとしても、その他の部屋をしらみつぶしに探すよりは確実だ。

ここまでとくに騒がしい様子はなかった。エンドーの侵入は気付かれていないようだ。

自分を安心させ、音を立てずに操舵室の扉を少し開いた。多少の音はエンジンかプロペラの低い音にかき消される。

エンドーの目に真っ先に映ったのは、クリーム色の髪をした人物の後ろ姿。王様が着るような、赤いマントを羽織っている。

ヒマそうに首を上下左右にねじると、美形の横顔がチラッと見えた。

「あれがデンテールです」

そう案内人に言われても、エンドーにはなかなか信じられない。

「ハハハ……。嘘だろ？　どこの美容外科に行けばああなるんだ？」
冗談めかして言う。

「ですが、あれがデンテールだということは事実なんです」

エンドーもそれを本気で否定しているわけではない。できれば否定したいところだが、案内人が確信を持って言うのだ。疑いようが

ない。

「――まだ島は見えないか？」

特別席に座っているデンテールが、船を操る対S A A Pに訊く。

対S A A Pの意味不明な言葉を聞いたデンテールは、うなずいた。

「あと数分ってとこか」

背伸びをしながらそう言った。

「それにしても、テレポート装置が海を渡れないというのは、なんとも不便でならん。あれを使えばこのような目立つ物に乗らなくても……」

これは独り言のようで、対S A A Pは何も言わない。

すぐ後ろでその会話――少なくともデンテールの言葉を聞いていたエンドーは、小声で案内人と話す。

「聞いたか？」

「ええ、この飛行船はどこかの“島”へ向かっているようですね」

「島か……。このままこの飛行船に乗っていて島に着いたとしても、位置がわからなければマハエやヨツくと合流できない」

「それもそうですよね……。しかし、この情報を二人に渡せば、何かわかることがあるかもしれません。どっちにしても、この船から降りることはできないんですし」

エンドーは開けるときのように、静かにドアを閉めた。

「殴るのは後でいいか。どこか隠れ場所を探さないか……」

操舵室の扉から後ろへ顔を向けたとき、エンドーは歩いてきた対S A A Pと目が合った。

「……………」

「……………」

相手も不意のことだったのだろう。すぐには攻撃を仕掛けなかった。

エンドーは手の平を首のところで前に向け、まるで久しぶりに会

う友人にするように話しかける。

「……よっ、チャールズ。久しぶりだな。どう？　奥さん元気？」
「……………」

——操舵室

半分眠りかけで目的地への到着を待っていたデンテールは、すぐ近くの廊下の異変に椅子を百八十度回転させた。

「どうやら、ヒマをしなくて済みそうだ」
にんまりと笑う。

デンテールが指を軽く振り、扉を開け放つと、廊下から武器を振るう音と、木の壁に傷がつく音の後に、エンドーの背中が後ろ飛び入ってきた。

扉が開いていたことに驚いたエンドーが、とっさに体を反転させる。

対S A A Pは直前に倒れていた。仮面が割れ、溶けて消えている。
「ほう、一人欠けていると思ったら、こんなところに」

そう言って笑うデンテールに、エンドーは人差し指を突きつける。
「乗りたくて乗ったんじゃない？　そっちからぶつかってきたんだろ——！」

それを聞いたデンテールはぼんと手を打つ。

「ああ、さっきの飛行物体はお前だったのか」

「くっそー！　しばらく見ねえ間にずいぶんとイケメンになりやがって——！　どこだ！？　なにクリニックだ——！！？」

デンテールはわけがわからない、と言うように肩をすくめる。

「どうでもいい話だ」

「どうでもよくねえ！　全世界のNOTイケメンさん達に謝れ！」

「エンドーさん。彼の言うとおり、その話は心底どうでもいいですよ」

「オレは悔しいぞ、このゾンビ——！」

腕で目を隠し、エンドーは悪態をつく。

「付き合いきれん。お前もさっさと仲間のもとへ逝け」

暇つぶしにもならん。とデンテールは溜め息をついた。

エンドーもボケをやめ、途端に真面目な顔になる。

「悪いが、オレの仲間は誰一人死んでいない。オレも死なない。仕方ないからここでケリをつけてやるよ」

エンドーは腕を前に構え、魔力を集中させた。

デンテールはその言葉を、ただのエンドーの強がりだと思い、とくに気にしなかった。

「たった一人でオレに勝つ？ 笑わせるな。小指一本であの世へ送ってやる」

「笑わせるな？ ははは、てめえこそ、小指一本でオレに勝てると思うな？」

それに対し、エンドーをふんと鼻であしらい、デンテールは視線を下に向けた。

「悪いが、もう一步前に来い」

エンドーは首をかしげ、言われるままに一步出た。

「こうか？」

「あばよ」

デンテールが片手を伸ばし、空調装置や小さなモニターなどの操作盤にある、大きなスイッチを“小指で”押した。

エンドーの足元の床が、パカッと間抜けな音で下へ開き、エンドーの姿は一瞬にして消えた。

「あああああああ……」

絶叫が床に開いた穴に吸い込まれ、飛行船のはるか下へ消えていった。

穴を覗き込んでエンドーが飛行船から放り出されたのを確認することなく、デンテールは椅子と体の向きを前に戻した。

「これで全員の始末を完了した。あとは例の計画の準備に取りかかるだけだ」

高笑いしたい気持ちを今は抑え、それを長い長い息に変えて口から吐き出した。

飛行船は海の上を、島へ向かって進行していく。

——空にエンドーを置き去りにして。

「うわあああああ！！！！ うわうわあああ！！！！」
落下するエンドーと、その絶叫。

頭から落ちていくエンドーは、遠ざかっていく上下逆の飛行船を、言い表せないほど悔しい気持ちで眺めていた。

「うおおおおお！！！！ オレは馬鹿かあああ！！！！」

「明らかな馬鹿ですね。百歩ゆずっても救いようのない馬鹿です」

「おーおー、言ってくれるじゃねーの！！ 今のは本気でグサツツときたぞ！！ ブレイク マイ ハーツ！！！！」

「そんなことを言っている場合ではありませんよ。自分が今おかれている状況を把握してください」

「飛行船から落下中！！！！」

マイクに思いきり叫ぶ。

「幸い下は海です。エンドーさんなら助かりますよ。エンドーさんなら」

「え？ 大丈夫かな？ オレなら大丈夫かな？」

「エンドーさんなら大丈夫ですよ」

「よっしゃあ！！！！ 遠藤京助のゴキブリ根性、今こそ見せてやらあ！！！！」

両手を合わせて下に突き出し、飛び込みの体勢をつくる。

耳に付けていたイヤホンが外れ、それを空中に残してエンドーは落下していった。

——ザボォーン!!

場所は変わり、城の最上階。ホールの扉から屋外へ出たマハエ、ハルトキ、大林、青島。

そこは、一メートルほどのコンクリートの塀に囲まれた広い屋上テラス。足元にはまんべんなく芝が敷かれ、デンテールの城には合わない、いいこの場のような場所になっている。

このテラスから、別の屋内へ移動できるようだ。

マハエは芝生にあぐらをかき、すでに塞がった肩の傷を撫でていた。怪我はほとんど完治したが、ジャケットにできた穴と、緑の布に染み付いた赤い血だけは隠せない。

ハルトキはマハエの前で、大林、青島と立ち話をしている。

「——なるほど、デンテールねえ……」

ハルトキから話を聞いた大林は、腕を組んで何度もうなずいた。

「ボク達の目的は、そいつを倒すことです」

ついさっき、その目的が変わったということは付け加えなかった。当然、必要以上のことは喋っていない。自分達がどこから来たのか、デンテールという存在についてなどは——

自分たちはデンテールという、王を名乗る極悪人を倒すためにここまで来た。ハルトキが話したのはそれだけだ。

大林が話せと言ったわけではない。ただ、再び出会い、助太刀をしてくれた彼等に何もかも隠し事するのは無粋な気がしたからだ。簡潔に語られた話だったが、大林はハルトキの言いたいことをすべて理解したらしい。

「すばらしいっす、アニキは」

感心したように青島が言う。大林も、

「ああ、深い事情があるとは思っていたが……」
そして塀の向こうの空に目をやる。

「逃げられたんだよな？ 当てはあるのか？」

「いえ、まだわかりません。もう一人、仲間がいるのですが……」
ハルトキはマハエの前にある無線機を見た。

芝の上に置かれた無線機からは、まだ案内人の声は聞こえてこない。

少し前、案内人から、エンドーがデンテールの飛行船に侵入したと報告があった。エンドーがデンテールの目指す場所を探り当てていれば――。

話が終わったのを確認したマハエが、のんびりした口調で言う。

「ねえ、ヨックーん。グラソンが今はオレ達を殺す気はないとして、この城はどうなると思う？ まだ爆発するような気配はないけど」

「そういえばそうだったね……」

ハルトキが大林達のほうを見ると、大林はすでに青島に指示を出していた。

「お前はみんなのところへもどって伝えろ。城から出るんだ」

「わかりやした」

青島が急いでホールへもどる。

「ボク達も早く行ったほうがいいね。グラソンが言ってた、テレポ
ート装置とかなんとか……」

マハエが尻を払って無線機を拾い上げたとき、ようやく案内人の報告が入った。

「デンテールの行き先がわかりました」

「お。待ってたぜ、案内人」

ハルトキと大林もマハエのそばに来てそれを聞く。

「デンテールはどこかの島へ向かったらしいです」

「ほう、どこの？」

マハエが訊く。

「“どこかの”です」

「だから、正確な位置は？」

「不明です。しかしデンテールが言っていた内容から考えると、そう遠くはない場所だと思います」

マハエは落胆した。

「と言つてもなあ……。そんな島なんて――」

案内人はさも簡単そうに言うが、情報が少なすぎる。文句を言うとしたとき、マハエの頭に引つかかるものがあつた。

「……わかつた、案内人。ヨッくん、行こう」

首をかしげているハルトキにそう言う。

「どこへ？」

「心当たりがある」

38：堂々シカバネ

マハエ、ハルトキ、大林は最上テラスに敷かれた芝の上を歩き、グラソンが言っていた装置の部屋に続いていると思われるドアを見つけた。

大林は、自分も供をすると言い、一緒に行くことになった。

「ところでエンドーは？ どうしてる？」

建物に入り、敵の気配がないことを確認すると、マハエが案内人に訊く。

「今、必死に泳いでいるでしょうね」

「泳いでる？」

「岸目指してがんばってますよ」

ぽかんとするマハエだが、案内人の言い方から、とくに危険な状態ではないことを感じ取る。

芝のテラスに増築されたような建物は、大きさのわりに中には何もない。

本来は四角形の部屋だろうが、無駄に壁で隔ててあり、軽く迷路だ。だが、ただそれだけなので、目的の部屋はすぐに見つけられた。建物の奥の隅にあったドアを開けると、怪しげな機械—— テレポート装置があった。

「これが、テレポート装置か？」

「みたいだね」

「王ってやつは……。いったいどれほどの技術を持っているんだ？」
大林はデンテールの飛行船の話にも、マハエが持っていた無線機にも驚いた顔をしていた。技術が進んでいないこの世界のもともとの住人にとっては、この城のあらゆるものが驚きなのだ。

大林の疑問に、二人は答えることができない。

「行きましょう」

そんな二人に助け舟を出すように、案内人が言った。

——最初にハルトキ。次に大林がテレポートする。

一度に一人ずつしかテレポートできないようで、一人がプレートに吸い込まれると、それから数秒間待たなければならぬようだ。

大林の数秒後、最後のマハエがテレポートした。

——強い光に包まれ、光の空間を移動する。

光が消え、足が地面をとらえると、バランスを崩して床に手をついた。

「うえ…… 気持ち悪う……」

目を閉じてくらくらする頭を落ち着かせる。

「テレポートしたんだよね？」

先に到着していたハルトキが、すでに立ち上がってさっきまでとは明らかに違う建物の中を見回していた。

薄暗くて狭く、装置以外の物は何もない。壁は厚いレンガだ。

頭が正常に戻ると、三人は一つだけあるドアを開けた。

「——ああ……、ここは……」

日の光と海鳥の声、塩の香りが小屋の中に流れ込んだ。

マハエは短く笑った。

「よかった。手間がはぶけた」

そこは、マハエが対S A A Pに拉致されたあの港町の、赤い屋根の小屋だったのだ。

そのときは昼前だった。今は日が傾き、おやつ時間も過ぎ、夕暮れも近い時分だ。

「マハエ、キミが言う心当たりってというのは？」

「ああ、この港町には一度来たんだけど、そのときに海の沖のほうに妙な島を見つけたんだ」

“壊れた案内人”がマハエを展望台へ誘導し、そのとき沖のほうに島を確認した。そのことを聞かされたハルトキと大林はそれぞれ

頷いて、ハルトキが言った。

「価値アリ。だね」

調べてみる価値はある。しかし問題は――

ハルトキは大林を見た。

「わかった。オレに任せろ」

できる限り協力したいという思いで二人に付いてきた大林。島へ渡るには船が必要なのだが、自由に使える船なんてない。

「船を借りる交渉をしてくる」

港に出て大林は言うのと、港に何人が居る漁師のもとへ行った。

「――きれいな海だね」

大林を待つ二人は、並んで広い海を眺めた。

「この世界に悪人がいるなんていうのが信じられないよ」

ハルトキが言う。

「どの世界にも、クソツタレはいるもんさ。……でもオレは、やっぱりこの世界が壊れるのは見たくない」

「ボクだってそうだよ」

ハルトキはマハエを見て笑い、再び海へ目をやった。

「デンテール……。何を企んでいるんだろうね？」

――話をする二人から少し離れた桟橋の先に、一人の少女が居た。彼女の趣味は風景画。

今日もいつもの場所でパレットを手にしている。

今はスケッチブックに水彩だが、いつかは油絵にも挑戦したいと夢見ている。

使用する色は青。青い海と青い空。そしてその境界線上にぽつんとある黒い島。

一年前ほど前に突然現れた謎の島。町の人々には『黒鬼の島』と

呼ばれ、死者が住む、鬼が住むなどと恐れられている。

しかし彼女はそうは思わなかった。死者や鬼が住むなど馬鹿らしい話で、少なくとも彼女はその謎多き島に魅了された。

「よしっ」

少女は筆を置く。

三日かけて海と空を完成させた。あとは真ん中にメインである小さな島を入れ、仕上げるだけ。

黒と白の絵の具を取り出すため、足元のバッグに手を伸ばした。

——彼女は手を止めた。

「……………」

何かいる。そう感じた。

海の中に、何かがいる。

バッグに伸ばした手を引っ込め、棧橋から水中を覗き込んだ。

——コポコポ……

いくつもの空気の塊が浮き上がった。

もっとよく見ようと、四つん這いになって顔を近づける。

泡が消えて数秒後——

「……………!!」

少女は固まった。

水中から人の顔が浮き上がってくる。

目を閉じ、口を大きく開け、水面に浮かび上がってくる男の顔。

短髪の、痩せた少年の顔——

きっと海に捨てられた死体が浮き上がってきたんだ。そう思い、早く誰かに知らせなければと思うが、体が動かなかった。

「いや……、いや……」

少年の顔がとうとう水面に現れた。そして—— 目を見開いた。

「（いやあああああ……!!）」

少年の死体は、「うあああううう……」とうなりながら棧橋に

手を伸ばす。

思い切り叫びたい少女だが、あまりの恐怖に声が出なかった。混乱する頭の中に町の人達の噂がよぎった。

生きた死体。亡霊だ。亡霊に違いない。きっと“あの島”から流れてきたんだ。少女は震える手でスケッチブックを抱きしめ、尻をついたまま、力のない足でどうにか逃げようと努力する。

少年の死体が棧橋に手をかけ、這い上がってくる。

「うううううううう……」

少女はもう、身動きが取れなかった。

死体が上半身を棧橋に乗せた。そして少女に向かって這いずってくる。死体が身につけている黒いジャケットと真っ赤なスボンから、水が染み出し、棧橋を濡らす。

彼女の中で、もはや噂は疑いようのないものとなった。

蘇った死体は生きている人の肉を食らうと、昔聞いた話を思い出していた。

「いや……、やめて……。こ、こないで……」

少女は涙を流し、懇願こんがんした。

死体がよろよろと立ち上がる。

ベチャッ、ベチャッと音を立てて更に少女に迫り——少女の横を通り過ぎていった。

「……………」

少女には何が起こったのかわからなかった。周りの音も何も聞こえなくなっていた。

——マハエは、棧橋のほうからよろよろと歩いてくる人物に手を振った。

「おおー、エンドーじゃーん！」

「ううううう……」

うなるエンドーは、全身びしょ濡れでかなり衰弱している。（棧

橋の上で、少女がヒステリックに笑いながらスケッチブックを破り捨てていた)

エンドーは二人の前まで来ると、ベシャン！とうつ伏せに倒れた。

「……大丈夫か？」

マハエが声をかける。

「……そう見えます？」

「どうしちゃったの？」

ハルトキの質問に、エンドーはうつ伏せのまま答える。

「いやあ……、デンテールの、なんともシユールな罠に引っかかってしまつてねえ……」

「至極古典的な罠です」

案内人の即座の付け足しを、エンドーは無視する。

「あー……、あの野郎ムカツク……！」

エンドーが仰向けになつて叫ぶ。

「まあ、そうだな。デンテールの野郎、いつも卑怯な手を――」

「なんであんなに、かっこよくなつてんだよお……！」

「そっちか……！」

二人が突つ込む。

「秘訣が知りたい……！」

数秒前までの衰弱ぶりはもう見られない。子供がダダをこねるように、手足をばたつかせている。

「まあまあ、エンドー君。落ち着きなさい」

マハエがなだめ、エンドーは「フーッ！」と腹から怒りを吐き出した。

「それで、デンテールの向かった場所は何？」

ハルトキがエンドーを助け起こす。

「おうよ、ここから北へ向かつていたから、その先にある島だな」

「やっぱりあの島で間違いないな」

マハエは自慢げにうなずいた。

「どうやって行くんだ？」

エンドーが二人に質問したとき、大林の呼ぶ声が聞こえた。

「おい！ こっちだ！」

一隻の船のところで、大林が手を振っている。

いくつも桟橋が並び、いくつも船がある中の一つ。小さな漁船の横に、大林と、漁師と見られる中年のおじさんが立っていた。

「この人が船を貸してくれるらしい。急ぐのなら早く出発しよう」

おじさんの手には、金貨が入った袋が乗っかっている。貸賃を払うということで交渉したのだろう。

大林は船の上で帆を張り、出航の準備をしている。

「聞いた話では――」

三人が漁船に乗り込んだのを見て、大林は話し始める。

「あの島は『黒鬼の島』と言われていて、約一年前に突然現れたらしい。数々の噂があるが、どれも良いものではない」

面白がつて近づいた者がいて、島の周りを囲むように奇怪な潮流が発生していたという。その流れは激しく、近づきすぎると沈められるほどらしい。

「まあ、あの島へ行くななんて、船の持ち主には言っていないけどな。そう言えば貸してくれはしないだろうか」

碇を上げると、準備は完了。船はゆっくりと前進し始めた。

「黒鬼の島……。ははは……。鬼よりも恐ろしいものが住んでそうだな」

マハエが苦笑すると、ハルトキ、エンドーもそうした。

港から離れていく漁船。決着をつけるその場所へと三人と大林を運んでいく。

鬼よりも、悪魔よりも恐ろしい、王のもとへと。

39：縛り付けるもの

「さて、まず何からお話ししましょうか？」

出航から数分。港も遠くなり、ついには波と風の音しか聞こえなくなつた。

大林は一段高い位置にある操舵席。そしてマハ工達三人は操舵席の前で、無線機——案内人を囲んであぐらをかいて座っている。

「まず、なぜお前が無線機の中にいるのか教えてくれ」

ようやく案内人から詳しい話を聞ける機会が訪れた。島に着くまではまだ時間がある。いろいろと訊きたいことがある中、最も最初に訊いておくべきことをマハ工は訊いた。

案内人は「わかりました」と答えて続けた。

「港町でマハ工さんと話をした後のことです。それまでどうも調子が悪かったのですが、そのときに何かに引きずり出されるような感じがしたのです。原因不明のエラーが次々に起こり、原因を特定するのにずいぶんと時間がかかりました。そして、ようやくそれがわかったとき——すでに手遅れでした。エラーは、強引にわたしのセキュリティを破られたことによるものでして、そうなってしまうてはもう抵抗もできず、わたしは強制的にシャットダウンされてしまいました。その後、再起動されましたが、すでにこの無線機の中でして……」

申し訳なさそうに言う案内人。

「デントールはどうやって、お前に手を出せたんだ？ 制作者側のコンピューターのプログラムなんだろう？」

マハ工が首をひねる。

「お忘れですか？ あなたたちも現実世界からここへ来たんですよ？ つまり制作者のコンピューターと、この世界はつながっているのです。デントールはあちらのコンピューターに手が出せる」

「たちの悪いウィルスのようなものです」と付け加えた。

そもそも三人がこの世界に送られてきたのもそのためなのだ。デ
ンテールがコンピューターに異常を与えていたことが原因で。

「厳密には、彼自身が向こうのコンピューターに行き来できるわけ
ではないです。おそらくこちら側のコンピューターとリンクさせた
のでしょう」

案内人は、このことについて自分でわかっていることをすべて話
す。

「わたしの『核』の部分はこの無線機に移し、本来のわたしである
プログラムを都合のいいように書き換えたのです」

「なぜわざわざそんなことを？」

ハルトキが訊く。

「それはわかりませんが、核を無線機に移したのは、おそらくグ
ラソンです」

「あいつが……？」

「誰や？」

こう言ったエンドーに、二人は説明した。

「——デンテールはデンテールで、グラソンのほうも何か企んでる
みたいだね。どちらにも警戒しないと……」

「デンテールの企みか……。あいつはけっきょく、オレ達に復讐し
たかっただけなのか？」

一番の疑問をマハエが持ち出す。

「それについては、仮説ですが……。彼がもともとプログラムだっ
たせいかもしれません」

「というと？」

「彼がもともとゲームのボスとしてつくられたというのは話しまし
たが、そのとき彼の中に追加されたプログラムが『執念』」

「そういえばそんなこと話してたね」

三人は前回のゲームの世界で聞いた案内人の話を思い出した。

もともと最終ボスとしてつくられたデンテール。しかしそこへ組

み込んだ『執念』というプログラムが暴走したために用済みとなった。だが彼は厄介な力を手にし、二度も三人を苦しめている。

「そう、デンテールがあなたたちに執着するのは、その『執念』が原因だと思います。もともとプレイヤーを倒すことがデンテールの目的なので」

三人は額を押さえる。

「ボク達を倒すという目的を達成させる『執念』……」
ハルトキが呆れる。

「すべて制作者のミスじゃねえかあ!!」

エンドーは激怒する。

「制作者の自業自得に、オレ達が巻き込まれている、と……」
一斉に溜め息をついた。

「デンテールからしても厄介なミスでしょうね。あなた達が死ぬまで、彼の『執念』は消えません」

「オレ達と同じか……。オレ達を倒すことがやつらの任務……」
城でデンテールが言っていたことを、ようやく理解できるのだった。

エンドーが仰向けに倒れる。

「……あわれだな……」

どうりでひねくれるわけだ。と、エンドーは苦笑した。

「しかし、だからといって見逃すわけにはいきません。彼は敵なのです」

エンドーは起き上がった。

「わかってるよ。きつちりケリはつける」

そしてマハエ、ハルトキを見て、案内人を見る。

「わかってもらえて、こちら嬉しいです」

疑問に思うことはまだまだあったが、それを訊く前に上から大林の声が。

「おーい、そろそろ着くぞ」

それは、島が近づいてきたという知らせだった。
最初大林を見た三人は、島へ顔を向ける。

「——おっと、その前に厄介な問題が」

船は島へとちやくちやくと進む。しかし、それを阻むように島の周りには奇怪な潮流が発生している。まるで島の周りだけに嵐が巻き起こっているかのように荒れ、波がうねっている。

「まずいぞ……」

大林が操舵席で苦戦している。舵が動かないようだ。

「このままじゃ、引きずり込まれる……！」

急いで帆をたたむが、船はぐんぐんと怪潮流に近づいていく。

「どうする！？ 何か解決策は……！？」

マハエがハルトキを見る。ハルトキは眼を光らせて集中している。魔力で島を観察しているようだ。

周囲の波が荒れ始め、激しく船を揺らす。

大林は舵と格闘し、マハエとエンドーはハルトキを信じて待った。

「——島の栈橋に妙な装置がある。もしかしたら、それでこの波を操作してるのかも……」

こちらへ向かって突出したコンクリートの栈橋をハルトキが指差した。

栈橋の先端に旗を掲げた一本の柱があり、その下にクランクの付いた装置が設置してある。

「島にあつたってどうしようも——」

おろおろするエンドーの横をマハエが走り抜けた。

「うおおおおお……！」

マハエは助走をつけて船首を踏み込み、魔力を放った。

「マハエ!？」

衝撃波で船がさらに揺れる。

栈橋まで十メートルはある。魔力を使った大ジャンプでも、届きそうにない距離だ。

「くっそおお!!」

栈橋まであと四メートル。しかし、届かない。マハエはそのまま海へ落ちていく。

——ドドドオン!

エンドーが飛ばした三つの魔力球が、栈橋の柱を根元から爆破した。

柱は海側へ倒る。

「(ナイス、エンドー!)」

自分の目前に倒れてきた柱を足場にし、再度魔力を放つ。

——無事、マハエは栈橋に降り立った。

そのまま船へ振り向くことなく、クランクを回した。

ひと回りすることに、荒れた海が静まっていく。限界まで回すと

マハエは船を見、沈んでいないことにほっとした。

——船は栈橋の横に停泊し、ハルトキとエンドーが胸をさすりながら下りてきた。

「ひやひやしたぞ。でもさすがマハエだ」

「ボクは信じてたよ。キミならやってくれるって」

「やればできる子です」

ただ一人、大林だけは何も言わなかった。——言えなかったのだ。自分の目で見たことが信じられなかった。それでも、ハルトキという少年の普通ではない雰囲気を感じ取っていた。だが、ついさつ

き、それはさらに深みを増した。

大林は、「お前たちは何者なんだ？」と喉まで出かった言葉を押し殺した。

それは訊くな。訊いてほしくはない。言葉では言われなくとも、それを訊いてはならないことも感じ取っていた。

三人は島を観察する。

この島は人工島らしい。海に浮くコンクリートの塊だ。島の中央を水路が通っていて、水が海へ流れ出している。水路を海からたどると、高い建物が目に入る。それは城というよりは、要塞といった感じだ。

飛行船は収納されているのか、見当たらないが、要塞の最上階にデンテールがいることは明白。

マハエはメンバーを見回した。

大林の戦闘能力は、人としては最高水準だろう。しかし相手はデンテールなのだ。加わったのが大林だけというのはまだ不安が残る。前回の戦いで、デンテールも学習したはずだ。もうあのときのようにはいかないだろう。

「（宗萱が居てくれれば——）」

マハエは首を振ってその思いを捨てた。

「——すまん。野暮用ができた」

要塞へ向かおうとする三人の後ろで、大林が言った。

大林は栈橋の先端で、何かを待ちかまえるように立っている。

もう一隻、船が近づく音と合わせ、怒鳴るような低い声。

「ははははは！！ まだ終わらんぞお！！！！」

窪井だ。四人を追って、窪井が小さな船で島へ接近する。すでにバケモノモードで。

「たくましい筋肉してますな」

窪井の筋肉に対するエンドーの普通すぎる反応に、マハエとハル

トキは驚く。

「しつこいやつだ。KEN 窪井。——お前達は先に行け」
大林がやれやれという感じで言う。

「無理ですよ！ さっきだって四人がかりでやつと——」

マハエは最後まで言いかけて息を吐いた。その姿は宗萱に似ていた。決心、覚悟を決めた戦う者の姿。

——『忘れないでください。戦う者の意志を』

宗萱の言葉が蘇った。

「オレは大丈夫だ。さあ、行け！」

もう味方が犠牲になるのは見なくなかった。だがマハエも決心した。自分達を守るために、道をつくるために犠牲になる者がいる。

自分達はその道を進まなくてはならない。それが戦い、盾になる者の意志に答えることなのだ。

ハルトキは何も言わない。しかし、拳を握り締め、小刻みに震わせている。彼はすでに決心していたのだ。

「行くぞ」と、言葉を出さずとも、三人の意思は疎通していた。

——ただ無事を願い、振り返らず、自分達の意志を貫く。

この因縁を断ち切るために。

——三人が居なくなつた棧橋で、大林は敵を待ちかまえていた。手元の装置のクランクを操作すれば、島への上陸を防げるかもしれない。しかしそうはしない。

「来い、窪井！ この腐った因縁。オレ達も終わらせようじゃないか！」

40：遊戯の道

ようやく三人がそろった。

そして三人は今、最終決戦の地にいる。

——最終決戦にしたい。ここで終わりにしたい。そう願う。

船着き場を離れてしばらくすると、船が棧橋かどこかに突進する音がした。窪井が上陸したのだろう。

三人は黙って進んだ。

歯を食いしばり、口を開かないように。それを解けば弱気な言葉が滑り出しそうで恐かった。

船着き場から遠ざかり、振り返っても船が見えない位置まで行くと、エンドーが喋り始めた。

「オレ達が一本の鎖でつながれているってこと、忘れるな。一人の危険は全員の危険につながる。目の前のことに集中しなければいけないんだ」

エンドーがそれまで黙っていたのは、単に喋り出し辛かったからだ。彼は宗萱のことも大林のことも知らない。だから二人の苦しみもそれほど理解できない。

ただ、二人とも前日に別れるときよりも、強く成長しているということはわかった。

「わかってるよ、エンドーちゃん。オレ達は一本の鎖。オレが先頭で落ちたら、無理矢理にでも道づねにしてやるからな。覚悟しとけ」
「いや、そのときは迷うことなくチェーンカッター」

「……エンドー、矛盾してるよ」
表向きはいつもの二人にもどった。

「一人でも二人でも、オレが引っぱり上げてやる」

二人の後ろで、エンドーは聞こえないようにぼそりと言った。

——そのとき、三人の上空には白い飛行物体が浮遊していた。
小さなバルーンに、プロペラが推進力となっている物だ。

そして、底部に取り付けられた小型カメラが、島のあらゆるところを“見ている”。

要塞の一室——城のものと変わり映えない、赤いじゅうたん
が敷かれた部屋で、デンテールは『空中巡回型監視カメラ』がモニターに映し出す映像に見入っていた。

モニターの映像では、マハエ達三人が要塞入り口付近の水路の上
にある、狭い足場を渡っているところだった。

ロックされた鉄扉を無視し、その先にあるハシゴを使用して水路
の上上がったところだ。

「……まさか、生きていたとは……。グラソンめ、しくじったか」
困ったしぐさをしながらも、嬉しそうな顔をするデンテール。

「仕方ない。オレが直接手を下そう」

そして、効率よく決戦の場へ導くため、コンピューターで扉のロ
ックを操作しながら道を考える。

ロックのスイッチを切り替えていくデンテールは、ふと手を止め、
カメラの映像を見た。

「そうだ。最後の難関として、“番犬”の相手をさせてみよう」

——ルートは決まった。自分がより楽しめ、よりわくわくできる
道順に。

要塞には数えきるのにくたびれるほど大量のカメラが設置してあ
る。その映像は、彼の操作ですべてこのモニターに表示されるよう
になる。

必要な扉をすべて操作し、このまま三人が進むであろう道順がマ

ツプ上に表示される。

「さあ、最後のあがきをしてみせよ」

デントールは笑い、“健闘を祈った”。

上空から監視するデントールの“目”に、三人は気付かないまま水路を伝って三つ目の滝まで来た。

そこからはまた、ハシゴや階段で段を登っていく。

これが正しい道だとは三人は思っていない。

当然、デントールがこんな面倒くさいルートに行くわけがない。

前にあったロックされた鉄扉から行ったのだろ。今のルートは良くて遠回り。最悪、全く別の場所に行き着くかもしれない。

しかし三人は進む。複雑に折れ曲がった、細い、道と呼ぶのも危うい足場を。

踏み外せば水路に落ちてびしょ濡れになる。

「あー、オレさっき海泳いで塩まみれなんだよ。ここで体洗って行きたいなー」

エンドーが言うが、二人が却下する。

「デントールが見栄えのためだけにこんな水路をつくったと思うか？」

「……やっぱやめところ」

マハエの言葉に、エンドーは思いなおす。

見た目は透き通った水だが、汚物や、未知の細菌が混ざっている可能性もあるからだ。

水路は途中で二股に分かれているが、足場は片方の水路側にしかない。

三人は足場をたどって行き、溜め池が見えたところで立ち止まった。

まだ屋外だが、だいぶ要塞の入り口に近づいたようだ。

「狭い道はここまでか。やっと楽な道だな」

そう言って先へ進むエンドーを先頭に、溜め池の架け橋を渡り始める。

「何の水なんだろうな——？」

低い手すりから上半身を乗り出し、池の中を覗き込んだマハエは、しばらく沈黙し、呆然と口を開いた。

「どうした？ マハエ？」

二人は立ち止まり、ハルトキが同じように覗き込もうとする。

「……走れ、エンドー！」

マハエが叫ぶ。

「わっ！？」

水の中から何かが跳ね上がる音がし、直後、黒い影がハルトキを襲った。

ハルトキが身を後ろへそらしてそれをかわすと、影は三人の頭上、橋を越え、反対側へ落下した。

「なんだ！？」

「うじゃうじゃいるぞ……」

水中には、同じような影がいくつも泳いでいる。

姿は巨大な灰色のウナギ。灰色のうろこをまとった長い魚だ。長さは一メートルをゆうに越える。だが、不気味なことに、目は大きくて赤く、口も大きい。それが鋭い牙をむき出して飛びかかってくるのだ。

一匹が跳ねると、それを合図にしたように何匹もの“怪魚”がいつせいに飛びかかる。

「走れ！」

エンドーの掌底が怪魚を打つ。と、同時に手の平が爆発し、怪魚が吹っ飛んだ。

体をねじり、反対側から飛びかかる怪魚にも魔力球を込めた掌底を放つ。身を屈め、頭上を通り過ぎる怪魚には、腰から抜いた無刃刀を叩き込んだ。

「……エンドー、すごく強くなつてない？」

ハルトキが低い体勢を維持しながら言う。

「……あいつにケンカ売るのはひかえよう」

マハエは動体視を使うハルトキの後ろに隠れながら移動する。

「ぎゃっ！ エサ与えてないのか！？」

マハエは自分の腕に噛み付いた怪魚を、服の袖ごと引き剥がす。

エンドーも噛み付かれたが、腕から引き剥がし、水の中へ投げ込む。更に飛びかかる二匹も手の平で叩き返す。

——ドボボボーン……！！

三本の水柱が上がる。

エンドーがリリースした—— 魔力を貼り付けた三匹が爆発したのだ。

水柱に何匹か巻き込まれ、舞い上がる。

エンドーのおかげもあり、三人はエサになる前に橋を抜け出した。

「帰りのルートは変更しよう……」

マハエの案に二人もうなずいた。

溜め池近くのロックされていないドアから、壁一枚向こうへ行く。

三人はその奥にある建物を眺めた。

「やつと要塞内部か？」

独り言のようにマハエが言う。

水路の水はその建物の中から流れ出ていた。

アトラクションも中盤。いよいよステージは屋内だ。

そして、例の如くドアの前でもめ始める。

「エンドー、先に入れ」

マハエがエンドーの背中を押す。

「は！？ なぜオレが！？」

「エンドー隊長、先に入ってください」

「よしわかった！ オレについて来い！」

『隊長』という言葉にエンドーは齒を光らせた。武器を持っていないマハエは一番後ろだ。

「最終決戦の前に武器を装備してないなんて、命知らずな勇者だね」

「仕方ないだろ、あの隠れマツチヨに折られたんだから」

マハエは溜め息をついた。

エンドーが、建物のドアを開けて鼻をつまんだ。

「臭え……」

大きなコンクリートの水槽が並んだ部屋。

奥の水路から紫色の水が流れ、水槽に入り、浄化されていく。それが三人がたどってきた水路に移り、流れていくのだ。

鼻をつく悪臭は、紫の水から臭うようだ。

「……マハエ、ありがとう」

エンドーがマハエに頭を下げる。

「さっき、体洗おうとしたオレを止めてくれてありがとう」

「この恩、忘れるなよ」

できるだけ呼吸を止めて、三人は浄水場を抜けた。

「あの紫の液体は何なんだ？」

無臭の空気です呼吸をしながらエンドーが浄水場のドアを振り返る。

「くだらん実験でもしてるんじゃないか？」

「デンテールのやることは、十中八九ボク達に迷惑がかかることさ」

マハエが両手を肩の高さまで持ち上げる。

「勘弁してほしいな」

もうデンテールの妙な研究もモンスターも、三人はこりこりだった。

三人がエレベーターに乗るところを、監視カメラはしっかりと捉えていた。

着実に、デンテールが作りだした道順を進んでいく。
デンテールはほくそ笑んでいた。

41：醜惡なペット

エレベーターが停止した。

三人はそこから見える廊下の階段に目を向け、次に横の通路に向いた。

エレベーターの上昇時間からして、ここは要塞のほぼ最上階。三人は横の通路へ足を進めた。

「デンテールは、オレ達の侵入に気付いてるかな？」

マハエが言うと、ハルトキが首を縦に振る。

「さつきから誰かに見られてる気がする。隠しカメラで監視されているかもしれない」

「でも、だとしても、やつの兵が襲ってくる気配はないぞ？」

エンドーが首を傾げる。

「デンテールがボク達に気付いて、兵を送ってこないとする——デカイのが来る」

ハルトキの言葉に、マハエとエンドーは鳥肌を立てる。

「ザコを送って無駄に兵力を消耗させるより、強い一体を送り込むだろうってこと」

「……よくまあ、冷静に……」

「ボクだって恐ろしいよ。でも、一人のときよりは全然恐くない」
エンドーも頷く。

——『三本の矢』は、簡単には折れない。

通路が広くなった場所に、二方向の分岐点があった。

一つは派手さのない木のドア。もう一つ離れたところには派手な赤い扉。

どちらがゴールへの道かは、考える必要もない。

だが、赤い扉はロックされていた。

「やすやすとボス部屋に近づけないか……」

「当然だろマハエ、中ボスをスルーして大ボスなんてあり得ない」
『あり得ない』の部分の大げさに言い、やれやれというように両手を広げるエンドー。

三人は木のドアへ進むハメになった。

ドアを開けると、冷たい風が三人の顔面にぶつかった。
屋外の狭いバルコニーに出たのだ。

じきに赤く染まるであろう空を眺めて、エンドーが言う。
「晩飯までには終わらせたいな」

——誰かの腹が鳴った。

「腹が減っては戦はできぬー……。弁当でも持ってくるんだった」
エンドーが腹を押さえる。

「『武士は食わねど高楊枝』って言うじゃん。行くぞ」

「デンテールがオレ達の侵入に気付いていることを願うよ……。もしかししたら、おもてなし料理でも準備してしてくれるかも……」

「無理だな。あいつケチだ」

「うん。絶対ケチだよ」

「……ケチだよなあ……」

バルコニーの壁に長いハシゴが固定され、屋上へ伸びている。
それ以外に道はなく、三人はハシゴを上った。

風がいつそう冷たく、きつくなる。

「あの扉かな？」

二十メートル四方の屋上に、また低い壁があり、鉄扉があるのをハルトキが見つけた。

だが扉はロックされていた。わかりやすい位置に鍵穴があることから、ここを進むには力ギが必要だ。頑丈なもので、大量の爆薬でもないかぎり破壊できそうにない。

「問題は力ギだが——」

エンドーが言葉を止めると、同時に三人の頭に嫌な感覚がよぎった。

ようやく、自分たちが意思に導かれてここへ来たことを確信する。

三人はほとんど一緒に振り返った。

オオオオオオオオオオオオ……

二体の対S A A Pが、いつの間にか三人の背後に出現していた。
「こいつらか……。ザコでよかった」

エンドーが腕を構える。一瞬で終わらせようと考えているのだが相手の様子がおかしい。

二体の対S A A Pは、それぞれが一本ずつ鎖を持っている。鎖がマントの中から三人の頭上へ伸びている。

「なんだ……？」

対S A A Pが鎖を引いた。

ジャラジャラジャラという音の後に、三人の頭上――鉄扉の上で鉄の柵が開く。

三人が行かんとした扉の上には柵で封鎖された抜け穴があった。その柵が開かれ、奥にいた生物が解放たれる。

穴から飛び出し、頭上を舞う大きな影を三人は目で追った。ずっと吹いている風とは違う風が通り抜ける。

まるでその風に裂かれるかのように、一瞬で二体の対S A A Pがばらばらになった。

「ゴワアアアウウウ!!!」

びりびりと鼓膜を刺激するケモノの咆哮。

軽々と三人の前に降り立った四足のケモノ。姿はオスのライオン。大きさは通常のそれよりもひと回り大きく、全身は赤い。何より普

通のライオンと大きく違うところは、背中に翼竜のような巨大な漆黒の翼を持ち、ドラゴンのように太く、トゲが付いた尾を持っている。おまけに額部分には一本のツノが。

「このようなモンスターまで……。まさか、複数のモンスターの組み合わせ……？ 吉野さんこれは——」

「うん。でもボクが戦ったやつとは比べ物にならない」

複数のモンスターの一部がライオンと融合している。姿はまさに融合生物『キメラ』だ。

キメラは、登場するや対S A A Pを切り刻んだ己の爪を不思議そうに眺めている。

ハルトキがトロツコ置き場で戦ったトカゲにヘビが融合したモンスター。それはあまりにも不格好なものだった。だがこのキメラはそうではない様子だ。

「ヤバイな。敵味方関係なしだぞ」

「それだけならまだいいんだけどよお、マハエ。やつの首を見る」

キメラのたてがみの間に見え隠れするキラリと光る物。

「扉のカギか！」

「やっぱりデントールは、ボク達に気付いていたのか……」

目の前の凶暴なケモノを倒すか、どうにかしてカギを奪うかしなければならぬ。

キメラが巨大な前足で石の床を踏み、三人をにらんだ。

「凶暴なペットを飼いすぎだな。あいつは」

顔を引きつらせて笑うマハエ。

屋上の端で炎が上がる。ここへ続いていたハシゴが燃え尽きたのだ。

デントールの醜悪な趣味は、どれも彼らを震え上がらせるものばかりだ。

恐怖をあらさまには表に出さない三人だが、心の中ではいつも震えていた。他人に弱みを見せない。そう決めて生きてきたのだ。

キメラが軽く吠えた。

三人は構え、次の瞬間キメラがとびかかるのを横へ逃れ、散る。キメラが体を回し、太い尾を振り回した。だが、とっさに床に伏せた三人にはヒットしない。

ハルトキが魔力を飛ばした。魔力はキメラを縛りつけ、動きを止めるはず。だがキメラは後ろへ跳び、魔力の鎖を回避した。ケモノの本能か、危険を感じ取ったのだらう。しかし、次に放たれたエンドーの魔力球は回避できなかった。

魔力球がキメラの頭部で爆発。

「よし！」

ガッツポーズをするエンドーだが、途端に喜びの表情は固まった。

「ガルルルル……！！！」

キメラの眼が鋭く光る。

「……あ、怒っちゃった？」

エンドーは自分へ向かって迫ってくる巨体に無刃刀を両手で横向きに構える。キメラの額のツノが無刃刀にぶつかり、ものすごい怪力でエンドーは押される。迫る力に対し足を後ろへ動かすが、とうとう壁に押し付けられ、逃げ場を失った。

「エンドー！」

助け出そうと駆け寄るマハエとハルトキが、キメラの尻尾になぎ倒される。

「——っこのっ……、調子に乗んじゃ——　ねえ！」

片手を無刃刀から離すと、そのまま掌底をキメラの鼻先に叩き込んだ。

掌に備えられた魔力球が炸裂。この一撃でキメラはひるみ、エンドーは壁から逃れた。

ずいぶんと丈夫な肉体だ。ダメージは受けども、キメラの体に傷

はつかない。鼻の頭にテープをくつつけられた猫のように、腕を鼻にこすりつけている。

エンドーは無刃刀を振り上げて力を込めると、キメラの角を叩き折った。

キメラは上半身を跳び上がらせ、後ろ足でエンドーのほうへくると回った。

「うわっ！」

尻をついたエンドーを鋭い牙が襲う。が、肩に食らい付く寸前で動きが止まった。ハルトキの『金縛り』が成功したのだ。

すかさずマハエが魔力で巨体を蹴り飛ばす。

「助かった！」

マハエの腕に助け起こされ、エンドーは安堵する。

キメラは床を一回転がり、体勢を立て直した。

三つ並ぶ標的の前に、どれを攻撃するか迷ったあげく、一番離れた位置にいるハルトキへ突進する。

動体視のおかげですぐに対処できるハルトキは、正面から突っ込んでくるキメラへもう一度魔力を飛ばした。

前は危険を感じ取り、回避したキメラだったが、今は頭に血が上り、危険を逃れるという本能を捨てたのだろう。横へ攻撃をかわすでもなく、そのまま突進し、片方の爪で魔力の鎖を切り裂いた。

その迫力に圧倒されながらも、ハルトキはキメラの連続爪攻撃をダガーで軽く受け、かわす。

「ガルル！！！」

キメラの猛攻は止まらない。

ハルトキは端まで追いやられ、足場と何もない空間を隔てる低い『囲い』に足を止められた。

これ以上後ろへ逃れたら、屋上から落下してしまう。

「ヨッくん！」

エンドーが叫んだ。

床に伏せるハルトキの背中を、横に振られた爪がかすり、服を裂

いて薄皮に傷を残した。

自分の真下で身動きできない体勢のハルトキをトドメようと、下へ向けて、両手計十本の爪をむき出しにし、跳ね上がった。

だが、ハルトキは考えなく床に伏せたのではない。両手で頭を覆い、待った。

——ドドドオン……！

三つの魔力球がキメラを吹き飛ばした。

あとコンマ数秒でハルトキを葬るところ。しかし、巨体は空中で弾かれ、一度バウンドすると、そのまま囲いを越えて落下していった。

「——いてて……」

傷ついた背中を押さえながら立ち上がるハルトキは、駆け寄ってきた二人に笑って無事を知らせた。

「しまったな……」

エンドーが頭をかいだ。

「先へ進むカギ、あのライオンが持ってたのに。一緒に落っこちまった」

「……死んだかな？」

キメラが落下した場所から、下を覗くマハエ。

「——いや」

ハルトキが残念そうに首を振る。

「あちゃ……」

マハエが囲いから後ずさると、ゴウ、ゴウと、巨大なうちわを振るような音が下から上がってきた。

「そうだった。あいつ翼があるんだったな」

再び三人の前に姿を現したキメラ。

背中に移植された翼は見せ掛けではなかったのだ。

「ヤバイな……」

つぶやくハルトキには、形勢が変わったのがわかっていた。陸と空、どちらが不利なのか。

42：翔るケモノと

「エンドー……、お前、空を飛べる技とか、覚えた？」

マハエが隣のエンドーに訊く。羽ばたき、鷹のように上空をぐるぐる回っている巨体から目を離さずに。

「いや、まだ覚えてない。お前こそ、そういう技使えないのか？」

エンドーも同じく、敵から目を離さないまま訊き返す。

「ハハハ。まっとうな人間にそんなことできるはずないだろう」

「……お前はオレを何だと思って、今までを共に過ごしてきたんだ？」

「人間離れしているとは思っていたよ」

エンドーは上を見たまま、マハエの後頭部を叩いた。

ハルトキは二人の前で、冷静に敵を観察している。

マハエが言う。

「ヨツくんなら使えるかもしれない」

「オレもそう思ってたところだ」

当然そんなことはできるはずないが、顔を上に向け、ハルトキは今にも飛び上がりそうだ。

「……ダメだね。あいつ動き回るから魔力を当てることもできない。やっぱり陸は不利か」

二人の期待の眼差しを無視して、ハルトキは言う。

「どうにかしてあいつを空から引きずり下ろさないと」

「……オレの魔力球も、動き回る相手に当てるのは難しい」

「オレも同じく」

「無理に空中にいるときに攻撃しなくてもいいのでは？」

案内人が言った。

敵が空を飛びまわっている状況では、攻撃はできない。だが、そ

れは相手も同じなはずだ。

マハエはもう一度空を見上げた。

「あのライオンがこっちに近づいて攻撃をしかけるまで待つしかないか」

空を翔るキメラが、次にどのような攻撃を仕掛けてくるかはわからない。ただ、さっきまでとは戦い方が大きく違ってくるだろう。

飛びまわっていたキメラが、ぎろりと屋上に目を向けた。

そして、三つの獲物に狙いを定めると、翼を折り、猛スピードで急降下。それまでは、慣れない翼の調整をしていたのだろう。

突然、弾丸のように突っ込んでくるキメラを、三人は身を屈めてやり過ごす。

すれすれのところで、キメラは再び舞い上がった。

「くそっ！ あんなに素早いんじゃない、攻撃のしようがない！」

悪態をつくマハエの横で、エンドーが魔力球を放つ。

「ダメか……。やっぱり素早い」

「ホーミング誘導式できないのかよ？」

「近距離なら可能かもしれないが、遠のくほど集中力を要するんだ」
ギリツと奥歯を噛むエンドー。

キメラは再び降下を始め、三人を襲う。

「くっ！」

突風が頭上を吹き過ぎ、キメラはまた空へ。

「きりがないな……」

「マハエ、お前、タイミングを見てやつに飛びつけ」

エンドーが提案する。

「お前はつくづく残酷なやつだな。人に任せるな、お前がやれ」

「この中で一番体重軽いのは、たぶんマハエだ」

「いや、エンドーのほうがオレよりも軽いね」

「何を言うか。お前のほうがオレよりも五百グラム軽い！」

「変わらねえ！ ……ていうか別に体重関係なくね！？」

二人の言い争いに、ハルトキの声が混ざった。

「伏せ！」

それに反応し、二人は突っ伏す。

キメラの爪が二人のすれすれを切り裂いた。

「何やってんの、こんなときに！」

「作戦会議だ」

マハエとエンドーが声をそろえる。

いくらタイミングを計っても、高速道路を走るトラックに飛び込んだような悲惨な結果になるのは目に見えている。

「案内人！ 考える！」

マハエがポケットの無線機を叩く。

「このような姿のわたしに期待されても困ります」

このままでは一方的に三人がやられるだけだ。

キメラが急降下。空中でターンをし、直線に突っ込んでくる。

攻撃をしかけるまでの間隔が短くなっているようだ。

前よりも正確性を増してきている攻撃を辛うじて避ける三人だが、もはや時間の問題だ。

「敵の体力切れを待つ？」

「それまでに、まずはマハエがひき肉になるぞ」

「ヨツくん！ どうにか止められないか！？」

上空三十メートルまで急上昇したキメラが、降下しようと一回転する。

「確実に、一発で当てる方法……」

「……そうか」

ハルトキが何かに気付いた。

「次は伏せても避けられる可能性は低いぞ！」

マハエが逃げ場を探す。

だがハルトキは突っ立ってキメラをにらんだまま動かない。

「どうした!?」

「……一つ思いついた」

小さく見えていたキメラが急激に大きくなる。

——キーン……!

ハルトキの眼が光った。

「なるほど、それは盲点だったな!」

マハエが微笑する。

横へ飛びまわる相手には真っ直ぐに飛ぶ力は当たらない。だが、直線に迫ってくる敵にならそれも可能だ。

正面から立ち向かう。動体視を使えるハルトキならではの作戦だ。案の定、高速で降下するキメラは急に技を避けることはできない。

『金縛り』は見事に命中した。

「——しまった……」

キメラの動きは止まった。が、突っ込む勢いは止まらない。

「くっ!」

間一髪、横へ飛び込むようにして体を投げたハルトキの足のところで、キメラが石畳の床に激突した。

「グゴオオウ!!!」

「うわっ!」

床を割るほどの勢いだったにも関わらず、キメラはすぐに復活し、再び飛び上がろうとする。その強引なパワーに、ハルトキの金縛りが崩れた。

「飛ばせねえ!」

エンドーがキメラの前に立ちはだかり、開いた大口に無刃刀を挟み込ませる。

「ヨッくん! 刃物をくれ!」

そしてダガーを指差す。

エンドーは投げられたダガーを受け取ると、それをキメラの翼の根元に突き刺した。

床を踏み込むエンドーの足がズルズルと後ろへ押され、彼は頭突きで跳ね飛ばされた。

一吠えすると、キメラは空へともどる。

それが十メートルほど上空まで達したところで、転がったエンドーが起き上がり、勝ち誇った笑みを浮べた。

——ドオオン！

空で小規模な爆発が起こった。

キメラに刺さったダガーが爆発したのだ。もちろん、それに込められたエンドーの魔力で。

ケモノの悲鳴がこだました。しばらくしてドズン！という、石畳を割る音が再び。

「おかえり」

床に横たわる巨体を見下ろし、エンドーが言った。

キメラは首を持ち上げて「グルル……」と弱ったようにうなり、力尽きた。

「やっと仕留めた……」

マハエも溜め息をつく。

一人浮かない顔をしているのはハルトキ。

「エンドーくん。あのダガーはねえ、親切な友人達から頂いた、とても大切な物、だったのだよ」

「気にするなや」

「……………」

静かに怒りをむき出しにするハルトキ。二人の間にマハエが割って入る。

「まあまあ、それよりもこれで先へ進めるんだ。デンテールぶっ倒

して帰ろうぜ」

そう笑いながらキメラの首にある力ギに手を伸ばしたとき――

「ゴワウウウ……！」

キメラの目が開いた。

「げっ！ なんつーやつだ！」

尾を振り回しながら足を立てると、翼を羽ばたかせはじめる。

凄まじい回復力と執念。

「もつと深く刺しとくべきだったか！」

爆発の力と刺さったダガーの刃で切り裂き、翼を完全に使えなくするつもりだった。だが頑丈すぎるキメラの肉体に、その効果はさほど大きくはなかった。

「逃がすか！」

翼を上下に動かし、飛翔しようとするキメラの尻尾にマハエが飛びついた。が、一人だけの体重でどうできるわけでもなかった。

彼の体は浮き上がり――

「うわああああああ……！」

遊園地のどのマシンに乗っても出そうにない絶叫を上げながら、キメラとともに空へ。

「……マハエ、飛んだねえ」

「……マーキンさんもびっくりだ」

「ぎゃああああああ……！」

絶叫が悲鳴に変わった。

キメラは、尾にくつついた“異物”を振り落とそうと、スピードを上げて飛行したり、激しく尾を振ったりする。マハエは生えているトゲにしがみ付き、抵抗する。

「大人しく――しろ――！！」

足に魔力を溜め、トゲを踏みつけて大ジャンプ。長いたてがみを引つつかみ、どうにか背に乗ることに成功。

キメラはぐるぐると体を回転させて、振り落としにかかるが、たてがみに覆われた首に腕を回したマハエはしぶとい。

「離すかあゝゝゝ!!!」

相当な高さ。手を離せば命はないだろう。

恐ろしいほどのマハエのねばりに、キメラは体の向きをもどし、宙返りすると翼を折って降下を始めた。

このままハルトキ達へ攻撃をしかけるのか、もしくはマハエを屋上に叩きつけるのか。どちらにしても、彼にとってはチャンスだ。手を伸ばし、キメラの首で光るカギを掴んで引っ張る。カギはひもで首にかけられていたが、そのひもごと強引に引きちぎった。

「カギはもらったぞ!」

屋上の床が近づいたとき、魔力を込めて背中を蹴り、脱出した。下の二人から歓声が起こる。

キメラの背から跳び上がり、あとは着地して三人で鉄扉へ向かう。

——考えだった。

「——!!!?」

キメラがこれまでのパターン——すれすれを攻撃して空へもどるということせず、床に足をつけ反対側へジャンプしたのは、大きな計算外だった。

降下した軌道を逆もどりするように、空中のマハエへ急接近。そして——

鋭い爪を彼のわき腹に突きたてた。

43：白銀のイカズチ

「（——なんで……）」

頭の中にあふれる疑問符が、重い激痛によってすべてかき消された。

マハエのわき腹に深々と刺さった爪は、がっちりと彼を捕らえ、その状態のまま、引きずるように翔け上る。誰にも邪魔をされない空高くで息の根を止めるつもりか。

キメラの爪をつたって滴り落ちる赤い水が、風に飛ばされ細かに散っていく。

「くああ……」

口を開いても、言葉が出ない。死につながるほどの致命傷だ。

だが死に直面しても、その現実を理解できない自分がいる。あまりにも身近にあり、あまりにも未知な、死に対する恐怖が、それを理解させたくないと言っているようだ。

薄ら目で見下ろすマハエの目に、何もできないでいるハルトキとエンドーが小さく映った。

マハエは力ギを握った手を横へ伸ばした。

この力ギを二人へ届ける。彼が最期にやるべきこと。

宗萱、大林がそうしたように、彼もまた、道を開く一人になる。

ただし、己の命と引き換えに。

手を開こうとしたそのとき、届かないはずの二人の声が耳元で聞こえた。

『もうあきらめるの？』

これはハルトキの声。

『お前はベストを尽くしたのか？』

これはエンドーの声。

『いいんですか？ これで終わってしまったって
今度は宗萱の声。』

「……………」

「あきらめてはダメですよ！」

現実の音がぼーっとした頭に響く。

ポケットの中の案内人だ。

マハエは鼻で深呼吸する。

「……わかった。できる限りのことをしないとな」

不思議と痛みも苦しみも消えていた。

「くおおおおお……！」

マハエはキメラの腕を掴むと、腹に刺さった爪を引き抜いた。

キメラの額に頭突きやひじを叩き込む。

そのたびに腹から流れ落ちる血も気にせずに。

「降りろ……！」

傷の治癒に大量の魔力が使われているのか、放てるだけの力はな
いようだ。

「あああああああ……！！！」

出せるだけの筋肉の力を振り絞り、拳を振り上げたとき――

ジャケットのポケットが光った。

「……………」

中から蒼い光があふれ、まるで滝を逆流するように、ポケットか
ら胸へ、そして振り上げた右腕へ移動する。

蒼い光は巻き付くように腕を包み、銀に色を変えとどまった。

キメラが吠え、マハエを振り落とす。ただならぬ身の危険を感じ
たのだ。すぐに翼を折り、下方へ逃げ出す。

「……………」

逃げていくキメラをギツとにらみ、銀色に燃える腕を放った。

腕から長い槍が伸び、キメラの背中に直撃する。

白銀の槍。白いイカズチが敵を衝破する。

「グアウウツツ……！」

「おおおおおお……！」

槍を押し付けながらキメラとともに落下するマハエ。ミシミシと頑丈な肉体に槍先がめり込む。

——ズズウウン……！！

屋上の石畳にキメラを叩きつけると同時に、槍がその胴を貫いた。衝撃波で空気が揺れ、砂埃が舞い上がる。

——決着がついた。

間違いなく、先を見ずともわかる結果だった。

槍の形が薄らぎ、消えた後、マハエは床に着地し、仰向けに倒れた。

がれきにまみれ、完全に力尽きているキメラを視界の隅で見て、マハエはようやく安堵する。

「マハエ……！」

「……やったぞ……！」

膝について自分を見下ろすハルトキとエンドーに、にかつと笑って力ギを見せる。

「無茶しやがって……！！」

エンドーがマハエを蹴る。

「ところで、さっきの槍は一体……！」

マハエはポケットから青い石を取り出し、ハルトキに見せた。

それは城で見つけた石。ハルトキが閉じ込められていた檻にしかけてあった物だ。

どこかで役立つかもしれない、という宗萱の言葉は間違っていた。

「何なんだろうね、その石は」

「……………」

「おかげで助かったじゃん。それがなかったら、お前死んでただろうなずくマハエ。宗萱には助けてもらうばかりだった彼であるが、まさかこんな形で助けられるとは思ひもなかった。

「……………」でもま……………、最終的に、デントールをぶっ飛ばすっていう“意志”が勝ったわけだ……………」

マハエはそう言つと、ハルトキにカギを渡す。

「すまん。手を貸してくれ」

だが二人は、伸ばされたマハエの腕を前にして、立ち上がった。

「キミは致命傷を負ってるんだよ。ここに居るべきだ」

「そうしろ」と、エンドーもうなずく。

たしかに、ここで独り怪我の回復を待つて行動するという手もある。

マハエは、二人の気づかいに感謝し、言葉に甘えることにした。

「心配しなくてもいいよ、マハエ。キミの“イシ”、ボク達が引き継ぐから」

「ああ、お前の“イシ”、立派だった。後はオレ達に任せとけ」

「……………」

いつの間にか案内人もハルトキの手に。

「あなたの“イシ”。わたしも後世に伝えてゆきたいと思います」

「……………」キミ達……………、その“イシ”っていう言葉が別の意味に聞こえてならんのだが……………」

「永久とわにさらば、友よ!!」

——ダダッ！

「うおおいい!!! “遺志”じゃない!!!」

マハエは跳ね起き、走り去る二人を追った。

「――無茶するなよ」

ゼーゼー言うマハエをエンドーが支える。

「お前らの余計な演出で傷が開いたぜ……」

鉄扉を開き、下りの階段を歩く。

「まったく、からかいがいのあるやつだ」

エンドーがけらけらと笑う。

「あとはデンテールですか。それ以外の戦いがないことを願うばかりです」

「まったくだ」

同時にうなずく三人。

エンドーが小声で言う。

「デンテールが病死しました。っていうオチがあればなお良い」

「まったくだ」

同時に何度もうなずく二人。

デンテールをぶっ飛ばしたい。でもできることなら戦わずに終わらせたい。そう願わずにはいられないのであった。

階段の終点にあったドアは、赤い床の廊下につながっており、正面の壁には見たことのある派手な赤い扉が。屋上へ行く前の分岐点にあった扉らしい。

「あのライオンと戦わせるために、わざわざ遠回りさせたってか」

呆れたように首を振るマハエ。

そして廊下の先を見る。

反対側にある階下からの階段から、真っ直ぐ突き当たりにある扉。間違いなく、あの扉の向こうだな」

廊下の赤いじゅうたんで、マハエが言った。

「さあて、行きますかあ」

拳を固めるエンドーと、肩の準備運動をするハルトキ。

「終わらせましょう。まだ小さな争いのうちに」

案内人が言った。

44：邪悪な野望

——ガコン…… ギイイ……

廊下の明かりが暗い部屋の床を照らす。

赤いじゅうたんは扉の手前でいったん途切れ、その部屋からまた、奥の短い階段、そして壇上の大きな椅子のところまで続いている。

ここが『王座の間』に違いない。が、そこにデンテールの姿はなかった。

——やつはどこだ？

三人はゆっくりと歩き出す。階段を上がり、椅子の場所まで。

「ここか」

エンドーが椅子の後ろを見下ろした。

もとはその位置にあった椅子が、前へスライドしたのだろう。大人一人通れるほどの穴があった。

隠し穴——。三人は危険な臭いを感じ取りながらも、備えてあるはしごを下りていった。

降り立った場所から、細いトンネルのようになった橋を渡り、別の建物に着いた。

そこは、それまでとは明らかに異なる内装だ。

黒い金網のような床。そして石ではなく、鉄の壁、柱。現実世界の怪しい研究所のような場所だ。同じ要塞の中にあるとは思えない。

「……ここまですると、あいつは科学者っていう感じだね」

ハルトキが左右を見ながら言う。

壁際には奇妙なタンクが並び、一部のガラスのタンクには、緑がかった液体が満たされているものもある。

「どんな研究をしているのか……。新しいペットでもつくろうってのか？」

ナンセンスだとも言いたげに、顔をゆがめるマハエ。

デンテールが何の研究をしているかが、三人にはどうでもいい。ここで彼を倒してすべてを終わりにするのだから。

「お前、怪我は治ったのか？」

エンドーがマハエの腹を見る。

ジャケットに穴が開いて周りが赤く染まっているが、出血は完全に止まっていた。

「ものすごい自己治癒力だな。病院要らずだ」

具合を見て、感心したように言う。

「前よりも治癒が早いような気がするんだ。それに魔力も増大してる」

「……バケモノになりつつあるわけだ」

ちやかすエンドーだが、彼もそれを感じていた。

歩けばカチカチと音を立てる床を堂々と歩き、左右へスライドする扉の前で立ち止まった。

斜め上にあるカメラが三人を捉え、扉が開く。

「ごちゃごちゃとさまざまな機械だらけの部屋。」

その中でも異様に目立つ巨大なカプセルのような物体の前に、クリム色の後ろ髪があった。

「遅かったな」

三人に背を向けたまま、デンテールが言った。

城のときよりもずいぶんと落ち着いている様子だ。それどころか、喜びに満ちている風もある。

部屋には彼一人だけだった。三人を自らの手で葬るということが嬉しくて仕方がないのだ。

「……………」

何も言わない三人に、ようやくデンテールは体を向けた。

「“番犬”に手こずったようだな」

デンテールが顔で笑うと、マハエが拳を握り、口を開いた。

「デンテール……、ライオンはネコ科の動物だ」

「……ふふふ」

予想していた言葉ではなかったのか、ただ笑うだけのデンテール。そしてまた三人に背を向け、カプセルを見る。

細長いそのカプセルのような物の先っぽは、二階建ての建物ほどある天井すれすれまであり、太いチューブやケーブルがいくつもつながっている。

「言い忘れたな。——我が研究所へようこそ」

お辞儀もせず、デンテールが言った。

「研究所だと？」

半ば想像していたことだが、エンドーは疑問符をつけて返す。

「そうだ。この島では物質の強化、兵器化から、生物の融合、進化、そして“変異”についての研究をしている。オレの中枢、と言ってもいい」

「何のための研究だ？」

マハエが訊く。

「お前らは、オレがこの世界のすべてを思うままにできる、と思っているのだろう？」

そう訊き、うなづく三人に鼻を鳴らして首を振る。

「ところが、そうでもない。この世界で、プログラムは生物となる。もともとプログラムであつたやつらを改造するのは簡単だった。だがどういうわけか、初めからこの世界にいたセルヴォどもは、そうはいかなかった。この世界に生きているセルヴォは改造できない。オレにとって、それは唯一の大きな欠点だ」

一呼吸して続ける。

「どの世界でも、力がすべてを支配するものだ。頂点に立ち、すべてを見下ろす者が必要なのだ。誰の手も届かぬほどの高みに存在するたった一人がな」

それは違う。とは誰も言えなかった。たしかに彼の言うことにも一理ある。世の中は力が支配し、人々を縛り付ける。そうやって世界は動いている。

だが彼の言う強引な“力”の支配には、大きく間違った部分があることも事実だ。

しかし、ここは三人、黙って話を聞く。

「だがそれは、オレの目的の些細な一部分にすぎない」

デンテールが両手を広げ、カプセルを見上げる。

「これこそが、目的のための大いなる第一歩！」

三人も見上げた。

「オレの力でセルヴオどもを改造できなくとも、方法はある。――

お前ら、これが何かわかるか？」

「……………」

三人の返答がないのを確認し、デンテールは満面の笑みを浮べた。

「ミサイルだよ」

「なに…………？」

たしかに、そう言われて改めて見れば、それはミサイルだ。その途端、デンテールの言っていた言葉の意味を知った。

その方法とは――

「ふふふ…………、このミサイルでウィルスをばらまく。オレが開発したウィルスに感染したセルヴオどもは、思考操作によって、みなオレの忠実なしもべとなる」

「そんなこと…………！」

殴りかかろうとするマハエの肩を、ハルトキが掴んだ。

「デントール、あんたは、力—— 兵力を手に入れることが些細な一部分だと言ったね？ そして、この世界を自分の配下とすることが、大いなる第一歩……。矛盾している気がする。あんたは、その些細な一部である兵力で何をしようって言うんだ？ ウィルスでこの世界を支配してしまえば、兵力なんて必要ないはず」

「……考えてみる。そのヒントは、お前らにある」

「……まさか……」

マハエが目を見開く。

「まさか、人間の世界を支配するつもりか？」

「ふふふふ……」

「ご名答。その笑いはそう言っていた。

「どういうことだ？ オレ達の世界を支配？」

エンドーが眉をひそめる。

「お前らがこの世界へ来たルート、そしてもどるためのルート。つまり向こうの世界とこの世界はつながった状態にあるわけだ。お前らがそうできるように、我々セルヴォも行き来が可能なはずだ」

「そんなバカな……！ 無理に決まってる！」

マハエが言う。だがデントールは薄ら笑う。

「本当にそうだと思うか？ ここがコンピューターの中の世界だとすればそうかもしれない。形のないプログラムが現実に姿を現すなど考えられないだろうな。だが、ここがコンピューターを通じてできた、人間の世界と並ぶ、もう一つの別世界。そう考えれば納得はいくだろう」

「……………」

「つまり、コンピューターというものは出入口にすぎない。そして、お前ら人間が、人間の肉体としてこの世界へ来たように、セルヴォもセルヴォの肉体として、人間の世界へ侵略できる」

仮説にすぎないけどな。最後にそう付け加えた。

「全セルヴォの力を合わせれば、人間世界のコンピューターを完全

に支配することができる。そこからすべてが始動する」
後ろ姿のままのデンテールを、マハ工は殺気を込めてにらみ付ける。

「コンピューターを支配する……。組織の崩壊から核兵器の発射まで、すべてが思い通りになるということか」

「どっちにしても、オレ達の世界を支配することになる……」

「……放っておけない話だね。当然、そうはさせない」

「ふふふ……、そうなるさ“オレが決めたこと”だ」

三人に向けた、すでに勝っているというような表情は、その整った顔立ちにも関わらず、昔のゾンビデンテールを連想させる。

「お前らが生きていて良かった。おかげですばらしいサンプルが手に入るからな」

一瞬、宙を浮く感覚を覚える。

三人とデンテールが立っている中央真っ直ぐの床だけが、長方形に切り取られる形で降下していく。

「至極の遊戯といこう。死んだ後は解剖がいいか？ それとも生きたまま薬品実験がいいかな？」

デンテールの楽しそうな声だけが不気味に、両サイドの壁に反響する。

闇に包まれ、やがてデンテールの姿も自分の姿さえも見えなくなる中で、三人は以心伝心しているかのようにうなずいていた。

——デンテールの野望は絶対に阻止する。そして必ず生還する。

当初以上に重いものとなった任務だが、三人の最大目標は変わらない。

ここでどちらかが散ると決まっているのなら——そう、生きてさえいればそれでいいのだ。

45：闇の竜

真つ黒な闇の中で、床が停止する振動が体に伝わる。

そしてデンテールの足音。それは三人から離れた位置まで進み、止まった。

スイッチを入れる音がし、明かりがつく。

天井や壁の電球が点灯すると、闇は完全に消えた。

「なんだここは？」

マハエが足元の、ずっと立っていた床を見てから周りを見回す。四人と一緒に降りてきた床は、その階の床にぴったりと収まっている。そこは先ほどの部屋の真下に位置していて、円形に広いホールになっていた。天井の高さも三階建ての建物ほどはある。

ホールを見て三人が真つ先に異様に感じたのは、そこかしこに散らばっている黒い鉄片。大きさはまちまちで、形もただの鉄板だったり、刃物だったり、統一性はない。

「これは……、たしかあの鎧と同じ——」

その黒い鉄の中に、城の広場で倒した鎧の一部に似ている形もあることに、マハエは気付いた。

「そう。ここはゴミ箱の中だ。研究や実験で生じた失敗作を廃棄している。主に『Rey金属』の失敗作だ。強度不足や軽量化失敗の問題でな」

たしかに、ほとんどの金属は歪んでいたりと弾痕があったり穴が開いていたりにしている。剣の形もあるが、すべて折れている。

だが、その中で一つだけまともな形を成している物があった。

竜の頭をかたどったような形の黒い金属。あごがあり、目を表す穴があり、後ろに向けたツノが二本ある。

「——だが失敗作だからと言って、硬度は通常の金属をしのぐ」

「……これで遊ぼうつてのか？」

エンドーが横目でデンテールを見る。

『竜の頭』からは長いワイヤーが伸びていて、それが三人を囲むように一周している。何か意味があり、明らかなデンテールの意思がうかがえる。『竜の頭』は失敗作のうちには入っていないようだ。『ふふふふ……』

デンテールが電灯用スイッチの横にある、ひと回り大きなスイッチを入れた。

——キュイイイイン……

灯りが、切れかけのように点滅する。

天井にあるのは電灯だけではなかった。鉄のトンガリが一つ、下へ突き出している。

点滅が止まった。

「『Rey Dragon』——始動」

——バチイイン!!!!

凄まじい閃光と音を響かせて、トンガリの中からイカズチが発生。それはほぼ真つ直ぐ、『竜の頭』目がけて落下した。

「……………」

三人は、とつさに目をかばった腕をゆっくりと下げる。

『竜の頭』の周りをバチバチと電気がはねる。すると、まるで生を得たかのように、目の穴から真つ赤な光が輝いた。

その輝きを見たエンドーは、その頭部に仕込まれてある物に気がつく。

「あれはたしか、マーキンさんが持ってた——。『太陽のかけら』とかいう石か！」

「ふふふ、そうだ。オレは『光の石』と呼んでいるが」

仕込まれているその石は、マーキンが持っていた物の十倍は大きい。

『竜の頭』から伸びたワイヤーを電気が伝い、そこへ周りの金属が引き寄せられるように動く。

『光の石』は、小さなエネルギーを何倍にも増大させる。与えるエネルギーが大きければ、更に大きなエネルギーを生む」

ワイヤーをプロテクトするように、金属がまとわり付き――一体の黒い竜が出来上がった。

散らばっていた鉄片は、ひとかけらも残らず、すべてが竜の一部となった。

「そして、このエネルギーにオレの力を上乘せすれば――」

とんでもなく重量があるはずの『黒竜』が、デンテールの腕の動きに合わせて、ギギギギと長い胴体をしならせゆっくりと持ち上がる。デンテールが黒竜の頭部に跳び乗った。

高々と頭を上げる黒竜の姿を首で追い、視界に収めながら、三人はただ圧倒されていた。

「……こいつは……、とんでもなく……」

エンドーの続きをマハエとハルトキが言う。

「ヤバイ……」

デンテールの前では絶対に弱音を吐かないと決めていた三人は、無意識のうちにそれをやぶっていた。それほどに恐怖を抱かずにはいられない圧倒感がある。

「遊戯開始だ」

デンテールの言葉で、三人は固まった足をむりやり動かしてジャンプした。

背後から迫っていた竜の尾を跳び越え、できる限り距離をとる。

竜の動きは重量に見合わず軽い。

「勝てる見込みは？」

マハエがハルトキを見る。

「……ん……」

「あの頭部の石を破壊すれば動きは止まるはずだ」

首をひねるハルトキの代わりに、エンドーが答えた。

「この長い胴体をよじ登って——か」

頭部を見上げるマハエは舌を打つ。

「まだ策はあります」

マハエのポケットから案内人が言う。

「エンドーよりもマシな策か？」

「敵のエネルギー切れを待ちましょう」

「却下っ！」

——ドゴウン!!!

前へ跳んでかわした竜の尾が、壁をえぐる。

「それまでにオレ達がペシャンコだ！」

やはり石を破壊するしかない。

「エンドー！『魔力球』で狙えるか！？」

「無理だ。相手が動いているうえに、その目の部分をピンポイントで狙うなんて、遠くから針の穴に糸を通すようなものだ」

「この巨体はボクの魔力で縛るのも無理だね」

「……………」

城での経験で、たとえ『魔力球』の爆破でもこの金属には傷一つ付かないことはマハエにもわかつている。そのうえハルトキの『金縛り』も通用しない。

「——となれば……………」

攻撃できるのは接近戦タイプのマハエしかない。

「どうしたー？ そんなものかー？」

上からデンテールが挑発する。

「待ってる！ 今からそっちへ行つてやる！」

「マハエ！」

エンドーが無刃刀を投げた。

「サンキュー！」

無刃刀を片手に、マハエは走り出す。尾の攻撃を踏みつけ、魔力を放って大ジャンプ。竜の胴体のパーツを踏み、更に魔力で高く跳ぶ。

「おおおおおおお！……！」

電灯が点滅した。

「デンテール！！！」

繰り返し魔力を放ち、デンテールを正面から押める位置まで跳び上がった。

デンテールを攻撃することもできる。しかし、前回彼に攻撃をヒットさせることにずいぶんと手こずったことを思い出し、マハエは石を狙う。

「ダメだマハエ！！！」

ハルトキが叫ぶ。

マハエの神経が、頭上の気配に移った。

——キユイイイイン……

頭上にあるトンガリ—— 雷発生装置に、エネルギーが集中する音に。

「（くっそおっ！）」

振り上げた無刃刀で石を破壊するのが先か、マハエが高電圧に貫かれるのが先か。

どちらにしろ、そのイカズチからは逃れられない。

——バチイイン！！！！

マハエは閃光に目を閉じた。

電気の柱がマハエを直撃する――

「……………?」

――彼の体は舞っていた。

トンガリの真下にいたマハエは確実に直撃を受けるはずだった。だがイカズチは赤く光る石のほうへ軌道を変えていた。

「よしっ!」

エンドーがガッツポーズをとる。

マハエが両手で握り締めていた無刃刀から爆発が起こったのだ。彼にそれを渡す前に、エンドーが込めておいた魔力が。爆発の衝撃で後ろへ吹き飛んだマハエは、そのおかげで高電圧を逃れていた。

「ぬかりのないやつだ」

両足から放った衝撃波で着地時の衝撃を緩和した。

「今回も簡単にはいかないか」

歯を食いしばり見上げるマハエの目線の先で、デントールは小動物を見下ろすような冷たい目で三人を見下ろしていた。それは一度負けた相手に対してしているものとは思えない余裕。

「下がってマハエ!」

「!!!? ――うわっ!!!」

ハルトキの言葉に反応したマハエの目の前に、分離した鉄片が降り注いだ。

「危ね……! これじゃ一方的にやられるだけだ!」

鉄片は再び黒竜に吸収される。

「手も足も―― 眼も出せない……」

ハルトキが言う。

「もう一回オレが行く。あのトンガリに注意すればなんとかなる!」

「やめとけ。デントールに近づくこと自体、自殺行為だ。それに魔力の使いすぎで動けなくなれば、かっここのえじきだぞ」

「……くっ」

もしかすると前回の何倍も手強いかもしれない。これといってよい手は思いつかない。三人は焦った。

エンドーの言うとおり、魔力の使いすぎは非常に不利な状況におちいる。だが何もしないのも同じことだ。

デンテールの声が降る。

「ふん。なす術なしか？　ならば、遊べないおもちゃに用はない」
デンテールの腕が横へ動くと、尾が大きく振られる。

重量の問題か、床から浮くことなくすべるように動く。そのおかげで尾の攻撃にはジャンプで対応できる。

——と、尾の先端部分が破裂し、重たい鉄のつぶてが三人を襲った。

「ぐっ——　つつ……！！」

「がっかりだ。お前らを少なからず脅威だと思い、ここまで入念に準備をしたというのに」

「……………」

内臓が潰れたのではないかと思うほどの激しい痛みで、三人は立ち上がれない。

黒竜の口が開く。

そこから覗く赤い石。口の中にエネルギーが集中し、膨れ上がる。目の前で竜の頭と同じくらいに膨らんだ高エネルギー球体に、デンテールが手を差し出し、三人に狙いを定めた。

「死ね」

放たれた球体には、標的を完全に消滅するほどの威力がある。
デンテールの三人に対しての興味は、すでに消え失せていた。

46：死を遠ざける力

デンテールは黒竜の上で、煙に覆われた床を見下ろした。高エネルギー球体は彼の予想通りの威力で床を破壊した。爆発でできた大きなクレーターは、その場にあつた物すべてが粉々になった証拠だ。

だがデンテールは、もやのかかった床から目をそらさない。

彼は気付いている。

三人が、まだくたばっていないことに。

「……どうということだ？」

すべてを消し去つたはずのエネルギー。そしてクレーター。だがその中心に三人は居た。

もやが晴れると、マハエ、ハルトキ、エンドーの無事な姿がそこにあつた。

「今の攻撃をまともに受けて……、なぜ生きている？」

「こつちも……、死ぬわけにはいかないからな」

先に立ち上がったマハエが言う。

「お前ら——不死身か……？」

デンテールの表情が強張る。

「……そうじゃない」

エンドーも立ち上がった。

「この力は、死を遠ざける。けど、死を打ち消すものではないんだ」
「……何が言いたい？」

とぐろを巻き、三人に牙を向けていた空気が一変して、今度はデンテールにその牙を向けているようだ。

「やっとわかつたよ、ボク達のこの力の意味が」

最後にハルトキが立ち上がり、三人はデンテールをキツとにらん

だ。

「お前を倒せつてさあ！！！」

三人の言葉が無数の針になったように、デントールは刺すような覇気を感じていた。そして、自分の力を上回る、別の力も。

「エンドー、ヨックン」

「ああ、やっとあのゲス野郎を踏み潰す準備ができたみたいだ」

「魔力が騒ぐ……。すごい力を感じる」

三人を包む膨大な魔力が、床を削り、ちりへと変える。

デントールは固まっていた表情をゆるませた。

「何だか知らんが、いいだろう。その力がオレを制すかどうか！
試してやる！」

黒竜の胴体が砕けた。

頭部以外のすべてのパーツが分離し、舞い上がった。

「死ねええ！！！」

すべての鉄片が、三人を目がけて弾丸のように発射される。

角ばった鉄板、兜型の物、剣の切っ先――

「無駄なあがきさ、デントール！」

ハルトキの眼が銀色に光り、キーーーーンと音をたて、魔力が空間を貫いた。

大量の鉄片が、ピタリと空中で静止する。

「――デントール！ お前が『創造神』なら、それを破壊するのがオレ達の役目だ！」

マハエが空中に放った衝撃波が、鉄片を逆方向へ吹き飛ばす。

「――なに！？」

エンドーが驚愕するデンテールを見据え、腕を構えた。

「ここでリセットしようぜ！ お前が創り上げたモンは全部、この世界には不要だ！！」

上へ放たれた魔力球が、大爆発を起こす。

デンテールは舞っている鉄片を操作し、黒い盾を作るが、意味はなかった。

「ぐああああっ！！」

爆風でデンテールは竜の頭から落下し、支えの力を失った鉄片が、その上に降り注いだ。

一つ一つの重さでも通常の金属をしのぐ。三人に食らわせるはずだった威力を、自分が受けてしまったのだ。さすがのデンテールも無傷ではすまないはずだ。

竜の頭がドシャンツ！と落下すると、命が尽きるように輝きが消え失せた。

「……………」

「……………」

「……………」

言葉はなかった。

黒竜の残骸に埋もれたのか、デンテールの姿は見えない。だが、動きもない。

デンテールは死んだのか。

しばし仁王立ちしていた三人は、破られない静寂を確認し、限界まで力をしぼり取られた全身を床に預けようとした。

—— ガラン…… ガシャン……

鉄くずが転がった。

「……！」

三人は踏ん張り、体勢を立て直した。

「くっ……、ふふふふ……」

彼らの期待は裏切られた。

腕を伸ばし、手を着き、立ち上がってくるデンテールに、どんな抵抗もできなかった。

「くっ……」

マハエ——ハルトキとエンドーも、めまいを感じながらも必死に直立を守っていた。

「遊びは終わりだ……」

デンテールが独り言のように言う。

彼の右腕と美しい顔の半分はひどく損傷していた。とてもまともに戦えそうな状態ではない。

それは三人も同じことなのだが——

コポコポ……

水が泡立つような音。デンテールの傷が、徐々に再生していく。

傷口から液体があふれ、それが皮膚組織を形成する。

「残念だったな。オレは不死身だ」

陰になったデンテールの眼が不気味にきらめいた。

完全回復したデンテール。竜の頭から取り出した『光の石』を胸まで持ち上げ、そこに押し付け始めた。

ズズズ……、と石が彼の胸に呑み込まれる。デンテールと石が融合していく。

「面白いものを見せてやる」

両手を大きく広げ、天井を仰ぐ。

デンテールの体が激しく発光した。彼と一体化した『光の石』が、

「――死を遠ざける力が……」

デントールは嘲笑する。

こうして死んでしまえば、すべてに意味がなくなる。どうやって産まれて、なぜ生きて、何のために戦ったのか、それまで経験してきたすべてが無に帰してしまう。

だが、彼にそれはない。死への恐怖も、誰かが死ぬ恐怖も何も。以前の戦いで生じたプログラムの暴走は、彼にとっては喜ぶべき、不死身の肉体を手に入れるきっかけとなった。

それはまた、生に対しての『執念』によるものだを知った。

「オレがすべてを壊してやろう。お前らを記憶するすべての存在を」
彼に死の恐怖はわからない。だから、誰を死へ追いやることにも頓着^{とんちやく}しない。

触手が抜かれると、三つの肉体は一切の抵抗なく床に転がった。

「ここからようやく踏み出せる」

デントールの中の呪縛は完全に消えていた。

だが同時に、彼自身にもわからない一つの感情も生まれていた。

「（オレの胸にも―― いや、心に穴が開いている……？）」

――孤独。

自らの野望のために何もかもを利用してきた。

どうやって産まれて？ なぜ生きて？ 何のための戦いだったのか？

自分の野望は何のために存在していたのか。

「――復讐だ」

『執念』は彼の心の中に留まったまま、微塵も消えてはいなかった。

47：カウント60

『Rey』のゴミ置き場から、ミサイルの部屋へもどったデンテールの前に、男の姿があった。

男は床が上昇してくるのを見ると、腰掛けていた大きな装置から立ち、腕を組んでデンテールを見た。

「グラソン。生きていたか」

男を見てデンテールが言う。

グラソンはボロボロになったデンテールの衣装を眺める。

「デンテール様、あの三人はどうしました？」

「“ゴミ箱”の中だ。少々手こずったが、な」

言って悪戯っぽく微笑む。

「……そうですか」

グラソンは眉を動かし、すました声で言う。

「ところで、セレーネはどうした？」

「あいつは消えました。城とともに」

爆発を表現するように手を閉じ、開く動きをするグラソン。デンテールは「そうか」と一言だけ言ってまた微笑する。

「もう少し使ってやりたかったが、これからのオレの計画に邪魔なだけだからな。窪井はどうだ？ やつは連れてきたか？」

「いえ、自分から来たようです。栈橋でザコを片付けていたので、オレは島の裏に船を停めました」

デンテールはうなずいてミサイルのほうへ歩き出す。

その前にある操作盤のパネルにパスワードを入力し、スイッチを押すと、ミサイルが機械の力で持ち上がり、天井が左右に開いた。夕焼けの赤い空からこぼれる光が、クリーム色の髪と銀色の髪を美しく輝かせる。

「すべてはここから大きな一步を踏み出す。まずはすべてのセルヴ

オを従え、人間世界のコンピューターを支配する」

ミサイル発射のための準備にかかる時間を、デンテールはゆつくりと楽しんでいた。

「ようやくですね」

「ああ、ようやくだ。ウイルスは増殖し、次々と感染する。この島の外にいるすべてがオレのしもべだ」

ミサイルは空中で炸裂し、ウイルスが地上へ降り注ぐ。ウイルスはセルヴォに感染し、増殖。風邪のウイルスのようにまた感染を繰り返す。すべてはデンテールのもくろみどおりに。

彼はこれまでにさまざまな生物、人を使って実験を繰り返した。このウィルスのもたらす効果に、九九・九パーセントの自信が彼にはある。

デンテールとグラソンは、ミサイルを見上げて同じような笑みを浮べていた。

——ガチャン

ミサイルの発射準備が完了した。

開いた天井から、空に向かって斜めにのびるミサイルを見上げる。「さて、ぞくぞくしてくる。この瞬間がどれだけ待ち遠しかったことか」

デンテールはミサイルの発射スイッチに“小指”を置いた。

「小指一本から始まる『黙示録』だ」

——もう邪魔をする者は一人もない。

カチッと、あまりに軽い音でスイッチは押された。

「カウントを開始します。ミサイル発射まで、六十秒」

機械的な女性の声が響く。

冷酷な天使のように、一切の感情はうかがえない。

「――五十秒」

デンテールの背に赤い半透明の翼が生えた。

「世界は終わり、そして生まれ変わる。――神の世界として」

ミサイルの先端よりも高く舞い上がり、これから終わりを告げる世界を眺めた。

デンテールはいつもこの時間にこの島で見る海が好きだった。この世界の何かを好きになる、というのは彼にとってはあまりにも少ないことだ。戦闘用としてつくり出された彼は、平和というものが嫌いだ。だがこの百八十度真つ赤に染まった海は、まるで戦いの中で表現される“血の海”そのものだ。実際の血の海を彼は見たことがないが、とくにそれを見たいとは思っていない。彼は殺戮をしたいわけではないのだ。

『血の海を中心に独りだけ立つ自分』というイメージは、これから実現する野望そのものを表しているように感じるからだ。すなわち『支配者』を。

デンテールは鼻で胸いっぱい空気を吸い込み、喜びで震えながらゆっくりと吐き出した。

赤い翼が赤く染まった空と交わり、更に輝いている。

「――二十秒」

「……ん？」

デンテールは妙な気配に視線を下げた。

さっきまで立っていた部屋の床の一部――“ゴミ箱”の昇降機がせり上がってくる。デンテールは操作していない。グラソンにもそんな素振りはなかった。それ以前に昇降機を下降させた覚えもないのだ。

一つ可能性があるとするなら、“ゴミ箱”の中からの操作――

「……あいつら……」

デンテールは自分の大きな失態を嘆いた。

昇降機が停止し、床がもとにもどると、そこにはマハエ、ハルトキ、エンドーが立っていた。

「デンテール……!」

三人が叫ぶ。

微塵も気迫は失われていない。それどころかそれは更に増しているようだ。

「なるほど、即死させなかったのは失敗だったな。仮死状態にあったわけか」

三人の塞がった胸をじつと見る。三人同じところにギザギザの線のような傷痕が残っている。

「しかし残念だったな。お目覚めが遅かったようだ。もはやミサイルは止められまい」

カウントが『十』をきり、機械の音が一秒ずつカウントダウンを始めた。

「――九、八、七、六……」

悪あがきの『魔力球』を放とうとするエンドーの腕を、グラソングが金属棒で払い落とす。そして棒を振り回し、三人をなぎ払った。

「――三、二、一」

カウントが終わった。

ミサイルを固定していたストッパーが外れ、炎が噴射する。あっという間に、ミサイルはデンテールの前を通過し、海の上を陸へ向かって突き進んでいった。

足の下からとどく嘆きの声も、彼にとってはもはや、あわれな小

鹿の悲鳴でしかない。三人が生きていたことはそれほど大きな問題ではなかった。

彼が恐れていたのは、計画が破綻^{はたん}してしまうことだったから。

「あと二十秒。ポイントに到達したミサイルは炸裂し、ウイルスが散布される。世界の終わりが訪れるのだ」

デンテールの計画を止められなかった。

三人は激しい憤りを覚えていた。

彼らが生きていたのは奇跡だった。デンテールが心臓か頭を正確に貫いていれば、さすがに命はなかっただろう。生きていたからには自分達の役目を果たさなければならぬ。セルヴオ世界のため、そして何よりも自分達が育ってきた人間世界のために。

だがすでに遅かった。ミサイルは止めようがない。

「まだ間に合う……！！」

膝を立てるマハエをグラソンが棒を向けて制する。

「動くな。——無駄なことだ」

「どけえ！ グラソン！！」

マハエが足を突き出し、『衝撃』を放つ。グラソンは金属棒を前に構えて防ぎ、後ろへ跳んで威力を受け流した。

デンテールが言う。

「いくらでも足掻いてみる。いまさら何をしようが歯車は止まりはしない」

「……無駄じゃない！」

デンテールを倒せば、少なくとも計画の第二步は阻止できる。しかしもうこの世界は救えないだろう。

三人が好きになったこの世界は、本当の意味で死んでしまう。

「お前らにオレは倒せん。あと五秒だ」

デンテールがニヤリと笑った。

それでも三人は立ち上がる。

「ボクらがここへ来たのは自分で選んだことじゃない。けど、もう

そんなことはどうだっていい。命に変えてでもお前を倒す！」

「無駄だと言ってるだろ」

グラソンが言う。

デンテールが耳のところに手をあてる。

「さあ、ミサイルがポイントに到達した。耳をすましてみろ、終わりの音が聞こえる——」

「……………」

「……………」

「……………」

——何も聞こえない。

聞こえるのは風の音と波の音だけ。

「……………何だと？」

空で静止し、遠くを眺めていたデンテールは、予想外の事態に困惑した。

ミサイルはポイントに到達した。ミサイルは爆発こそしないものの、大量の黒雲を発生させるようになっていく。黒雲が空に広がると、雨とともにウイルスが地上に降り注ぐしくみだ。

だがどれだけ遠くの空を見ても、それらしいものは見当たらない。何の変哲もない夕空。

——不発だった？—— いや、プログラムは完璧だった。何度もシミュレーションをした。

——燃料不足でポイント到達前に落下した？—— 燃料は満タンだった。燃料不足ならば発射前にエラーが出るはずだ。

——何者かがシステムを書き換えた？—— システムに侵入するにはパスワードが必要だ。パスワードを知っているのは自分自身とグラソンだけ——

そのとき、カウントダウンのときと同じ女性の声が響いた。

「ミサイルは目標到達寸前に降下。山中に落下しました。発雲装置、作動せず。ミサイル内のウィルスの死滅を確認」

「……………」

デンテールは無言のままグラソンを見下ろした。

グラソンはこの事態に何の反応も見せていない。デンテールに背中を見せ、三人のほうに体を向けたままだ。

「…………グラソン…………、貴様何をした？」

見下ろす目に殺気がこもる。

グラソンは金属棒を片手に持ち替え、トンと床を突いた。
そして静かに言う。

「…………言っただでしょう、“無駄だ”と」

48：クラッシュ

『言っただしよう、“無駄だ”と』

その言葉の意味を、デンテールは理解できないでいた。

「貴様、この計画の重要性が——」

「その重要性というものはあなたにとって、でしょう？ デンテール様」

そう言いながらも、グラソンは決してデンテールのほうを見ない。怒りを込めるデンテールとは逆に、妙に落ち着いた口調。

「裏切るのか？ このオレを」

「裏切る？ …… そうかもしれないね。一時的にでも心からあなたの手下でいたのですから」

「一時的……？」

デンテールがゆつくりと、部屋にいる四人と同じ目線まで降りてくる。

「まさか、思い出したのか……？ —— いや、そんなはずはない。記憶は完全に消去した」

「そんなはずはないだと？」

そこでグラソンの口調も変わる。

デンテールのほうへ振り返り、こちらも怒りを込めた声を返す。

「オレをさんざん利用したあげく殺し！ 蘇らせてまた利用！ すべて覚えているぞ、デンテール！——」

「……………」

歯を食いしばり黙り込むデンテール。「大きな失態はここにあった」そういう表情をする。

「グラソン、あんたは……」

マハエが眉をしかめる。

「そつだ。オレは前にお前達と戦い、こいつに殺されたプログラム」

「あのときのボス—— 『氷室』か……！？」

驚いた声を出すエンドー。マハエとハルトキも驚き、改めてグラソンを見る。

そこでマハエは、それまでのグラソンの奇妙な行動を思い返した。マハエに展望台でこの人工島を確認させた後に拉致し、城の牢に監禁した。デンテールに怪しまれることなく、彼を城へ導いたのだ。牢の中でも脱出させる算段は整っていた。S A A Pの隊長である宗萱と同じ牢に監禁したこと。わざわざ武器を持たせて。

「この三人とお前を戦わせるため、オレは密かに行動していた」

接点はエンドーにもあった。マーキンの研究所前で、無線機のイヤホンをエンドーに持たせたのも彼だ。

「すべてはこいつらを使ってお前に復讐するためだ」

「……………」
デンテールは食いしばっていた歯を解き、口元を笑いの形に変えた。

「く、ふふふふふ……。はははははは……！！！」

身を後ろへそらして笑うデンテール。

背中の赤い翼も笑っているように震えている。

「はははははははは……！！！」

デンテールは大きく息を吸って、そらした体をガバツと前にもどした。

「くだらん……！！！」

本当の怒りで、美しかった顔は鬼のようにゆがんでいる。

「記憶がもどった？ ふん、ならばそのままオレに従っていけばよかったのだ。わざわざオレを殺すためにこの三人を使った！？ それがどうだ？ こいつらでもオレに手も足も出せなかった。けっきょくは失敗に終わったのだ！！ 馬鹿馬鹿しい！！ オレに従って

いればここで命を落とすこともない。お前はただ、自らの命を捨てただけにすぎん!!!」

翼が大きく広がり、その下にまた半分ほどの大きさの翼が生えた。四つの翼のひと打ちで、デンテールの体は十メートルほど浮き上がる。太い尾が三本生え、籠手のようにエネルギーが腕にまわり付き、長い剣を形成した。

「いよいよ悪魔の道を選んだようだな」

前よりも完全に悪魔と化したその姿に、マハエが大きく肩をすくめる。

「……グラソンよ……、苦しまずに死ねると思うな。よく仕えてくれた情けだ、などと甘ったるいことは言わないぞ」

「だらうな」

頭の上で金属棒を振り回すグラソン。

デンテールの右腕の剣が、三人を貫いたときと同じように素早く伸び、グラソンを狙う。グラソンはそれを横跳びでかわし、片手に持った棒を大きなモーシヨンで横に振った。

棒を握る手から棒全体がたちどころに凍り、その勢いは棒の先で止まらず、氷が空中をはしる。

「——!?!」

デンテールは自分に向かって伸びてくる氷を、剣を触手のように変形させ、絡めとった。だがその勢いはまだ止まらず、とっさに頭を傾けた彼の頬に一筋の傷ができた。

「……………」

氷を握りつぶし、粉々にしてから、デンテールは不思議そうな顔でグラソンを見る。

「何だその力は？」

頬の傷が消えた。

——ヒュヒュンッ!

両腕二本の触手がムチのようになり、交互にグラソンを襲う。グラソンは、もとは四本で一本に連結させた金属棒を、真ん中の節から二本に分け、両手に持って触手を弾く。

恐ろしいスピードで繰り出される連続攻撃を、二本の棒を使い、次々と器用に弾いていく。触手と金属棒がぶつかるとき、一瞬氷が生じ、砕け散る。氷で防御をしなければ、金属製の棒は威力で折れ曲がるか切断されてしまう。

「お前まで何だというのだ？ 一体その力は何なんだ？」

二本の触手が同時に床を打ち、えぐった。跳び上がったグラソンが、壁を蹴り——壁につくった氷の足場を踏み、連続で三步駆け上がる。最後に強く壁を蹴り、デンテールへ向かった。

両手に持った金属棒が氷の長剣に変わる。デンテールも触手を剣にもどし、それに対抗した。

——バチバチッ！！

二本の氷の剣を、二本の赤い剣が受け止める。

「その力は何だ？ あの三人と同じものか？ ——いや、少し違う感じがするな……」

「何だつていい。お前を倒せればそれでな！」

氷の剣が圧す。

デンテールは笑っていた。

「勘違いするな。オレを倒す？ この程度でオレを倒せると一瞬でも思ったのか？ 愚かな！」

氷の剣が細かな塵と化した。

グラソンはその身が切り裂かれる直前に、金属棒で相手の剣を突き、その力でデンテールから離れた。そして壁に棒を凍らせて固定し、それを掴んで高所にとどまる。同時にもう一本を指先で回し——回る棒に空気中の水分が集まって凍り、氷の『円盤』が出現した。

デンテールに投げつけられた氷の円盤は、回転しながら弧をえがいて飛ぶ。更に一つ二つ三つ、円盤が左右から標的を狙う。

「くだらん」

円盤はすべて標的を切り裂く前に粉々に破壊された。

キラキラと舞う氷のダスト。

「――氷結^{ひょうけつ}！」

散らばったダストが集結し、一瞬にしてデンテールを凍らせた。

彼の本体、触手、翼が氷にまとわれ、動きを止める。

「……やったか？」

それまでの闘いを黙視していたエンドーが、まだ浮いたままのデンテールを見上げる。マハエとハルトキも固唾を呑む。

グラソンは壁の氷にぶら下がったまま様子を見ている。デンテールは不死身だ。いや、本当に不死身なのか、ただ生命力が恐ろしく強いだけなのか。彼を倒すにはまだ足りない気がしていた。

――パリッ……

氷にヒビが入った。

「――！！」

やはり足りなかった。いや、まったく足りていなかった。それはグラソン自身予想はしていたことだった。そしてその場合はすぐに対応できるように構えていた。

が、それでもデンテールと“遊ぶ”には力不足だった。

「夏には便利な能力だ。クーラーいらずとはな」

氷が溶け、水となって滴り落ちる。

「……………」

グラソンは動けなかった。すでにデンテールの触手に捕縛されていた。

ギリツと腰のところで締め付けられる痛みに顔をゆがめながら、グラソンはそれでもデンテールをにらみ続けた。

「後悔しているのか？ グラソン。ふふふ、強がるな、どんなに強い意思を持つと、人は死ぬ間際には後悔するものだ」

「——っ……！ してねえよ、そんなもん……っ！ オレは一度殺された……！ 今のオレは復讐のためだけに存在する……！ お前へのな……！！」

「……残念だグラソン。お前には期待していた。遊び相手としてではない、オレにとって信用できる者としてだ。だから本当はこんなことはしたくないのだが……、どうしようもないだろう？ お前が選んだ道だ」

言っている言葉と表情がまったく逆だ。デンテールは慈悲のない表情で言い放った。

「苦しんで死に逝け。愚かな生き物よ」

強烈な電撃のようなエネルギーが、グラソンの体に流れ込む。

「ぐああああああっ……！！！！」

「苦しいか？ ならば乞うてみる。少しは楽に逝かせてやる」

「……っ！！ 貴様に使われるためだけに…… 存在した命など……！！ おいしいものかつ……！！！！」

「苦しい！ 苦しい！！ 苦しい！！！！——そんな表情でよく言えたものだ！！ さあ叫び、感じる！！ 限りある己の汚れた命が、目の前で燃え尽きていくのを——」

——ドドオン！！

グラソンを縛る触手が破裂し、切れ離れた。

「あー、見てらんねえ！ オレらそっちのけで復讐だの、殺すだの、命はいらないだの」

『魔力球』を放った腕をそのまま構えながら、エンドー——そしてマハエとハルトキが、背中から床に落ちたグラソンの前に、彼をかばうように立つ。

「なんだ、恐くて震えていたのではなかったのか」

デンテールのちぎれた触手が再び伸び、剣の形にもどった。

「グラソンがお前を倒してくればありがたい、と思って黙って観戦してた。けどこれじゃ、状況は悪くなる一方だからな」

マハエが歩み出る。

「お前を倒すために、これ以上犠牲は出したくない」

ハルトキ、エンドーもうなずく。

「これ以上の犠牲を出したくないからお前らが戦う？ それはまったく矛盾しているぞ」

「たしかに矛盾してる。けど何でかな？ 勝てる気がするんだ」

「それも矛盾しているな」

デンテールはくすくす笑った。

マハエはその様子を眺めながら、ポケットから青い石を取り出した。

「む？ その石は——」

石が蒼く輝きだす。

「『陰の石』か。なるほど、城から持ってきたのか。だがそんなものが何の役に立って——」

マハエは、エンドーから預かったままだった無刃刀を左手に握って床を突き、右手に石を持って左手の上にそえた。ハルトキとエンドーも両側から両手をその上に重ねる。

石の輝きが、よりいっそう強くなった。

「さっきオレ達が生きていられたのは、この石のおかげでもあるんだ。この石の力がオレ達を目覚めさせた」

蒼い光が銀色に変わる。

「バカな……、それは力を吸収する石ではないのか……？」

銀色の光が三人を覆い隠すほどに膨張すると、石が割れ、そこか

ら銀色に輝く三羽の鳥が飛び出した。

49：光の子守歌

赤い空の下に響く美しい鳴き声。すべての不安をかき消すような、優しく、頼もしい鳴き声。

赤い空の下に舞う銀色の結晶。すべての傷を癒してくれるかのよう、キラキラと輝く。

銀色の光の中から生まれた三羽の銀色の鳥。光が集まり、その大きな輪郭を形作っている。

一羽は口ばしが長く、一羽は尾が長く、一羽は頭に二股のツノが二本ある。

「きれいだ……」

マハエはその光景を見てから、手の上に残った石のかけらを見た。蒼い輝きも銀色の輝きも、青い色すらもなく、黒く透き通ったただけの石クズ。

「陰の石に…… 反応したか……」

腕について上半身を起こすグラソン。

「その石は魔力と結合し、未知のエネルギーをつくり出す……」

「これが何なのか、わかるのか？」

マハエが尋ねる。

「ああ……、その石の研究を任されていたのはオレだからな……」

グラソンは苦しげな顔で、にやつと笑った。

「ごさかしい！ こんな鳥が何だ！」

デンテールは両腕の剣で鳥を斬り落そうとする。だが鳥はひらりひらりとそれをかわし、デンテールの周りを飛びまわる。

「鳥の分際で……！」

デンテールは三本の尾も剣の形に変えた。未知の力を恐れている

のだ。

だが武器を増やしても、鳥達はすべての攻撃をすり抜ける。

三羽の鳥はデントールよりも少し上のほうで、彼を囲むような配置で動きを止めた。

「バカにしているのか？」

デントールは、その中の尾の長い鳥を目がけてすべての剣を放った。

尾の長い鳥はひらりと宙返りしてそれをかわすと、彼に向かって突進する。

——ピキイイン……

デントールは目を見開いて動かなくなった。

鳥がデントールを貫くと、鳥の姿は消え、代わりに銀色の鎖が彼の体を縛っていた。

——まるでハルトキが放つ『魔力の鎖』の金縛りのように。すると次はツノがある鳥が彼に突進する。

その鳥は寸前で形を変え、銀色の金棒のようになり、デントールにぶつかって爆発した。

——まるでエンドーの『魔力球』のように炸裂し、翼とすべての剣を砕いた。

続いて口ばしの長い鳥。ツノの鳥のように形を変え、細くなる。長細い銀色の槍となり、デントールの胸部に突き刺さった。カメラを倒した槍と同じだ。

——そしてまるでマハエの『衝撃波』のように、槍先から衝撃を放って、そこに仕込んである『光の石』を破壊し、胸を貫いた。

「……！！」

デントールは大きく口を開けたまま空を仰いでいた。そして鎖の呪縛が解かれると、無力に落下した。再び翼を出現させることなく。

三羽の鳥は消え、わずかに残った美しい鳴き声が空にこだました。銀色の結晶も空中で消滅し、まぼろしを見ていたと思い込みそうになるほどに静まり返った。

デンテールは大の字になり、空から注ぐ赤い光に照らされていた。
「……デンテール」

グラソンがよろよろと立ち上がり、足を引きずるような格好でデンテールを見下ろせる位置まで歩いた。

「……」

デンテールは「何が起こった？」という表情で彼の顔を見た。
「負けた……、お前の」

「……」

数秒、間をおき、デンテールはかすれた声で笑った。

「おかしいことを言うな。だれが負けたって？」

彼が普通の“人”ならば、誰だって笑ってしまふセリフだろう。

この状況を理解してもなお、負けを認めようとしないとはい愚の骨頂だ。だが、笑うのは負けたデンテールだけ。

——彼は不死身なのだ。

胸に穿たれた穴から血は出ない。代わりに、起き上がる彼の体と分離した石のかげらが、ばらばらと床に落ちた。

「何をしても…… ムダだ！」

ゼーゼー言い、苦しそうにグラソンと三人に背を向けて距離をとる。

「この程度の穴なんぞ……、すぐに塞がるっ……！」

こぼこぼと水が泡立つような音で、傷口が再生しようとする。

「……かはっ……！！」

デンテールが膝をついた。

再生は止まり、穴から肌と同じ色の液体が流れ落ちる。

「再生しないだ……！？ い、いったいこれは……」

グラソンが歩み寄る。

「……あいつらの力に、貫かれた影響だろう。お前を倒すために与

えられた、力だ……」

「あ、与えられた、だと？ 誰に……？」

「さあな……。ただ、これだけは言える……。やっぱりお前は、この世界には不要だ」

グラソンの腕に“魔力”があふれる。

「ま、まてグラソン……！ 考えなおせ、オレの敵もお前の敵も、人間のはずだ！ オレ達をつくり、利用し、苦しめた！ もとはといえば人間が……、倒すべき相手は……、滅ぼすべき相手は人間だ！ やつらが生み出すのは何だ？ 苦痛の悲鳴だけだ！ 捨てられるものの悲鳴をやつらに聞かせてやらねばならない！」

「だからセルヴォ世界を支配し、人間世界を滅ぼそうというのか？」

「……そうだ」

「違うな……。お前がやりたいことは、そんな“ご立派”なことではない。ただ、自分を苦しめた人間に復讐がしたいだけだ」

「……グラソン。お前もつくられた身ならば理解できるはずだ。たかが娯楽のために、利用されるためだけにつくられた悲しみ……。一番最初に憎むべき相手は、平気な顔をしている人間どもだと言っているのだ」

「……たしかにそうだ。だが、その悲しみが生まれたのも、お前がオレをセルヴォに改造したせいでもある。利用するためにな。人間を恨む前に、オレはお前を恨む」

デンテールは「クソ野郎が」と毒づき、グラソンをにらんだ目をそらさず立ち上がった。

「貴様あああ……」

憤怒の表情で、グラソンに片手を伸ばす。

グラソンは冷めた目を向けて言う。

「今のお前じゃ……、オレに勝つことはできない……。もう、利用されるのは……、ごめんだ」

魔力をまとった腕を持ち上げ、デンテールに向ける。

「グラソン——！」

——ピシピシッ……！！

恐ろしい感情を宿したまま、デンテールの全身が凍りついた。完全に弱っているデンテールには、全身を固める氷を溶かす力はない。

「デンテール……、お前の野望も……、ここまでだ」

グラソンは金属棒を振り上げ、残った最後の力で氷を叩き割った。デンテールの最期の悲鳴が、小さく聞こえた気がした。

細かな破片と化した彼の体は、氷とともに溶け、消滅する。今度こそ完全に。

だがグラソンは、それを見届ける前に倒れた。倒れる彼を、マハエ達三人が受け止めた。

「……終わったな、デンテール」

マハエが床に話しかける。

デンテールの声が返ってこないことにホッとし、続けた。

「あわれに思うよ」

けっきょく彼の目的は人間への『復讐』だった。

それは誰しもが持っている恨みの感情。人間ならあつて当然の感情だった。

人間が目に見えない世界を平気で滅ぼそうとするように、当初の三人がそうであったように、デンテールにとっても同じことだったのだ。

彼は特別な『悪』ではなかった。

だから三人も彼を許す。——それだけ。消えてしまった者へでき

ることはそれだけだ。

「……すまん……」

壁に背を預けさせて座らせ、武器を手元に置いてやると、グラソンは小さな声で言った。

「……オレも、あいつと同じだ……。オレの目的のために……。お前らを利用した……」

「いや、それはいい。あんたとボク達の目的は同じだったんだから」「そうだ。とりあえずしゃべるな。ドラマいわく、しゃべるとよくないらしい」

エンドーが言うと、グラソンがかすかに微笑む。

「……さすがに……。やつの攻撃は効いたな……。体力は限界だ。ははっ……」

「動けるか？」

マハエが力を入らない彼の腕を持ち上げる。

「……オレはここに置いていけ……。眠く……。なつた……」

虚ろな目で一点を見つめ、誰に話しかけているのかわからないような声で話し続ける。

「オレは……。デンテールに利用されるために……。生まれてきたようなものだ……。だから……。ここで朽ちるのも、しかたない……」

……

「デンテールは死んだ！ もうあんたは自由なんだ！ だから――」

マハエが説得するように言う。だが、グラソンの声はしだいに小さくなっていく。

「はは……。自由……。か……」

そして目をマハエに向けて「言わなければならないことがある」と。

「……あの彼は……。生きている……。だから……。心配……。するな……」

声が消えた。

ゆっくりと頭を下げ、うつむいて。それ以上何も言わなかった。

「……ありがとう。……おやすみ」

マハエは鼻をすすって、自分と同じような顔をしている二人を見た。

「行こう」

闇に呑み込まれつつある夕日だが、彼らの勇姿——戦いを見守っていた。消えゆく最後まで光を照らし、子守歌を歌い続ける。

愛に満ちた歌声は、この一日の光が続く限り、静かに——優し
く——

50：また会う日まで

空いっぱいに広がっていた夕焼けも、すみへ追いやられ、夜が来る。

三人は疲れ果てた体を引きずって、できる限りの速足で船着場にもどった。

マハエが立ち止まり、要塞――研究所を振り返ってつぶやく。

「あいつは……、人間を憎んでいたのかな？」

「グラソンのこと？」

「ああ」

「どうだろうね？」

ハルトキは首をかしげた。

すると、マハエのポケットの中から案内人が声を出す。

「先ほどの彼の言葉からは、そういう感情は伝わってきませんでしたよ」

無線機をつまみ出し、マハエが言う。

「お前、ずっと聞いてたのか。全然しゃべらなかつたから、どうしたのかと思ったよ。いや、存在すら忘れてた」

「わたしが口を出す機会なんてなかったじゃないですか。……それにしても、デンテールがあのような恐ろしいウィルスをつくっていたとは……。この島にあるものは危険すぎます。すべて撤去してしまわなくては」

「……そうだな。この世界のためにも」

マハエは研究所から空へ視線を持ち上げた。

「このきれいな空のためにもね」

ハルトキとエンドーが目を見交わして、鼻の前で手を振る。「くさいセリフだ」と言いたげだ。

「帰るぞー」

マハエは二人の頭をポンと叩いて船へ向かった。

船着場の栈橋の先に、ロープを肩にかけた大林が座っていた。近づく三人に気付くと、振り返ってにっこりと笑い、平然とした声で尋ねた。

「よお、終わったのか？」

だが、彼自身もずいぶんと疲れているようだ。

「ええ、なんとか」

ハルトキも平然を装った声を返した。

「KEN 窪井は……？」

「……………」

大林は立ち上がって息を吐き出してから言った。

「逃げられた」

——波の音が心地よい。

三人は船の後部に立って小さくなっていく島を見つめていた。左側から顔を照らす夕日に目を細めながら。

胸にはデンテールにやられたときの傷痕が残って消えない。大抵の大怪我でも、時間がたてば魔力の力で完全に傷は塞がり、痕も残らない。だが彼のエネルギーが具現化した触手は違った。個人の魔力だけでは、とても打ち消すことができないほどの力を彼は持っていたのだ。

「三人、生きててよかったあ」

ハルトキがしみじみと言う。

「なあ、案内人……、セルヴォって、何なんだろうな？」

マハエがつぶやくように、右手に持った無線機に話しかける。

「わかりませんね。これからじっくり調べてみる必要があります」

「人間……と同じだよな？」

「そうですね。彼らも立派な生命体です。デンテールが言っていた

言葉——ここは人間の世界と並ぶ、もう一つの現実世界。コンピュータはそれの入り口。その仮説は、十分に納得がいきました」

「……もう一つの現実世界ねえ……」

エンドーがあごに手をそえる。

「たしかに、この世界のメシはうまかった」

誰かの腹が悲鳴をあげた。

「細かいことは考えてもしかたがないですけど、これだけは言えます。誰かの勝手で滅んだりしてはいけない世界。守らなくてはいけない世界だということ」

「……案内人。ずいぶんと変わったね」

ハルトキが感心した声を出す。

「何ていうか、今は自分の意思をしっかりと持ってる」

「……………」

案内人は何も返さなかった。気付かないうちの自分の変わりように、自分自身が驚いているように。

港町の賑やかな声が、波の音にまじって小さく聞こえてきた。

「港に着くぞ」と大林が言う。

三人は微笑んで、船の前部へ移動した。

「——ボク達はこれで。大林さん、ありがとうございました」

船を持ち主に返してから、港でマハエとハルトキとエンドーが横一列に並び、大林に頭を下げる。

「元気だな。たまには『田島弘之』にも顔出してくれ。歓迎するぜ」

「……ええ。いつかまた会いましょう」

「じゃあな、ハル。真栄、京助も」

マハエとエンドーは照れた顔をし、もう一度頭を下げた。

「それじゃ」

「ああ」

あつけない別れだが、疲労困憊している四人にはこれでよかった。

向かい合って微笑み合うだけで十分だった。戦いの後は、それぞれが無事に生きていたことに感謝するだけだ。

生きてさえいれば、また再会することもできる。

くだらない話に花を咲かせるのは、今じゃなくてもいい。

「また会おう」

大林は三人の後ろ姿に手を振り、数歩歩いてから足を止めて沖に浮かぶ人工島を見た。

「……窪井、お前はこれで終わらせるつもりはないだろう？　てめえが動けば、オレが全力で止める」

深く吸い込んだ息を一気に吐き出した。

「――すべてを切り裂く覚悟はできている」

大林は拳を固めて、目の前に突き出した。
何かを誓うように。

五拾巻：最強のボス

時計の音。

時を刻む秒針の音。

今、三人がいる世界の音。

離れていたのはたった二日だけなのに、ずいぶん懐かしく、そして心地よく感じていた。

「十二時五十分」

マハエがつぶやく。

セルヴオの世界で戦いを終えた後、案内人の指示どおりにしばらく歩き、人間の世界へ帰るための出口になるらしい、場所（ただ人目につかないだけの森の中）に到着した。あらかじめ回収ポイントが決められていて、そこから人間の世界へ帰ることができる、と案内人が話した。

そこで案内人に適当に別れの言葉を送り、無線機をそのへんに捨て置いてセルヴオ世界を出たのだ。

自分の体と視界が薄れていき、それから意識がなく、目を覚ますと施設の部屋の、布団の上で仰向けで眠っていた。

目を覚ましたときの時間は夜の九時。セルヴオ世界と時間が同じなら、三時間ほど眠っていたことになる。

そして激しい空腹に耐えながら、深夜――今の時間に至る。

布団に三人仰向けになって時計を見つめ、“作戦開始時間”を待つ。

妙に静かな夜。消灯時間はとくに過ぎ、遊びまわる子供達の声もない。

「一時ゼロゼロ分—— 作戦開始」

エンドーが言うと、三人いっせいにむくつと起き上がった。まずはマハエが部屋のドアに耳を当て、十秒後、ゆっくりと開ける。

静寂と暗闇が支配する廊下。

できる限り呼吸を抑えながら、足音を消して歩く。

ハルトキが階段の手すりのところでしゃがみ、隙間から階下を覗いて、マハエとエンドーに手で合図を送る。

何年も改築、補修されていない施設の階段は、少しの体重でもキシキシと音が鳴ってしまう。だが三人は、一段一段どの位置を踏めば音が立たないかを、ここでの生活で学習していた。

目指すは食堂。

空腹。腹が減っている。死ぬほど減っている。空腹なのか通常なのか、わからないくらいまで減っている。

なぜこの時間まで待ったのかというと、二日も行方をくらませていた“不良少年”を、この施設の職員がたが説教の一時間や二時間で許してくれるはずがないからだ。（今回は二時間、みっちり説教をくらった）

どうせ説教されるなら、その前に腹を満たしておきたい。あわよくば、翌日、何事もなかったかのようにあいさつをして、朝の दौरानに加わりたいたのだが、当然それは無理な話。

十時の消灯時間になると、泊り込みの職員達は子供を寝かしつけ、十二時には全員が眠りにについている。

念のために一時間置いた。起きていたとしても、気配を消せば気付かれない。

マハエが小声で言う。

「一階へ到達。だが本番はここからだ」

二階の部屋のほとんどは子供達の居室。一階には職員用の居室、職員室、応接室など。そして一番の難関である園長室。それらの危険ポイントを通過しないと、奥の食堂へはたどり着けない。

階段下にあるトイレ、その正面の壁に背をつけて、じりじりと食堂を目指す。

闇の中には人っ子一人いない。トイレのドアについている小さな窓からも灯りは見えない。が――

――ガチャ。

女子トイレのドアが開き、七歳の男の子が目をこすりながら出てきた。

あくびをした派手なパジャマ姿の男の子と、いかにも怪しい体勢の三人。数秒、時が止まった。

先に口を開いたのは男の子。

「シンエ――」

「ノボルちゃん！ また便座で寝ていたの！？ 女子が男子便所を使わなきゃいけなくなるからベッドにもどって寝なさいって、もう、何度言えばわかるのっ！ でも今日は許したげる！ もう少し寝てなさいっ！！」

目を見開いて言いかける男の子をトイレへ押し込み、マハエはバタンとドアを閉めた。

「……………」

男の子の声はない。再び眠ったようだ。

今の声で誰かが起きてくる気配はなく、胸をさすりながら息を吐き、三人はまた食堂を目指す。

職員の居室は問題なく。もっとも警戒しながら園長室の前を通り、食堂のドアにたどり着いた。

「いくぞ」

フック式のノブに手を伸ばすマハエ。それをハルトキがさえぎる。
「まってマハエ。『死神アラーム』だ」

ハルトキがポケットからカッターナイフを取り出し、刃をドアの隙間に差し込んで、仕掛けられていた糸を切った。

ドアが開いて糸が引つ張られると、アラームのピンが抜け、作動する。だが、このアラームの恐ろしい特徴は、音が鳴らないことだ。厳密に言えば、そこにあるのはスイッチで、アラームの本体は園長室にある。そのせいで罠にかかったことに気がつかない。いつの間にか後ろに立っている恐ろしい園長の気配を感じたときに初めて罠に気付く。知らず知らずのうちに忍び寄る恐怖。だから三人は、それを『死神アラーム』と呼んでいる。

「危なかった。『遊戯室』以外にも仕掛けてあったのか。この前に忍び込んだときにはなかったのに」

「足元に気をつけよう。まだあるかもしれない」
ドアを開けて足を踏み入れる。

エンドーのペンライトで照らされた食堂の床には、黒くぬめられた細い糸があちこちに仕掛けてあった。

慎重に糸をまたぎながら厨房に入る。

「あゝ、ここに来ると空腹に拍車がかかるなあ」

エンドーが腹をおさえる。

「今日の、おかずは、何ですか」

マハエが鼻歌をまじらせて鍋のフタを持ち上げた。

「今日の、おかずは、おブタの角煮……で、し、たゝ（過去形）」

「……………」

——沈黙。

鍋の中に、角煮の『角』すでになく、砂糖と醤油で味付けされた、

猛烈に食欲をそそる香りを放つ煮汁だけが残っていた。

「大人気だねえ、角煮さん。やっぱ日本人は角煮だよねえ」

マハエは大きく頷きながらその隣の炊飯器を開けた。

「まあ、ご飯さえあれば十分だ。煮汁をかけていただきます……」
炊飯器の中には米の一粒も残っていなかった。

『いただきます。ごちそうさま。今日の明日の命を支えてくれる食物に感謝をし、たとえ米の一粒、野菜の一かけらも残すべからず』

壁に貼られた大きな紙に、筆で力強く書かれている。

「嗚呼、すばらしきかな我が家の教訓」

強烈なめまいで、三人は床に両手をついた。

「もうだめだ……。オレらはここで力尽きる……。でもいいんだ、悪の野望から世界を救えたから……」

「までマハエ、あきらめるな。ここにまったく食料がないわけじゃない」

打ちひしがれるマハエの背中を叩いたエンドーが、冷蔵庫を指差す。

「嗚呼、冷蔵庫ちゃん……、キミの存在を今以上に愛おしく思ったことがあっただろうか……」

歡喜の涙を流しながら、マハエ——三人は冷蔵庫のつてに手を伸ばし、力を合わせていつきに引き開けた。

——ピーン

何かが抜ける音がした。

「……………」

再び沈黙した三人は、冷蔵庫の扉の下のほうを見た。

そこには黒く細い糸が。

マハエは苦笑いしながら冷蔵庫を見上げた。

「裏切ったね？ レイコちゃん……」
ぬうつ……と、恐怖を押し固めたような気配を、背中いっぱい
に感じた。

「……………」

「（……で、なぜ？）」

マハエは、目の前にある大きなドンブリに目を向けた。

「（……なぜだろう？）」

ハルトキは、目の前にある大きなドンブリに盛られているホカホ
カご飯のマウンテンに目を向けた。

「（……どういうことだ？）」

エンドーは、目の前にある大きなドンブリに盛られているホカホ
カご飯のマウンテンの上にこれでもかと乗っかっている茶色い牛肉
に目を向けた。

そしてテーブルの向かいにどっしりと座っている、ニコニコ顔の
クマ男、こと園長に目をもどす。

「（読めないっ……！）」

三人は苦笑いして首をひねった。

園長特製の『超山盛り牛丼』の甘い香りが、三人の腹を鳴らす。

二日行方をくらまし、あぐく厨房に忍び込んで冷蔵庫をあさろう
とした三人にゲンコツを落とさず、代わりに手料理をふるまう園長
の意図が読めない。

「腹が減っているんだろう？ 食わんのか？」

相変わらずニコニコ顔の園長が言う。

三人は唾を飲み込んだ。園長の料理の腕はプロ級だ。調理師免許
も持っている。和食から洋食、中華、どこかの民族の伝統料理まで、

作るときは何でも作る。でも今は、何か裏がありそうで、恐ろしくて何も喉を通らない。

「——ごちそうさまでした……」

きつちり完食。

米の一粒も残っていない。

「（食っちまった……）」

マハエは頭を押さえた。

「（食べてしまった……）」

ハルトキは目頭を押さえた。

「（おかわりしてしまった……）」

エンドーは腹を押さえた。

園長はニコニコ顔をやめない。三人が残さず完食したのを確認すると、すつと立ち上がって手招きをした。

「来なさい」

「……………」

三人は黙って従う。

庭に出た園長と三人。自然をイメージして作られた庭には、木がたくさん植えられているが、夜中はそれらの影がとくに気味悪く、ゆらゆらと風に揺れている。

冷たい空気と、恐怖で冷え切った三人の心。

園長は剣道で使う『竹刀』を、三人に一本ずつ投げ渡すと、それを前に構えた。

「——来い」

微塵もすきのない構え。

「来いって言われてもなあ……………」

マハエは竹刀を構えつつ、ハルトキを見た。

「これは一種の選択肢だと思う。ここで園長を倒せば、ボク達は助かる。かも」

「だって……、デントールより恐えよ」

体の震えが腕から竹刀へと伝わる。

「牛丼食いすぎた……」

エンドーがうなった。

園長は三人をじつと見つめ、ぐつと柄を握った。

「——まだまだ甘いな」

五拾貳：再臨

——一カ月後。

初夏の温かい風—— 何とも言えずいい薫り。
流れ落ちる滝の音—— とても涼しく。
川のせせらぎ—— なんと心やすらぐ。

三人はその世界の自然を胸いっぱい感じた。
ここはセルヴォオ世界。マハエ、ハルトキ、エンドーは、またこの世界に招かれていた。
やはり“いつもの服装”で。

「お久しぶりです。みなさん」
案内人の声。悪魔の声。

それは無線機からではなく、本来の案内人。

「よお案内人。もともどれたんだな」

「ぼー、と寝ぼけ眼のマハエが言う。ハルトキとエンドーも同じように、起きたばかりのような目をしている。

「当然です。制作者にかかれば、ちよちよいのちよいですよ」

「自慢げに言う案内人だが、彼は気付かない。彼に向けて飛ばされる三つの静かな殺気に。」

「無線機のほうがよかったのによお……」

エンドーがぼそつと言った。

「あの状態のわたしに、どのような利点があるっていんですか？
声の質は悪いうえ、視界は狭く、小回りがきかない——」

「利点ならあるよ」

ハルトキが言った。

「何ですか？」

三人は一つ溜め息をついて叫ぶ。

「あの状態のお前のほうが、簡単にへし折ってやれただろうになあ
！……！」

爆発。

「……なにか怒ってません？」

「ああそつだよ怒ってるよ！ 今度はなんだ！？」

いまだ三人の怒りを理解しないドンカン人工知能に、さらに爆発するマハエ。

「KEN 窪井でも見つかった！？」

と、ハルトキ。

「まさか、またデンテールの野郎じゃないだろうな！？」

最後にエンドーが爆発すると、三人はいつせいに頭を押さえてしやがみ込んだ。

「いてて……」

ひと月前、園長に竹刀で“バツサリ”とやられた部分の痛みが、ぶり返した。あのときはけつきよく、手も足も出なかった。というよりも出す前にやられた。

その後の四時間にもわたる説教は、言葉では言い表せないほどに辛いものだった。

しかしこの世界にいれば、魔力で自然と痛みは消える。――はずだ。

三人は立ち上がり、深呼吸で心を平静にもどした。

ハルトキが頭を垂らして言う。

「あの、痛みを通り越すほど強烈なゲンコツと、あの、すべての感覚をマヒさせる辛く長い説教……。それがこの世界を救うことと割り合うのかどうか、疑問に思えてくるよ……」

同感。とマハエとエンドーも深くうなづく。

案内人は少し黙り、それから明るい声を出した。

「いえ、今回はそういうのではなくてですね。えっと、あなたが救ったこの世界、じっくりと眺めてみませんか？」

「……………」

「……………」

「……………」

三人はいぶかしそうな目をする。

「……つまり、観光？」

マハエが首を傾げる。

「そ、そうです。観光ですよ、観光。デンテールが消滅し、平和になったこの世界を思う存分堪能してください！」

「気がきくじゃない。さすが案内人！」

爆発していた怒りも、パァーと完全に吹っ飛び、上機嫌のエンドー！。

「よおし、そんじゃあ行くぞー！」

「おー！！！」

マハエの掛け声に、ハルトキとエンドーが拳を上げた。

「……………」

案内人は、さっさと行ってしまふ三人の姿を眺めながら呟いた。

「はしゃいじゃってますねー……、後が恐いです。“KEN 窪井が見つかった”、なんてことを知ったら……」

「おーい、案内人ー、案内人らしく案内しろー」

マハエの声に「はい」と返し、また呟いた。

「もう少し黙っておこう」

——また、そんな三人の様子を見ている者がもう一人いた。

木の陰で腕を組む、背の高い男。

三人のはしゃぐ声が遠くなっていく中、茶色い肌のその男は、口元で「ふっ」と笑うと、銀色の長髪をなびかせて立ち去った。

「人は数多の小さな鈴、ですね」

「なにそれ？」

ハルトキが笑う。

「人は鈴。その数多の鈴をぶら下げるのは一本の紐です。すべての人々の命は、『世界』という一つの命に守られている、ということです。どんなに楽しい人生を送って、どんなに楽しく鈴を鳴らそうと、紐が切れてしまえば、すべての鈴は落ちてしまいます」

「……………」

マハエが空を仰いで、小さく溜め息をついて言う。

「そして鈴が一つでも変に暴れたりすれば、すべてをつなぐ紐は揺れ動いて、切れてしまう、か。楽しく踊る鈴も全部……。怖いものだな、世界って」

ハルトキも空を見た。

「世界を守らないと人は守れない……。この世界を壊さなくて本当によかったよ」

空では一羽の大きな鳥が——一つの生命が楽しそうに飛びまわっていた。

——誰かの腹が鳴った。

「それより、まずはメシ食お」

一人だけ自分の腹を見ていたエンドーが、気の抜けた声を出した。マハエとハルトキは、首を落として同時に大きな溜め息をつく。

「……………狭いな。お前の世界は」

——鳥が笑った。

——風が笑った。——草が、木が、——無数の生命が笑っていた。

「この世界で何が食いたいんだ？ エンドー」

「牛丼食いたい」

「いや、懲りろよ」

「ないと思うよ、牛丼は」

三人の笑いが加わった。

このたくさん笑い声、いつまでも消えないでほしい。三人は願った。

「……ギュードンって何ですか？」

「……………」

五拾貳：再臨（後書き）

第二章、ようやく終了。

いやぁ……、まさかここまで長くなるとは……；

ここまで読んでくださった方々に、感謝します。

そして……、えー、第五章まで予定しています。早めに更新できるように、がんばりますので、ヒマなときにも読んでいただければ嬉しいです。

文章を読みすぎて気が抜けたあとがきですが、これで、失礼します。

——では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638c/>

造られし空の下で（２）～生命の世界～

2010年10月8日15時33分発行